

---

# シークレットワールド

鷹鷲飛来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットワールド

### 【Nコード】

N5346H

### 【作者名】

鷹鷲飛来

### 【あらすじ】

出合ってしまった二人の特殊な人間。

特殊部隊の少年と魔法使いの少女。

魔法使いの少女は、紛れも無く異世界の人間。

その世界の名はシークレットワールド、隠された世界。

二人とその周囲はイギリスの情報機関に監視され、次第に世界各国にその少女の脅威を知る。

少女はなぜここに来たのか？なぜイギリスの情報機関はストーカーに等しい行為をするのか？

私は、その記録を私は残す。

## 二人の人間

この物語を書くにあたって、私は二人の人物を挙げることにした。一人は異世界から来た少女である。彼女は今まで生まれた世界で普通に暮らしていた。だが、ある日突然この我々が住む世界に飛ばされてしまった。

もう一人は特殊部隊、もしくは工作員の少年である。彼は過去に何らかの問題があり、その問題によってこうなってしまったある意味現代の生んだ犠牲者である。

この二人である。

彼女はこの物語の主人公であり、主要人物である。しかしながらこの二人の思考は全く違う。片方は全く知らない世界で生きた人間。片方は現代の真実を何度も目にした人間。この地点で二人の思考は全く違うであろう。この二人の考えをまとめて書き進めるのは私としては少々強引であるようにも感じる。そこで、この物語は二人の内片方の視点から進めていこうと思う。いや、正確に言うならば三人の内である。少女と少年、そして私という第三者。この三つで進めていく。

この物語は、物語という私の記録だ。

歴史には絶対してはいけないことがある。それは歴史を消すことである。

人間は次々に記憶を欲する。しかし同時に記憶を抹消する。そこにあるのは歴史の抹消という意味だ。歴史なんていう物はすぐに消えてしまう。だが、歴史は残っている。紀元前からの歴史が判明しているとおりに、歴史は抹消されていない。なぜなら、それを証明する十分な記録があったからだ。

私はこの物語という名の記録を残す。嘘の記録を残す。そして、この記録がいつか人々に触れることを願う。どんな真実でも、それは正義だと信じて。

2009年ソマリア海

ソマリアという国は悲劇の国の一つだと俺は思う。

この悲劇の国には事実上の国家が存在しない。無法地帯である。こうなってしまったのも内戦の影響だろう。米軍はどうにかしようとして度特殊部隊のレンジャー隊とデルタフォースを送り込んだが、モガディシオの戦闘こと作戦アイリーンで失敗し、結局泥沼化した。結局、あの地で死んだ米兵やソマリア民兵の死は無駄だったのかと、俺は思う。

ソマリアでは小銃が日本円で500円程度で売られている。それを手にしたソマリア人は兵士となって輸送船を襲う。なんとも酷い有様だ。しかし、それでも向こうの要求する金で儲かっているソマリアの人間がいる。この不況最中、彼らは案外裕福なのかもしれない。目の中の輸送船に添って、イージス艦は進む。

俺は無言で輸送船を見ていた。

正直、早く帰国したい思いだ。

俺の名は蒼京諄一。日本の機密警備会社の人間。本当はまだケツの青いガキだが、大人たちは俺たちを子供とは扱わない。かといって大人とも扱いはしない。その答えは、人間ではない、である。まあ、本当なら俺はもう死んでいる身だ。そんな扱いでも、仕方がないと思う。

俺がここに連れて来られた理由は一つ。正確に言えば『俺』ではなく『俺達』だが、その理由は新兵器の密接な受け取りである。

輸送船の中にはその新兵器というものがあり、ソマリアの海賊が襲ったと同時に俺達は輸送船に侵入する。無論、海賊からの自衛という口実で。

「.....」

無言で俺はコーヒーを飲む。

「そろそろ.....襲われるかね」

俺はこの場を後にする。

イージス艦は慌しくなる。その中でただ一人別の方へと向かう。向かった先には六人の隊員がいた。

「予定通りに行く。これが終われば即刻帰れる」

隊員は全員最新鋭の小銃を持っていた。嘗めた生意気な顔をしていた。

「ソマリア民兵ごときにやられると思ってるのか？俺達を誰だと思ってるやがる？」

別の誰かが言うのであった。

「犯罪者。それも、三人以上を殺した死刑囚さ」

「相手の使用武器はAK-47、RPG-7だ。こっちの装備は最新鋭。XM8にXM320だ。やられるとも思ってるのか？」

坂崎渥が小銃を見せつけながら自慢げに言う。

だが、俺の隣にいる副隊長である樋口公柔が怒鳴った。

「馬鹿野郎！嘗めてんじゃねえぞ。奴らは米兵の特殊部隊相手にしてダメージを与えたんだぞ。てめえらもそうなりてえのか？」

俺は樋口に手を出した。

「よしとけ。まあ油断大敵だがな。俺はすぐに帰りたいんだ。お前の説教は御免だ」

「だがよ、こいつらに言い聞かせんと俺は気がすまんぞ」

「ああ、ああ、分ったよ。帰ったらうんと聞かせてやれ」

そう言っつて樋口を押さえた。

俺達はゴムボートに乗り込む。上の方で銃声が聞こえる。海賊が来たのだろう。

ゴムボートはエンジンの唸りをあげて海を走り始める。すると、真っ先に海賊らを確認する。

作戦では一隻だけ海賊を輸送艦に乗せる予定だ。そのため、俺達の一つを除いて狙い撃つ。ゴムボートにも銃声が響き、さらには銃弾がかすめる。

海賊がグレネードランチャーを向けてくる。だが、それに気がつ

く隊員は即座に頭を命中させる。撃たれた海賊はグレネードランチャーの引き金に指を寄せていたらしく、倒れる同時にそのグレネードも撃つてしまい自爆する。

「RPGが爆発したぜ！ざまあ見るファッキン！」

坂崎は叫びながら次の目標を見つける。

俺は礼の輸送船を見る。一隻がはしごを使って輸送船に乗り込もうとしている。

菊地大刀に命令する。

「輸送船に近づけ！」

「了解！」

ゴムボートは進行方向を変えて輸送船に近づき始めた。

俺は小銃を構え、輸送船に乗り込もうしている一人に照準を合わせる。ゴムボートの速度、風向、風速、弾丸の到達時間、それらを考えて照準を合わせ、最後の動作で引き金を絞る。その数秒後には一人が狂ったように海に落ちる人間が目の前にいた。

海賊達はこちらに気がつき、小銃を向けてくる。しかしもう遅い。その数秒前には俺達が照準を合わせており、各隊員が引き金を絞って銃口に光を灯していることであった。

敵の船にはついに一人も生存者を残さなかった。それでも俺達は輸送船に近づき、急いで乗り込む。

まだ中に海賊がいるかもしれない。そんなことがあるわけないと感じながら船内に侵入する。

「Go!Go!Go!」

隊員達は小銃を前に構えながら船内を進んでいくのであった。

ここはどこであろうか？

私はふと周りを見回す。

いつもならここは木で出来た小屋で、周りには色々な物が置かれているはずであった。朝食のために用意していたパンや米、それに昨日買った野菜があるはずだ。だが、周りにあった物は見たことの

無いものばかりである。

鉄で出来た壁。鉄で出来た円柱形の物。見た事も無いような箱。

「ここは・・・何？」

私は未熟な人間だ。でも、こんなところを見たことはまだ誰も無いだろう。

ここがどこなのか知りたく、私は耳を澄ませて外の様子を聞き取る。その時気がついたが、この部屋揺れている。

色々な音が聞こえる。騒々しい音が主立って聞こえるせいで良くは聞こえない。しかし、外に誰かの声が聞こえる。

私はこの部屋から出てその人たちに様子を伺おうとする。この部屋の出口を探す。

そうしているうちにどんどん声は近づいてくる。はやくしないとここを通りすぎてしまう。そう考えると焦った。

でも、どうやらその予想は全然違っていたらしい。

次に聞こえた声は、突然開くドアからであった。

「Freeze！」

その時のことは生涯、絶対に忘れることは無いだろう。私は人の形をした全く別の生き物を見たのだから。



## 二人の人間（後書き）

すみません。私は知識の乏しい人間です。  
間違った部分などがあるかと思いますが、お許しください。

## 接触

「フリーズ！」

俺達は礼の新兵器がある部屋へと入る。

念のために銃を構え、いつでも中で誰かが俺達を撃とうとしている人間があれば撃てる状態で入る。

私は恐怖のあまり、その場に隠れた。箱の隣に即座に伏せたのだ。あの人の形をした生き物は勢い良くこの部屋に入ってきて早々、部屋をあさった。あれらはきつと獲物を狙っている。だとすれば、私を探しているの？

私があんまりの生き物を判断しなかった理由はあんな体である。黒々としたしまし模様の服が大きく盛り上がっている。そして頭には変な帽子を被り、変な長い物を手にしている。他にも変なところが沢山あった。それらをまとめると、あれは人間なんかじゃないという考えになった。

俺は箱を見つめる。これだ。これが礼のものだ。箱に近づき、中身が無事かどうか確認しようとする。すると、その隣に妙な服装の少女がいた。年として俺くらいだ。

樋口が俺と同様箱に近づくと、やはりこの少女に気がついた。「・・・ソマリア人ではなさそうだな」

それは分った。肌は色白く、東洋人のような顔立ちにも思える。俺はフラッシュライトでこの少女をじっくりと照らす。

生き物は私にいきなり光を照らす。その光には熱が無く、まるで魔法の時に発生する光のようでもあった。

私はびっくりして寝ていた体制ながらもその場を逃げる。逃げるとは言っても三メートル動くぐらいだった。

「た、食べないで！」

少女は聞いた事の無い言葉を喋った。ソマリ語などのソマリアで使われている言葉ではなかった。

「・・・なんて言った？」

樋口が俺に聞いてくるが、俺は首をかしげるだけで目線すら少女から動かさなかった。

少女の姿をじっくりと見る。服は黒く、少々露出部分が多い。そして何より気になるのは目である。

「・・・こいつの目」

片方は綺麗な澄んだ色のブルー。もう片方はこれもまた綺麗な光のような黄色であった。

なんなんだこの少女。

次第に隊員達もこの少女に気になり始める。

少女はおそろおそろゆるゆる立ち上がり、どうやら所持していたらしい短剣のような物を突き出す。

するとまた訳の分らない言葉を発した。

全員が銃を構える。だが、俺達が銃を向けても少女は怯えるどころか何も反応しなかった。まさか、この少女は銃というものを知らないのか？

「撃つな！こいつ銃を知らないぞ」

銃が脅威にならないとなると、向こうはいつ攻撃するか分らない。少女はゆっくりと短剣を持ちながら俺達を見回す。しかし、先ほどと変らずの怯えがあるせいで少し動きが鈍い。これなら大丈夫だ。少女は俺を背後にして後ろにいた隊員を見る。直後、俺は銃で急所を叩き、少女をガクンと倒れさせる。

全員が小銃を下ろし、俺の命令を期待した。だが、当の俺にもこの状況は全く読めない。

樋口は俺に叫んだ。

「なんなんだこいつ！ソマリアの海賊じゃなけりゃなんだ！どこか

の作業員か？」

「落ち着け。まだこいつが敵だと分ったわけじゃない。それに、銃を知らない地点で作業員なんかの部類にはならんだらう」

坂崎も少女に近づきながら言った。

「だがよ、結局こいつはどうするんだ？今の、聞いた限りじゃロシア語でもアラビア語でもないぞ。かといって韓国語とかでもないぜ。どう処理するんだ？」

言っていることは正しい。今の言葉は俺には聞いた事もなかった。それに、この少女には他にも不審な点がいくつもある。

隊員が箱の自身を確認していた。そちらの方は無事らしく、急いで運べと命令する。

さて、この少女をどうしようか。

まぶたを開けて眼球を見る。やはり片方とも色が違う。

「なあ」

樋口は少女を見ながらもう一度俺に意見を求めた。

「結局こいつはどこ人間だと思う？」

しかし、意見は変わることは無かった。

「分らん。分るわけねえだろ」

「じゃあ起こしてみるか」

やってみる価値はあるかもしれない。さっきの言葉は恐怖のあまり言葉が上手く発することができなかつただけかもしれない。俺はとりあえずその希望にかけてみることにした。

少女の柔らかい頬をペシンと叩く。ペシン。ペシン。ペシン。三度目くらいにやっと目を開かせる。同時に、勢い良く立ち上がろうとするが、俺は首を掴んで再び床に寝た状態にする。

少女はこちらを睨み、ふたたび訳の分からない言葉を発する。これで俺達の希望は失った。

樋口と俺は顔を見合わせ、疲れた顔をした。これはもうどうしようもないなということである。

すると、いきなり少女は手から何か光る物を俺に投げた。光？俺

はそれが何なのか分らないが、その光は俺の体に一瞬だけ入り、また少女の手に戻った。なんなんだ、本当に？

あっけにとられてまた顔を見合す。訳がわからない。

「食べないで！」

甲高い声が部屋に響き渡る。それも、日本語が。

その声の持ち主が誰か分るのには数秒掛かった。無論、その持ち主は少女であった。

「・・・こいつ、日本語喋ったな？」

「ああ、喋った」

少女は再び叫ぶ。

「た、食べないで！」

「食べないでだと」

「食べないでなあ」

少女は俺達を睨む一方であった。だがあっけにとられていた俺達を睨むうちに、やがてもうちよつと優しい声がする。

「・・・もしかして食べないの」

「食べるのか、お前」

俺の問い。

「食べるって性的にか？」

「さあ」

少女の顔は歪んできた。どうやら恐怖を忘れてきたようだ。

「あのお、離して貰えます？」

俺達は気がつくかのように少女を離れた。そして、日本語が分る以上、これは聞くしかなかった。

「おい、お前、どこから来た？」

少女は首を振る。

「え、エターナルフォーレストよ」

樋口が首をかしげる。俺も首を傾げそうになっていた。

「なんだその下らん物語にでも出てきそうな森は？お前さん頭おかしいだろ？」

そういう樋口と同じ意見ではあったものの、少女は怒り出す。

「な、エターナルフォーレストなんて誰でも知っているでしょ！？もしかして知らないの？」

「知るか」

少女のイカりはどんどん増すようであった。

だが、俺はそんな中でももう一つ聞いた。

「なぜここにいた？」

「分らない。起きたらここで寝てたの」

どうも変だ。話が繋がらないし、ありえないことばかりだ。

少女は今度は逆に聞いてきた。

「貴方達こそ、どこから？」

「・・・日本だ」

俺の答えは正直言っていない答えとは思えない。これは極秘任務だ。むやみに言ってはならないが、俺の仮説では言っても何もならないはずであった。

そして、仮説は正しいようだ。

「日本？何、それ？」

やはりだ。こいつは、この世界の人間ではない。

俺は言った。

「ついて来い！俺達と一緒に帰還する！」

樋口は立ち上がり、通路へと向かう。俺は座ったままの少女に手を差し伸べる。

「そういえば、肝心な名前を聞いてなかったな。俺の名は蒼京諄一。

お前は？」

「私の名前はフィービス。フィービス・トライデントよ」

俺とフィービスは通路にでた。その通路が、後々になって重要な通路になるだろうとは、今は思うわけが無い。

接触（後書き）

読んでくれたらありがとう

## 入隊

何がともあれ、任務は無事に終了した。だが問題は収まっては居なかった。

フィービス・トライデント。そう名乗る少女はまさに問題そのものと言えるだろう。

俺の耳元に樋口が喋る。

「おい、あいつをどうするんだ？報告書には書いたんだらうな？」

「書ける訳がないだろう。彼女の出身地はエターナルフォーレスト。永遠の森だと？誰がそんなことを信じる」

とてもじゃないが今の理由だけで書けなかった。彼女は信じられない事だが明らかにこの世界の人間ではない。彼女の使っていたことばや、イエローとブルーの綺麗な目。この世界での常識の無さ。

向こうの世界のリアリティ。これらを信じる人間なんて滅多にいない。

「けどよ」

俺は腰についている拳銃をフィービスに向ける。安全装置は既に解除されている。しかしフィービスは首を傾げるばかりでここにこしている。拳銃の果てには俺にこんなことを聞いた。

「ねえ、さっきから思ってたけど、それ何？」

俺はその言葉を聞いて拳銃を収め、樋口にいつてやる。

「こんなんで報告書が書けるか」

とてもじゃないが無理である。

では彼女をどうしようか。それが問題である。

報告書に書けないし、かといってそこら辺に放り出せば生きていけない。それに何より向こうは機密情報を知ってしまった。こちらで保護するしかない。

俺達の寢床はこの第五小隊本部である。ここ以外には寝る場所など無い。



俺の考えはこうである。このフィービスは俺達と同じ過去に犯罪を犯した人間にし、俺が直々に部隊に入隊させたことにする。そうすれば何とか誤魔化せるし、万が一彼女が自分の世界に帰れることになっても戦死という肩書きで隊員から外せばよかった。しかしこれにも問題はある。彼女が戦闘をしなければならぬことだ。

私の座るイスの真正面にイスを持ってきて座る。

数日前まで彼らを人間だと思っただけはなかった。あんな重装備は見たところがないからだ。でも、装備を外したとたん恥かしくなる。人間であると思っただけから。そのときは顔を真っ赤にした。

蒼京は深刻そうな顔をした。

「フィービス、お前は・・・お前は自分の世界に帰れないんだな」  
私は当然のように頷く。

「だってどうしてここに居るかが分からないんだもん」  
相手は重いため息をつく。

「もう一つ、お前はこの世界で生きたいか？」

この世界で生きる。私はこの世界に来て色々と凄い物を見てきた。大きな鉄の鳥や大きな船、動く箱に動く絵。私は今でも信じられない。そんな世界に私は住みたいと思っただけなことなどなかった。

私は戸惑う。

この世界に来て私は何をやるの？私はもとの世界で人々を助ける魔女になりたいとがんばってきた。でもここは違う。ここで私は何ができるというのだろうか？

蒼京に言った言葉は仕方の無いものであった。

「分らない」

その言葉に相手は黙ったままである。でも、呆れられてはいなかった。

「フィービス。なら、こう言う。お前は生きたいか死にたいか？その選択をしてくれ」

私は思う。生きる事の意味をもたるには、生きている間に何かを

しないといけないということ。果たしてここで何ができるか？

「私はここで何をすればいい？」

相手は深刻な顔になる。

「生きる選択をしたとき、お前はここでしなければならぬ過酷なことが待っている。俺はそれを無理に押し付けようとはしない。あとはお前の判断だ」

過酷なこと？

私はその言葉に何か深刻なものを感じる。きっと蒼京の表情の理由はここにあるのだろう。

「過酷な事って？」

「お前を兵士にする」

答えは即答である。

私は兵士という言葉に良い印象はない。彼らは邪道な生き物で、それこそ人間であって人間なんかじゃない。でもそんな生き物に私はならなければならなかった。

死にたくない。その思いはある。しかし兵士とはなりたくない。はつきりいってそれは恥だ。

蒼京は私の顔をじっと見ている。

考えてみるとこの蒼京は兵士ではなかっただろうか。

「ねえ蒼京」

「どうした？」

私は思い切って言ってみる。

「蒼京はどうして兵士になったの？」

蒼京はうつむいた。その背中には悲しみを語っているようにも思える。

「俺は過去に数人を殺した。それだけだ」

私の世界では軍隊の力が強い。村人を殺すなんていうのも見たことがある。でも、蒼京は殺した事に罪悪を覚えていた。

相手はそれだけを言つと何も言わなかった。後は私の判断のみ。

私は下を一旦見てから相手の顔を見る。

「生きる」

少年の顔は変化しなかった。  
代わりに立ち上がった。

「これから過酷なことがあるだろう。しかし、お前は俺達と共にあること今選択した。ついて来い」

蒼京はそう言つて部屋から出る。私はそれを見て気がついたように慌てて立ち上がり、ついて行く。その先には一体何があるか全くといっていいほど分らなかつた。

私は通路を歩く。とても長い長い通路のような気がした。一分、一秒が重い。重すぎる。

コツコツコツ。響く足音。蒼京はまるで宮殿で歩く貴族のようである。貴族と違つところは、沢山ありすぎるがそれだけが同じのようない気がした。

長いと思つていた通路もやがては終わりがある。その先には、数人が並んでいた。

「今日からお前と共になる奴らだ」

蒼京をあわせて六人。男が五人、女が一人の集団であつた。

「ようこそ、我が家第二小隊へ」

蒼京の隣に来た体の大きい力がありそうな男が言つ。

「樋口公柔三等尉だ。この部隊の副隊長を務めている。力まさりでありと傲慢な頑固野郎だが……」

樋口が強く蒼京の背中を叩く。

「馬鹿言つちやいけねえぜ。俺が頑固か？」

「それ以外のなんだ？この女たれ」

二人の間で火花が散るが、それもいきなり消えて私の方を向いてニコツと笑つた。私はそれに苦笑した。

蒼京が右から手を指して紹介する。

「菊地大刀一等兵、秋口大吾三等曹、桜井空二等曹、坂崎渥一等曹だ。坂崎は気をつける。この馬鹿の樋口よりも女好きでお前を襲うかもしれないからな」

「っひ！」

私と坂崎の距離は触れない程度の離れていたが、私はさらに身を引いた。

「そりやねえっすよ」

「どこがない！？お前見てるとイラクの米兵みたいなことするんじゃないかと思うんだよ！」

イラクというのが何なのか私には分らないけど、さぞ酷いことには違いない。私は更に身を引く。

蒼京が私の方を向く。

「俺は蒼京諄一二等尉。ここの隊長を務めてる。お前さんは？」

蒼京はそれだけを言って私に自己紹介を求めた。私は恥かしいながらも自分の両方とも異なった色の目を皆に向ける。

「ファイビス・トライデントです。エターナルフォーレストから来ました」

「彼女は紛れも無く異世界から来た人間だ。俺と坂崎が話す前まではこの世界の言葉を使っていなかった。何より、この目がその証拠だろう」

皆はその目を興味深く見ていた。なにしろブルーとイエローの綺麗な目で、まるで宝石のようであった。

私はちよつとこの目について話してみた。

「こ、この目は、魔法の属性を象徴していて、ぶ、ブルーは水、イエローは光や電気の属性を表しています！」

蒼京もそれには興味深そうにしていた。

「そうだったのか。その目には興味深かったが、そんな意味があったのか」

「わ、私の世界ではそうです！魔法を使える人はみんなこんな感じですよ」

つい大きな声を出してしまったが、全員は引くことなく見ていた。桜井は首をかしげながら言った。

「何か魔法を使ってみて？」

何か？何かといわれても……。私はしばらく悩んでしまう。そうしている間にも皆はまだかまだかと魔法を待っていた。

その期待に答えようと、近くにあったあの長い黒い棒みたいなものを見つける。

「そ、その棒貸して！」

坂崎は指を指した棒を取ってくれる。

「G36をどうするんだ？」

私は一度目を瞑り、一点に集中力を高める。

魔力は集中力と比例する。そんなことを昔お母さんから聞いたことがある。これは本当らしく、集中すればするほど凄いことができる。

突然勢い良く目を開け、指を棒に指す。そして指の先から水を放出した。

みんなの最初の感想はきつとこんなものか、とかだったはずだけど、その水は細長く真っ直ぐと棒に流れ、ついに棒を切り裂く。

「ウォーター・カッター？」

そのまま水を放出し続け、棒を完全に真っ二つにしてしまう。

私は集中しすぎて息が荒かった。そんな中、みんなの反応は良かった。

「スゲーな」

樋口が言ってくれたが、一人棒の前で呆然とみていた。坂崎だ。

「お、俺のG36・・・ブラックマーケットで買ったG36があ」

皆はそんな坂崎を無視していた。

この少女が入隊したことが、のちに大変なこととなったのはこの段階では分らないことであった。そもそも、この少女は一体何者なのか？それはこの物語の先で語られるが、この段階では異世界の人間であることと魔女であることしか分らなかった。この二つで十分の気もした。そのためこの部隊もこれ以上は問い詰めなかった。しかし、これだけでは不十分であったと言えるであろう。

フィービスはこの後、蒼京が独自の判断で入隊させたと報告される。また、その際魔女である事や、異世界の人間であることなどは一切触れなかった。

さて、私はまずこの物語でフィービスの初の任務を描いていこうと思う。

2009年8月という世界は非常に色々な事が起きている。裁判員やクリントン元大統領の訪問などさままだ。けれども、彼女らはそういう世界で生きながらも、表には絶対に出ない存在である。その中で生きるフィービスというのは非常に都合が良かった。

フィービス初の任務。それは彼女にとって辛い連続であり、試練のようなものであった。

## 入隊（後書き）

更新遅くなつてすみません。そういえば、私以前の名前はR a p t o r 1 でした。ここではないですがその名で小説投稿しています。ですから『この作品、似てるな』とか思いましたら同じだと思つてください。

読んでくれたらありがとう。

## First Mission

第二小隊担当局長が俺に任務を与えた。その言葉を未だに覚えている。

『最近、田母神元空幕僚長について嫌な話を聞く』

『それは．．．どういった風に？』

そのとき局長は顎に擦り、髭を気にしていた。そのしぐさは何か気になっているという感じであった。

『あの時の論文や発言を覚えているか？』

田母神元空幕僚長は以前問題の論文を作り上げていた。そこには自衛隊の今後のあり方が書かれており、はっきりといつととても平和主義に基づいたものとは思えないことが書かれていた。そしてその後、国会に呼ばれた末になんとか自分の考えが正しい事を主張しようとし、見事に失敗した。

俺の意見はこいつは馬鹿ではないのかというものである。戦争を勧めるなんて有るまじき行為だ。そんなことをしたら日本国民から非難を浴びせられるに決まっている。それに彼は軍人だ。軍人と政治家は別けなければならぬのに彼は政治家のようになろうとした。馬鹿丸出しである。

『ええ』

その時の脳裏にそういったことが浮かんでいたが、相手の言葉によつて全て沈み、代わりに新しい事が浮かび上がる。

『これはあくまで信頼性にかける情報だが、田母神を狙うテロ組織が行動を始めている』

『はあ』

『そこで、君たち第二小隊はこの件を今回担当してもらおう』

俺は相手の顔をろくに見もせずに分りましたと言った。

その適当な返事のお陰で、俺はわざわざ今日のために自分の給料を減らしてステーキハウスの予約をしていた。



俺が予約した理由はなにもステーキを食べたかったからではない。正直それよりも今は訓練中のフィービスの方が心配だし、個人的に言わせて貰うとステーキより今は寿司が食べたい。しかし、相手はステーキが好きな人間であつたためにそれを食べる事にした。

ステーキの好きな相手とは、俺の知り合いのTBSのディレクターであつた。

俺達はただ敵をぶつ殺す事だけが仕事ではない。俺達の存在意義は日本国民を守り、より良い暮らしを作っていくことにある。それに基づけば、時にはこうやって人を気前良く待つことが必要であつた。

約束の時間に五十六秒遅れながらも相手は愛想良く笑いながら来た。同時に俺はイスから立ち上がって礼をする。

「遅れてごめんね」

まあ仕方が無いのしょうな。内心そう思っていた。

「いえ、こちらからお願ひしたのに滅相もございません。後一時間くらい遅れても良かったくらいですよ」

相手はその言葉に苦笑した。しかし実際このディレクター、川上秋はニューステイレクターであり、時には遅れる事もある。とは言え、電子手帳にはきつちりと自分のスケジュールが書かれているので遅れるときは連絡が来る。

川上は俺とは反対側に移り、イスに腰をかける。

「いやー、全く君も大変だね。まだ若いのにこんな仕事を・・・正直、この日本に不満をもたないかい？」

TBSはどちらかといえば左翼である。その影響で、よく終戦記念日などには日本のしてきた残酷な事実を流す。

「ええ、時には思ったりしますね」

思つても無い事では無いが、それに近いものはある。それでも相手は笑ってくれた。

相手のグラスにビールを注ぐ。

「すまないね。で、何の話だい？」

相手は俺の話を期待している。実は川上は俺の正体を知っていた。しかし、そのことを報道するどころか、川上はTBS本社にまで知られないようにしていた。

俺と上川の間には太いパイプが二本ある。両方共情報と言う資源が流れており、それぞれ価値は違っている。このパイプはとても頑丈である。多分叩いても切ろうとしても壊れる事はない。なぜならこのパイプは信頼と言うチタンよりも強い鉄で出来ているからだ。だがそんなパイプでも壊れないわけではない。壊れる方法、それはお互い弱みに漬け込まないことである。上川は俺が機密の警備会社の人間だという事を知られない事。俺は上川を殺さないことと彼が以前過ちを犯した事を本社に言わない事である。この二つの事柄がパイプの自爆スイッチである。上川は俺の話を楽しみにすることが出来た。

「最近の田母神元空幕僚長について伺いしたいのですが」

俺はそう言った。すると、向こうはビールを半分くらいまで飲んでから言った。

「さて、その代償は？」

予測通りの言葉である。無論用意くらいはしている。

「ソマリア沖の自衛隊による銃撃戦でどうでしょう？」

相手は食いついてきた。

「ほお、ソマリア話か。いいね。そもそもソマリアに行くなんて、過去の日清戦争や日露戦争と同じようなことじゃないか。．．．いいでしょう」

「ありがとうございます」

上川は目の前のステーキに手をつける。対する俺はあまり食べはしなかった。

相手が喋りはじめるのを待っていると、自分の携帯電話が鳴る。

メールが来た。桜井からの物だ。

桜井は同性ということでフィードビスの訓練を担当している。その桜井からのメールなのだから、訓練についてに決まっていた。だが、

それが良いものか悪いものかは分らない。俺は嫌な予感しかしなかった。

「失礼」

携帯電話を見る。

覚えは良いらしいく、銃の基本的な使い方やチームのフォーメーションなどはしっかり覚えられているが、銃についての扱いは最悪である。

メールにはそれだけ書かれていた。どうやら本当に銃の扱いがマズイらしい。

俺はしばらくの沈黙の末、携帯電話をしまう。この件についてはまた後で考えよう。

「では、お話を・・・」

「うん、田母神さんのことだね。・・・この前の核武装の件とか本当におもしろかったねえ。あの人、完璧に無理な理想を普通に言っちゃうからお笑いだよ。地に足が着いていないってまさにこのことだよ」

笑いながら言っていた。やはりそうだろう。いくらそれが合理的であっても人間には感情があるから、それを考えなければ出来ない。彼はそれも考えもせずに発言しすぎである。ただの軍人なら命令された事をすればいい。狙撃手であったシモ・ヘイへの『やれといわれた事を、可能な限り実行したまでだ』という言葉が軍人には当てはまるのだ。

「左翼、まあ反日論を批判してるけど、教科書を見ればその実体が分るじゃないかね。日本の教育は左寄り。だからこの国には反日論が高く、親日論は低い。そんなことも分らないんじゃないかね」

「はあ、そうですね」

日本の教科書は左翼である。歴史の教科書の太平洋戦争の部分をみると分るように、日本は間違っていたと言いたげなことが書いてある。日本のしたかの戦争は、残酷で最悪の戦争だ。しかし、ハルノートについては一切触れていない。

太平洋戦争というのは、日本が勝手にアメリカを攻撃して始めたものではなかった。日本としては米国との戦争を阻止しようとしていたが、当の米国にその気はないようで日本に無理難題を押し付けた。そこから太平洋戦争が生まれた。つまり、真珠湾攻撃は苦しなからの止むおえない行為だったともいえる。

このような教科書をまだ知識の乏しい子供が知識を得るために読む。この結果子供たちは太平洋戦争について完璧に否定するようになり、そのまま大人となる可能性が高い。そんな国なのだから反日論が高まるのは当たり前だ。

上川はステーキを既に半分くらい食べ終わっていたのに対して俺はまだ三分の一も食べていなかった。

これでは田母神の敵は多すぎる。一体誰が彼を襲うのだ？いや、襲わないかもしれない。

「あの、近頃彼が狙われているという情報は入ってきませんか？」それを聞くと、グラスを持っていた川上の手が俺を指した。

「ビンゴ！」

酒に酔っているようだ。

俺はそれを思いながら平然と聞く。

「入ってる入ってるよお！」

「では、教えて頂けないでしょうか？」

控えめに言う俺に、向こうは笑みを浮かべていた。

「実はね、最近ソマリア沖の自衛隊派遣についての特集を企画しているんだ」

何を言うかと思えば、どうやら相手は俺に別料金を払わせようとしているらしい。

「分かりました。今回は特別です。私がそれについて後ほど案を出しましょう」

「流石天才少年！分ってる！」

別にソマリアの特集だから俺達の任務について語る必要は無い。

本当なら質問を受けるだけで終わりにしようとしたが、相手の満足

するようなことを言わなくてはならなくなってしまった。まあそれだけなら安い物だ。

「で、どんな情報でなんでしょうか？」

相手のテンションは高かったが、俺は低かった。それでもビールを頼み、飲みまくっている。

「実はね、最近彼を狙うテロ組織が出来たんだ」

「彼だけのために創設されたテロ組織ですか？」

「うん。その組織がどうも怪しいんだ」

「その根拠は？」

とげの無いように言い、相手はそのお陰で普通に話してくれた。

「俺がこの前その組織を調べようとしたらね、警視庁の公安にとめられたんだ」

警視庁公安部。その名が出るとなると、信頼性が出てくるが踊らされてはならない。いくら公安が出てこようが、それが十分な証拠となることにはならないくらい知っている。報道の世界に住む上川ならそんなはとづくに知っている。だが、俺に教えるとなればそこまでの信頼は必要にならない。俺はそれでも聞きたいのだから。

「なるほど、公安が。それだけでしょうか」

「うん。そうだね。でも、結構な情報だろ？」

それは確かにそうである。

俺はこの組織について頭に入れながら話を聞いていた。

桜井が私を呆れながら見ていた。

その原因は手にある鉄の塊にあった。

「・・・その、絶望的ね」

体力なんかは今まで森に住んでいたりしていたから問題はないと言われたけど、この銃の命中率は本当の本当に絶望的であった。

どうも銃は重いし、撃った時の音は大きいし、また反動も大きい。使いたくないというのが私の意見である。

「これを使わないって言う選択肢はないのでしょうか？」

きつぱりといわれる。

「無いと思います」

やっぱり。

私たちをそつと見ていた樋口が私のものとは違う銃を持って来た。多分あれはサブマシンガンという銃の分類で、MP7という名前だと思った。

私が樋口を見ていると、私に代わって樋口は銃を構える。安全装置は既に解除されており、あとは引き金に手をかけて引くだけだった。

樋口は引き金をかけ、そのまま引く。

連続した銃声が次には聞こえ、あっという間に撃ち切ってしまった。

人の姿をした的には真ん中を中心に穴があいていた。

「狙って、撃とうと思ったとき引き金をかける。そしてそのまま撃つ。お前さん、それは出来てるか？」

「は、はい」

「だとすると・・・ブレが激しいのか」

桜井が追撃をした。

「それだけじゃなくて他に幾つか問題があるわね」

「やっぱり。弓矢とかと原理はなんか違うような感じだけど、実際は全然違うから慣れる訳が無い。」

そんなところに、帰ってきた蒼京が顔を見せる。

「ダメか？」

「ダメだな」

腕組みをする樋口に、蒼京は平然としている。

「いつそ銃を使わないでも良いかもしれんぞ」

この場にいた三人が蒼京を見た。銃を使わないって？

「そもそも、銃の無い世界で生まれ育ったこいつじゃあ扱いがまともとは思わなかったからな。それよりも、こいつが戦闘から避けれる可能性を考えていた」

「そんなことが可能ですか？」

桜井の問いを私も同じことを言いたかったのだが、蒼京は答える。「多分無理だ。だから、もしよければその魔法でなんとかしてもらえないか？」

私はちよつと嬉しかった。

私の魔法は今まで私利私欲にしか使われなかった。しいて言うなら、お母さんが生きていたところに魔法で水汲みを手伝った程度だ。だけど、それ以外は動物の狩りとかしか使わなかった。でも、もしかしたらこれで人のためにこの魔法が使えるかもしれない。そう思うと嬉しい。

先ほど私が桜井に見せたことで、桜井は私に合図した。

「さっきのやつてくれる？」

「は、はい！」

私は張り切って言った。

蒼京と樋口が私の方を見る。桜井は小銃を取り、足を開いてしっかりと地面を踏み、小銃を片手で持った。

「準備は良い？」

私は神経を集中させる。そして、私の周りに水で出来た膜を球状に張る。そこにもう一つの能力である電気を水に流す。

薄く出来た水の膜はシールドとなっていた。

「大丈夫です」

桜井は小銃に引き金をかける。

「ファイア！」

小銃からいくつもの銃弾が私に向かう。銃弾は私に向かうが、その前にあるシールドにあたり、高圧電流の流れる水で形が変わってしまふ。銃弾はそのまま進行が止まってしまい、その場に落ちて固まる。

桜井が引き金から指を離す。

「シールド。かなり強力よ。さっきバレットで確認したら、連続では持たないけど一発一発なら耐えられるみたい」

私はこのシールドを張りながらその場を歩く。一度張ってしまえばこっちの物。後は私が止めようとするまで張り続ける。

「こいつは凄いな。だが、攻撃はできるのか？」

「フィービス。やってみなさい」

「はい！」

今度はさほど集中せず、指を的に指した。的と指の間にある一部分のシールドに穴を開ける。

光同時にもつ能力。それは光。

「はっ！」

指の先から光線を放つ。一瞬であったが、それは的に穴を開けた。開けた場所は的の真ん中に近い部分であった。

「これなら銃の代わりにはなると思っただけど・・・」

シールドを解除させた私はちょっと自身が無いように言う。

すると、蒼京と樋口は顔を見合わせた。

「Okだ。」



**F i r s t M i s s i o n (後書き)**

ファイビスの能力は水と光、電気ですよ！。  
ちなみに目の色がかぶることはありません。微妙に違う色なんかがあつて違いが分らないだけです。

読んでくれたらありがとう

## 出撃

田母神元空幕僚長を狙う組織は極左翼の過激派組織であった。

また、この情報源が警視庁公安部であることも再確認した。情報の信頼性は高い。

実は公安部との伝があった。向こうは一般人とは避けているようだが、俺達は一般人とはかけ離れた存在であり、豊富な情報を持っているために親しくしなければならぬ相手であった。

そういう事情により、公安部とは確認はできたものの、この組織がどのように田母神を狙うのかは分らなかった。

俺は全員を会議室に入れて状況確認をしていた。

「以上だ。何か質問はあるか？」

手は拳がった。

俺はその手を指す。

「坂崎」

「フィービスについてです。彼女はどうするんです？」

やはりそうきたか。

「フィービスは魔法で何とかする。このことは後日資料を渡すから見といてくれ」

と、俺は適当に対応した。正直、この話は喋っただけでは分りづらい。

もう一人手を挙げていた奴が居た。今度は桜井だ。

「桜井」

「この組織の本拠地は分って居るんですね？」

「そうだ」

「ではそこに行って情報を手に入れることが有効では？」

確かにそうなのだ。

「許可を待っている状況だ」

「このまま待っていて許可が出る見込みがあるんですか？」

あると言いたい。しかし、正直ない可能性は高かった。

先ほども言ったとおり、この件は公安部が調査している。公安部は警視庁であるため調査権等を使えば様々なことが可能だが、俺達はいくまで警備会社である。確かに国の直下とも言っているいい立場かもしれないが、向こうにばればそれは厄介になる。

このことが理由で許可が降りるのは少々難しかった。

「ない」

俺は素直にそう言う。

桜井はその答えを聞いて座るまでだ。ここで俺に反抗したところで全く意味は無い。

だが、俺はこのまま黙って指を啜えるほどお人よしではない。考えはしっかりと持っている。

「質問はないな。では、先ほどの桜井の質問と少々被るが、今現在我々の手で敵のテロ組織から情報入手するのは完璧なほど困難になっている。そう、我々はな」

俺はあえて『我々』という単語を強調させた。

皆は俺がこの単語を強調させたことによって少々期待をする。

「実は、これには早速フィービスの能力を必要とする」

フィービスはびくつと体を震わせた。多分彼女はまさか自分がここで出てくるとは思わなかったのだろう。逆に周りは当然のように彼女を見ていた。

「フィービス。お前、水と光と電気が自分の能力だったな。洪水を起こすことは出来るか」

「ぶー！」

フィービスはどうやらあまりのことに吹いてしまった。軽く前にいた秋口に唾が飛ぶ。

「こ、洪水って・・・」

「特定の地域だけでいい。出来るか？」

相手はちよつと困ったように考え込んでしまう。即答で断られないだけいいとは言え、やはり少し彼女の答えに緊張を覚えていた。

この作戦、彼女が洪水を起こさない限り可能にはならない。

じつくりと考えた時間、とは言っても僅か二分程度ではあるがその時間が経過し、やっと彼女は顔を上げてくれた。

「できない事はないと思います」

「できない事はない？」

「基本的に私は水を発生させたり、水を自由自在に操ることができるけど．．．そこには限界がありました」

やはり無限の力では無いわけだ。

「魔法は集中力と僅かな体力を使用します。でも、あまりにも大きなことをすると集中力よりも体力の消費が激しくなっちゃうんです。それで、洪水みたいに大量の水が必要になることを今までやったことがないから心配なんです」

可能だがその時はフィービスはもう体力の限界に達している訳か。出来ないよりはかなり良い回答である。

「それでいい」

フィービスは俺の顔を見たままであった。きっと緊張してきたのだろう。

「今回の作戦は敵の基地を狙う」

俺達は訓練の名を装って夜の樹海の上空をへりで飛んでいた。

CH-47チヌークという輸送ヘリで、中には俺達意外にも本職の自衛隊員がいた。

富士山の樹海ということと富士の演習場から出してもらった物だ。

俺達全員はただただ黙って座っていた。

周りの自衛官からは変な目で見られていたが、特に気にしなかった。

俺はここがどこなのか自分が持っているGPSで確認する。

敵の基地は樹海の中で、かなり分りにくいところにある。現在、その上空に近づこうとしていた。

不意に自衛官の話が耳に聞こえた。

「何たってこんな雨の夜にヘリを飛ばすんだ？事故で墜落したら死ぬのは俺たちなんだぜ」

「まったくだぜ」

確かに、この雨の夜にヘリを飛ばすなんて言うのはかなり危険なことである。しかし、だからこそ意味がある。

私はこのヘリという乗り物で緊張していた。

洪水なんてやったことない。初めてだ。そしてそのはじめてのことが今回かなり重要になってきてしまう。

となりで座っている蒼京は平然と何か機械をいじっていた。

蒼京の腕を引っ張る。

「どうした？」

「もし、もしよ、その、出来なかつたら・・・」

蒼京は至って平然と答える。

「作戦は失敗。みんな揃って帰りましょう」

「・・・」

まるで彼は気にしていない。

私は彼の態度に何かが抜けてしまう。なんと云うか、熱意というか、緊張というか。そしてその結果私は呆れて言葉を失ってしまった。

代わる様に今度は彼が質問してきた。

「こっちに来てどうだ」

こっち、というのはやはりこの世界のことであろう。

考えると私はこちらの世界で驚く事しかしていない気もする。地面は完璧までに硬く、空の青は微妙に薄く、夜は本当に暗い。私の世界ではもつと空は青く、夜は月が明るかった。

この前、桜井と一緒に買い物に行かせてくれた。そのときの驚きは今でも忘れられない。

人がたくさん居て、皆同じような顔をしていた。絶望も希望も何も感じていない顔である。私の世界の人たちは違った。皆明るい人

たちで、希望は同じ仲間の人たちで、絶望は兵隊達と決まっていた。だから、皆仲間がいるからいつも希望に溢れる顔であった。

そのことを蒼京はへりの向かいの窓を見ながら聞いていた。私を見ていなかったが、どうやら真剣に聞いているようであった。

「なるほど。覇気がないって感じか。確かにそうかもな」

そう言う蒼京は少しばかり変であった。

「あの自衛官を見てみる。お前のいた世界の軍人とは大違いじゃないか？」

確かにそうである。

聞けばあの人たちも兵隊のようなものだ。でも、私たちの世界の兵隊のようにいばっていない。彼らはいつも自分が兵隊であることを誇るのに、この人たちはどちらかと言えばそんなものごととやめてしまいたいようだ。

「ここ人間は皆そうさ。ただただ皆生きてる。死ぬのが嫌だから、目的も無いのに生きてる。別にそれが間違いつて訳じゃないが、自分が生きる意味とかっていうのをあまり感じてないんだ」

私が入隊した理由は生きる意味をもたせるため。なのに、ここの人たちはそれを感じていないという。私は不思議であった。

「ねえ、この人たちは生きていて楽しいの？」

「さあな」

蒼京の目は死んだ魚のように見えた。でも、よくよく見るとどこか感情が表れている。怒りのようなものである。

「蒼京は、生きてて楽しい？」

私はそう聞いた。

でも、彼の反応はあまり良いものではなかった。

「分らない」

「自分のこと・・・なのにな？」

そう再度聞いても彼は言う。

「分らない。これが本当に楽しいことなのか」

冗談のようには一切聞こえない。むしろ真剣であった。

相手は自分の持っている機械を見て顔の表情を険しくした。そして、隊員全員に頷く。

どうやら私の初の仕事が始まるらしかった。

## 出撃（後書き）

フィービスの世界にも月ってあるんですね。

読んでくれたらありがとう



## 実行

俺と樋口は席を立ち、操縦席入り口に向かう。

席に座っている隊員や自衛官はそんな俺たちをじっと見ていた。操縦席では、少々慌しかった。

「どうなってる？突然リーダーがイカれちまったぞ」

「妨害電波でしょうか？」

そんな会話の最中に俺たちが入ってきた。

「どうしました？」

副操縦士が俺たちの方を向いて騒ぐ。

「どうもこうも、どうやらジャミングされたらしいんです。」

「ジャミング？一体どこから？」

冷静な感じで俺は聞く。しかしながらこの質問の答えは既に知っている。相手が知っている可能性はゼロに近いが。

「分かりません。この樹海の中で妨害電波を流すイカれた奴なんて全く分かりません。ですが、この雨の中それで動くのは大変危険です。

暗視装置は酷い雨で使いにくいですし、だからってこの深夜の真っ暗闇で暗視装置無しでは見えないのと同じです」

操縦は窓を叩いた。

「クソ！だから無理だと言ったんだ！これじゃあいつだかの霧で事故にあつたヘリと同じになっちまう」

操縦士は絶望した表情で叫んだ。どうやらこの訓練に危機感を感じていたらしい。

俺と樋口は顔を見合わせ頷く。そして次には目の前の二人の急所を叩き、気絶させた。

ゆっくりとその二人を見てから火がついたように樋口が慌しく操縦室を出た。

「大変だ！パイロット二人が気絶している！しかもヘリのリーダーや無線がシャットダウンした」

ヘリの座席に座る自衛官達はたちまち騒ぎはじめた。しかしそれに対して俺たちの部隊は静かであった。ただ一人を除いて。

「わー！大変だー！大変だー！死んじゃうー！死んじゃうー！」

既に伝えておいたはずだろ。多分フィービスの奴、本気で危険な状態だと信じてるんだろ？が何で危険なんだか分かってないぞ。そもそもあいつはパイロットがなんだか分っているのだろうか？桜井はちゃんと教えてあげたのか？あ、桜井がフィービスを押さえてる。それはともかく、自衛官達はついに言い出した。

「脱出だ。このヘリから脱出するんだ！」

揺れるヘリの中で、どうやら計画通りに揺れてくれたようだ。

今の発言に周りは賛成したり反対したりしているが、隊長は何も言わなかった。

代わりに俺が言ってやる。

「この暴風の中ではヘリの燃料の消費も激しいです。脱出しましょう。訓練で使うはずであった60式で降下しましょう」

実はこの判断は俺がなるであろうと予想した。

誰かがパニックを起こし、適切な判断をしなくなるはずである。そうならばとっさに考えた事を口に出すようになる。とっさに考えれば脱出したいという気持ちが優先され、脱出の案を誰かが出す。俺はそれにつけ込み、正当そうな理由を言って脱出に誘導する。

計画通りだ。フィービスのあの慌しさは別として計画通りに進んでいる。

相手の隊長を含め、皆降下の準備をし始める。パイロットは気絶をしているために自衛官二人がそれぞれパイロットとくっ付けて降下しようとする。

俺達もパラシュートの準備をした。ただし、銃などの武器は持っていない。ナイフはあるにはあるがアーミーナイフ程度で、人を殺すのには困難である。

しかしこれはあくまでも口実の材料であった。

俺達はただの部隊ではない。そう、信じがたい能力を持つ部隊で

ある。

この作戦はその能力をはじめて発揮する作戦だ。そして、その能力を持つ彼女こそが今回の花嫁であるのだが……。

みんなは座席から立ち上がって荷物を持っている。

隣の桜井も立ち上がってしまった。

あれ？何するんだっけ？というかここを脱出するってどうやって？

ここは綺麗な富士山とかいう山の森。それだけなら私は喜ぶけど、森の上空というからあまり喜べない。しかもその上空から脱出ってどうやって。

そりゃあ故郷の世界には飛行の能力や風の能力、更には重力の能力なんていう人たちが飛んでいた。けど、私は水と電気と光の能力者。波乗りが出来ても空は飛べない。でもこの世界の人たちは皆飛べるのだろうか？って言っても既に空を飛んでいるんだけどね。

私はぼーっとしていると、蒼京が私に話し掛けた。

「何やってる!？」

「あ!」

思い出した。パラシュートって言うのを使って脱出するんだった。でも私はまだ十分な訓練を受けてないから蒼京と降りるんだった。映像でそのパラシュート降下って言うのを見せてもらったけど、二人で降りるってどうやるのだろう？私が蒼京の肩に乗って降りるのかな？

突然蒼京は私に後ろから抱きつくぐらいまでに近づいてきた。

「きゃ」

私はとっさに体を引く。

いきなり何を!？」

「おい隊長さん、フィービスちゃんが怖がってますよー。女に強引に抱きつくなんていけませんねえ」

坂崎は自分のパラシュートをしっかりとつけながら言った。

私は蒼京を見る。

「フイービス．．．」

その表情はかなり怒りに満ちている。

しまった。またやっちゃった。

「お前、この後どうするか忘れたる」

「はい」

相手はもう呆れ顔で何も言わなかった。代わりに次の行動を始めた。

蒼京は私に先ほどと同じように近づき、私とベルトでくっつける。そして重い荷物を私につけた。

「いいか、俺のパラシュートが開かない時はお前の予備を使うんだ。パラシュートが不良品で落ちると骨が折れるどころか皮膚を破って突き出るって話だからな。そうはなりたくないだろ」  
え。

骨が突き出るって．．．それかなり酷い状態じゃん！

急に風が私たちを襲う。ヘリのランプドアが開いたのだ。

雨の雫と風が私の頬を撫でる。でも、体はかなり暖かい。

みんなが一斉にヘリから飛び降りる。

「行くぞ！」

私と蒼京もヘリから飛ぶ。

すると私に先ほどとは比べ物にならないくらいの風がせまってきた。そしてその風の奥には壮大な森があった。このままではあの木にぶつかって蒼京が言っていたように骨を突き出してしまう。

「死にたくない！」

叫んだ瞬間にいきなり上から引っ張られるような感じがした。

上を見てみると大きな袋のような物が浮かんでいる。そして景色は先ほどのスピード感溢れる壮絶な物とは違ってかわってゆっくりなものになっていた。

「良かったな予備を使わないで済んで」

風の音もさほど無くなり、蒼京の至近距離のささやきが聞こえた。まったくもってその通りである。

「この先は覚えているな？」

この先、というのは私の初仕事のことだと思う。

私はしっかりと頷く。

初の仕事だからこそ、私はしっかりと覚えている。失敗は許されない。蒼京から聞かされた。それは今の状況からも身に試みている。隊員達が木に引っかけりながらも着地していく。私たちも地上に近くなっていく。

「ねえ、蒼京って暖かいね」

蒼京の顔は見えなかったが、息が急に上がって顔を頻繁に動かしていた。

「と、突然何を言いやがる」

「だって、これだけ雨が降って風にあおられてるのに体は暖かいんだもん」

「知るか。ちや、着地するぞ」

焦っている？

私はそんな蒼京がちよっと可愛く感じたがそれも束の間、着地には流石に参ってしまう。

安全に着地できる場所がないお陰で木に引っかけり、物音をたてながらどンドン落ちていく。まるで木登りで足を滑らせてしまったかのように落ちていき、土を踏みしめるころにはびしょ濡れであった。

ベルトはずし、私は蒼京と離れる。そして今度は着いて来いとかかりに走り始めた。

私は久しぶりの森に少しの喜びを感じつつ、みんなが集まる場所へと走った。

みんなは済ませ顔で並んでいるので私もそのように並ぶ。すると蒼京だけ自衛官の偉い人と話していた。なんだか大変そうな話だ。まるで、税を納める時の村長と兵隊の会話のようだ。

そのことで私は嫌な過去を思い出しそうになってしまった。

あの時のことは二度と思い出したくない。絶対に。

しばらくして蒼京は戻ってきた。

「いいか、今からこの周辺を搜索する。俺や向こうの隊長さんも見たのだが、この近くに民家のようなものがあつたと聞く。そこに行く」

この会話はフェイクである。

自衛官の人たちには悪いけど、私たちが行くその民家とはテロ組織の基地で、私たちはそこに行つて情報を手に入れる。

武器は一切無い。なぜなら私がいる。そして、誰も殺さないから。私たちは隊長である蒼京を先頭に走つた。

雨の中、雫にうたれながら走る気持ちはなんとも悲観的であつた。しかもそれが夜の出来事なのだからなお悲観的だ。

走る、走る、走る。森で済んでいるときの私は雨の日にそんなこととはしなかつた。雨の日の森は外に出ないほうがいいとお母さんが昔言つていたのでよく覚えている。

着地点からいくらか離れると、走るのをやつとやめた。かわりに、浮かんで光っているへりを皆が見た。

桜井が隣で小さく言つた。

「やつて」

目を瞑り、神経を集中させる。

まだ。まだ。まだ！

じつくりと集中させ、ついにその集中力は熱をも発生させ、雨の雫とは違つ汗を顔に流す。

今だ！

「はー！」

両手を開いて一気にそれを襲い掛かるようにして思いっきり振つた。

次には凄まじい光が天空に訪れ、光に遅れて轟音が鳴つた。同時に、上空に爆発が生まれる。へりに雷が直撃したのだ。

へりは爆風を上げ、そのまま見えなくなつてしまつた。

私たちはそのまま目の前の家を見た。

これが、テロ組織の基地だという。

基地、というのにはなんだか違和感がある。どちらかといえばやっぱり民家だ。でも民家にしては大きい家だ。少なくとも自分の手で作った私の家よりは十倍以上は大きい。

私たちは泥となった地面に伏せ、こっそりと基地を見ていた。

「フイービス。あの傾斜のところに洪水を起こせ。それも、地面にしみ込ませるように」

蒼京の指す位置は、基地よりも高い部分にある隣の傾斜の部分である。

私はもう一度集中させる。

今度は集中力とかなりの体力を使う。

想像する。神経を想像に費やす。あの地域に大量の水を発生させ、土に水をしみこませる。

私の息は次第に荒くなっていく。神経を長時間集中させている上、壮大な想像を必要とする事にはかなりの体力が必要であった。でも、不可能では無いはずだ。私はそう信じて集中させる。

今！

そう叫んでもう一度先ほどのように勢いよく目を開き、焦点を目標とする地域にあわせた。

先ほどの雷同様に突然そこに大量の水が溢れる。まるで津波でも着たのかというほどであった。

と、次の出来事に私はびっくりする。

いきなりその土や木が動き始めたのだ。まるで雪崩のように。

土砂崩れ。そう、蒼京はそれを狙っていた。

土は傾斜を勢い良く流れ、そのまま基地へと突っ込んでいった。

窓が割れ、ついには壁が壊れ、土と木が家の中に迫った。あの勢いだ、中にいた人たちの多くが土に埋もれてしまった。

人を殺した？

「突入する」

全員が立ち上がる。そして先ほどよりも速いスピードで走った。

私は何とか殺したショックを押さえて一緒に走った。けれども、中に入った瞬間そのショックは再び私を襲った。中で顔が完璧に埋まり、足だけが埋まらなかったという人がいたのだ。

「こっちに何かあります」

菊地が二階で叫んだが、私には聞こえるほどの余裕は無かった。

土に埋もれた沢山の人を見てしまった。私は、その時初めて人を殺してしまった。

私は、ただ目を大きく開き、その事実を否定しようとしていた。



## 実行（後書き）

間違ったことがあるかもしれません。もしありましたらごめんなさい。

読んでくれたらありがとうございます

## 情報

死んでる。死んでる。死んでる。

私の頭は死の文字一つである。別の物があつたとすれば、それはきつと壮大な罪悪感。

人が埋もれしまっている。大量の土が口に入ってしまったって息が出来なく、みんな苦しみながら死んでしまっている。

「私は．．．私は．．．人を．．．」

最後まで言う事は出来なかつた。出来るわけが無い。

私は死体を見て気持ち悪くなり、吐き気がした。でも、口から出るものよりも、二つとも違う目から出る涙の方がおおいようにも感じた。

私のした事は、私の家族にした忌々しい兵隊たちと同じ事だ。

なんてことをしてしまったんだ。

ついに立つ事も出来なくなり、その場にひざまずいてしまった。

顔に手を被せ、自分の、罪人の顔を隠す。

もうこんな姿、見せられない。

「ごほっ！ごほっ！」

「！」

近くで埋もれている人が生きていた。

目の前にあるパソコンや文章に俺は眉をひそめるばかりだ。

樋口はイスに腰をかけ、頬に手を当てて疲れたような、何か悩みを抱えてるような表情をする。

「この文章からすると田母神はF-22のステルス性についてのデータを持っているぞ」

このテロ組織の目的は田母神暗殺ではなく、データの破壊にあつた。

文章を読んでいくと、最近彼は防衛省技術研究本部に足を運んだ。

らしい。このテロ組織はなぜそうなったのか知るため、彼と接触をした人間を買収して問い詰めると、F-22のデータについてと軽く語ったらしい。

防衛省とF-22というところやはり頭に浮かぶのがF-X問題である。

時期主力戦闘機の有力候補として挙げられたF-22。その性能は誰もが世界一と言い、F-15ならば最低でも六機以上無ければこの機体には勝てないという。

ただ、問題点は多い。

このF-22は冷戦を想定されて作られたもので、敵は旧ソ連とされていた。しかし、時代は大きく変わってしまい、敵は旧ソ連ではなくテロリストになってしまった。

果たしてテロリスト相手にステルス機を使う必要はあるのだろうか？

無論答えは必要ない。そんな最強戦闘機よりも、F-15Eの方がいいだろうし、何よりF-22は対地攻撃は得意分野ではない。テロとの戦いにおいて必要とされたのは皮肉なことに、安い最強攻撃機のA-10であった。

オバマ政権に交代してしまい、彼は軍事費を大きく減らそうとした。その政策の中でやはり注目したのはF-22の生産中止であった。

先ほども言ったとおり、F-22は現代において必要ではない。無いよりはいいかも知れないが、それをするのに沢山の犠牲が伴うなら話は別だ。

この不況の中、F-22は完璧な場違い。こうしてこの機体は生産中止になってしまったのだ。

さて、米国ではこのような状況であったのに対し、日本ではどうなっていたか。

日本は時期主力戦闘機の候補として、ユーロファイター・タイフーンやF-15FX、F-35などを検討した。だが、その中でも

最強のF-22がふさわしいとして米国に求めてきた。

米国はこれに対して反対であった。

F-22は最強とはいえ、情報が漏れてしまえばそれつきりである。それはどんな兵器でもそうだが、日本にはその危険性が高かった。

イージス艦の情報が漏れた事件がここになって痛かったのだ。

そうして何度も防衛省はF-22を求めたが、ついに政権は代わってしまい生産中止になった。これを機に防衛省も考えを変えたらしく、他の候補の機体を検討するようになったのだ。

さて、俺の意見を言つとそれで正しかっただ。

日本にF-22のような機体が必要かといわれるとそうでもない。北朝鮮の戦闘機を見てみると分るが、確かに最新の戦闘機はあるが数的には朝鮮戦争時の旧式戦闘機が主力である。この戦闘機は確かにミサイルは詰めるが機関砲が単発であつたりとかなり性能が劣る。それに比べれば今の日本のF-15JやF-2のほうが圧倒的に上だ。

このような状況がある中、F-22は必要でないばかりか、それは別の影響を及ぼす。東アジアの軍事バランスが崩れるのだ。

これらのことを踏まえれば日本にもF-22は必要ないといえる。でも、日本はどうしてもF-22を必要している。まるでだだをこねる赤子のようなだが、それが現実であつた。

先ほども言つたとおり、今回の生産中止は諦めがついていいことだと思つた。なのにこの田母神はその計画を復活させようとしていくのか。

「呆れたよ。F-XをF-22にしようなんて無駄なものにな」

俺の言葉に秋口は反応したらしく、顔を俺に向けた。

秋口は主に狙撃を得意とするのだが、趣味で航空機の操縦が出来るようになったりとそちらの方面にも詳しい人物であつた。

「これをそのままF-Xにするとは限りません」

その言葉には樋口も目を細めた。

「ATD - X、心神があります」

ATD - X？

しばらく俺は記憶を探る。たしかに聞いた事のあるようなことだ。だが、俺よりも早くに坂崎は思い出したようだ。

「ああ、あれか。あの独自で開発しようとしてるステルス機か」

思い出した。F - Xの候補にもあつたような無いような機体だったと思う。

樋口が再び話をすすめる。

「極秘でF - 22をF - Xにするのは難しいでしょうし、無理があるでしょう。しかし、国産の心神にF - 22の特徴を盛り込むのであれば話は別です」

確かにそうだ。考えてみればF - 22を極秘にF - Xにするといふのは無理だ。当然米国の許可が必要なわけだし、となればこんなデータは無意味である。

となると、やはり問題がある。

「東アジアにおける軍事バランスがおかしくなるぞ」

俺は呟いた。

樋口はそこに付け加えた。

「それだけじゃないぜ。前のF - 2のように米国に渡ることになれば確実にF - 22の件に気がつくはずだ。だとすると、このデータが極秘に渡っていることがばれて日米同盟にも傷がつく」

とにかく、田母神が行うことはかなり危険なことであった。

しかし、俺たちの任務はその行いを守ることであった。

樋口は俺の前に立ち問いた。

「どうする？」

「.....」

その時、下で何か声が聞こえた。

「しっかりしてください！」

フィービス？

まさか助けようとしている訳じゃないだろうな。

「しつかりしてください！まだ生きてますよ！」

まずいぞ、あいつ、テロリストを助けようとしている。

俺は走って階段を下りた。

フィービスのいるところに着いた時、やはり彼女は助けていた。

「しつかりしてください！」

まだ生きている。まだどうにでもなる。

私は泥だらけになった手を死にそうになっているこの人の顔を叩いて意識をはつきりさせようとする。

どうか、どうか彼を助けて。

「何をやっている」

その時後ろにいたのは蒼京であった。

蒼京は私のところに歩み寄った。

「ひ、人が生きてたの……。だから、助けてあげようと思って……」

蒼京の目はまさに人を殺す事の出来る人の目であった。さっきの焦っていた蒼京とはかなり違っている。

この人、殺される。

「こ、来ないで……」

それでも歩み寄ってきた。

そうだ、私は彼に殺せと命令された。それも、私に誰も死なないと言って騙して。

彼は殺す。この人を殺すわ。

私は蒼京に指を指す。

「何の真似だ？」

「それ以上来ないで！来たら魔法を使う！貴方の心臓を貫くわ！」  
それでも蒼京の足は動きを止めなかった。

「説得力が無いな。人を殺した事に罪悪を感じているのにお前は俺を殺すのか？」

私は自分のしようとするにはっとなってしまっ。これではあ

の時と同じではないか。

蒼京はそうしている間に私の隣まで来てしゃがみ、まだ生きているこの人を睨む。

「こ、殺さないで！」

私は叫んだ。同時に諦めかけていた。

目を思いつきり睨り現実から逃れようとした。

あのときと同じだ。あの時もこうやって現実から逃げようとして、振り返った時には大切な人を全員失っていた。そして今回も人を失ってしまった。

でも、目を開けた時、目の前の男はまだ生きていた。

殺してない？

「田母神はなぜF-22のデータを持っている？」

良く分らないがまだ殺していないことは確かであった。

男は弱り果てながらも私や蒼京を見ていた。

「言え」

問い詰める蒼京はやはり怖かった。

「言え！」

男は声の大きさにも関わらず、怯えることは無かった。

「・・・お前達は・・・何・・・者・・・？」

「それはお前の回答しだいだ」

その言葉を聞くと、男は諦めたように私の方を見た。

「讓ちゃん・・・ありがとう・・・」

男は目を瞑り、眠ってしまった。結局、助ける事は出来なかった。その時の私の涙は枯れていた。

今回の作戦、実はこの件について警視庁公安部はかなり戸惑いを見せた。

自衛官を問い詰めても何も分らなく、嘘も言っていないことからかなり困ったようだ。

事実なのは、彼らがああ組織の基地に行ったこと、そして偶然に

もそこで土砂崩れがあり、基地が壊滅状態になってしまったこと。そして、彼らは武器を持たずにあそこに訪れた事。ヘリがジャミングで動けなくなり、操縦士二人も気絶したことで脱出したこと。ヘリがその後雷で墜落した事。

偶然が重なりすぎである。でも、彼らがやったという証拠は無い。武器を持たずに彼らが行ったことから公安部は本当に助けを求めたと考え始めた。

しかし、これを知った組織は公安部だけではなかった。

実はこのことを知りたいと調査したのは公安部だけでなく、イギリスのS I Sもそうであった。

なぜS I Sはこのことを調査したのか。私はそのことをこの物語で伝えていかなければならない。そう、それが真実であるから。



## 情報（後書き）

フィービスは一体過去に何があったのでしょうか？まあありきたりな  
ことですね。

読んでくれたらありがとう

## 感情の変動

私は自分の部屋で呆然としていた。

未だにあの死んでしまった人たちの記憶が頭の中で繰り返されてしまっているのである。

忘れる事など到底出来なかった。だから、帰ってきてから二日間こんな感じだった。

「ご飯もあまり食べずにずっと座っていた。まるですねているようだ。」

私はあの事実を頭で言い訳していた。私は人を殺していない。でもそれが嘘であることなんて自分が良く分っている。でも、言い訳をしないではいられなかった。

もうそろそろ夕飯が部屋に届けられるころであった。本当なら食卓まで行かないとご飯はくれないが、やっぱり隊員達は私に気遣ってくれた。

部屋のドアからコンコンと音がする。

「夕食よ」

いつもなら菊地が『夕食です。食べてくださいね』といってくれるのだが、今日は菊地ではなく桜井であった。

「入るわ」

入って欲しくは無かった。でも、それを止める元気も無く、入室を自動的に許してしまった。

桜井はエプロン姿であった。どうやら今日は彼女が作った物らしい。

私はベットの上で桜井を気にせず小さく座っていた。そしてただ呆然と窓の外の月を見ていた。

何も話したくない。それが今の気持ちである。

そんな気持ちを見捨てて桜井が夕飯を机に置いて私の隣に来る。

「貴方の世界にもあんな月があるのかしら？」

答える元気は無い。

でも答えるとするなら、あんな月よりも綺麗な月がある、と言う。この世界の空はどこかきこちない。何もかもが薄い。はっきりとしない。まるで今の私のようである。

桜井は私の顔を見て微笑んでいた。

「その顔は久しぶりだわ」

「？」

流星にその言葉には首を動かした。私は気がついたときには桜井の顔を見ていた。そして自分の顔でその言葉の意味を教えてくださいと尋ねた。

「多分私たち部隊の中でその顔を知らない人間はいないわ」

先ほどから言っている意味が分らない。その意味を私は知りたくて仕方なかったが、彼女はもったいぶった。

じつと私は彼女の顔を見てみると、やっと答えを教えようとしてくれた。

「ここにいる人たちはみんな死刑になってもおかしくないのよ」

「え？」

私たちの兵隊は殺す事が仕事だから人殺しは罪にはならない。もちろん、ちゃんとした理由がなければ罪となってしまう。それはこの世界でも同じらしい。だから死刑になるというのはおかしい。

「隊長さんは言っただけでなかった？昔何人か殺したとかって」

そういえば言っていた。しかもそのときの彼はどこかに罪悪を感じていた。

もしかして、そういうことがこの部隊の隊員にはあるというの？

「人を殺すってというのは簡単じゃないわ。理由もなしに殺せばそれは一生傷となる。それも致命的なね。私たちは過去にそういうことがあったの。そしてそのとき今の貴方のような顔をしたはずよ。私も例外じゃなかった」

月を見ながら言う桜井は、まるで月に向かって語っているようにも見えた。

「でもね、私から言わせて貰うと、貴方の殺しは逆に救いでもあったかもしれないのよ」

「救い？」

「そう。私が人を殺める理由は何か？それは人を守るため。今までそう信じて殺めたのよ」

「それは、私も例外じゃない？」

恐れながら聞く私に、彼女はこちらを向いて笑いながら答える。

「ええ」

それを聞いた私は心のどこかで安心した。でも、桜井の話は終わっていないかった。

「ねえ、貴方が人を殺めて辛いと感じている間、実はもっと辛いと感じている人がいるの。誰だと思う？」

急な問いかけに私は何を言っているのか分らなかったが、聞こえた限りの桜井のことばをもう一度再現して理解する。でも、理解したからと言って回答は出てこなかった。

「答えはね、貴方を騙した隊長さんよ」

「蒼京？」

思わず私はその名を出してしまった。

彼女は頷き、口を開く。

「貴方は自分の意思で殺した感じがするかもしれないけど、貴方は銃だったのよ。引き金を絞ったのは隊長さん」

「どういうこと？」

「貴方に命令したのは彼であるし、もしも責任を問われるなら彼が追う事になる。そして貴方の心を一生閉ざしてしまうのではないかと彼はかなり心配していたの。でも、沢山の人を救うために貴方を騙して命令した。向こうもかなり罪悪を感じているわ」

私はそれを聞いて酷く無力なことを感じた。

「蒼京は・・・今何を？」

「部屋にいますと思うわ。ちょっと気になったことがあるから調べ物をしているとか言ってたと思う。もしよければ行ってあげたら？」

私は長い時間同じ体勢をしているのを止め、一目散にドアを出た。なんでだろう。いつてどうするのだろう？そんな思いがありながらも、行動は心よりも速かった。

俺の考えは正しかった。

どうやら俺達部隊は利用されていたらしい。これでは許可が下りないわけだ。

田母神がF-22のデータを持っていることを知った俺は、少々ある考えが浮かんだ。それは、この作戦がテロ防止という名の陰謀ではないかだ。

結果大当たりだ。

第二小隊担当局長は元空自の幹部であったのだ。

そうと分れば話は早かった。

局長は以前田母神と接触した人物であるに違いない。だとすれば、今回の任務は田母神がデータを持っていると知っていて与えた任務だ。

しかし、データを持っていると知れば上の連中は任務どころか田母神すら消し掛ける。だから俺たちに情報を集められないように、公安部を口実に許可を出さなかった。

だが、今回許可を得ずに情報を集め、真相を知ってしまった俺たちの行動はもう定められていた。

「やられちまったなあ」

俺達の任務はテロを阻止すること。つまり、田母神の持つデータを守ることであった。

こうなった以上、真相を知ってもどうにもならない。後はテロの阻止だけを考える。ただ、そこらへん諦めの悪い俺はちゃんと考えてあるのだがな。

実はテロが発生すると分った以上、これを警察なんかには知らせればSATやSIITくらいは来てくれる。でもあえてそれはしていない。

今回のテロは完全に俺達だけで阻止するからだ。そう俺達だけなのだ。

「好き勝手にやらせる訳にはいかない」

一人で呟くと、ドアからノックの音が聞こえる。音は小さいせいか小柄な、もしくは遠慮がちな女性の感じがした。

「どうぞ」

俺が言っつてやると、ドアはゆっくりと怯えているように開く。だいたいそこら辺で菊地がフィービスであると推定できた。

ドアから一瞬見えた青いような黒いような髪でそれがフィービスであることが分った。

どうやら、誰かが彼女に何か言ったようだな。まあ誰かは見当がつくが。

「どうした、フィービス」

フィービスは俺達と初めて会ったときと同じ服装であった。多分それが彼女の私服なのだろう。服に詳しくないが、これがワンピースドレスというものなのだろう。黒々としたワンピースドレスで、意外にも胸が少し大きいのでちょっと盛り上がっている。森の中で暮らしていたというが、フィービスはかなり肌が白く、服とは対照的であった。

それに対して俺は黒のシャツに黒の迷彩ズボン姿だ。ちょっと相手とは違う感じである。いや、ちょっとではないかもしれない。

彼女は俺のところまで来たはいいが、ここにきて何をするのか分らなくなり、もじもじとし始めた。

俺は別にそれにイライラするわけでもなく、イスから立ち上がった意味も無くずらりと並ぶ本を見始めた。

でも、このままでは何も変化しないので俺から話を始めた。

「今の気分はどうだ？」

「ふえ？」

予測もしない問いかけにフィービスは一瞬の戸惑いを見せたものの、その答えはしっかりと答えて見せた。

「う、うん。だいたい．．．と思う」

「なら今すぐ作戦実行に移る。拳銃を持って着替える！」

「え、え、え!？」

突然の声の強さに完全に驚き、本当に着替えようとドアを振り返る。いつもフィービスだ。

「冗談だ」

その声を聞くとちょうど触れていたドアノブを離し、再び俺の方を向いた。

「もう」

ちよつと怒り気味で俺を見た。

「なあに、もう大丈夫かどうかを確かめただけだ。その様子だと、大丈夫なようだ。で、俺に何のようだ？」

フィービスは今度こそという顔をして口を開いた。

「き、聞いたの。桜井二曹から．．．。本当は責任を問われている蒼京の方がつらいつて。でも、なのに蒼京は平気な顔で仕事をしていて、私は部屋に引きこもり。なんだか情けなくて．．．」

結局最後まで自分の思いを全て言う事が出来なくなってしまったフィービスはうつむく。でも、それが言えればもう十分であった。

「なるほどな。まあ、経験の浅いお前だから仕方ないさ。それに、あれが初で良かったかもしれない」

「どういうこと？」

「人殺しは悪い事だ。その思いを忘れない事が大切だと俺は思う。説得力はないがな。お前はそれを忘れないでああやって引きこもった。だがな、お前のあの殺しは俺達の正義であり悪では無かった。皮肉にも。だから良かったんだ」

「正義？殺しが正義なの？」

そのときの表情は疑問を問い掛ける少女ではなく、どちらかといえば悪を憎しむ少女だった。でも、そんな表情でも俺は話を続ける。「俺達にとっては。俺はこの世に正義などないと思っっている。あるいは、全てが正義かのどちらかだ」

「どづいづこと?」

「俺達の正義ってのは、人を守る事なんだ。人を守るためなら人を殺す。でも、敵にとつての正義は人を殺すことにあるかもしれない。俺達が悪だと思っっているものは、相手にとつて正義で、俺達を悪と見る。だからだ」

フィービスはちょっと困ったような顔をしたが、俺は別に気にしなかった。

「お前のしたことは正義であつた。少なくとも、お前がいなければ俺達はやつらのところに突入し、誰かが死んでいたかもしれない。お前はそれを救つたんだ。だが、それを正義とは言わないのなら、全て正義ではない。正義なんてないんだ」

「つまり．．．私は仲間を助けたの?」

頭が混乱していてそう言つたようであつた。

「ああ。ただ正しいかどうかは俺には分らないがな」

俺はベッドに座つてそう言つた。すると、フィービスは隣に座る。「ねえ、どうして貴方は死刑になるようなことをしたの?」

それを聞いて俺は黙る。

あまり触れたくない過去。だが、逃げられないのが過去である。それでも逃げようとした。

「許されないことだつたからだ。それだけさ」

そう言つと、彼女は俺の方をまだ見ていた。

「何だ?」

彼女は諦めるかと思つたが、まだ俺の方を向いていた。

「ねえ、何をしたの?」

今度は俺がうつむく番のようであつた。

「いずれ話すかもしれないが．．．今は良いにしてくれ」  
「教えて」

強引に部屋から出せばそれですむことでもあるが、それは人としてどうかと思う。だから言つてやる。

「お前の家に行った時、話してやる」



「それって無理でしょ」

「だからこそさ」

笑いながら言つと向こうも笑ってくれた。

だが、のちほどこの約束を果さなければならぬことになるとは思わなかった。

## 感情の変動（後書き）

なんか知りませんが、この作品の評価が知りたかったりします。

読んでくれたらありがとう

## 戦闘

菊地は携帯食料を手にながら外を見ていた。

この前の基地の襲撃からあらゆる情報を手に入れる事が出来た。

実は田母神の行動は敵に全て知られていた。そして今日、彼が防衛省研究所の方に向かうこと、またその際の移動ルートなども漏れてしまっていた。

俺がこの情報を知ってしまった事を敵は知らない。なぜなら、俺達の強襲は完璧に自然災害に隠れてしまったからだ。ならば阻止はさほど難しくはない。

敵はカミカゼアタックをしかけてくる。それも防衛省研究所の前で。あくまでそれは予測に過ぎないが、可能性は高かった。だが、もう一つ高い可能性を持つものがある。それはアサルトだ。

今日は8月30日。メディアは選挙に集中し、とてもではないが他のことを報道できる事態ではなかった。

この日の夜に田母神が防衛省研究所に向かうのは意図されたものだろう。万が一テロが発生しても隠すことが十分できる。それが目的だろう。

この意図はテロリスト達も十分理解できているはずだ。テロと言うのは武装による暴力で訴える行為だ。となれば隠れてしまつと向こうは困る。

今回の敵の訴えは何か？それはきつと田母神のような考えをする人間が軍隊の中にいるな、ということをだろう。

訴えるにはことが大きくなればなるほどいい。だとすれば自爆テロよりも強襲で激しい銃撃戦を行った方がいいかもしれない。

富士の基地で手に入れた情報によると、敵のもつ爆発物というのはC4プラスチック爆弾で、さほどの量も無い。はつきりといって9・11同時多発テロのような自爆テロは不可能だ。

とはいえ、強襲よりは自爆テロのほうが被害は少ないはずだ。そ

の点を考えるとやはり自爆テロのほうの可能性は高い。

自爆のタイミングは多分研究所の目の前。その付近にはアパートもあり、もしかしたらテロリストが隠れている。

俺達がいる場所はその付近のビルであった。

「.....」

M82A1バレットという対物狙撃銃を構えながら、秋口は携帯食料を食べ終えた。

彼はずっとその体制で数時間過ごしている。狙撃手というのはそういうものなのだ。

俺は俺で選挙が気になりながらも窓の外を見ていた。

「くそ、月が見えねえ」

俺の密かな楽しみができないことに悪態をつくど、ひとまず振り返って状況を確認する。

順調。とは言っても、まだ何も進められていない。しいていうなら、樋口と坂崎のチームがどうなっているかだ。

彼ら二人は今回特別に別行動をしてもらうこととなった。

田母神の持つデータは現在本格的に防衛省の方には渡っていない。正確に言つと交渉の最中で、データはまだ田母神の懐にあるということだ。また、その懐というのがどこかというのが漏れていた。

それが面白い事にこの研究所なのだ。

それを知っているからこそここをテロの舞台とするだろう。

彼らにはそのデータの奪取を任せたのである。

俺はコーヒーを一杯飲む。

「た、隊長」

慣れないのか、フィービスは俺に堅苦しく言う。

「なんだ？」

俺が聞き返すとフィービスは困ったように目線をそらす。日本人は相手の目を見て話すことが出来ないというが、もしフィービスがこの世界の人間ならきつと日系人が日本人なのだろうなと思う。

「い、いえ何も無いけど.....」

「作戦を忘れたのか？」

「だ、大丈夫！それは大丈夫だから・・・」

「じゃあなんだ？」

それを聞くとどうも戸惑った感じだった。

きつとカミカゼアタックという単語がまだ信じられないのだろう。どうもフィービスの世界は国家の力が強く、中世のフランスのようらしい。ただ、軍隊や国家にはフィービスのような魔法使いがあまりいなく、税金が多すぎたりすると彼女らが暴れ出すのではないかと恐れているためにさほど酷くあれいてはいないらしい。しかし、力が強く、能力を持たない者たちの方が多いため、勝手な事をされていることも確からしい。

フィービスがなぜカミカゼアタックに驚いているかと言うと、こういう世界であるのにレジスタンスやテロ組織などがないからである。つまり、国家に暴力で訴えることが信じられないのに、そのためなら命も差し出すと言うのは本当に信じられないらしい。

それでさっきからフィービスはそのことを聞いてくる。まるで航空機を見たときの感想と同じだ。

「そ、その・・・なんでこの世界はこんなに・・・こんなに・・・」  
「なんだよ」

「ああ！もう！なんていうか・・・残酷、っていうか、酷いっていうか・・・」

そりゃそうだろうな。

俺は呆れたためにフィービスを背にしてコーヒーを飲む。選挙はどうなったのだろうか？

そんなとき、突然秋口の声が部屋の中に響き渡る。

「来ました！武装車両です！敵は強襲する模様です！」

叫んだものの、秋口の銃口は火を吹かなかつた。発砲は許可されている。ということ、敵はまだ攻撃をしていないというのか？

「奴ら、何かおかしいです。車の中から出てきません。しかし、見るからに少なくとも五台は付近に止まっています」

付近に？何かをまっっているのか？だとすると、仲間か？それとも田母神か？

「おい、なぜ武装車両と分った？」

「乗車している人間が拳銃や小銃を手にし始めているからです」  
準備は出来ているようだ。

田母神の予定時刻はもうすぐだが、一体どちらをまっっているんだ？すると今度は外を興味深く見ていたフィービスから声がした。甲高い声だ。

「凄いい勢いで車が走ってきた！」

俺は急いで窓を見てみると、状況は既に遅かった。

車は扉に突っ込み、直後大爆発した。特攻だ。

ほぼ同時に敵の車からテロリスト達が出てくる。そして、秋口のバレットの銃口が光を灯した。

俺達四人は急いでビルを降り、攻撃を開始した。

壁に隠れ、侵入しようとする人間を小銃で撃ち殺す。すると敵はこちらに気がつき始め、隠れ始めた。

俺はそんな中でも少しずつ前進するために隠れる場所を変えていく。すると突然俺の目の前に敵が現れる。敵は引き金を引こうとするが、直後俺はしゃがみ込み、上を向いて顎のあたりを小銃で貫く。弾は頭から出てこなく、頭蓋骨の中で収まってしまった。

倒れそうな死体の胸倉を掴み、それを一気に敵のほうに投げると、今まで俺の隠れる壁に傷をつけてきた弾丸が瞬間的に死体に集まってきた。

そのチャンスを逃さずに俺は体の半分を出し、小銃についているグレネードを撃ち込む。グレネードはたちまち爆発し、敵の数人が吹き飛んだ。

爆音は私が隠れている間に襲った。

私は凄まじい音に耐えながらも車が突っ込んだ場所を見る。するとそこには血を流して倒れる人間がいた。

死体。

その言葉が響く中、蒼京の言葉も響いた。

『お前はそれを救った』

これが人を救う事となる。

すると横にいた菊池がいきなり倒れて尻餅をついてしまう。

「うわぁ！」

菊池はそそっかしいところもあるから転んでしまったのかと思った。でもそれは違い、よくよく見ると肩から血を流していた。

「こちらレイン。スノーが肩を撃たれた！」

桜井は倒れた菊池の肩を急いで手当てする。その様子に、私は目を大きく開けていた。

死ぬのは、相手だけじゃない。

耳が蒼京の声を捉える。

『こちらストーム。敵が侵入しようとしている。援護を頼む！』

すると応急処置をしていた桜井は私を見た後、深く頷いた。

私は無線のマイクに大声を出した。

「こちらクリアー。今すぐ行くわ！」

私は目を瞑ってすぐにバリアを展開させる。そして右の五本指を力強くしっかりと前に向けて立ち上がった。

私に銃口を向ける敵を容赦なく指差す。バリアが銃弾を電流で溶かしているのがよくよく見えた。

五本の指から閃光が敵に走った。そして閃光は敵の心臓のところをいとも簡単に貫通させ、同時に真紅の血を噴出させた。

指は敵に向けられたまま蒼京の方角に走り、近くまで寄ってバリアを解除する。

「応援に来ました！」

「よし。いいか？テロリストが施設内に侵入したら樋口と坂崎命が危ない。俺達が彼らを救出するんだ！」

「りよ、了解！でもどうやって？」

蒼京は再装填をしてからいつでも飛び出せるような体勢をとった。

そして私の方を向いて答える。

「俺はお前の背後に隠れて撃つ。お前が盾となるんだ」  
要するに私のシールドの影で撃つと言うわけである。責任重大である。

私は少し楕円形のシールドをつくり、蒼京が隠れやすくする。蒼京は私から少しはなれ、シールドに接触しない程度の位置についた。壁が銃弾によって削れていく。そしてその破片が飛んでくる。

蒼京の大きな声が後ろから聞こえた。

「行け！」

指をしっかりと敵に向けて光線を放ちながら、私は走った。後ろから猛烈な銃声が聞こえたが、そんなものに構っている余裕は無く、何も考えずに走った。

敵と桜井達の間の所のだ真ん中までくると、私は止まり、そこで両方の手の指をしっかりと開いた。敵の心臓や頭をそれぞれ指差し、光線を放つ。合計で十本にもなる光線は、全てが全て敵に当たるわけではないが、それでも数人が倒れていく。

人を殺しているのに、何も感じる事は出来なかった。

その事に後々気づかされるのだが、本当にこの時何も感じる事が出来なかった。感じていたとすれば、背後の蒼京のことだった。後ろには蒼京がいる。もし私がここでシールドを解除してしまえば、私だけでなく彼まで死んでしまう。その事が、どこか私の奥で離れなかったのだと思う。

シールドの端から蒼京は体を出して小銃の引き金を引く。私はその姿を一瞬だけ見てしまった。すると、突然蒼京の顔に銃弾がかすめ、頬に血の線が出来てしまった。

「っつ」

蒼京は小さな声を出した。私は心配して手を下ろし、蒼京を見た。

「大丈夫！？」

「前を見る！レーザーを絶やすな！」

私は不意にも怒られてしまう。だが、本当にその通りであった。



カランカランと近くで音がした。よくよく見るとそれは手榴弾という爆弾の一種であった。

無意識にシールドを大きくし、蒼京を中に入れた。次には手榴弾は爆発し、破片を撒き散らした。

再び手を挙げ、指を敵に向けた。すると耳から声がした。

『こちらタイフーン。成功した。だが、どうもこの施設内は混乱しているらしい。虚報なんかで皆別の場所に集中しちまつてる』

どうやらテロリスト達は虚報を流して混乱させていたらしい。

後ろの蒼京が話した。

「よし、敵がいない方から脱出してこっちに来い！対象（田母神）もこの状況を知ってここには来ないは．．．」

蒼京の声が止まった。そして声だけでなく、体の動作すらも動かなくなり、やがて一気に起動したかのように動いた。

「早くこっちに来い！急がないと対象が来る。そちらにも虚報が流れてる可能性が高い」

『なんだと？』

「情報が漏れていたんだ！奴ら、対象の携帯電話番号まで知ってやがった。奴らの目的はデータの奪取、もしくは爆破テロなんかだろうが、事実奴らはダメージを受けている。だとすれば、せめて田母神だけでもと目的を移行しているかもしれない！」

『分った。そちらに向かう！』

「サングダー。車を全てぶっ壊してくれ！」

次には私が見えていた車に突然大きな穴が開いてしまう。多分これは秋口の狙撃だろう。

私はそんなことに少し気がいつてしまった。

蒼京は頬から血を流しながらも私のシールドに隠れ、銃を撃つていった。

それでも、敵はまだまだいた。これでは樋口達が来てもどうしようもない。このままでは田母神が着てしまう。

焦っていた。早くしなければと。その結果、どんどん光線の命中

率が悪くなっている。

「おいフィービス。あまり焦るな！」

「で、でもこのままじゃあ・・・」

「ああ分ってる。だが焦りは禁物だ」

そんなことを言われ、私はちよつと手を止めた。

焦ったところでどうにもならない。

私はゆっくりと狙いを定めて光線を放つ。それによって数人が倒れるが、数は一向に減らなかった。

ある案を思いついた。単純だがそれしかなかった。

「敵を集めて、皆を敵に接近させてください！」

「何？」

「大量の水に飲み込まれてもらうんです。そうすれば一時的に無力化ができます！そこを一気に攻めれば早いです！」

それを言うと、蒼京は敵を見ながらも少し考え、口を開く。

「サンダー以外は敵に接近しろ！そして奴らを一点に集中させるんだ！」

私達はひとまずここを離れ、敵に近いながらも隠れる場所に移動した。

シールドを解除する。その時気がついたが、いつの間にか私は体力を結構消耗していた。残りはもう大量の水を発生するのに使う体力くらいしかなかった。

後ろを見ると桜井と先ほど怪我をした菊池が走っていた。よくよく見ると、その後ろには樋口と坂崎がいた。

蒼京は小銃についているグレネードの弾を変え、それを敵を集中させる場所の端に撃つ。

グレネードは煙をあげ、そこにいた人間は味方のところへと集まった。

今度は坂崎が同じグレネードを今度は反対側の端に打ちこみ、敵を誘導させる。

後は細かく二、三人が車に隠れているので、それを秋口が狙撃す

る。これで条件が揃った。

「いいか、敵が大量の水に飲み込まれた直後に走ってそこまで行き、銃弾を奴らに浴びせるんだ！」

蒼京は私の方を見て頷く。

フィービスが目を閉じた時、俺は身構え、まるでスタートダッシュをするかのように待っていた。

出来事は、100メートル走のスタートのピストルのようであった。

大量の水が敵を一気に飲み込み、誰もがそれに驚き、倒れ、戦闘どころではなくなっていた。と、同時に俺達は走り始め、敵の集中する両側まで来て銃を向け、火を吹かせた。

後は透明な水に混じる赤い血を見るだけであった。

血は本当に赤く、水と流れるせいかなそれはいっそう感じられた。

作戦は終わった。

## 戦闘（後書き）

なんだか更新が久しぶりのように感じられるのは私だけでしょうか？私だけですネ。

読んでくれたらありがとう

## 報告

「任務は無事に成功しました」

担当局長の目の前で言っただけだと、相手はイスに座ったまま頭を抱えていた。どうやら絶望でもしているようだ。

その原因は多分俺だ。

あの作戦の最後、俺は樋口から渡されたデータを完全に抹消した。多分そのことを知らされたのだろう。

目の前の男は小さく呟いた。

「成功だと？」

俺は済ませ顔であった。たとえどんなにこいつが俺に怒鳴りつけても、全く揺れることなく帰るつもりだ。

「ええ、成功ですが何か問題でもありましたか？」

抱えていた頭を解放し、俺を勢い有り余るような目で見てきた。それでも俺は一步も譲るつもりは無い。

相手の言葉は怒りと絶望に満ちている。いや怒りではない。憎しみだ。

「問題？ふざけるな！」

怒鳴り上げた男の声は、部屋から漏れるほど大きかった。

「何が不満でしょうか？」

「何が不満だ？お前達は失敗をしたんだ！」

「はあ。ですが、任務は田母神も・・・」

「言い訳など聞きたくない！」

別に言い訳でもないが、相手はどうやらかなり頭に血が上っているようだ。

担当局長は机を思いつき叩き、再び口を開く。

「いいか、お前達は大きなミスをした。F-22ラプターのステルス性を含むデータを、奪取されたんだ。これがどういう意味か分るだろう！イージスの情報が漏れてF-22が日本から遠ざかったの

同じで、今度はアメリカが遠ざかろうとしているんだ!」

俺は今の発言を逃さなかった。

データのことなんて俺は知らない。

「F-22ラプター?それはなんでしょう?私をはじめて知るのがですか」

「...あ!」

失態を晒した。

「我々の任務は田母神元空幕僚長をテロの脅威から守ることで。データとはなんのことなんです?F-22のデータがなぜそこにあつたのです?」

泣きつ面に蜂。

とは言っても、ここまで失敗してしまったのだ、クビになるのがあたりまえだろう。

「貴方は私に言いませんでしたよ。F-22のデータなんて。そんな貴重なデータが奪取された責任は全て貴方のものです。違うでしょうか?」

「...」

責任は俺達にはない。あくまでこの男だ。

そして、その失敗が世間に回ればこの男の罪は重くなる。俺に言わなければまだそれが世間に回る事は無かつただろう。しかし、怒りに身を任せてしまったのが運のつき。後はこいつに自由気ままに話させばいい。

ただし、あくまでそれを俺が世間に回さなければそのままになる。

さて、相手はそこを狙ってくるだろう。交渉に乗り出す。

「私は今の発言を録音しました。これを上に報告したいと思います」「や、やめてくれ」

「現在匿っている防衛省の研究員も調べられるでしょう。データが盗まれても隠さなければいけないのでしょうから」

「...お、お前、知っていたな?」

データが盗まれても隠さなければならぬ。その発言に気がつい

たのдарろう。

何故俺が隠さなければならぬことを知っているのか。そこに疑問がつくのは当たり前だが、実はこれは痛い点ではない。

「さあどうでしょう。でも、私にデータの件を言わなかったのなら隠していたのでしょうか？」

何か言いたそうであったが、唇を噛みしめて何も言わなかった。

「・・・何が目当てだ」

「・・・」

相手は本当に頭に血が上っている。できることなら何でもやるという感じであった。

「何が欲しい？金か？女か？それとも、お前、いやお前を含める隊員の自由か!？」

「魅力的なものです。ですが、欲張りな私はそんな魅力的なもの以外のものが欲しいです」

「何だ？」

「この件の真相です」

俺はそれが欲しい。そしてそれは、この交渉上最大のものかもしれない。なぜなら、この交渉は俺の要求を阻止するのが目的なのだから。

相手は黙った。どうやら頭の血が下ったようだ。

立ち上がっていた体を、先ほどのように下げてイスに寄りかかると、また頭を抱えたようだ。

「なぜそんなものが欲しい？」

「理由によつては貴方を排除しなければならぬからです。また動揺に、はじめからやり直して欲しいからです」

その言葉に反応したらしく、一度ため息をつく、振動する息を口から放出した。

「脅されたんだ」

「脅された？」

顔はうつむいていてよく分らなかったが、相当酷い顔をしている

のだろう。

「俺がまだ新米の空自の自衛官だったころ、売女を買った事があった。それは昔の俺の戦友しかしらず、またその戦友も・・・いや、またではない、レイプをしていた」

相手の一人称が俺になったことで、こいつが本当のことを言っていると分った。

精神的にかなりやばい状況だろうが、だからこそ本音を言っている。

「戦友とはいい仲であつたが、俺はどんどん偉くなり、ついにはここに連れて来られた。そのうち、そいつとは会わなくなった」

そこまで言うとは本当辛そうな顔で俺の顔を見る。

「突然だ。ついこの前、俺のところには田母神が依頼してきた。機密データを守ってくれと。内容も聞いたよ。だから俺は断つたんだ。

だが、次の日に研究員が俺のところに来てこつ言つた。『お前の知人が言つてた。お前は昔女を買つたと』つてな。それを聞いたら恐怖に満ちた。今は妻もいるし子供もいる。俺はそれで幸せなのに、あいつらはそれをぶつ壊すのじゃないかと。それを考えると恐怖でいられなかつた。本当にな。だから、首を縦に振る以外の選択肢はなかつたのさ」

そこまで言つても俺は無言であつた。が、判断からしてこいつははじめからやり直させる必要があるようだ。

「なるほど、そういう訳ですか。ところで、このデータは一体どこから？」

それを聞くと、どうやらもう何でも話すような感じで俺に言った。「米国のお偉いさんだ。反日派の人間だと思つた。それにホイホイと田母神は行つてしまつたようだ」

俺はそれを聞いてもういいにしようとした。聞きたい事は全て聞いた。

そして、元担当局長を背中にした。

「失礼ですが、ここの局長は止めてください。我々も一人心に大き



な傷を負った人間がいますので、そのことは重々自重してください」

「お、おい、それで．．．私は．．．」

ドアを開きながら、最後にこう言った。

「家族を大切に」

私はエプロン姿でテーブルにご飯を並べると、樋口と蒼京が帰ってきた。

二人とも真っ黒い．．．スーツだっけ？まあそういう服を着て、帰ってきたとたん勢いよく脱いで普段の格好着替えた。

「おかえりー」

私が言つと二人は即座に席についてご飯を待った。

「いやー疲れたな、蒼京」

「ああ、全く」

「俺なんてお前の代わりに報告書を書いてたんだからな」

そんな会話をしながら待っていた。そして私の料理を見るなり意外そうな顔をした。あれ？私ってそんなに料理が不味そうに見える？

蒼京は疑問を浮かべた顔で私の顔を見た。

「フィービス。これがお前の世界の食い物か？」

「そ、そうだけど．．．」

何がおかしいのかな？私の顔も疑問の顔になっていると、だんだん皆が集まってくる。すると皆も疑問を抱くようになっていた。

桜井は私に率直に聞いた。

「これ．．．この世界の料理を真似たのよね？」

「違うけど．．．」

あれ、皆が食べている料理と私達が食べている料理ってあまり変わらないから安心してただけど、なんか違ったのかなあ？

「じゃあ、これってフィービスの世界と俺達の世界の食いもんが変らんってことか」

樋口の言葉でなんとなく分る。あ、そこに疑問を感じていたわけか。

「うん、私はちょっと安心したけどね」

そんなことを言っている間にご飯はテーブルに並び、私達は食べ始めた。

蒼京は美味しそうに頬張っていた。それをじーっと私は見てしまっ

最近私は今まで無いような感情を抱いている気がする。何故かは分らないし、それどころかこの気持ちが何なのかも分らないけど、蒼京を見るたびにその気持ちがよみがえる。

どうしてだろう？

蒼京を見ていると、隣の坂崎からおかずを取られてしまっ。そしてそれをぱくりと一口で全部口に入れてしまった。

同時に私は目がさめたように坂崎を見る。

「わ、私のー」

「そういえばフィービス、エプロン姿可愛いね」

「誤魔化さないで！」

私達はそんな感じで食事をしていた。

この作戦はまさにフィービスの成長を描いた作戦とも言えるだろう。

彼女は、彼らが自分達の世界の兵隊とは違い、命をかけて戦っていることに気がついた。自分達の世界の兵隊もそういう人がいたのかも知れないが、私の時代は違った。そう考えたのだろう。

さて、実はこの作戦自身には結果的に良い終わり方をしたのだが、少々疑問点が出てきた。というのは、再びS I Sがあの後調べていたのである。

なぜイギリスのS I Sはそんなことを調べるのだろう？

その前にS I Sとは何か少々触れたいと思う。

S I S、M I 6や六課とも言われるこの組織は、言ってしまうえばイギリスの情報機関である。いうなればアメリカのCIAだろう。

このS I Sは過去にテロを防止したりと様々な活躍をしている。

また、ダブルエージェントつまり二重スパイを得意とする組織だ。

実はCIAはこのようなダブルエージェントは許されない。というのは、米国では報道の自由があり、それを貫いている。しかし英国の倍いは確かにそれはあるが、貫かれてはいはない。そこには暗黙の了解があり、報道は事実上規制されてしまっている。

そう言った点で米国よりも優れた点がある。

SISとは少し違うが、実は半年ほど蒼京は英国陸軍でロシア語やフランス語を学んだ事がある。これは実は単純なことではない。ただ単に学ぶだけなら日本でもできる事だが、それを英国でやったのは理由があった。

これは簡単に言うとな友人の証をつけるような行為であった。

この件で蒼京は卒業生と言う肩書きを貰っているため、SISに名の聞く人物である。だから、蒼京はSISともこねを持っている。さて、問題なのは、こねを持つておきながらなぜ裏でSISが調査をしているのかだ。

真実は何か臭いをもたらす様だ。どんなに上手い嘘を言っても、そこには僅かながら真実と言う臭いがある。

真実の臭い。この場合は裏で調査をしていることだ。裏でやっているというからには、何か理由がある。その理由まで現段階では分からないが、とにかくそこには何かがあったのだ。

そのことについて、どうやら私はもったいぶる性格なので後ほど語る。

では、私はこれから次の任務を書くことと思う。

次の任務、それは少しばかり今回のような軍事的なものではなくなるが、やはり陰謀めいた物である。私はそのことを次に書く。

## 報告（後書き）

ファイビスの胸の大きさはどのくらいですか？

ファイビス「．．．まあまあだと」

桜井「体が大人になりかけてるしね」

読んでくれたらありがとう

## Second Mission

機密警備会社SACSC (Secret Assault Company)  
bat Security Company)

その実体は警備会社などではない。

機密裏で日本を守る、影の会社とも言えるだろう。

しかし、警備会社である以上、依頼を受けることがある。

この組織を知る人間は皆警備の依頼などしない。もっと複雑な依頼を突きつけてくる。

私はその組織のある小隊を描いている。

何度も言いくどいようだが、これは物語と言う名の記録である。

しかしながら、これはあくまで物語である。

私かなぜ物語という位置を取るか。それは少々個人的であるが、その方が書きやすいからだ。

どうも私は以前からそういう才能があったのかもしれない。

物語という位置である以上、新鮮な物を語る記録ではなく、物語らしいことを書かなければならない。

私の直感からすると、何も全てが全て戦闘や任務の様子を描く必要はないと思う。物語というのは、全部に戦闘シーンを居れ、全部を華やかにするものではないと思う。時にはつまらない、何気ないようなシーンを入れ、登場人物たちの心情をより印象強くするのも大切だ。

そのため、そういった内容を取り入れていこうと思う。だが、これもまた盛んにすることではない。

今回は彼らの日常風景と、今回の任務について書かせてもらう。

政権交代・・・か。

俺が戦闘中の間、どうやら日本では大変なことが起きていたようだな。

数日前まではそんなことを素直に感じていたが、今にして思うと別になんとも感じなかった。

実際問題、政権が交代しても俺達の存在は隠されたままだろうし、今まであまり変らない政治をするのが正しいだろう。

これはある評論家の意見であるが、政治は政権が変わっても大きく変らない方がいい。当たり前と言ったら当たり前だ。政権が変わったからといって外交の方針を大きく変えてはいけないし、変えようとするならばそれを阻止する行動が出てくる。

その行動次第では再び政権が戻る可能性も出てくるだろう。

オバマ政権がなぜあそこまで変れたかと言われれば、ブッシュ政権の悪評が漂っていたからかもしれない。

失敗したイラク戦争や阻止できなかった9・11同時多発テロ。金融恐慌も重なり、まさに救世主を待つようであっただろう。その救世主がオバマだったのだ。

しかし、オバマといえど全てが全て変わったわけではない。事実、イラク戦争に対して失敗とは言っているが、アフガニスタン攻撃については正しいと言っている。そして今、次第にイラクからアフガニスタンへと戦場が戻ろうとしている。

まあ言ってしまうえば結論はどちらも必要であるが、大きなことはあまりしない方がいいのだと思う。

「まずー。」

俺は熱いコーヒーをすすする。

「熱い」

テレビから目を離さずに叫ぶ。

「フィービースー、冷水でコーヒーをうすめるー」

緊張感の無い暇そうな声で言うが、返事は無い。

もう一度声を出す。

「フィービースー」

次にはフィービスの部屋のドアが開くのではなく、代わりに坂崎の部屋のドアが勢いよく開いた。一瞬誰かここに侵入してきたのか

と思ったが、出てきたのは当然坂崎であった。

「うるさい！フィービスなら桜井と一緒に買い物だ！」

「うるさいとはなんだてめえは！？」

「うるさいんだよ！お前のせいでエロゲのボイスが聞こえなかった！」

エロゲか。

そういえば話していなかったが、こいつは気にいった女なら何でもいいらしい。

こいつが女好きというのは以前フィービスの前で言った。そしてフィービスは引いた。これはどうでもいいとして、女好きのこの坂崎は三次元、二次元両方共イケイケな野郎である。

外見としては案外かっこいい男で、昔は女子にかなりの人気を誇っていたらしい。その影響かどうやら女がいないとやっていけない人間になってしまい、こうなってしまった。

「エロゲね、はいはいエロゲね」

俺はもはや呆れ顔であった。

「今俺に諦めたる」

「ああ」

「あのな！男つてのは、どんどん仲間を増やすために異性に興味深々なんだ。だから俺のやっているのは・・・」

「はいはい、男の本能とでも言いたいんだろ。知るかボケ」

そう言うと、相手は顔を俺からそらし、しかし視線を変えずに見る。すると妙に俺に対していやらしそうな雰囲気を出す。殴つてやろうか。

「とかいってよ、フィービスのこと気になってんだろ」

「ああ気になる。あいつがいつへまを起こして何かしでかすんじゃないかと凄く気になるな！」

奴のへま俺達の全滅意味するのではないかと最近考える。

奴はここでは完璧な非常識人（とは言っても向こうの世界では常人のようで次第にここの常識も身につけている）で、しかも壮大な

力を持っているからミスを犯すと大変なことが起きてしまう。

「とか言って、この前はフィービスと一緒にくっついて降下したりよー」

「仕方ないだろ」

「それに部屋に連れ込んだろ」

「奴から入ったんだ。さらに桜井が誘導した」

「桜井が誘導した理由がもしも蒼京とフィービスをくっ付けることだっただら？」

「・・・」

流石に押し黙る。

ありえる。少なくとも無いとはいえない。否定できない。

しばらくの沈黙に相手は漬け込んだ。

「桜井はいつもお前の姿を見て可愛そうに見えたんだなきっと。支えが無くて、今にも寂しさで死んじまうようなお前を見るのが辛かったんだ。いい部下をお持ちになりましたね、隊長！」

「あー大丈夫だ。俺にかかる重みは俺だけの物じゃないからな」

「部隊、とか言わないですよね？」

「その通りだ。というわけで昼飯を作れ」

「俺当番じゃな・・・」

「たまにはいいだろ」

意味も無く肩を叩いてやり、そのまま自分の部屋に戻ろうとする。すると、充電中の携帯電話が鳴る。

急いで部屋に入り、携帯電話に出る。

電話先は、本部であった。

受付の女性の声が出た。

『お客様がお待ちです。どうされますか？』

この前の任務により、担当局長はここを離れてしまっている。そして次の担当局長が事実上現在空白である。

また、これに伴って副局長まで空白になっていた。というのは、担当局長を脅していたのは思ったほどより多く、この副までもその



一員であったのだ。

ちなみに彼らは俺の手によってこの世界からロストした。

俺が樹海で手に入れた資料を見せたところ、研究員等が次々に辞めてしまったようだ。

空白の時間、仕方が無く依頼を俺が直接受けることになっている。だからこうやって俺に電話が掛かってきた。

「三十分待たせてくれ。悪いな」

『かしこまりました』

「おいしいなあ」

私はクレープと言う食べ物を美味しそうに頬張っていた。

桜井は笑みを浮かべていた。

「フイービスの世界にはこの食べ物はないの？」

「うん無かった」

「へえー。不思議ねえ」

確かに不思議だ。この世界の料理と私達の世界の料理は一部しか同じではない。どうしてだろう？

「まあどうでもいいわね。次は何をする？」

私は戸惑いの顔を見せる。

先ほどから私のお金は一切使っていない。

私のお金は入隊と同時に送られてきた。その価値を後で聞くと、とてつもない金額であった。さらに、この前の任務が終わると更に増えた。

お金には困らない。だから私は払ってもいいのだけど、桜井がそれを止めたのだ。

「何を遠慮しているの？貴方のおかげでボーナス貰えたのよ。ボーナス」

「は、はあ」

「しかもちよちよっとそそのかして菊地くんからお金もらっちゃったし」

「？」

私は桜井が何をしたのか分らなかったが・・・何か腹黒いような事だと悟った。

クレープを食べて、ゴミを捨てる。

「じゃあ何する？」

「うーん」

服は買ってもらったし、ご馳走もしてもらった。他にやる事はな  
いような気がした。

「何もすることないなあ」

「じゃあゲーセンでも行きましようか？」

ゲーセン。なんだかよく分らない単語が出てきた。

桜井は私の表情からそれが何なのか分らないと察したらしく、説  
明してくれた。

とりあえず私達はそのに向かうために秋葉原という場所に向かっ  
た。そして、適当なところに入った。

ゲーセンというのは意外に中がうるさく、ちょっと驚いた。でも、  
桜井は平然としていた。

「得意なアクションゲームでもする？私達がゲームオーバーしたら  
多分任務も失敗だろうけど」

苦笑するしかない。

目の前のゲームが銃を使ったものだった。

たしかに、これで負けたら任務なんてやってられないかも・・・。  
まあ流石に私はここに着てまでそんなものはやらなかったけど、  
UFOキャッチャーは楽しかった。少しお金に気にせずやってしま  
った。でも、私は全て落としてしまった。

「うーん。やっぱりダメみたい」

私が諦めると、隣で桜井は言う。

「あー、私もダメなのよねー」

と行ってここを後にしようとした。

時間も時間であったことだし、私達は帰ろうとする。

外に出て道を歩く人を見る。すると、見る人見る人がマスクをつけていた。

「？」

「どうしたの？」

「なんでマスクなんてするの？」

桜井は平然と答える。

「新型インフルの影響でしょうね」

インフルエンザ。その言葉を蒼京と樋口から聞いた事がある。

それはウイルスというもので、人に感染する。感染が感染を呼び、どんどん広まっていってしまう。そして感染した人は苦痛に苦しみ、酷い場合は死亡してしまうという。

今はやっているインフルエンザは実際に死者が大勢出ていると聞いた。

私としてはなんとも感じられない。ただ感染しないように予防をしないといけないなって思っただけであつた。でも、この話はそこで終わりではなかつた。

インフルエンザなんかは誰かが意図してばら撒いた可能性があるという事だ。

その目的はテロのような訴えもありえると聞いた。

私の仕事はそんなことが起きた時、人々を守ること。それを考えた時、ちよつと誇らしげに思った。

「さ、行くわよ」

歩き始めると、私の肩を誰かが叩いた。それに反応して後ろを向く。

「よう。久しぶりだな」

「？」

三人の金髪の青年。私に気がつき、桜井も振り向いた。すると、桜井は変な事を言うのだ。

「ああ、久しぶりね。ちよつと行きましようか」

久しぶり？私は会ったことがないんだけどなあ。もしかして桜井

の友達かなあ？でもなんだかやばい気がする。普通の人以上、テロリスト以下のレベルでやばい気がする。

私達は進行方向を変えてついで行くと、人気の少ないところに出た。

桜井の眼差しは変わっていた。

「格闘戦術は習ったでしょう？練習になるんじゃないかしら？」  
「やっぱりそういうこと。」

私はため息をついてしまった。

三人がその部屋に座っていた。

左と右。

俺の座る右側には樋口も入た。

それに対する左側には中年の男性がいた。

「依頼とは何でしょうか？」

単刀直入に聞く俺に、向こうは汗をハンカチで拭きながら答えた。  
「最近、新型インフルエンザがはまっているのはご存知かと思いま  
す」

俺は真顔で頷く。

相手はその様子を確認してから話を進めた。

「このインフルエンザが日本に上陸して、感染が広まり、我々会社はマスクの製造を急ぎました」

「分ります」

「しかし、いざ流行るとなるとマスクは飛ぶように売れてしまい、我々はずいに底まで突きそうになってしまいました」

普通に考えると、マスクが売れるのは二月あたりだ。この月はインフルエンザもかなり流行し、感染を防ごうとマスクを多く買う。

しかし、新型インフルは時期が外れていた。

メキシコで流行ったのは四月という時期はずれだ。日本で本格的に流行った、いやこの場合、はやり始めたと言った方がいい。それは、夏あたり。

なんにせよ、時期はずれである。

この男はマスクなどの販売をする会社の社長であった。

その社長が言うには、マスクはかなり売れてしまい、時期も時期であるから追いつけなかったと言う。

「ですが、実はKS社というライバル社だけは未だにマスクの在庫があるんです」

「はあ」

樋口が腕を組む。

「さらにKS社はその影響で株価を上げています」

「はあ、それで」

樋口はどうもせっかちなようで、先を急いでいた。

「私もどうも怪しく感じるんです。時期はずれであるのにどうしてそんなに大量のマスクが存在するのか」

「なるほど。それで、我々に何を頼みたいと？」

そろそろ言うだろうと見込み、俺は率直に聞いた。

「KS社がインサイダーをした証拠を掴んで欲しい」

インサイダー取引とは、簡単に言うと、未公開の内部情報を利用して行うことで、これは完璧な不正である。

それにしても、インサイダーとはちょっとおかしい。

未公開の情報を利用したなら、それは一体どのような物か。今回の場合、それはインフルに関してである。

でも考えとしてインフルが自然的なものではないとすればおかしくない。そして、それこそ俺達が出てくる幕である。

「報酬は？」

「五億で手をうってくれ。頼む！このとおり」

向こうは無理を行っている事は十分承知の上であつたらしく、手をテーブルについて頭を深々と下げる。

「いいでしょう」

樋口はなおも腕を組んでいた。

「引き受けます」

どっちら早くも俺達の休日は終わったらしい。

## Second Mission (後書き)

空ちゃんって大人っぽく書かれています、実は蒼京くんよりも一つ上です

読んでくれたらありがとうございます

## 情報収集

生物兵器とはどういうものか？

核兵器、化学兵器、そして生物兵器。基本的にこの三つが大量破壊兵器となる（放射能が含まれる場合もある）。

これらを合わせ、NBC兵器、ABC兵器などと言われる。

その中にある生物兵器はよく化学兵器と間違われる場合がある。

化学兵器とは、一般的には毒ガスなどのことである。例えを挙げるとすればVXガスやサリンといったところであろう。

では、生物兵器とは何が違うのか。

生物兵器とは、細菌などを使い感染させていくような兵器の事を言う。要するにウイルスなどのことだ。

NBC兵器のうち、最も厄介なのがこの生物兵器かもしれない。というのは、核兵器はまだそれなりの対処というものがあるし、化学兵器についても対処がある。なぜならこれらは分りやすいからである。

この二つは分りやすくさらに一瞬だ。核兵器は爆発すれば絶対にばれるだろうし、化学兵器についても核兵器ほどではないが、気づかれる。だが生物兵器は違う。

生物兵器というのはウイルス。人の体内で繁殖し、知らぬ間に人に感染する。

どんなに強力な核兵器や化学兵器でも一定の区域でしか被害は出ないが、生物兵器は世界に被害が出る。しかもそれは容易に出来、犯人が誰か、それどころかそれが意図されたものとは分らずに行われる。

例えばだ、テロを起こすとしてニューヨークに行く。そしてそこでどうやってテロを起こすか？

化学兵器は入手が困難だ。出来たとしても、それを人口が密集する場所で使うのも困難だ。最近ではテロ対策が厳しくなっている。



その状況下では爆発などすぐに被害が出るテロは困難すぎる。

だが生物兵器ならどうだろうか？生物兵器なら簡単ではないだろうか？

ニューヨークに行く前に自分にウイルスを注入する。するとあるうことが自分がいつの間にか生物兵器となっている。

接触した人間は感染する可能性が高く、その連鎖でパンデミックを起こす。

これなら誰が犯人なのか気づくことは無いだろうし、それどころか自然現象とまで思われる。

テロならばこの脅威を誰かに突きつければ良い。それだけでも十分なほどのテロだ。

でも、これが誰にも知られずに行われるとすればそれはテロではなくなる。

以前も言ったとおり、テロとは暴力で訴える行為だ。しかし、自然現象とまで言われてしまう様な行為ならば、それはテロではない。従ってその目的は別にあると言っている。そしてその目的のほとんどが殺人である。

「それで、隊長はどのようにお考えでしょうか？」

容赦ない桜井の質問。その質問の内容は、この新型インフルについてだろう。

桜井の質問はこの全員の視線を俺に完全に集中させた。やはり、この点気になるところだろう。

「分らん。分らんが、新型インフルが意図されたものだという可能性は無いとはいえない。もしもインサイダーをしていたというのなら、その点がやはり怪しいだろう」

桜井はそれでも発言した。

「インフルを分散させた目的についてはどうお考えで？」

彼女は俺よりも年上で、階級は俺の方が上ながらも威厳がある。

その威厳に俺は少々圧倒されることも以前はあった。今の俺にとっては微妙なのだが、年が上なだけあってやはりお姉さんのような存

在だ。皆がその彼女の言葉に断れないところがある。

しかも、戦闘に置いても優秀である。現に、秋葉原に行ったフィービスと桜井はカツアゲに遭ったところ、そいつらをボコボコにして帰ってきた。フィービスの言葉によると、『クラブ・マガを使っただお陰で殴ってきた拳を受け止めながら、その人の両目が失明させちゃったし、心臓を集中的に攻撃したら心臓が止まりそうになっちゃったし．．．』とのことらしい。ちなみにその時フィービスはフィービスでもう一人をボコボコにしていた。

「6フェーズというかなりの感染力だ。何処かでこの新型インフルを持ったテロリストとの交渉にでも失敗したか．．．人口爆発が怪しいだろう」

「人口爆発？」

フィービスが頭にハテナを浮かべるように呟く。

樋口が俺の隣で立ち上がり、その説明をした。

「人口爆発というのは、その文字通り人口が爆発的に増えることだ。俺達日本のような先進国は少子化という全く逆の現象が起きているが、発展途上国ではこれが問題となっている。はっきり言ってこれは深刻な問題だ。フィービス、お前の世界では子供を沢山産む奴は多くなかったか？」

「うーん、そう言われても、皆兄弟がいた気がするくらいかなあ？」  
「それだ。それだけでも人口は増えるはずだろう？俺達先進国は十分な発展ととげ、働くといったらサラリーマンが普通になってくる。だが発展途上国は違う。働くといったら農業などになって来る。そうなると人が必要だ。人を雇えば金が掛かるが、子供なら話は別になってくる。だから人手を増やすために人口が増えてくる。その結果、ついに食料は底をついてしまい、やがては世界から食料が消えてしまう」

そのあたりで俺が入る。

「人類は急激な人口爆発を迎えている。今や世界の人口は五十億に達し、このままでは食料が本当に消える。サミットでもこのことを

発展途上国が訴えたが、今は不況の真つ只中だ。その話は流されてしまった。．．．誰もこの危機に勘付いている。そしてこの危機から抜け出すためには、大量虐殺をしなければならぬと考えている人間達がいるんだ」

フィービスはその言葉に過剰な反応を見せた。

「それってかなり酷いよ！だって生まれたんだからちゃんと生きなきゃいけないのに」

「だが、それでも普通に考えればこうするのが一番合法だと考える人間がいる。．．．さて桜井、質問の答えに答えた、今度はこれからについてだ」

誰もが背中をびっしと正した。

俺はその空気の中で言った。

「まず全ての新聞を今日から購入し、KS社の動きを確認しろ。菊地、お前はインターネットで怪しい動きを調べろ。株価から何かから何まで徹底的に調べろ」

全員が了解という顔をしていた。まあ当然フィービス以外だが。実は新聞と言うのは大きな鍵となる。

ある外交官はこう言う。『控えめに見積もっても東京で熱心に情報収集活動をすれば、必要となる情報の80パーセントは集まる』CIAは常に諜報活動をするために敵地に行くわけではない。彼らも新聞などの情報を頼りにインテリジェンスを集める。

インテリジェンスというのはただの情報という意味ではない。その言葉には知能などの意味も含まれる。すなわち、インテリジェンスという情報の中には人の心が見られる。インフォメーションという新鮮な情報からインテリジェンスを生み出すのだ。そこには人の考えや心があるのだ。

新聞にはそのインフォメーションが十分にあり、必要とするインテリジェンスが集まるというわけだ。

さて、仲間がそれらから情報収集活動をする間、俺はまた別の情報収集活動をしなければならない。

携帯電話を取る。

皆はそれぞれの行動を始めた。

「こちら第二小隊です。明日からありとあらゆる新聞をこちらに届けられるようにしてください」

電話越しに喋る坂崎の姿や、

カタカタ

と、パソコンの前に座る菊地の姿が目映る。

私は何をすればいいのだろうか？

すると、携帯電話を置いた蒼京が私のところに近づいた。

「フィービス。お前は俺と行動を共にしろ。早速今夜動く」

「こ、今夜って」

「大丈夫だ、余計なことさえ言わなければいい」

「余計なことって？」

「相手を不快にするような発言だ。逆にお前は相手の気分を良くしろ」

私は蒼京の言う事がよく理解できなかった。でもまあ、言われたとおりにしていればいいか。

「フィービス。私服になれ。俺はスーツで行く」

言われたとおり、この前買った服に着替えた。

一体蒼京は何をするのだろうか？

ふと、蒼京という呼び名にどこか疑問に思った。というか、なんだか蒼京と呼ぶのがあまりにつまらない気がして来た。

ちよつと、そのことについて考えてみようか。

首をちよつと傾け、少しだけ考え始める。

「諄一．．．ジュンイチ．．．．．ジュン。ジュンでいいや」

そんな呟きに誰も気がつかず、代わりに蒼京が私を車に招くのであった。

助手席に座る。車は暗くなっていく空の下を走る。

「酒は飲むなよ。お前が酔ったら大変なことになりそうだからな」

「ねえジュン」

「？」

やはり私がジュンと呼んだことに反応した。

蒼京は首をかしげるようにしたが、それでもまあいいやという感じであった。

「作戦中にその名で呼ぶなよ。はじめは付けなきゃいけないからな」

「あ、うん。ところで、今から何をするの？」

「今から依頼してきた会社の方から来た人間に会うんだ」

要するに、蒼京も情報収集活動をする訳だろう。

でも、そうだとしたらなんで私を連れて行くんだろう。私なんかよりも、樋口を連れただろうが話が通じやすいと思うのだけど。

その点を聞く前に、どうやら私が疑問を抱いているだろうと悟ったらしく、口を再び開く。

「樋口は樋口で情報収集活動をしている。何しろ、俺の持つ人脈と奴の持つ人脈は別々にあるからな」

「人脈？」

そういうと、珍しく誇らしく語り始めた。

「俺はイギリスのS I SやアメリカC I A、N S Aなどに友人がいる。他にもいろいろいるんだ。それと同じで奴もいろいろいる。」

例えば日本の軍事評論家や政治評論家。中には危ない組織までいる「へー」

私はあまりそういう組織の名前を言われても良く分らない。それでもまあ、始めのS I Sとかは一応の形だけで覚えている。

ん、S I S？今なんか思い出せそうだった気がする。

S I S . . . S I S . . .

「どうした？」

「あつ、なんでもない、なんでもない」

すると、蒼京は前を向いて再び話し始めた。ちよつとその姿はいつものような姿ではなかった。

「第二次世界大戦中、日本の外交官がユダヤ人を救ったんだ。 . . .

大量虐殺されるユダヤ人に海外に逃げれるようにして、虐殺から逃したという歴史がある。それは今でも道徳として教科書にも載るストーリーさ」

楽しそうに話す蒼京に、私は頷いた。

「それで、そのストーリー。実は現代で人脈として繋がるきっかけとなることもあるんだ」

「どういうこと？」

「俺はあの時のストーリーを熟知して、ユダヤ人の国であるイスラエルに行った。そこでモサドって組織の人間と接触し、訓練をしてからその話をした。向こうは俺を友人という扱いをしてくれてね、それで今に至るのさ。俺は言ってしまうえばそのお陰でイスラエルに人脈があるといえるんだ」

それを聞くと、確かにそうなるかもしれない。

過去に自分達の仲間を救った国の人。その印象は、かならずしも悪い物ではないと思う。人として私なら受け入れる。

「その話を聞くと、この前の戦闘なんていらぬような気がするね」「どうして？」

今度は相手から問い掛けてきた。

「だって、こんな世の中でも人間として感情を持っているんでしょ？ そうじゃなきゃ友達になんかなくてくれないよ。だから、そうやって敵を減らしていけば良いんじゃないかなって」

すると、今度はうつむくようになってしまった。

「・・・だろうな。でも、時には彼らも俺を暗殺するかもしれないさ。それがこの世の中だ」

その言葉には、どこかやるせなさを感じた。

友達であるのに、殺される。それは殺す側も嫌なことだし、殺される側も嫌なことだと思う。だったら、そんなことをしなければいい。そう言いたいのがこの世界だろう。

やっぱり、私の世界なんか比べてこの世界は人として悲しい世界なのかもしれない。私はそう思った。

情報収集（後書き）

フィービスという名前に愛着が湧く

読んでくれたらありがとう

### 三つの情報

車はついに太陽の光が消えた町を進んだ。

実は私のこの特徴的な目は、蒼京のような東洋人の目にする事が出来る。

魔法といっても、本当のところはそういう神秘的なものではなく、生まれつきの能力のような物だ。その能力は自分で一時的に解除でき、能力さえ使わなければ通常の目の色になる。

でも、不思議な事にこの解除をすると僅かながら体力が減っていく。そのお陰で皆いつも解除はしないのだけど、この世界では通じない常識であった。

「フィービス、目はどうだ？」

「うん。大丈夫。これならジュンと変わらないでしょ？」

蒼京は一瞬私の方を見た。大きな目が私を覗き、すぐに前に視線を戻した。

「その服どうした？」

考えもしなかった言葉に、戸惑いを見せてしまった。

頭の中で急な言葉に反応しきれず、やっとのことで意味を理解する。

正直、今日の蒼京は意外だ。

「桜井さんから買ってもらったの」

そう言うのと、もう一度大きな目が私を見た。その目はすばやく下から上へ視線を動かし、再び視線を戻す。

でもまだ何も言わなかったので私は更に付け足す。

「桜井さんが『フィービスのお陰でボーナスがでた』とか言って買ってくれたの」

するとやつと口を開いた。

「確かに、お前のお陰でボーナスが出たな。上の幹部だからの大金、それと元担当局長からの直々の金かな」



蒼京はそこまで言って一度ハンドルを切る。それから再び声を発した。

「俺は服についてあまり興味ないから分らないが、いつもの服の方がいいと思っただ」

意外であった。本当に意外だ。

蒼京はそんなようなことは言わない人間だと少し前まで思っていたくらいだ。でも、こういうことも言うんだなと少し感心しつつもいつもの服というのに頭を張り巡らせる。

いつもの服ってどんなのだっけ？

そんな姿を見て悟ったらしく、蒼京が言った。

「あの黒い服だ」

「ああ、アレ」

私がこの世界に来た時から着ていた服だ。

あの服は向こうの世界でもお気に入り服で、私をはじめで自分で稼いだお金で買った服だ。

この世界に来た前夜、確か私は魔法を使って依頼を受けていた。

確か、今年は雨が少なく不作になりそうだからと私が呼び出され、畑に養分を含んだ水を与えたのだと思った。それはかなりの体力が必要で、帰ったときには無意識にベットに向かっていた。

そんな訳でここに来た時はいつもの服に、短剣やらなにやらがついていた。

それからはここでもあの服を着ていたのだが、まさか蒼京がそれを見ていたとは思わなかった。

「見てたの？」

「そりゃいつも着ていたからな」

「そうじゃなくて、その・・・気にしてたの？」

それを聞くと向こうはちよつと目をそらした。

この前もそうであったが、どうやら蒼京はこの手の話に弱いらしい。でも、私からすればその話を続けていたい。

「ねえ、気にしてたの？」

くどく聞くと、相手は焦り始めた。なんだか心理戦のようだ。

「お、お前、俺の部屋に入ってきたときその服だった。そ、それでその服、いいなあ、とか思ったんだよ」

そんな、何時着ていたのかまで覚えているんだ……。

「結構気にしてたの？」

ついには頬を赤く染めた。

「ば、馬鹿野郎。そんなわけないだろ」

「じゃあなんでそこまで詳しく覚えているの？」

「……」

相手は押し黙った。口を開けたまま喋らない。

運転をしばらく続け、すぐに向こうは開き直った。

「ああ、ああ。分った。気にしてたよ。お前があソマリア沖から着てたことまで覚えてるよ」

ここの世界に着て一ヶ月程度だが、この世界、今日で滅びるんじゃないかと思ってしまう。

「なんで気にしてたの？」

「馬鹿野郎。言えるか」

そこまで言った時、車は車庫にいた。  
時間切れ。

この短くも無い長くも無い時間はかなり貴重な時間だったと私は思った。

私は蒼京にちょっと近づけたかな？

さて、寿司屋であるここに来た理由は先ほど言ったとおりだ。

しかし、先ほどの会話からも少々身に危険を感じてフィービスに言った。

「食べたい物を注文しても良いぞ」

無論俺の金である。まあ、ポーナスの件もあるのでそこはあまり気にしない。

「うん、それじゃあその赤いの」

そう言ってマグロを選ぶフィービス。容赦ないな。

そんなところに待っていた人間がきた。相手は俺の顔を見ても戸惑ったが、俺が立ち上がりお辞儀をしたためにここだと分つたらしい。

「お待ちしていただきました」

「こ、こちらこそ。こんな高級なお店に招いていただき、なんと申し上げればよいか」

「いいんです。さあ、座ってください。今、注文していますのでお待ちください」

フィービスと一緒に頼んだのだが、流石にそこまで早く握ることは無かった。

相手は依頼会社の人間で、今回の鍵となる人物である。でも、様子からするとこういう店に招かれることはあまり無いようだ。

それはいいとして本題である。

「最近、そのKS社はどこかの組織と関わりを持ちませんでしたか？」

目の前で寿司を握って貰い、それを相手の方に置かれる。それをフィービスが羨ましそうにしていたので、俺は耳元で『後だ』と言った。

相手はまず一つを手で掴み、礼儀正しく醤油につけて食べる。このあたり礼儀正しかった。

「は、はい。最近、とは言っても去年の冬なのですが、どうやらイスラエルとの関わりが見られました」

イスラエル。その言葉がでると何か嫌な予感を感じた。

俺の方にも寿司が来るが、あまり手をつけようとはしない。横でフィービスも寿司が来たが、俺の方も欲しかったようなので食べて良いよと言っ。

「イスラエルですか。その関わりはどのような物なんです？」

「それがあまりよく掴んでいません。表向きはインフルエンザ予防のための研修らしいです」

「では、貴方の会社ではイスラエルとそのような研修は過去にしましたか？」

頭を少しばかりかしげ、困った顔を作る。

「私の記憶では・・・そのようなことはなかったと・・・」  
「どうやらしていないらしい。」

「ということは、裏に何か重要なことがあったに違いない。一体なんだ？」

俺は喋っているのもなんなので、先ほどからフィービスに食べられながらも自分の寿司を食べる。俺のを食うなフィービス。

「なるほど。・・・お酒、頼みますか？」

俺が酒を薦めるが、相手は手を出して遠慮した。

さて、聞きたい事はそれだけでなかった。

俺は二つくらいしか食べていないが、相手はそれなりの量を食べていた。ここら辺のころあいで質問する。

「マスクの製造意外にも何かおかしいことは？」

それを聞かれると、どうやら思い当たる物があったらしい。

しばらくの時間が過ぎると、顔を即座に上げた。

「やはり、今後の対策に準備が出来ているような点ですね。それと

・・・これはちょっと・・・なんというか・・・」

「なんででしょうか？」

相手が迷うというのは、その情報が下らない内容かどうか迷う時だろう。だが、言わないよりは言った方がよい。

「言ってください」

俺がうつすら笑ったような顔を見ると、相手は正直者になる。

人間、強いだけではいけないな。

「最近になって分かった事なんです、マスク意外に手袋を製造しているようなんです」

「手袋？」

俺には良く分らない。なぜ手袋を製造するのだろうか？

だがそれは相手も同じらしく、証拠に首をかしげていた。

「他には？」

「他には・・・テレビ局の人間がKS社に入るところを確認して  
います」

テレビ局。

「それぐらいです」

相手はそれだけ言った。

イスラエル。手袋。テレビ局。

この三つが共通したものは限らない。だが、調べる価値はある  
な。

ふと、相手がフィービスに興味を持ち始めたことに気がついた。

「どうかしました？」

「い、いえ」

見とれていたようにも見える。

相手はまだ二十代の若さである。こいつに恋するのも無理は無い  
かもしれない。

フィービスはそれなりに可愛いと思っている。服の件だが、確かに  
俺はフィービスを見ていた。以前話したと思うが、フィービスが  
あのワンピースドレスを着る姿は可愛かったし、それは部隊内でも  
同感であった。

彼女の魅力は桜井とはまた別のところにある気がする。

桜井は年上で背が高く、お姉さんだが、フィービスは同じクラス  
の憧れの子みたいな感じだ。実際聞いたところ同じ年だったしな。

そんな感じの魅力を持つフィービスに、俺は今動揺している。

俺はこういうことに鈍感なのかもしれない。いや、敏感すぎるの  
かもしれない。俺は奴に何かを思う。心の奥で彼女に対する何かを  
訴えている。その訴えが何なのかは分からない。実は分りたくない。

俺はフィービスをどう思っているのか分からない。彼女を有能な兵  
士とも思っているが、それ以外に何かを思っている。

それが恋とか恋愛とかだとしたら、俺は今後深く悩まなければな  
らなかつた。

フィービスは一旦寿司を食べ終わり、そこで帰宅する事にした。太陽の光は完璧なまでに消え失せ、代わりにネオン管の光が町を照らしていた。しかしその光は太陽のようなものではなく、どこか寂しさを引き出す光であった。

そんな町を車が走った。

フィービスは満足そうに助手席に座っていた。

まったく。能天気な奴だ。

「ねえ、私って役に立ったの？」

「まあな。少なくとも相手はお前に引かれたな」

それを聞くとにつこりと微笑んだ。どうやら嬉しいらしい。

フィービスはシートベルトに寄りかかり、眠くなっただよで目を瞑り始めた。

さて、俺は俺はこれからを考えなければならぬ。

まずTBSの上川に話を聞くのが良さそうである。その次にイスラエルのモサドから情報を貰う。その順序で行こう。

ただ気がかりになるのは手袋の大量生産だ。これに関してはどうしようもないと諦めざるおえない。

人通りの少ない道を、一台の車が走っている。

それは突然であった。

銃弾が車に響く。

フィービスはその瞬間目を開けた。

「じゅ、銃弾!？」

立て続けに銃弾が響く。だが俺は焦らない。

この車はかなりの高額の高級車で、装甲がかなり厚く、小銃弾では意味が無い。だから俺はスピードを上げてこの場を突っ切るのみである。

「ぶ、武器は!？」

フィービスはいつも銃を使わないが、一応クリス・スーパードという銃と、拳銃を装備している。しかしながら俺の言う答えはこう

だった。

「ダッシュボードに樋口の入れた武器があったはずだ！」

先ほどの文章に『しかしながら』という否定的な接続語を使用した。その理由は中身が不安でしかたが無かったからだ。

フィービスは急いでダッシュボードを開き、中にある茶色いものを取り出した。そしてドアに寄りかかっただけでいつでも戦闘できる状態にしたが、フィービスは気づいたようだ。その武器が何なのか。

「これって・・・何ですか？」

「かつおぶし」

そう、かつおぶしである。

樋口はきつと銃刀法違反を気にしたのだろう。そのためこのかつおぶしを入れたのだ。

以前奴はこう言っていた。

『知ってるか？かつおぶしって硬いんだぜ』

『知ってる』

『それが凄んだぞ。前に完璧に固まってない状態のかつおぶしを包丁で切ろうとしたら包丁が割れたんだぜ』

確かにそれは凄かった。やってみると分るが、かつおぶしを腕に叩くと凄く痛い。バットで叩かれるよりも痛い。軽く叩くと骨に直撃するような感覚がして痛かった。

あれを人の頭に直撃させたら死亡すると思うが、だからと言ってここにいれることはないだろう。

車に銃弾が響きながらもしばらく沈黙した。

フィービスはかつおぶしをダッシュボードに戻した。そして自分の能力を解放した。

「戦闘なら私が入ります。命令を！」

後ろからワゴン車が来た。

「まだ待ってる！」

ワゴン車はこの車の後ろに体当たりしてきた。そのお陰でフィービスは前に倒れ掛かる。

「きゃ！」

バックミラーで後ろを確認する。

「俺が合図したら後ろの向かって大量の光を浴びせろ！レーザーじゃない、フラッシュを起こせ！」

「了解！」

前を確認する。もうすぐである。

車さらにスピードを上げる。すると向こうもスピードを上げ、この車から離れない。

いいぞ、それでいい！

車は最高速度までいかないが相当早くなる。

「今だ！」

ファイブスの光とともに、俺はハンドルを思いっきり切る。

大通りに出た俺達は曲がり、そのまま減速をしたが、後ろのワゴン車はそのままビルに突っ込んでしまった。そしてついには火を吹き始め、爆発した。

俺はそれをバックミラーで確認した。

奴らは何者だ？

俺の中で激しく言うのであった。



### 三つの情報（後書き）

最近投稿が激しいです。

その内ピークを迎えると一日一話になるかもしれませんが、たまに二週間ぐらいほったらかしにすることがあります。

まあこんな小説、いつも読んでくれる人がいるかなんてたかが知れてますがね。でも、読んでくださるのでしたら本当に感謝しています。

読んでくれたらありがとう

## S I S と情報

誰からの攻撃なのだろうか？

それが分らなかつた。

樋口と俺は予測できる限りの敵を言ってみた。

「アルカイダ」

樋口は連想ゲームで自分の番が回ってきたときのように言った。

「・・・違う」

「コロンビア革命軍」

「・・・違う」

敵についてわかる事は、敵は銃にサイレンサーをついていたことくらいだ。

はつきり言つて分る予測などできないが、俺達は奴らを事故に遭わせた。警察が調べを始める可能性が高い。

しかし、問題なのは敵が妨害電波を流していないだろうかということだ。

なんとか菊池にこの付近のカメラや、警察をハックさせ、桜井に追突したビルの電話を盗聴させている。その結果が少々待ち遠しいが、それを指咥えて待っている気はさらさらない。

さて、それでは心当たりはあるのかと言われるとそうでもない。

疑うならイスラエルだろうが、イスラエルとK S社の関係が全くわからない。

どこを疑えば良いのか分らない。イスラエルも含め、全てのテロ組織が疑う対象となる。

「SEALs」

「それはないだろ」

俺は樋口を見ずに言った。

ちなみにSEALsとはアメリカの海軍特殊部隊のことで、世界最強を誇っている。

そんな中、ファイブスが来た。

「菊池一等兵が呼んでいます！」

一等兵が来い、とでも言う場面かもしれないが生憎あいつはシギントをしている。ここは俺達が動くべきであった。

反射神経が反応し、すぐさま俺と樋口は足を動かす。ファイブスもそれを一瞬見て再び足を動かした。

向かった先にはパソコンの前で操作をしている菊地と新聞を読んでいる坂崎がいた。

二人は俺達を見てディスプレイを見る。俺達も見ろということだろう。その指示に従ってパソコンの周りに集まって見てみる。するとそこには警察のような人たちがいた。

いやよくよく見ると警察なんかではなかった。それは外人達で、日本の警察ではない。

「隊長とファイブスさんが事故に遭わせたビルの付近です。カメラをハックしました」

樋口は目を細めてじっくりとみる。やはり外人である事に気がついたのだろう。

「これは警察じゃないな」

「ああ、俺も気がついた。だが、一体どこをやつらだ？攻撃してきた奴らではないだろう」

もしもこいつらが攻撃してきた人間達だとすると、大量の武器が何処かに放置されているということになってしまう。可能性としては奴らは逃げている。だとすれば、この調べをしている奴らは一体何者だ？

気がつくのが遅かったが、隣には桜井がいた。桜井は盗聴をしようとして試みているが、やはりうまくいかない様子であった。

カメラから会話が流れてくる。

耳を澄まして聞いてみる。どうやら英語のようだ。

しばらくじっくりと聞いてみると、少々なまりのような物を感じた。それは、日本語で言う標準語の微妙な方言の違いといったら言

いのだろうか。

聞いた限り、多分これはイギリスのなまりが入っている。多分イギリス人だ。

どうしてイギリスが？そんな疑問と、こいつらが大体どこの組織の連中か分ってきた。

多分SISだ。

まさかここに来てイギリスが出てくるとは思わなかったが、俺は早速携帯電話を手にとり、友人に電話をかける。友人の名はクリス・ビショップ。SISの人間であった。

電話はしばらく続け、俺はディスプレイの方をちょっと見ると、ビルの中から少々背の高い女性が出てきて携帯電話を取り出した。どうやらビンゴのようである。

「もしもし」

『はい』

「警備会社SACSCの蒼京です」

しばらく向こうは沈黙した。映像を見ると、先ほどの女性が電話片手に固まっている。

フィービスが俺に気になり始めてみてる。

しかし、そんなフィービスを無視した。

『ああ！お久しぶりですね。何ですか？』

どうやら向こうは今の沈黙を誤魔化そうとした。あくまでもこのことは知られたくないようだ。

「お久しぶりです。実は、少々帰り道で襲われましてね。それで私はちょっと気分が晴れないんです」

『へ、へー』

俺の優しそうだが何も優しくない声に、相手は興味のなさそう、いや正確には話題を変えたいようなこの話題から逃げたいような返事をする。

「でも私、間抜けなことに襲った人がどんな人だったか忘れてしまっただんです。そこで、もう一度そこに行って調べたいと思うのです」

相手は切羽詰ったような感じである。

『それと、私のどういう関係があるのか分らないんですが．．．』  
「いえいえ、ただちよつと愚痴を聞いて貰えればなと思ひまして。  
忙しい中、ごめんなさい」

相手はもう逃げ切れないことを悟った。嘘をついたところで更に不利になり、後々になってどうなるか分らないと思ったのだ。そのため、話は突然交渉に姿を変え始めた。

『分りました。私は何をすればいいのでしょうか？』

「私を襲った人たちは何者ですか？」

それを聞いて相手はため息をつくか、それとも背筋を震わせるかするかと思つたのだが、ディスプレイには意外にも安心してゐる姿を映していた。

その安心してゐた理由は後々分るのだが、今は置いておくとする。

『私達の調べではメキシコ軍というのが有力です』

メキシコ？ またしてもよく分らない情報が出てきたな。

でもとりあらず目的は果した。

「ありがとうございます。これで気分が晴れましたよ」

その言葉に先ほどよりも安心したらしく、相手はほつとしていた。  
『力になれてよかったわ』

「ええ本当に。今度日本で一緒に食事でもどうです？」

『いえイギリスで食事を．．．とは言えませぬ。しばらくの間は日本にいますのでまた今度。では』

それだけ言つて電話を切った。

俺は皆に言った。

「メキシコ軍だそうだ」

私達は一度解散し、再び調べ始めた。

私としてはもう訳がわからなかった。

始めは手袋に次はテレビ局。そこまではまだ平和だが、次にはイ  
スラエルという先ほどの二つとは接点がないような情報が流れてい

た。そこにメキシコ軍ともはや平和どころではないものが着たから全く分らない。この世界は一体どうなっているのだろうか？手袋とメキシコ軍の共通点なんて全く分らないよ。

実は手袋とテレビ局についても共通点分らない。

樋口は私にその件について考えを述べてくれた。

「俺の考えだが、イスラエルとかメキシコ軍とは別に存在していると思う」

「別に？」

「そうだ」

一杯のサイダーを一気に飲み干す樋口はまるでお酒を飲むようである。

「それは・・・どうして？」

すると樋口はちよっと頬にしわをつくって笑った。

「勘だ、勘」

樋口はこういう根拠もないことをよく言う。でもそれは私の世界の人たちのようなことであった。

私の世界の人にもこういう人たちがいた。私の仕事をくれるおじさんがそうであった。

お金に困った時であった。私はいつもより時間を多くしてお花畑の手入れをしていた。でもとうとう夕方になって、いよいよお腹がすくようになると、そのお花畑の叔父さんが私に言うてくれた。

『なあに、今日は肉も安くなってるさ』

どうしてと聞くといつも同じ答えが帰ってくる。

『勘だ、勘』

樋口をみているとそういう懐かしさを思い出す。でも、そんな懐かしさとは別れをしてしまった。私はそれを思うだけで悲しい。

樋口は先ほどの会話を終わらせていなかった。

「ただ勘と言ってもそれなりの考えはある」

「それはどいうの？」

「イスラエルはユダヤ人だ。ユダヤ教を崇拝している。そしてユダ

ヤ人は選民思想を持っている。日本人のような黄色人種や、黒人達は皆劣等人種だと考えているようなものだ。だとすれば生き残るべきはユダヤ人。頭のよいユダヤ人は生き残るべきなのだ」

私はまた酷い話を聞いてしまった。トラウマになりそうだ。

「や、やめてよ！」

すると樋口は楽しそうになる。

「それで劣等人種を殺し、自分達が生き残る。まるでノアの箱舟のように……」

頭を抱えてイスに座る。夢に出てきそう。

「なあんてな。だが、その考えからするとイスラエルがインフルを流した可能性は十分ありうる」

確かにそうだ。

最近は宗教について学ぶようになったが、宗教とはすごい。

宗教を信じる人は本当にその神を信じていて、そのことに何か言われると最悪戦争になってしまう。歴史を見るとそういうのが少なくない気がして来た。

「そういえばフィービス、お前もこの世界に好きな野郎とか居たのか？」

そのことを聞くとすぐさま坂崎が駆けつけてきた。

「なんだなんだ？フィービスはどんな奴が好きなんだ？」

ものすごい勢いである。

私はその姿を無視しながら、一応樋口に答える。

「べ、別に居なかったけど」

「そうか？その年なら一人くらい居そうだがな」

「逆にモテたりしたんだろ？」

坂崎が興味津々に聞く。

私はどうも答えてしまう性格らしく、その時普通に答えてしまった。

「その、モテたかどうか分らなかったけど……好きになっていた人はいました」

ほう、と二人が微笑していた。凄く嫌な感じしかしなが言ってしまった。

「誰だ？」

「ええーと、そのお、国の王子でして．．．」

「ぼかーんと一瞬の沈黙。」

二人は先ほどまでの微笑を崩さず、そのまま微動すらせずに居た。それも束の間。私を質問攻めした。

「王子様？そんなのに目えつけられたのか！？」

「受けたのか？結婚うけたのか？」

「う、受けてませんよ！私はその人嫌いだったし」

「はたまたどうして？そいつ女遊びが大好きだったのか？それともぶっさいくな顔してたのか？」

「女遊びはしてたようですけど、ぶっさいくではありませんでした。」

話を聞いていると、王子に遊ばれた人はかなり喜んでいて、遊ばれるのを夢見ている人もいました」

これは事実で、実際に王子は女遊びが大好きであった。それで、その王子はかつこよくてモテただけで、かなり横暴なところもあった。

「で、なんで受けなかったんだ？」

樋口はもう一杯サイダーを飲み干す。そしてまるで酒の肴のようにサラミをつまみ始めた。

「その．．．だって、私はあんまり好きじゃないし、王子とか王って嫌いだったから」

私はあいつら権力者が嫌いだ。自分の権力をオモチャのように使って、人々を苦しめる。そして次々に犠牲者を産む。

考えてみると、ここの人たちも犠牲者ではないだろうか？

権力者から武器を与えられ、戦いを強いられる。自由を失ったこの人たちはまさに権力者の生んだ犠牲者では？

そこに、蒼京が来た。

「寝ろてめえら」



「あー俺エロゲやってくるわー」

「俺はおつまみつまんでるわー」

坂崎は自分の部屋に戻り、樋口はここに残ってつまんでいた。

「フィービス寝ろ」

「ジyunは寝ないの？」

「ぶー！」

樋口がサイダーをぶちまけた。霧のようにサイダーは空中をさまよひ、しばらくして消えた。消えたところには樋口の笑い声が聞こえた。

「ジユ、ジyunか。ジyunか！こいつはおもしれえ」

サイダーとサラミを持って立ち上がる。

「俺は邪魔なようだな」

樋口はそのままこの場を背にした。

夜の闇が完全に支配したこの地にある部屋は、人工的に生んだ光では闇を追い出す事ができずにいた。

どこか、静かになった。

蒼京は意外にもオレンジジュースを取り出し、二人分をテーブルに置いた。先ほどは寝ると言っていたのに、どうやら考えを変えてしまったらしい。

オレンジジュースをちよっとだけ飲むと、蒼京の口が開いた。

「さっきの話、気になるな」

「さっきの？」

「王子が嫌いだったって話だ。なんで嫌いだったんだ？」

あまり聞かれたくない質問であった。そこで私はこの話を変えるために難題を押し付ける。

「ジyunの過去を教えてくださいらいいよ」

これなら無理だろうと思って安心してオレンジジュースを飲むと、意外にも空気が違った。

「お前にとって、もうここはお前の家だ。約束を果そうか」

「え？」

「だが、おおざっぱだ。あまり言いたくないが・・・どこかで聞いて欲しいと思ってる。だからおおざっぱに言う」「  
蒼京のオレンジジュースは、まだ三分の二はあった。

SISと情報（後書き）

空気の読める樋口くんでした

読んでくれたらありがとう

## 同情されたい過去

うつむきながらも、蒼京はこちらを見た。

触れられたくない急所は誰にでもある。それは、心も同じなのだ  
と私は思う。

その急所を自ら打つ。蒼京の告白はそれ同等である。

私は自分のオレンジジュースを飲む事ができなかった。この空気  
の中、その行為は不適切極まりなかった。

蒼京の口はついに再び開いた。

「俺は過去に人間を殺した。無論、そのときはまだ、純粋な子供・  
とも言えんが、この機密警備会社の存在や、政府の行動の意図な  
ど、全く知らなかった頃だ」

この世界の良いところは、やたら無闇に人を殺してはいけな  
いところだと思っている。

私はいつもこの世界と私の世界を比べてしまう。それは仕方がな  
いことだと思う。なぜなら私の基準は私の世界の常識であって、こ  
この常識ではないから。そしてその基準からするとこの世界はあま  
りに惨たらしい。人を簡単に騙し、利用し、最後には捨ててしまう。  
そんな世界は本当に酷かった。

でも、人を殺せないという点では私の世界は劣っている。

最近になって私の世界が何故かこの世界の過去に似ている事に  
気がついた。

過去にあったこの世界の悲惨な出来事が私の世界にあった。

例えばグラディアトルだ。

実は私の世界にもそのような試合があった。

それはかなり細かい事は違うにしても、大まかなことは同じであ  
る。

私の世界ではこのように人を殺しても良かった。でも、人を殺す  
事は皆しない。それはいけないことだと分っているから。殺すのは、

いばっている軍人だけ。

軍人は殺すのが仕事。だから、人を殺しても誰からも文句は出ないし、もしも口を出せば殺された。

この世界は違う。

この世界は軍人も例外ではないし、法で人を殺してはいけないことになっている。

その法を知ったとき、すばらしいと思った。それなら、この世界に殺人はないのだと思った。

でも、目の前の私を救った人は殺人を犯していた。あまり信じたくない事実だと思っている。

「殺したのは四人。一家族だった」

衝撃の事実であった。

蒼京は私を救ってくれた。元の世界に戻れない以上、ここで生きるのは困難。私がかもしも蒼京に見捨てられていたのなら、すでに私と言う存在はここにはあらず、誰にも知られずに眠っていただろう。彼はそこかに人としての優しさがあった。

人を殺すのが仕事の軍人。でも、蒼京から言わせると違う。

『俺達は人を守るのが仕事だ』

無駄な人殺しはしない。人を守る上で止むおえない場合のみ人殺しをする。そういう位置付けをしていた。

蒼京はそういう人であった。

なのに、そんな人が家族を全員殺すなんてありえない。

私はそのとき顔の表情を一切変えずに聞いていたが、内心では凄く動揺していた。

「あまり理由は言いたくない。だが、簡単に言えば俺は奴らが嫌いだったからだ」

「それだけの理由で・・・」

ついに私は口を開いてしまった。不意だった。

私の言葉に蒼京は怒ったかと思ったが、そんなことはなかった。向こうとしては、どうやら私の発言は想定内のことだったようで、

平然とオレンジジュースを飲んでいた。

「それだけの理由．．．だな。だが、嫌いになった理由は．．．ある。それについては．．．すまんが触れないでくれ」

突然蒼京の目は険しくなった。

蒼京が殺した理由は嫌いだったから。でも、その嫌いになった理由が重要なのだと思う。そこに何があったかは分らない。きっと相当酷いことに違いない。しかし詮索しようとは思わなかった。と言うより、詮索する勇気がなかった。

「あのクソ野郎のことを今でも憎たらしく思っている。一度殺したのに、まだ殺し足りないくらいだ」

その言葉にはとてつもない力が込められていた。

怖かった。一言に尽きる。

この時の蒼京は本当に怖かった。どこまでも憎しみに身を任せていた。

でも彼ははつと我に帰って私にいつもの調子で話した。

「すまん。俺がこの話をしたのは他ならぬお前が来たからだ」

「私？」

「ああ。正直、俺はこのことを心の奥にしまっていたが、とてもじゃないがしまいきれるものではなかった。誰かに言って解放された。でも周りも同じであった。だから他人を解放させた事はあっても、自分を解放させた事はなかった。．．．お前には悪いが、少し楽にさせて欲しかったんだ」

「．．．」

私は反応に困った。

というのも、蒼京が私を頼りにしていたけど、蒼京が本当に楽になったのかは分らなかったから。

本当に楽になりたいなら全部を打ち明けてくれればいい。でもそれはきつと蒼京の良心で全てを打ち明けなかったんだろう。全て打ち明けてしまうと、私とその苦しい思いを共感しないといけないから。私にはどこまでも純粹で居て欲しいと思ったんだ。

相手は残ったジュースを一気に飲み干し、つられて私も飲んだ。  
会話はそこで途切れた。

私はなんともいえない。

どうすれば良いのか分らない。

でも、一言でも言っただけよと思っただけよ。

「その．．．全部、言っただけよ。」

すると、蒼京は照れくさそうに言う。

「いやいい。これ以上言うとなんか俺が解放するどころか精神的に嫌になる。」

考えてみると、蒼京はあまり言っていない。言っただけは家族を殺した事だけであった。その殺し方も、状況も、具体的な理由も言っていない。それで十分なのだろうか？

蒼京を楽にさせてあげたい。でも、どうすればいいのか分らない。私は蒼京にどうしてあげることができなかった。

「さて、五日後にまた仕事がある。TBSのディレクターに会わないとな。それまで風をこしらえるなよ。」

そう言っただけで蒼京はこの部屋を背にしてしまった。

蒼京の頭の中には五つの情報があった。

一つは手袋。一つはテレビ局。一つはイスラエル。一つはメキシコ軍。そして最後にSISである。

だが私は以前からSISが調査をしていることを語っている。となると蒼京の持つ情報の最後には誤りがあった事になる。しかしながら、その誤りは実は今後意外な展開を見せる事となってしまった。さて、現時点でのSISの状況を確認して貰う。

なぜここまでうるさくSISについて話すかと言えば、やはりこのことはかなり重要な点であったからだ。

これを読む人たちは既に気がついていられるかもしれないが、SISは蒼京達にとってもかなり重要なことを調査している。しかしそれは蒼京達にはばれないようにしていた。

今回の件でS I Sは緊張感を覚えた。

あの部隊は私達の調査の目的を知っているのでは？と。

この時のクリスの報告は以下のような物だった。

『彼らは私達の目的を知っていません。しかし、今後注意が必要で  
す』

彼女はあの会話から蒼京が目的について知らないことが分った。

しかし、安心するのは早かった。相手は相手の任務があり、その情報の中にS I Sが入ってしまった。つまり無事に任務が終わり、真実を知ればS I Sが任務上関係ないことが分り始め、彼らは新たな疑問を浮かべるはずである。そう、なぜS I Sがあそこにいたのかという疑問だ。

S I Sに時間がなくなってしまった。

誰もがそう思った。

だが、それは後に計画していたことが早くなつたに過ぎなかった。

S I Sはいずれ彼らは第二小隊と接触しなければならない。

S I Sは準備を始めた。

はて、どうやら私はせっかちなようで物事をもつたいぶることが難しいらしい。

先ほど、これを読む人たちは既に気がついていられるかもしれないと言った。そこでその予感を確かにするために先ほどのクリスの報告の一部をここで書こうと思う。

クリスは確かにこう報告した。

『シークレットワールドについては漏れていないようです』

シークレットワールド。

それが意味する物は何なのか？

読者は気がついていいる。

そうである。このシークレットワールドこそが魔法使いフィービス・トライデントの住む世界である。

しかしなぜその世界がシークレットワールドなどと呼ばれるのか？なぜS I Sは堂々と第二小隊にその世界の存在を報告しないのか



?なによりなぜS I Sは水面下でこの世界について調査をしているのかはまだ書くつもりはない。

フィービスの情報が欲しいならば、第二小隊と接触するほうが早い、そういう問題ではなかったのだ。

フィービス一人の問題ではない。この問題はさらに深く、慎重に行う必要があった。

私の物語はまだ中盤にも達していない。

ここにきて問題があった。

メキシコ軍だ。

奴らは常に俺達を狙っている。俺達が車を出せば対戦車ミサイルが向かってくるだろうし、ヘリを出せば携帯式対空ミサイルが空を飛ぶに決まっていた。

つまり閉じ込められたのだ。

だが奴らの目的は何なのかを考えると少々おかしい。

奴らの目的は紛れもなく俺達の任務遂行の阻止であり、それは第二小隊の殲滅に繋がる。だとすると奴らは何も俺達が外に出るのを待っているのではなく、この基地にC4なりセムテクスなりを仕掛ければよかった。でもそれが無い。

その理由は規模の問題だ。

メキシコ軍は全力で俺達の任務を阻止しようとしているだろうが規模が大きすぎると問題が発生する。

基地、いや家ともいえるようなこの施設は外見に比べて非常に強い耐久性を持っている。

S I Sの本部は以前アイルランドのリアルIRAという組織に対戦車ミサイルを撃ち込まれたが、そのときの被害は軽微だったと言う。この施設もそれと同じような耐久性をもち、対戦車ミサイル程度ではなんともならない。となると、破壊するには強力な爆薬が必要である。つまり、相当派手な手を使わなければこの施設を破壊できないのだ。

奴らはばれることを恐れている。

俺達を殺しても政府はこのことを公表しない。いや出来ないと言  
うべきだ。

なら一般市民ならどうだろうか？

解決策はそこにある。

この基地にTBSのディレクター、上川を呼んでおいた。

ちなみに彼には警備をつけておいた。これには我々、SCASC  
の別の部隊に頼もうか迷ったが、民間警備会社の方が万が一何かあ  
ったとき騒ぎが大きくなると思いきちらに依頼しておいた。

樋口は戦闘服に着替え、自分の武器であるM60E4を持つ。

ずっしりとしたその機関銃は樋口にあっていた。

俺も相手に失礼だと分りながらも戦闘服に着替えていた。

「今回はどれくらい資金使った？」

俺は最新鋭の小銃の照準機を一度見ながら答える。

「相当だな。まあ報酬が大きいからな。それよりも・・・」

俺は一度小銃を置く。

「上川さんに与える情報の方が心配だ」

樋口は苦笑しながらその場を立ち去り、俺はソファに座る。

後から俺の隣にフィービスが座り、彼女も戦闘服であった。

ちなみに彼女の戦闘服は俺のとは違い軽い。彼女は防弾パネルも  
必要なく、他の色々な物もいらなかった為にかなり軽量化されてい  
た。ただし、これは彼女の体力をなるべく消費させないためという  
意図もある。

俺は目の前にあるお茶を少し飲む。

お茶はまるで氷を入れたかのように冷たかったか、実際には入っ  
ていなかった。

「フィービス、お前の入れた茶か？」

フィービスは平然と頷いた。

ところで今思ったのだが、フィービスの創り出す水っていうのは  
安全な水なのだろうか？

そんなことを心の中で呟いたが、彼女も普通に自分の入れたお茶を飲んでいたので別に良いとした。

沈黙の領域がそこにはあった。

何も喋らず、ただただ待っているだけの時間だ。この時間がどうも何かを感じる。

何かをすると余分なことを感じなくなる。しかし暇な時、もしくは何もしない時は様々な事を感じる。

例えば秒針の動く音だ。

どうも人間は何かをしなければ生きていけないようだ。何もしないようにすれば、今度は細かい事でもいいからと何を見つけ取それを感じる。逆に言うと、何もしていないというのは絶対に無く、人間は何かすら常にしている。

人間にはそういうところが多い。

人間は二度と同じ状態になることはないと言われている。つまり常に動き、変化しているということだ。これも逆にいえば人間は変化していないときははないということになる。

俺は時々その型をぶち壊したいと考える。

常に変化しているなどというのはまっぴら御免で、これは俺の体なのだから自由にさせてもらいたい。何もしない状態を意地でも作ってやりたい。そう思うのだ。

下らない考えだな。

暇なときはいつもそんなことばかりを考えてしまう。やはり、人間は常に何かをしなければならぬのだな。

『上川さんが着ました』

耳にそんな言葉が入り、俺は再び少しのお茶を飲む。どこまでも冷たいそのお茶は、俺の喉をひんやりと潤すのだった。

同情されたい過去（後書き）

フィービスの世界の本当の名前って何ですか？

フィービス「うーん。なかったような気がする」

それじゃあオリンピッククッてありました？

フィービス「あったね。しかもそのまんまの名前で。でも始めは皆裸で競技するから市民はかなり反対したけど」

読んでくれたらありがとう

## マインドコントロール

上川の表情は怯えてなどなかった。

迎えに来たのは民間警備会社の隊員で、玄関には銃を持った少年と少女の二人が待っている。中に入ると厳重な検査が行われ、その後銃を持った少年に案内される。

普通の人ならビビッて何も言えなくなるか、興味深く写真でも撮りまくっている。

でもこの男はどちらでもなかった。

興味深い、それに近いかもしれないが、表情としては何かを期待していた。まるでクリスマスを待つ子供のようでもある。

多分この類の人間はこういう状況になればなるほどこの期待を隠せない顔になってくるのだろう。現に、俺とフィービスのいかにも戦闘間近の姿を見て嬉しさがどっと溢れたようで、顔は本当の笑顔を作っていた。

俺とフィービスは立ち上がる。

「申し訳ありません。このような形でお呼びしてしまって」

「いえいえ！とんでもない」

本音であろう。その本音の裏には俺からの情報というものがあるのだろうな。

「こちらはフィービス」

フィービスがここにいる理由は伏せておいた。

「はじめまして。フィービス・トライデント」

「はじめまして。TBSのディレクターを勤める上川です」

二人は握手をしてからゆっくりと座った。

一旦俺は冷たいお茶を飲んで落ち着く。今回ばかりは少々緊張がした。

上川も一度お茶を飲んだ。すると、意外にもそのお茶に驚いたようだ。多分すごく冷たかったからだ。だがそれはどうも相手として

は良かったらしく、ちょっと興味深くそのお茶を見ていた。

「お茶が・・・どうか？」

「いえ、凄くおいしいなと思いましてね」

「いつも用意するお酒に比べれば、面目ありませんよ」

そう言つと相手は苦笑するのであった。

相手の印象は結構良い。

いつも笑顔を絶やさない人のようだ。

でも、それが本当の笑顔かどうかは分らなかった。

コンビニやスーパーに行くとき皆優しく接してくれるが、どうもそれは本当の優しさではないようであった。

この世界は全てお金で解決できる。

私はそう感じてきた。

いつも何処かにお金が潜んでいるのがこの世界だ。本当の優しさなんて無いのかもしれない。

いたるところにお金は潜み、優しさの裏にはいつもそれがある。

この世界はこれが原因で人々の目が死んでいるのだと思う。だってこれではお金を持っている人だけが幸せなのだから。

この人もそういうものがあるのだろうか？私には分らない。分らないが・・・そう見えてしまう。

そうでないで欲しいが、この人はどうなんだろう？

蒼京は話を始めた。

「この前のソマリアの特集、どうでした？タイトルは『ドキュメント ソマリアの悲しみ』でしたね。私としては見ていて良かったと思っただけです」

蒼京は確か、前回ソマリアの特集番組をどうのこうのって言うてた。私もそれを見たけど、なんとも衝撃的であった。同じ国の人と争い、そこに他人である大国が入ってくる。ソマリアの人たちは必死で大国の攻撃を逃れ、怪我をした人たちを助ける姿は本当に悲しかった。しかも、ここまでしたアメリカは失敗。両国とも沢山の命

がなくなっているのに、なんだったのかと思つてしまった。

「私も．．見ました。本当に衝撃的で悲しくなりました」

蒼京からこういうことは言つていいといわれている。だから私は遠慮容赦なく言つと、相手は笑つた。

「いやー良かったですよ。視聴率もかなり良かったですし、蒼京さんがいなくなつたらあんなの出来ませんよ」

そんなことを言いながら、笑つていた。

蒼京も笑つていた。すると、彼は話を次第に動かそうとしていた。「ではもう一つ、ドキュメンタリー番組を作りましょうか」

相手の表情が変わつた。

一瞬だつた。その一瞬で、相手の顔は真剣な物へと変化してしまつた。

「ええ、今回は大事になるような番組を作るつもりでここに着ました」

それは本気だ。

この人はここに命がけて着た。作戦内容を聞いていた時酷いと思つたのはそのことだ。

蒼京は騒ぎを大きくするために一般人をここに入れた。何かあればメキシコ軍を完全に悪者にしようとしたのだ。

人を利用する事はいけないことだ。でも、そうしなければ私達は守る事も出来ない。そのことを前回分つた私は、このことを黙認した。

しかし、よくよく考えてみるとこのことは当事者も分ると思う。

この人はきつと分つていた。ここに来る時死ぬかもしれない。それでも来ようとしたのだ。さっきの言葉が本気でなければおかしい。蒼京は本題に持ち出した。

「実はとある事情でKS社について調べているのですが、どうやら最近KS社はテレビ局と接触していると聞きましたね。それがCMの依頼とも思えないので、貴方に尋ねようとしたのです。まあ、CMの依頼と思えないのは勘なんですけどね」

実際勘だったのだろう。

蒼京と一緒に聞いた時、相手はCMではないと言っていなかったから。

私は自分の密かに魔法で注いでいる冷たいお茶を飲む。このお茶おいしい。

「なるほど．．．まあ言ってしまうと宣伝みたいなものですね」

「と言いますと？」

「TBSの方では、夕方のニュースにこの前発売したKS社の手袋の特集を依頼されたんです」

私はそれがどういう意味なのか分らなかったのだが、蒼京はその言葉に敏感であったようだ。

蒼京は口元に軽く片手を当てて少し考え始めた。

「他のテレビ局の方は？」

お茶を少し飲んでから、相手はちよつと急ぐようにコップを置いて話す。

「ちよつとよく分りませんが、やはり私達と同じ動きが少しあるようです」

この話を聞くと、口元に当てられた手が即座に離れた。そして微妙ながらも頷いて理解したようであった。

蒼京はお茶を飲んですぐに話す。

「実はKS社がインサイダーをしている疑いがあります」

機密情報だ。そんな機密情報を渡すと言う事は、この上川が言った事はそれに相当に相対するということだ。

私には分らなかつた。

上川の言ったのがそんなに重要なことだったのだろうか？

「内容は報道できるような物ではありませんが．．．調べれば報道できるようなものも見つかると思いますよ」

相手はその報道できないというのが何を意味するか分っていたと思う。

私はこう言われている。



『機密を知った奴は殺せ』

もしもそんな情報を報道したとすれば上川は命が危ないに違いない。でも上川の顔は笑っていた。

「なるほど、いい情報を貰ったよ」

何かを企む笑顔を作るが、そこに蒼京の声が入ってきたときは顔は動かなかった。

「そこで、報道についてのアドバイスを近日するのでそれに従ってください」

この会談は実は作戦の一部でしかなかった。

確かに、この会談はかなりの価値があった。そのお陰で蒼京は手袋とテレビ局についてのことが分り、さらにはKS社が描いている絵が何なのかまで推測してしまった。だが、これからが本番である。突然のことであった。

蒼京の携帯電話に一人の男から電話が掛かってきた。相手はイスラエルの友人であった。

このタイミングでイスラエルが出てくるのは完璧に怪しい。まず偶然と考えないほうがいい。だから気構えながら蒼京は電話に出た。すると予期せぬ言葉が出てきた。

『明日すぐに会えないか？助けて欲しい！』

一体何があったのか全く分らない。蒼京は無論、相手が何か俺達を嵌めようとしていると考えた。

蒼京の考えは樋口の考えと大差なかった。イスラエルが以前から生物兵器を流そうとしていると聞かない事は無かった。無いとは限らなかったのである。だからこそ二人は愚か、フィービスを含む隊員全員がそう考えていた。

現状は違った。

どうやら考えを改めなければならなかった。

だが、電話だけでは信じられない。相手が嘘をついている可能性など、高すぎている。

そのため直接会い、詳しいことを聞く必要があったが、外には絶対メキシコ軍が居る。だから、お守りとして上川を呼んだのだ。ここからが本番である。

菊地は無人ヘリを飛ばした。

無人ヘリといっても、ラジコン程度の大きさの物だがそれなりに使える。

無人ヘリには小型カメラや赤外線カメラなどが装備されており、各隊員の端末機にそれらの情報が送られる。また、ヘリは隊員の端末の要請で動くため、リモコンはそれとなる。ただし、飛行時間は約一時間と少ない。だからあまり無駄には使えない。電気駆動であるために、電力不足となればバッテリー等を変える必要がある。ちなみにもしもの時はフィービスでもなんとかなりそうである。とにかく、このヘリの欠点は飛行時間であった。

この作戦の目的は俺とフィービスが目的地のホテルに着く事である。そして作戦の目標達成時間は一時間以内になっている。

メキシコ軍を発見するのはこの無人ヘリしかない。それまでに到着しなければ危険が高まる。

俺とフィービスの乗った車は走り出す。そして、もう一台桜井と樋口の車が走る。

上川は確かに囷として大切だが、別に乗らせる必要は無い。この車に乗っている可能性を出すだけで良かったのだ。後ろの座席をカーテンで隠し、前からも隠せばすむことであった。

俺は運転をし、フィービスが携帯端末機を見ていた。

「フィービス、そのビルの上を拡大しろ」

カーナビに移る無人ヘリからの映像を見ながら言う。フィービスはやっと覚えたという手つきで拡大をすると、そこには案の定メキシコ軍の狙撃兵が居た。

「ルート変更！スノー、狙撃兵のいる方へタイフーンらを回せ！」

『了解です。ブラボーは送信するルートに沿ってください』

すると桜井の甲高い声が了解と言っのを聞いた。

ハンドルを切り、急にルートを変える。俺はカーナビを見ていた。すると、フィービスが話し掛けてきた。

「あ、あの隊長」

「なんだ？」

作戦中はジュンと呼ぶなと言ったためにフィービスは隊長と呼んでいた。

「さっきの、上川さんの話・・・何が分ったの？」

「作戦中だ。それに集中しろ」

そういつて話を止めようとしたが、やはり冷たすぎて相手はちょっと落ち込んでいた。

それが普通の軍人であるなら問題だが、生憎フィービスは普通の軍人ではなかった。集中力が命の魔法使いである。俺は一旦ため息をついてしまった。

「あまり作戦中にそういうことは聞くな。だが、今回だけは特別だ」それを聞いてフィービスは驚く反面、自分の役割である端末機を見て敵を必死に探すようになった。

「マインドコントロールだ」

「マインドコントロール？」

俺はあの話聞いてすぐさまその言葉を思い浮かべた。

この言葉、マインドコントロールとは言わば洗脳という意味に等しい。違いとえば、その洗脳を利用するという点だ。

手袋の件ははっきり言ってあまり生物兵器とは関わり無かった。

テレビ局で宣伝をしているということは、どうやら単純に商売目的であった。

以前、あるある大辞典とかいう番組があった。そこでは納豆のダイエツトの特集をし、それが嘘だと分って大変なことになった。そしてその時、一時的に納豆が急激に売れた。

今KS社のしている事はそれである。

専門家を買収し、その手袋にどのような効果があるのかを証明さ

せ、商品のすばらしさを分らせるのだ。

KS社の手袋は飛ぶように売れるだろう。しかし、証明されない他の手袋は売れ残っていくだろう。

俺はそこに少し悲しみを感じる。これから冬がきて手袋がいよいよ売れるのに、他の会社はかわいそうだな、と。

「つまり．．．人を洗脳して、この手袋は凄くいいですよーって言うって売るのは？」

「そうだ」

フィービスは少しばかり考え込む。そして敵を見つけたらしく、カーナビを拡大させた。

『アルファ、ルートを変更します。送信したルートに沿ってください』

「こちらストーム。了解」

「やっぱりなんか酷い．．．」

俺は素直にそれを同意した。

「ああ、だが問題はその手袋が本当に効果があるのかどうかだ」

効果が嘘だとすれば一瞬しか売れなくなる。手袋をすればインフルに掛かりにくいといって一瞬は売れても、そのうち皆それが嘘だと分るようになってしまはずだ。そうなれば誰も買わなくなる。

「だから、その点をKS社はどう考えているのか知りたいんだ」

そんな言葉を最後に、俺は運転に集中した。

順調であった。あまりにも凄すぎるくらい順調であった。

俺は嫌な予感を感じながらも、車は目的地に進んでいた。出発してからまだ三十分。このままならへりは予定通りの行動をしてくれる。フィービスは使い方をもう慣れたようで、ふんだんにこちらのルートの様子を偵察するよう要請していた。

これなら戦闘は避けられそうだ。

『こちらタイフーン！引つかかったぜ！奴らダミーである事を知らずにこっちはつか攻撃しやがる。てめえらの銃弾じゃきかねーよ！』  
樋口はひっかかったことを喜んでいた。

この作戦、鍵は無人ヘリと樋口達の車だ。

無人ヘリでメキシコ軍兵士を察知した場合、俺達はそのを避けるのだが、樋口達はそこへ向かわせるのだった。メキシコ軍は俺達の車が発進するのを見ているから、配置に着く。そして樋口はまんまとそこに引つかかったように見せかけ、相手を樋口達に集中させる。生憎だが樋口の車は俺の乗る車よりも金をかけていて、戦車以上の装甲を誇っているから銃弾はあまり意味が無い。万が一ミサイルが着てもチャフなどを使えば済むようになってる。

つまり、樋口の喜びは作戦成功の喜び同然だった。  
順調すぎやしないか？

目的地まで残り500メートルであった。

突然、ヘリの映像が消える。ヘリに何かあったのだ。  
フィービスはびっくりして急いで連絡した。

「スノー、何があつたんです!？」

菊地の声は、慌しかった。

「攻撃です! RQH-1が狙撃されました!」

まさか! 奴らは無人ヘリのことまで知っていたと言うのか!?

その点を見て分つた。奴らメキシコ軍、いやメキシコは本気だ。  
本気で俺達から何かを隠そうとしていやがる。

俺達は、なんと少しでもそれを暴く必要があつた。

## マインドコントロール（後書き）

商品って、やっぱり様々な視点から見るのが大切ですね

読んでくれたらありがとう

## イスラエルの陰謀

蒼京の推理では、メキシコは本気で何かを隠そうとしていた。

というのは、無人ヘリRQH-1が狙撃されたことから分った事であった。

この無人偵察ヘリについては蒼京の説明で十分に分ったと思う。そのため、私はこのヘリについての別の説明をする。

そもそも機密警備会社SASCの依頼のほとんどが警備でない事は以前触れた。だがその内容については多数であったために語る事はなかった。その中には、今回のインサイダーの陰謀を暴く事や、前回の機密護衛などが入っている。そして、このRQH-1もその一つであった。

自衛隊の新兵器と言うと、基本的に北海道の陸自の最新鋭部隊に送られる。しかし、時には例外もある。その例外がこのRQH-1だ。

このRQH-1は小型かつ、小火器を武装できるようにしてある。また、取り扱いも手軽で、一人が背負えば十分に持ち運びもできた。実際このような兵器は先ほど述べた最新鋭部隊にもあり、それはヘリではなくどちらかと言えばラジコン飛行機のようなもので、RQH-1よりも随分と速い。ちなみにこの無人航空機も第二小隊は手にしている。それも最新式の物を。

なぜ持っているかと言うと、依頼されたからである。

最新の兵器は基本的に実験として陸自の特殊作戦群やSASCに送られる。この二つは普通の陸自の部隊に比べて実戦が多く、中でもSASCについては特殊作戦群よりも戦場の幅が広い事からよく送られて来る。そして実戦でその兵器を評価し、具体的なアドバースを与えるのである。それにつれて兵器は完璧な物となっていく。

だから第二小隊はこの小型ヘリを持っていた。だがしかし、今述

べた説明からすると、依頼側である会社とSCASCだけがその兵器を知らないはずである。なのにメキシコ軍はこのへりを狙撃してしまった。

実はこのへりは外見よりも強く、ミサイルに対してチャフやフレアを使って回避する事が出来、さらに装甲はチタニウム合金を使っているために小銃弾程度では破壊できない。なにより小型であるために発見が難しい。ちなみに今後、光学迷彩の装備も考えられている。これらのことからこのへりが発見されにくいように作られていることが分る。だがそれでもメキシコ軍は狙撃してしまった。

このへりの存在を知っていても発見は困難であるのに、このへりの存在を知らないとなると破壊は不可能に近くなる。となるとやはり考えるのはメキシコ軍がこの機密の壁で守られたへりを知っていたのだ。

先ほども言った通り、このへりの機密レベルは高い。それでも漏れたと言う事は、向こうは国家レベルでこの情報を手に入れたのだろう。向こうもこの情報を手に入れるために手の内を開いたはずである。かなりの本気がうかがえる。

蒼京の推理はそうやって発展していった。

その推理は間違っていないかった。

答えは現在向かっている目的地にある。そこにこの陰謀の大きなピースの真実がある。

だが、それはピース、つまり一部に過ぎない。

ちなみにこの陰謀についてSISは知っていない。むしろ知っていたのはCIAの方である。

それについてはまた別の話である。

さて、問題は現状である。

銃弾が車を襲った。弾の大きさは大きいようで、多分M82A1などの対戦車狙撃銃だと思う。

車にはキズが付き、穴が開くかと思った。



「スノー！今すぐX R Q - 2を出せ！」

X R Q - 2、確か小さい飛行機だった気がする。それは先ほどのへりに比べて速度が速く、こちらにすぐに駆けつけてくれる偵察機だ。

でも、ここに到着するまで私達は生き残ることはできるのだろうか？

蒼京は先ほどとは比べ物にならないような運転をしていた。

真っ直ぐ行くかと思うと、いきなり右折して敵から回避行動をする。でも、右折したところにも敵は潜んでいる。これではきりが無い。

私はまるで、敵は無限にいるのではないかと思ってしまった。そして、その考えから最悪の答えが私を襲った。

私達はここで死ぬ。

恐怖で怯えそうになる言葉だ。その言葉がこの状況でであると、もはやそれは冗談ではなく、現実と捕らえてしまう。

穴があるならそこで隠れていた。でも生憎そんな都合のいいものはない。私は小さくなっていった。小動物が怯えているように。

蒼京は私を見た。

私は蒼京が守ってくれるかと思っていた。私を見た蒼京は慰めの言葉をくれるのかと思っていた。でも甘い。それは本当に砂糖のように甘い考えであった。

「前を見る！最善を尽くすんだ！まだ死ぬと思うな！」

怒鳴られた。

そうだ、私はここで死ぬと決まった訳ではない。最善を尽くして生き残るんだ。

目的地まで残り400メートル。それまで私達は生き残ればいい。銃弾が私達を襲う。私は手を前に出し、電気を前方に発する。銃弾はたちまち溶けてしまい、完璧に無力化した。

「敵に向かってもいいから突っ切ってください！」

調子がでてきた。蒼京はそんな顔で言った。

「分った」

車のスピードは上がる一方になった。

大通りに出れば騒ぎは大きくなり、メキシコ軍は存在を隠せなくなる。でもそれは私達も同じであった。だから逃げ場が無いのだ。

偵察機の到着まで推定で残り十分。

それが到着すれば敵の居場所が把握できる。把握する事が出来れば私が電気でも流して無力化することが可能だ。だからそれまでこの銃弾を何とかしなければ。

「RPG！」

煙を上げて何かはこちらに向かってくる。それが何かはさっきの言葉で分った。ロケットやミサイルなどの類だ！

速い内から手を打つべきである。先ほどよりも車から遠い位置に電気を発生させ、こちらに向かってくるロケットを爆破させた。

爆発の影響で車が煙に隠れてしまった。

それでも銃弾は私達を襲う。

「この車はRPGに耐えられるかどうか分らない。今撃たれたらまずいぞ！」

出来る事はまずこの車にシールドを張ることである。それにはかなりの体力を必要とするのだが、今は言っていられる事ではなかった。

「はあ！」

神経の全てを集中させ、車の周りにシールドを張る。

銃弾が溶けていくのが何故か分った。さらには再びロケットが爆発したのも分った。

すると、爆発のところからシールドの穴が見えた。爆発で水が蒸発してしまったのだ。

急いで補給するようにすると、私の体は悲鳴をあげた。

「ああ！」

体のあちこちが痛くなった。息は荒くなり、何も考えられなくなってしまう。筋肉が張っていくようにも感じられる。

走るよりも辛かった。走るのは足が疲れるだけでまだいいが、魔法は違う。水と電気を大量に使うために二倍の速度で体力が消耗していく。かなり辛かった。

「X R Q - 2 が到着しました！」

「ファイブス！シールドを解除しろ！敵にいつぱい食わせてやるんだ！」

即刻シールドを解除し、体力を完璧に回復させる。魔法を解除させると、体力は急激に回復する。

「りよ、了解！」

端末機に映る兵士を確認する。どうやらジャベリンのようなものを持っている。

まずはそいつに電気を発生させ、完全に無力化する。

次に対戦車狙撃銃を持つ兵士を確認し、そいつには大量の水で飲み込まれてもらう。映像には銃を持ったまま水に流されて建物から落ちる様子が見えた。

車を襲う銃弾は次第に減っていった。

目的地であるホテルが見えた。

「目的地だ！スピードを減速する！」

車はもうぼろぼろで、今にも蜂の巣になってしまおうかと思った。でも、どうやらかなり耐えていたらしく、十分に走っていた。

ホテルの駐車場である地下に入ろうとすると、後ろからロケットを撃たれてしまった。

「うお！」

「きゃ！」

後部から火を吹いていた。直撃ではなく、ロケットは地面に当たって爆発し、その爆発に巻き込まれた感じだ。

私は急いで消火し、蒼京は車を急いで止めた。

車の中で二人は一息ついた。

「．．．行くか」

その言葉で車に出る事になった。

俺達はエレベーターで上がり、相手の部屋へと向かう。

相手の名前はオットー・グロスマン。モサドというイスラエルの諜報機関の人間であった。

俺は注意をはらっていた。

このタイミングでイスラエルが来るというのはあまり偶然とは思えない。確かに俺達に何か依頼をするというのはありえるが、それよりもやはり今の任務上そっちを考えるよりも、何か今回の任務に関わる事で来たのだと思っただほうが良かった。

俺とファイビスの姿は戦闘服であった。しかしあくまで武器は拳銃を隠しているのみである。それ以外は持ち込めなかった。

ファイビスはかなり体力を消耗したようで、顔に汗が流れ、さらには息が荒かった。

「体力の消耗が激しいようだな」

それを言うと、少し苦笑しながら俺を見る。

「大丈夫。大丈夫……。魔法は使えば使っただけ消耗の量が減るか  
ら」

まるでロールプレイングゲームの経験値のようだな。だがまあ、筋肉とかと同じなんだろうな。俺はそんなことを思った。

「知っているか？アメリカでは肩は消耗品らしいぞ」

体力が回復してきたようで、姿勢がだんだん良くなってくる。

ファイビスは苦笑ではなく、表情としては普通の顔をした。

「肩が消耗品？」

「ああ。肩は使えば使うほど使えないものとなっていく。使えなくなればそれつきりってわけさ」

「……それって本当のこと？」

「さあな。だが、少なくとも俺達日本人の考え方は違う。俺達の場合には肩は使えば使うほど仕上がっていくという考えだ。メジャーに行った松坂はボールを投げる事で肩の調整をしていると聞いたな」

「メジャーって？」

そういえばファイブスはまだそう言った娯楽のような物を一切知らないのだったな。

「帰ったら調べる。説明は面倒だ。まあとにかく、日本では使えば使うほどいいと言う訳さ」

「ふーん。私の魔法も、そんな感じかな？」

「さあな」

ちょうどエレベーターが開き、俺はファイブスよりも先に出た。

俺達はエレベーターでこそあんなに雑談をしていたが、それとは打って変わって黙っていた。

部屋の番号を確認して、チャイムを鳴らす。ドアは即行で開き、その先には久しぶりに見る戦友の顔が合った。

「こんばんは」

俺の言葉に相手は笑顔を作った。だが、その笑顔にはどこかぎこちないものを感じた。

「こんばんは。良く来てくれた」

ファイブスには警戒しろと言っている。体力が消耗しているとは言え、レーザー程度は出来るようだ。

部屋に入ると、まず目に入ったのはテーブルの上のブランデーであった。そしてグラスを三つばかり用意していた。俺達の分なのだろうか？だとするとここは飲んだ方がいいのかもしれないな。

オットーはソファに座ってくれと薦めた。それに従い、俺達はソファに座った。

向かい側のソファアに座るオットーは、予想通りグラスにブランデーを入れてくれて俺達に渡そうとする。

「あ、未成年……だったかな？」

「構いませんよ。この国ではどうせ未成年の飲酒には黙認がありますから」

別に黙認している訳ではないだろうが、高校生になってくるともう皆酒の一杯は飲んでいる物だ。俺一人飲もうと対して変わらない。ただ帰る際は多分俺が運転をしなければならぬので、あまり飲ま

ないようにしなくてはならない。

驚いたのはフィービスが普通にブランデーを飲んで即刻酔わなかったことだ。案外向こうの世界では飲んでいたのかもしれない。単刀直入に、本題に入ろうとした。

「電話の件ですが．．．何があつたのです？警備の依頼ですか？」  
もちろんはなから依頼などとは思っていない。だからといっていきなり自分の推測から相手に『新型インフルの件ですか？』などと聞くのは失礼だと感じたため、あえて依頼と聞いた。  
相手は予想通り首を横に振った。

「違う．．．」

暗かった。部屋は明りが少なく、その分町の明りが綺麗に見えて静かで大人のムードを漂わせそうだったが、今は違った。雰囲気はとても暗く、絶望を感じるようなものであった。

「では、我々は貴方にどのような助けの手をすれば？」

相手は少しばかりブランデーを飲んだ。

自分の死が近い。それを恐れているようであった。

「君達は今、現在流行中の新型インフルエンザについて調べているだろうか？」

「．．．ええ」

どうやら予想は的中した。

こいつはやはりそれについて俺達を呼んだのだ。来たかいがあった。

フィービスはブランデーをちよつとずつ飲んでた。こいつにしては遠慮がちとは珍しい。それくらいこの部屋が暗いと思ったのだろう。

「．．．私は以前、SARSを流した」

中国で流行った新型肺炎、SARS。現在ではその被害は有らず、もはや終息宣言がだされている。

このウイルスは未だに原因が明らかになっておらず、中には生物兵器だという噂もある。しかしその噂はどうやら本当らしい。

以前も言ったとおり、生物兵器とはこのように自然現象に隠れてしまう兵器なのだ。大量殺人にはもってこいの兵器である。

「人口削減のためだった。中国政府も密かにこれに同意し、結果実現した」

俺はあくまで黙っていた。

ファイブスも黙っていたが、ブランデーを飲まなくなったあたり、何かを感じたことをうかがう。

「それが裏目に出た」

「あの・・・何の？」

遠慮がちに俺が聞くと、相手は静かに答える。

「今回のインフルだ・・・。ママッドの奴らは過去のSARSから私を睨んだ」

ママッドとはイスラエル外務省政治調査局のことで、モサドとは対立関係にある。

俺は大体もう理解できた。要するにイスラエル外務省政治調査局はシナリオを組み立てているのだ。

過去のSARSは背後に中国政府があるお陰でオットーは守られているかもしれないが、インフルエンザは違う。インフルエンザの場合ははつきりと言ってその正体があるならばそれを晒すほうが良い。これだけ世界を騒がせているのだ。誰しもが知りたいと思うだろう。

しかし、話からするとどうもオットーはやっていないように見える。

「貴方はインフルを流していないと？」

「その通りだ。・・・だがママッドはそんなこと気にしじゃない！」

そうだろう。

やったという疑いがあるだけでも十分だ。それを政府に突きつければイスラエル外務省政治調査局はモサドに対して優越を得ることになる。それがシナリオだ。オットーはこのシナリオを恐れている

のだ。

インフルは誰もがその正体を知りたいものだ。例えそのシナリオが嘘であっても信じる可能性がある。それこそマインドコントロールで信じさせる事が出来る。もしもイスラエルが流したとなれば世界に非難を浴びせられるだろう。

オットーはこれが報告されれば命が危ない。だから恐れていたのだ。

救われる手段は俺達に全てを話すことしかなかったのだ。

「イスラエルは流していませんね？」

俺は確認した。

相手は深く首を縦に振るのだった。

「なら、貴方の考えを教えてください。でなければ貴方は救われません」

それを言うと相手はかなり深刻な表情であった。

「すまないが全く無い。行動が制限されている・・・」

つまり、既に行動を監視されてしまっているということか。

俺には新たな情報が手に入ったが、同時に道を失ったようであった。

疑いであったイスラエルは違う。だとすれば一体どこだということのだ？

手がかりはインフルを調べる俺達とは違う組織の人間だ。何度も言っているがインフルは誰もが正体を求めて・・・。

「・・・あ」

小さな声で呟いた。

先ほど俺はインフルは正体を誰もが求めているから、俺達意外にもそれを追っている組織があるはずだと思ったのだ。だが、その『誰も』という単語に反応した。

知りたいのは誰もではない。例外がある。

メキシコだ。メキシコは隠している。出なければ俺達を攻撃しない。むしろ俺達に接触するはずだ。



「すみません。メキシコについて何か知りませんか？」  
「メキシコは確か・・・インフルの感染源であるはずだ」

## イスラエルの陰謀（後書き）

レビューされたい・・・。

そういえばどうやら一人、お気に入りに入れてくれたようです。こんな作品ですが、本当にありがとうございます

読んでくれたらありがとう

## フィービスの限界

メキシコは一体何を隠しているのか？

俺の推測は・・・

「どうか・・・しました？」

オットーは俺の動きが止まった事を伺った。

「いえ、何も・・・。・・・そう、何も情報が無いんです」

「情報が？」

「メキシコについてです。貴方もこの騒ぎを聞いたかと思いますが、我々はメキシコ軍に狙われています。何かを我々から隠そうとしているのです」

フィービスは座りながら大きな窓を覗いていた。その姿は無邪気な子供が落ち着き無く景色を見るようであったが、俺はフィービスを怒らなかつた。むしろ、彼女を不審な目で見た。

俺も窓を覗き込むと、そこには樋口達のブラボー班が全速力でこちらに向かっていった。さらによくよく見ると、幾つかの建物には銃を持った兵士もいた。

迎えか。

オットーも窓を覗き込むとしたとき、俺は話し掛けた。

「ここにもママッドの人間は潜伏しているはずですね？」

「あ、ああ多分」

「ならばここはイスラエルの城とも言えますね。奴らはここまで攻撃しないでしょうね」

ここを攻撃すればイスラエルを敵に回したと同じになる。そうなれば終わりだ。

ママッドとしてはオットーには生きてもらわないと困る。そうではなくてはモサドに優越するための証拠がなくなってしまう。だからもしメキシコ軍がオットーを殺せばママッドはメキシコを徹底的に叩くだろう。

メキシコが本気を出しているのだとすれば、そんなことは分っているはずだ。となればここは安全区域と化している。

ここにブラボー班を入れれば俺達は安全に脱出する事ができる。俺達の車はもうポロポロだ。フィービスの魔法で守ってもアレだけ食らったのだから、もう無理である。

ブラボーをここまで誘導しなければ。

「すみません。ちょっと移動をしてくれませんか？部屋を移動させたいのです」

「それは・・・ここからだと・・・」

「いえ！この窓から少し離れたいのです」

それを言っつてやっと理解したらしく、オットーは立ち上がってくれた。

俺はフィービスにささやく。

「いいか？樋口達をここまで援護するんだ。だが窓を開けるなよ」窓を開けないとなると光は屈折してしまう。だが、仕方が無い事だ。なんとかやって貰うしかなかった。

フィービスは呆然とした果て、しっかりとした顔になった。

「分りました！」

そう言つと、フィービスは威勢良く立ち上がり、伏せながら指を構えたのだった。

「こちらクリアー！援護します」

俺はその威勢の良い彼女を背後に、オットーのところで話を聞きに行った。

オットーにはまだ聞きたいことがある。S I Sのことだ。この前S I Sはなぜ調査をしたのか。もしかしたら彼は知っているのかも知れなかった。

奥の部屋に行くと、そこではやはりうつむくオットーがいた。

オットーはやはり自分の死を恐れている。それは人間なら誰でもそうかもしれないが、彼はそれでも恐れている事をなんとか隠していた。その点、やはりこの男はいくつもの修羅場を通っているのだ

と思った。

「SISについて、何か知っていますか？」

そのときの相手の表情は意外である。何しろ首を傾げてきたのだ。「それは．．．インフルとは関係ない話でしょうか？」

関係ない？

「最近になつて日本での活動が活発化しているのは聞いたことがあります。あまりインフルの話は聞きません」

日本での活動が活発？なぜ？

「活発．．．ですか．．．。その理由は．．．」

相手は首を横に振った。

インフル以外の情報はあまり流せない。もしくは、本当に知らないかのどちらかだ。とにかく、どちらであつてもそれ以上の情報は手に入らないらかった。

SIS。俺は今後その名の組織に注意しなければならぬと思つた。

それはともかくだ。SISが関係ないと分つた以上、次の行動に出なければならぬ。

次は、

「CIAと接触します」

オットーはそれを聞いても表情は変わらなかった。きっとそれは予想済みであつたから。代わりに、相手は紙に何かを書いて俺に渡した。

「私の友人にCIAの人間がいる。紹介しよう」

無論、俺や樋口、それどころか桜井や菊地にまでCIAの友人はいる。でも、オットーが紹介するというのは訳が違う。もしも俺達の伝でCIAと接触する場合は何らかの犠牲を俺達が追わなければならぬ。だが、その犠牲をオットーが補ってくれる。紹介という言葉の裏にそういう意味がこめられていた。

「ありがとうございます」

俺は紙を受け取るうとすると、相手は真剣な顔で言った。

「お願いだ。真実を．．．暴いてくれ！」

静かな声ながら、その声にはとても力がこもっていた。

真実を．．．暴く、か。

『タイフーンだ！ 奴らの対物狙撃銃が厄介だ。タイヤがぶっ飛びまう。クリアー、なんとかかしてくれ！』

「了解！」

デジタルな映像の双眼鏡を覗き、探す。

狙撃手のいるいわゆるスナイプポイントというのを秋口から教わった。

秋口は本当に無口な人で、かなり私は困りながら習ったが、言った事はこんなことだ。

『狙撃手の気持ちになれ』

かなり困った。この時の私は人生で一番を争うくらい困った。

でも今ならその言葉の意味がなんとなく分った。狙撃手のようになって場所を探す。それがどのようなものか案外簡単に分った。

双眼鏡に大きなライフルを構える兵士が映る。こいつだ！

目の前の窓は光を屈折させるため、私の光線は無理だ。ならば、相手の居場所を突き止めたのだから電撃を食らわせてやればいい。

前進の集中力を一点に集中させ、一気に放つ！

すると双眼鏡に映っていた狙撃手はいきなり痙攣をはじめ、目を白くして吐きながら倒れた。

「倒しました！」

『今度は対戦車ミサイルを持つ野郎を！』

双眼鏡を見なくてもすぐに分った。何しろ弾が弾だからその元をたどればいい。でも、相手は撃つごとに移動をしているから厄介だ。

これではどこに電撃を発生させればいいのかわからない。ならば、建物ごと水だらけにしてやればいい。

ミサイルを持つ兵士がいる建物を見る。何階にいるかは大体わかる。よし、七階をターゲットに洪水を起こそう。

今度はまた多くの体力を必要としていることであつた。先ほどのシールドでかなり体力を失わせているが、それでもやるのが私の使命。だから無理をしてもやるのだ。

一点に集中させ、何をしたいか想像し、一気にそれを放ち、ぶつける。同時に体力を一気に持つていかれ、私は危うく倒れそうになつた。が、それでも建物を見た。一人、中に居た兵士が建物から窓をぶち壊して落ちた。

『サンクス！』

奥の方から蒼京がやつと出てきた。

「フイービス。今すぐ駐車場に行くぞ」

「りよ、了解」

体力不足のせいで私はかなり疲れて動けなかつた。

とりあえず最後にブランデーを少し飲ませてもらい、部屋を背中にした。ドアから一歩出たとき、嫌な予感がした。

蒼京の足は動き出そうとするのを急に止め、その場に立ち尽くす。私もそれに伴い、止まるしかなかった。何故止まったのか。それはドアの先に二人の男が挟んでいたから。そして、その二人は私達を確認するとすぐさま拳銃を突きつけてきたから。

「イスラエル外務省政治調査局、ママツドの間か」

蒼京の言葉に、二人は一切の反応をしなかつた。それどころか、今にも平然と引き金を引きそうであつた。でも逆にいうと何で引き金を引かないのだろうか？

こつこつとき、普通は手を挙げるべきだと思つただけど、相手は手を挙げるとは言わないしこちらもしない。どうしてだろうか？

私は二人の男をしきりに見ていた。どうすればよいのか。シールドを張るべきなのだろうか？

そうこつこつしているうちに、いきなりもう一人の男が出てきた。

「はじめまして。蒼京諄一さん」

先ほどの人と似た感じの人だ。やはり同じ国の人なんだろう。

蒼京は返事を返そうとせず、代わりに相手の顔を静かな顔で睨ん

でいた。それに対して私はまだ戸惑い顔である。ちよつとなさけない。

「私たちが何者が知っているようですね。では、彼から全てを聞いたのですね」

彼、とはきつとオットー・グロスマンのことだろう。

話からするとやはり蒼京の言ったとおりこの人たちはママッドとか言う組織の人だ。そしてオットーを追跡、いえ監視していた人なんだ。

「全てを聞いたのなら、私たちにとって貴方達がどのような立場か分りますね？」

邪魔だから消えて欲しい。そう言いたいなら言ったほうが楽なのに。

私はこの男が妙に嫌いだった。なんだか・・・威張ってる。

「そこで私達は貴方達を排除したいのですが、そうなるはこちらもこちらで少々困った事が起きます。まあ、言ってしまうえばSACSを敵に回したくないということなのですがね。そこで、提案があります」

「拒否します」

蒼京ははつきりと言った。そして私の顔を見て小さく頷いた。

シールド展開！

「はっ！」

私と蒼京はシールドに一気に包まれる。そして私は更に両手を左右に開き、拳銃を持つ二人に水を食らわせる。水は電流の流れたシールドを通って流れるために、シールドと同じ電流を流れ、その水が人に直撃するとなると・・・

「があ！」

二人の男はこのように痙攣し、やがて死んでしまうのだ。

この様子を見て先ほどの威張っていた男は発狂するように拳銃を撃ち放った。何発も何発も撃ち、私達を排除しようとした。

私の目は殺気を漂わせてその男に向けられた。



「く、来るなあ！」

手の平を思いつきり開き、強力な電気の流れる水を男に襲わせる。男は逃げる余地もなく、その水に飲み込まれて即刻死ぬ。

同じシールドの中に居る蒼京は、私の肩を叩いて言った。

「行くぞ！」

蒼京は拳銃を構え、階段を下りていった。

階段はカンカン！と鉄を叩く音がして、その音がよく響いていた。階段を下る時、私は自分の体力の限界を感じつつあった。そして私の世界の暮らしを思い出していた。あの時の暮らしなら、きっと今ごろ私は呑気に買い物や、あまり大変ではない仕事をしていただろう。何もすることが無ければ、ベットに横になって受け継がれてきた古い本を読む。夜になれば虫や動物の音を聞き、もしもその日が暑ければ家の前の湖で裸になって水浴びをする。

あの頃が懐かしい。

でも、今は責任を感じている。責任を感じているから限界でも私はやるのだ。

私は一段一段しっかりと踏みしめながら階段を下っていった。

この建物の中にはまだママツドの人間が居るかもしれない。先ほどの人たちだけではないはずだ。私はそのことを配慮していた。

階段のドアを見るたびにすぐさま敵が繰るんじゃないかと思ってしまった。でもそれは必要な行動だと思う。

地下の駐車場のドアを蒼京はゆっくりと開け、敵が居ないか確認する。どうやらいないようで、私に手で合図した。同時に身構え、一気にドアを開いて走り出す。私の足は悲鳴をあげていた。

急いで向かった先は先ほど乗っていた車だ。そこには私達の武器や防弾パネルがある。まずはそこに向かい、戦闘に備える事が必要であった。

私ももう魔法は使えない。体力はまだそれでもあるが、集中力がまずい。出来てもシールドを一時間でできるかどうかであった。それでもさっきのお酒が案外よかったのだけど……。

蒼京と私は車に近づき、ドアを開ける。蒼京は急いで私に装備を渡し、やがていつものクリス・スーパードを渡した。

今度は蒼京とばかりに彼は装備し始める。だが、それは途中で中断せざるおえない状況になってしまった。

『こちらレイン。地下にメキシコ軍が向かってる。私達を待ち伏せするきよ。アルファは今どこに!?!』

防弾チョッキを着ながら蒼京は自分のマイクに言った。

「俺達は地下に居る。情報が正しければ俺達は交戦。ブラボーはここに突っ込め!」

するとスピーカーにいつもの怒鳴り声が聞こえた。

『本気か!?本気でお前ら交戦するのか?』

「本気だ。こっちも敵が増えたからな...」

やっぱりママッドを敵にまわってしまったようだ。

樋口はもうなるようになれという口調になった。

『ああもう分ったよ!だが交戦するなら対戦車ミサイルを持っているやつをどうかしてくれ。じゃないとまずいからな!』

「わかった」

蒼京の最後の一言を言っている間に敵の姿が見えていた。彼らは暗視装置をつけていた。

私は車の開いたドアに隠れ、蒼京も隠れた。そして蒼京は車から自分のいつも使っている小銃を取り出し、サイレンサーをつけて密かに狙う。彼の顔は本当に冷静で、そのときの姿に私は少々ときめいていた。

その束の間、敵の一人が倒れた。敵は仲間が倒れた事に一瞬、本当に一瞬戸惑いをみせた。その戸惑いが再び悲劇を生むのである。蒼京は次には小銃についたグレネードを撃っていた。グレネードは戸惑う人間達に容赦なく襲いかかり、数人を吹き飛ばした。

私達の追撃は休むということを知らない。

蒼京はもう隠れながらではなく、思う存分に攻撃を開始していた。それに伴い、私も銃撃戦に参加する。無論私は魔法を使っていない。

使っても思うようにいかないからだ。

私は反動が少ないと言われるこの銃を撃った。撃ったがなかなか当たらない。それが原因で隠れる事を忘れて撃ちまくっていた。

無我夢中の私の髪を銃弾が襲った。

「ファイブス、冷静になれ！」

ダメだ。魔法がないと、私はただの足でまといだ！

私は自分の存在が邪魔に感じてしまう。

魔法が使えなければ、私は要らない存在なんじゃないかと思う。

でも、かといって死ぬ勇氣はなかった。

「ファイブス！何をやっている！？撃つんだ！俺達はこんなところにくたばる訳にはいかないだろ！」

「なら私が突撃する！」

私は思い切って言った。こうなったら死んでしまいたい。無力になった私なんて、死んだほうがいい。それにもかしたら死んだら元の世界に帰れるかもしれない。

私は死についての妄想を膨らませ、かなり絶望的な気分になった。でも、蒼京は今日二度目の怒り顔をした。

「ふざけてんなら俺が殺す！何一つとして失わせない。何一つだ！そのときの顔は本気であった。初めて見た顔で、それ故に怖くなくなった。」

なんだろうか？本気、という前に何かある気がする。過去に何かあったのかようだ。

「とにかく生きるんだ！もうすぐブラボ・・・」

どかーん、とものすごい音で地下の入り口に何か起きた。

「こちらタイフーン。迎えに来たぜ！」

地下の階段からスーツ姿の男が三人ほど出てきたのが同時であった。

## フィービスの限界（後書き）

フィービスは純粹な子です。でもお酒を普通に飲めるんですね。悪い子です。

フィービス「あ、お酒って飲んじやいけないの？」

何歳ですか？

フィービス「十六です」

未成年ですね。だめです。

フィービス「で、でも日本には黙認があるってジュンが……」  
ありません

読んでくれたらありがとう

## 距離60メートル

俺はファイビスを怒鳴りつけたことを忘れ、突っ込んできた車を見ていた。

だがそんな光景をばーっと見ている暇など、どこにもありはしなかった。

先ほど出てきた階段から三人程の男が出てきたのだ。ママッドの奴らだ。これで前と後ろにはさみ打ちされた。

しかし前方のメキシコ軍は標的を俺たちから樋口の乗る車にと変ってしまった。車の装甲が叩かれたような音を発生させ、更には樋口の叫ぶ声がする。

『クソ！奴らメキシコが攻撃してくる！こちらは応戦できん。なんとかしてくれ！』

ファイビスはそれを聞いても動く事はなかった。精神的にも、体的にもかなりのダメージを負っている。先ほどの発言には血が上ったが、奴は自分が役立たずだと思ったのだろう。

「ファイビス！後ろの敵をやれ！手榴弾を投げろ！」

俺の声を聞いて気がついたように手榴弾を取り出した。そしてそれをママッドの奴らに投げたが、遅かった。彼らは既に散らばっており、今の手榴弾を回避してしまった。

「撃て撃て撃て！お前は後ろの敵をやるんだ！」

俺は前のメキシコ軍をやる。小銃のサイレンサーをいい加減外した。先ほどよりも重くなくなり、扱いやすくなった小銃を敵に向け、フルオートで撃つ。

敵の大体頭らへん狙い、連射で撃つ。すると時にはその敵の顔をぐちゃぐちゃにしてしまい、付けている暗視装置もろとも原形をとどめなくした。

それでも敵は減らない。メキシコ軍はどんどんここに流れってくる。ファイビスの銃はなんとか動いた。動いてはいたが、当たってい

なかった。それはいつもの酷い射撃のせいではない。やはり体力と集中力が問題になっている。早く車に運んであげないとまずい。本気でまずい。

そんなことをうつすらと撃ちながら考えていると、背中の防弾パネルがパン！と響いた。

「つぐ！」

骨が折れたかもしれないな。後ろのママツドの野郎からだ。

俺は痛みを感じないように折れたのを無視した。痛みはダメージの警報システムのような役割だが、心理的に毒を回している。痛みは自分に絶望を見せ、やる気を失せさせる。そのため、病気などになると気力がなくなり、治るものも治らなくなってしまう。だから自分で痛みなど感じないと言い聞かせてやると痛みは消える。そうすることで気力を無くさずに行動できる。

でも攻撃を受けていないフィービスには心理的ダメージが大きかったようだ。

「っ！...」

自分のせいで俺が食らったと思っている。確かにそうかもしれないが、考えてはならないことだ。

フィービスは自分を自分で追い詰めている。自分が嫌になり始めている。早くなんとかするには車に乗せ、休ませなければ！

手榴弾をママツドが投げようとする。それに対するフィービスは

カチャ

カチャ

弾切れに気がついていなかった。

俺は小銃をママツドの奴らに向けた。こうなったらやるしかない。俺がフィービス分までやり、彼女を助けるしかない。

やってやる。やってやる！

グレネードの引き金を引き、手榴弾を阻止しようとする、いきなり俺の周りに水の膜が発生した。

後ろを見るとそこには必死で立ち、さらには手を苦しみながらも

頑張つて伸ばすフィービスの姿があつた。彼女は喋るのも苦しそう、いや絶対に苦しいはずなのに大声で叫んだ。

「は、早く！早く車にい！」

フィービスの綺麗なブルーとイエローの目は、強い視線を発していた。

「早く！」

フィービスは走ろうとしない。もうそんな体力もないのだ。

俺は彼女に近づくと、するとシールドとシールドが重なり、重なったところから繋がった。

「お前もだ」

下手に運ぶとシールドに当たるので、小銃を一度ぶら下げ、フィービスをお姫様抱っこする。

手の平をしっかりと開くフィービスは、目をしっかりと開けていたが、どこか弱々しかった。

「置いていって。私はもうダメ……」

「何度言わせれば気が済む？諦めるようなら俺がお前を殺す。てめえのその綺麗な目も跡形なくな！」

「じゃあそうして……」

一瞬、俺の怒りと過去のトラウマが感情を占領した。

「死ねえ！本気で死ねえ！何も失わせないと言っただはすだ！てめえの耳はクソで出来てるのか！？うんとかすんとか言ってみろ！」

その言葉は矛盾を生じていたが、俺の頭ではそんなことはどうでもよかつた。

俺は重い装備とフィービスを持ち走つた。

短距離であるがかなりきつい事は確かである。銃弾はシールドを破る事ができずに液化するが、同じくシールドの水も蒸発してしまふ。そうなるとフィービスの体力が減り、絶えず叫びそうになつた。爆風となると更に蒸発し、フィービスの体力どころか、命まで搾り取ってしまいそうであつた。

爆風を避け、銃弾からも避ける。その条件を満たすため、俺の走

る速度は不可能なものを要求していた。だが、戦場においてそういうことは多い。不可能と考えるよりも、可能と考えるべきなのだ。

樋口達の車は60メートル。ここから走り、まずママツドの目の前を通り過ぎ、そこで左に曲がってメキシコ軍の攻撃を受けながら車に乗り込まなくてはならない。

難題であった。難題であったがやらなければならぬ。

俺は走り始めた。フィービスは俺を見ていた。しっかりと見ていた。だが、何も語らなかつた。

ママツドはサブマシンガンをこれでもかというほど撃ってきた。水が蒸発する音が分り、フィービスの悲鳴を聞いた。

「あああ！」

俺はその悲鳴をなんとか無視した。でも悲鳴は俺の中に入って走る気力を無くそうとした。

それでも走った。

フィービスが最後の力を絞ってやっているのなら、俺もそうしなければならぬのだ。

メキシコ軍がグレネードを放ち爆風が襲うとした。着弾地点を即座に予測し、その地点をすぐに通過しようとする。5メートル前方に着弾する。通過は不可能。その地点を避けても間に合うか分からない。でも、止まれば銃弾の餌食になる。

俺はさらにスピードを上げ、着弾地点を避けた。それだけで俺はぶっ倒れそうであった。

着弾地点で爆発し、不意に目を瞑ってしまった。

車までもうすぐそこ。窓から銃が出て誰かがメキシコ軍兵士を撃っている。俺がそのドアに近づくとタイミングよく開き、倒れるのと同時であった。

車の中に倒れこむと、すぐさまドアは閉められ車が動き始める。「こちらブラボー班。アルファー回収に成功。これより帰還する。引き続きX R Q - 2で偵察してくれ」

『了解です』



樋口の声が聞こえた。

フィービスは俺の体の上で気を失っていた。

「大丈夫ですか？」

桜井が俺に向かって言った。俺は答えようとした。答えようとしたが、寝てしまった。

「二人で仲良さそうだな」

樋口の声がうっすら聞こえ、それから記憶は途絶えてしまったのだった。

第二小隊は事実上失敗を犯していた。

原因はフィービスの体力を考慮していなかったことにある。

そもそもこの作戦はかなり無理があった。十人に満たない小隊と国をバツクにした特殊部隊、いや軍隊ではとてもじゃないが戦力の差が大きすぎた。

確かに、上川の搭乗を偽装するということを考えたのは良かった。しかし、蒼京の考えは甘かった。

蒼京の失敗は甘いことにあった。具体的に言おう。彼はメキシコが本気だとは思っても見なかったのだ。

とはいえ、本気であることなど判断するのにかなり難しいであろう。なにしろ彼らは行動をメキシコ軍によって制限されてしまい、情報が集まりにくかったのだから。

このことが失敗の原因であった。

今回はなんとか帰還する事ができ、事実上成功ではあるかもしれないが、フィービスが居なければまず第二小隊は終わっていた事だろう。そして、そのフィービスについてもほとんど無限の力だと思っていたのも失点であった。

さて、今回の失敗についてはもう述べた。では話を現状について変える。

メキシコ軍に加え、ママッドが敵になった事は非常にきわどい事であった。

イスラエルは事実上アメリカの上にある。というのは、イスラエルには金があるからだ。

この世界の基本は金であると考えていい。国家は金で成り立つものであり、そうなると資金源が絶対的に大切であることになる。つまり、国家と言う大きな組織は資金源という独裁者によって操作されている。

この資金源というのがイスラエルやスイスなどのことになる。現在ではここに中国が入っているかもしれないが、それは余談である。とにかく、この理論からイスラエルはアメリカの上であることが分る。

蒼京達はこれからCIAと接触しなければならない。それもママツドが動き出す前にである。

時間は一刻争う事となる。ママツドが完璧に動き出せば簡単にCIAとの接触が不可能な物になってしまう。

しかし、まだ完璧に動く事はないだろう。蒼京たちの時間稼ぎをしてくれる組織がいたからだ。それは対立するモサドである。

モサドが時間を稼ぐ間にはなんとか大丈夫である。それでも急がねばならないのは確かだ。時間は限られている。

ところで、シークレットワールドについて少々話したい。

今回の作戦によりS I Sが恐れていることが起きてしまったと言っている。

実はS I Sはシークレットワールドを知っているもフィードの存在を当初は知っていなかった。そのために今回の出来事は大いに驚いた。

今までフィードの存在はなんとか突き止められていたが、その驚異的な能力については全く知らず、今回初めてそのことが確認された。

ホテルのカメラにはしっかりとフィードが電気の流れた水を生み出し、それで人を殺すシーンが撮影されていた。これにはS I Sも腰を抜かすほどであったであろう。

しかしながら腰を抜かしたのは何もS I Sだけではない。ママッドやメキシコ軍はもつと腰を抜かしたのである。

そのことがS I Sの恐れることであった。

S I Sはシークレットワールドについて一切のデータが漏れないようにしたかった。知っているのは女王陛下だけで良かった。なのに他の人間、いや組織が知ってしまったというのは最悪である。

S I Sはママッドとメキシコ軍に近づこうとしなかった。せめて我々S I Sが既に知っているということを広めないのが最善だ、と考えたのだ。

だが、今後この件は思わぬ速度で広まっていくのであった。

私はベットいつの間にか寝ていたらしく、ベットの上に居た。

寝る前の記憶をたどり、何があったのか整理する。確か、私は帰還しようとして、銃を撃っていたけど当たらず、自虐的になつていて、蒼京に怒られて・・・。

そこらへんしか覚えていなかった。ただ蒼京が本気で怒鳴りつけたのは覚えている。何か、過去の悲しみを抱きながら叫んでいた気がする。後は、確か・・・何か温もりを感じていた気がする。

私は目だけを動かしてあたりを見る。そこには本を読む蒼京の姿があった。

「・・・ジュン？」

その声で相手は気がつき、本をパタンと閉じて私を見た。

「起きたようだな。長い間寝てたぞ」

「どれくらい？」

「約一日」

私はその言葉に驚いた。過去にそんなに寝たことはない。

蒼京はどうしてそうなったか教えてくれた。

魔法の使いすぎで体力が限界を超えていた事。

無い体力を使って蒼京を守ってあげたこと。

私が見捨てて欲しいと言った事。

それでも蒼京は助けた事。

何より、この作戦の失点の事。

私はただ呆然と聞くだけであった。でも蒼京が謝った時は流石に驚いてしまった。

「本当にすまない」

私はその言葉に驚いて慌てて手を出してやめて、と言った。

「そんな、ジユンのせいじゃないよ。私がダメだったんだし・・・」

「いや、俺のせいだ。俺の考えが甘すぎた」

そう自分を責める蒼京には幾つかの傷があり、さらには背中にもなにやら怪我をしているようであった。

そうだ、確か私のせいで蒼京は背後を狙われて撃たれたんだ。

あえて私に気を使い、蒼京は言わないんだと思う。

私は自分こそ本当に甘いんだと感じた。

もう以前のような考えではいけなかった。私は守られていると同時に守っているのだ。それならば私はもっともっと体力をつけなくてはならないし、魔法も使わないといけない。やはり甘すぎたのだ。

胸の中で、密かにそのことを決意した。

「CIAとの接触は何時なの？」

相手は案外和やかな表情であった。

「急だがあさつてだな」

「メキシコ軍は？」

「まだいるさ。だが、それでも何とかする」

私はベットからとりあえず起き上がった。

「何か飲むか？コーヒーとココア、どっちがいい？」

「じゃあ暖かいココアがいいな」

そういえばもう冷える季節であった。私がここに始めてきたときはまだかなり暑くて死にそうだったのに、今ではちよっと寒くて震えそうだ。

時間が経つのがって早いんだなあ。

蒼京が一度部屋を出て行った。

あの時のことを、聞きたい。

あの怒鳴り声の裏には何が潜んでいたのか、私は本気で知りたかった。

窓から見える景色はあまり変わらず、変わったところといえば人の服装が冬服になっているところであった。

蒼京が入ってきた。

「ほら、ココアだ」

二つのコップの内一つを私に渡し、蒼京はもう一つのコヒーの方を飲んだ。

「寒くなつたな」

コヒーをすする蒼京の声に、私は思わず聞いた。

「ねえ、何であんなに本気で私を怒鳴ったの？」

「馬鹿野郎。見捨てるわけ無いだろ」

あまりにも平然と言われた。それでも私は確信している。さらに問う。

「本当に？」

「・・・ああ。当たり前だろ」

戸惑った。一瞬と惑った。やっぱり何かあったんだ。

話はそれっきり変わってしまい、まるで蒼京は逃げるようであった。

過去に何があったのか、私はそれを探るため、このことを覚えておくのであった。

距離60メートル(後書き)

そういえば正確に言うときリス・スーパードVはサブマシンガンではないんですね。本当はMP7やプロジェクト90と同じ部類になるんですね。

読んでくれたらありがとう

## 飛び進むブラックホーク

インフルエンザは確実に感染地域を広めている。その原因は幾つかある。

一つは自然に感染の連続で広まっていくことだ。これが一般的だ。常識は考えを制限させる。

この感染が自然に広める原因だと常識は述べているが、あくまでそれは常識に過ぎない。人々はその考えの基で考えるため、有りえる事でも有り得ないと判断してしまうことがある。

何を言いたいのか？つまりは感染が広めたという原因が正しくないかもしれないということだ。

もしもである。

米国が人体実験のためにC-130にインフルエンザをのせ、飛行中に散布させていたとしたらどうであろうか。これは常識に基づけば有りえない、不可能な話である。しかし本当に有りえないのであろうか？

この輸送機から散布されるのを見た人たちは何と言うだろうか？霧が出たとしても言うしかないだろう。それにたとえウイルスをばら撒いたと言いつ張っても、そいつは陰謀論を語る物好きでも言われて終わりなのだ。

一般的な人が見てその程度なのだ。有りえない話ではない。

もしこのことに反論するならば、国連が許さないなどという意見が出るかもしれないが、はっきり言って国連などの組織はどうにでも誤魔化してしまう。そこには暗黙の了解があるかもしれないし、ただ単純に目をつけていないからかもしれない。ともかく誤魔化せてしまうのだ。

ガダフィ大佐はインフルエンザが生物兵器だと公で言った。それくらいありえることなのだ。

さて、問題はその生物兵器の実体が何なのかである。

蒼京たちの予測はあまり発展していなかった。というのも検討が  
つかなかったのだ。

メキシコが隠している事が何なのか何も分らない。もしもメキシ  
コが生物兵器を分散させたとしたら、一体何故なのだ。メキシコと  
してはそんなことをして危険を犯したくないはずだろう。だから、  
分散させるとするとかなり重要な理由が隠されているはずなのだ。  
しかしその理由と言うのはきつと重要すぎて隠せるような問題では  
ないはずだ。でもそんな問題は出てこなかった。

今の蒼京達にはCIAが頼りであった。それ意外の頼りとなるも  
のは、あまりなかった。

「なあ秋口い。俺小学のとき喘息持ちだったんだがよお」  
気軽に無口な秋口に話し掛けたのは坂崎であった。

以前も言ったとおり、秋口は無口な性格の狙撃手で、正直あまり  
無意味な話をふっかけるのは気まずい。俺でさえが少々気まずいの  
だ。それでありながら坂崎は気軽に話せる。

実は何故かは知らないが秋口と坂崎は仲が良かった。ちなみに坂  
崎は狙撃手ではない。

俺には未だに奴らの接点が分らないのだが、とにかく奴らは意外  
にも仲のいいやつらなのだ。

済ませ顔の秋口は坂崎の方を向く。

「それが何だ？」

「いやよお、インフルって喘息持ちだとまずいらしいじゃん。そん  
でさあ、俺達いまなんだかんだでインフル関係に関わってるだろう  
？」

途中まで聞いていた秋口は顔を変えずに言った。

「つまりお前はインフルエンザを意図的に感染させられて苦しむの  
が怖いと言いたいんだな」

「そうそう！向こうだって本気でやってんじゃない。インフルエンザ  
の一匹二匹くらい流しそうじゃん」



秋口はまたも平然と坂崎に言うのだ。

「有り得なくないが、可能性は低いんじゃないか。それにお前、小生のときというが最後に喘息になったのはいつなんだ？」

「あー、たしか小4のときだったかな。まあそんなところだ」

ついに秋口は表情を変えたかと思うと呆れた顔になった。

「なら今更気にする必要も無いだろ」

「お前はつめてえなあ」

俺がその会話を中断させた。

「ほら、もう行くぞ。早くしないとCIAのおっちゃん怖いからな」

ちよつと樋口っぽかっただろうか？おっちゃんという単語が妙にそう感じさせた。

「こっちは乗り込んだぞ！いつでもOKだ！」

樋口はヘリの中で叫んだ。

ヘリの名前はUH-60。今回SCASCの第三ヘリコプター団に依頼を出して二機のヘリで目的地まで乗せてもらい、さらに帰還することにももらった。

「先に行くぜ！パイロット、お願いする！」

ヘリは風を吹かせながら浮いていき、浮いたかと思うと前進し始めた。

俺はその姿を見てすぐに別のところを見る。

もう一機のヘリが夜の街を光を点滅させながら降りてきた。その着陸の素早さは多分一般人には想像もつかないものであっただろう。

桜井が俺の隣にやってきた。

「夜の都会って私好き。ビルの電気やネオン管の光が綺麗で、いつも見とれちゃうの」

桜井は年上のお姉さんだ。あまり差はないが、精神年齢はかなりの差があるようだ。

彼女はいつもこうやって男達を落とす。隊員達はその色気にお手上げであった。無論、俺を含めて。その度にフィービスが不機嫌と

いつかふくれつつらになるのは何故かは分らないが、桜井は本当は誰が好きなのか分らない。

これだけ男達を色気で急接近しているのに、面白い事に彼女の男に対する感情は未だに分らないのだ。好きな男のタイプも、嫌いな男のタイプも、それどころか男自身どう思っているのか分らない。彼女は仮面を被っている。俺達はその仮面を見ているせいでその素顔が見れないのだ。

でも、ときには見せてくれるようであった。それが今のような気がする。

桜井は自分の小銃を肩に乗せ、ドアが開いたへりに近づきながら言った。

「私はきつと夜の女ね」

気がつくと桜井はへりの前で立っていた。俺は慌てて小銃を持ってへりの前に来た。後に続いてフィービスや秋口が来た。

俺達は急いでへりに乗った。

するとその中で声を掛けられる。

「久しぶりだな、蒼京」

聞き覚えのある声である。

その声の持ち主は操縦席に座っていた。そして弱冠コーパイ（コーパイロットの略 意味は副操縦士）よりも小柄のように見えた。それはそうだろう、コーパイは大人だがパイロットはまだ子供であった。子供といってもまだ高校三年生の年である。

「ああ、久しぶり。安全運転で願いたい」

相手は訓練の時一緒にになった友人である。名前は泉直哉。階級は准尉である。

へりは浮き上がり、急速に速度を出し始めた。

フィービスは見とれていた。

「凄い……」

フィービスの世界にはきつとこんな景色はないのだろう。彼女世界はきつと暗かったんだと思う。でも、その分人の心と言うのが明

るいんだろつな。

「こころの何処かでそう呟いた。

俺が見とれていているな、とフィービスに注意しようとしたが、桜井がその前に声を発していた。

「綺麗でしょ？この世界は人の暗さと町の明るさに反比例するのよ」「俺が考えていることと同じようなことを言った。

「そうかもね・・・」

「だからこの世界の夜はこんなに明るいよ」

フィービスは顔を再び夜空に向けた。その眼差しはどこか悲しみや哀れみを感じた。

彼女にとって俺達は、哀れむべきなのかもな。

技術の発達は必ずしも幸せを生むものではなかった。むしろ、幸せを奪うこともあった。一番の良い例がダイナマイトだろう。

俺達は技術という偽りの幸せを本当の幸せと勘違いし、道理を捨ててそれを欲した。その結果がこの光なのだ。もしかしたら本当に桜井の言うとおりなのかもしれない。

愚かな世界だな。

「さあ、見とれてないで私たちが狙う目の光を殺すわよ」

それを言うと一気にフィービスの眼差しは変わった。

直哉は俺に言った。

「お前のとこの新人つてのはそいつか？」

「ああ」

「聞くところによると、訓練をまともに受けて無いそうじゃねえか。

おい、あんたは訓練何年目だ？」

隣のコーパイは新人らしく遠慮がちに言った。

「一年です」

「一年でもコーパイだけ。その子はどれくらいなんだ？あ？」

「忘れたよ。だが俺がスカウトしたんだ。訓練は必要無しつてな。」

相手は不審な表情をした。

「とてもじゃないがそんな奴には見えないぜ」

「まあ、そうだろうな」

「なんだ、隠された力でもあんのか？」

あるさ。あるから訓練無いんだよ。

俺は苦笑してなんとか誤魔化した。

「ところであの子の名前はなんだ？」

「桜井のことか？」

それを聞くと相手は一瞬吹いた。

「馬鹿。新人だよ」

俺は少々名前を言おうか言うまいか迷った。しかし今更ばれたところなんだと考え、言ってしまった。

「フィービス・トライデント」

俺は相手の顔が見えないが、きっと奇妙な顔をしたはずだ。なぜならそんな変った名前は世界中を探してもいなさそうであったからだ。まあもしかしたら居るかもしれないが。

「フィービス・トライデント？偽名にしては珍しいな」

「偽名じゃないな」

「は？」

「本名だ」

「本名って、どこの国の人間だよ。見た感じ東洋人でどこにでもいそうな日本の女子だが・・・」

「まあ、そこはあれだよ。俺にも・・・」

俺にも分らん、と言おうとしたとき、後ろで声が聞こえ、即座に銃声が聞こえた。銃声からして多分対物狙撃銃であった。

振り返ると秋口が発砲していた。彼の使うバレットM82A3の銃口から光が生まれ、すぐさま消えた。

「敵です！メキシコ軍と思われます」

秋口は続けて発砲する。

『こちらタイフーン。こっちにも敵がいる。ミニガンを使っていいか？』

「こちらストーム。ダメだ。あくまで派手なことできない」

あちらのヘリには俺達の部隊以外にも数人隊員がいる。だからあちらは菊地と樋口だけなのだが、やはり敵は多かったようだ」

俺達のヘリは樋口達のブラボーを先頭に進行している。しかし、ここで二手に分かれることにした。

ヘリは進行方向を大きく変え、二つのヘリがビルを挟むようになってそれからどんだん間の距離を長くしていく。

「パイロット、何があっても進行を変えるな。回避行動もするな」「なんだと!？」

「ミサイルが着たら知らせるだけでいい。チャフはいいが、旋回するな」

「訳がわからんぞ!説明しろ!」

「フィービスが何とかする」

「信じて良いのか!？」

その言葉は俺に発したわけではなかった。発した先はフィービスであり、パイロットの直哉は真剣に顔を見た。

それに対するフィービスはもうさっきのような呑気な顔ではなく、まさに戦場を知った人間の顔であった。

「はい!やってみせます」

その言葉を聞いて前を見た。

ヘリは進む。夜の空を進む。

依然として秋口の銃声は鳴り止まなかった。

「ダメです。敵が多すぎます」

秋口は諦めてはいない様子であったが、無理だと決め付けていた。当然ではあった。

だが想定範囲内である。

直後パイロットが俺達の方を向いて叫んだ。

「メーデー!メーデー!三時の方向ミサイル!」

フィービスは急いでその方向を見た。そこには一発の光があり、急速にこちらに向かってきていた。

フィービスは手を伸ばし、一瞬落ち着きを見せた。その一瞬は本

当に一瞬である。そして次にはミサイルは爆発していた。

直哉とコーパイは顔を見合わせた。

「ミサイル、消滅・・・」

フィービスにはこう伝えている。無茶はするな。だから敵を倒さなくてもいい代わりに守ってくれ。俺達は殺す事で守るが、お前はそうじゃない。これはお前にしかできないことだ。

彼女の体力は前回ほど消費していなかった。

彼女の体力消費は以前よりもましになっている。というのは、彼女が言ったとおり魔法を使え使うほど消費する体力が減っていくのだ。そのために減っていない。ちなみにどうやら消費量以外にもいろいろとできるようになるようだ。

俺は自分の銃を構えた。

「メーデー！十時の方向ミサイル」

直哉は先ほどよりも落ち着いた感じであった。

ただし、フィービスは変わらなかった。依然として強い責任感を持ち、手を伸ばしてミサイルと爆破させた。

「ミサイル消滅」

ミサイルは回避できている。しかし、問題はミサイルではなく銃弾である。

秋口は先ほどから何回も装填しては撃っている。そしてその目標は狙撃兵である。

フィービスはミサイルに対しては完璧な盾を作っている。だが、銃弾に対しては無力であった。というのも、銃弾はいつでもどこからくるか分からないために、彼女が防御できないのである。

そのために秋口は狙撃兵を狙っているのだが、一人だけではとてもじゃないが撃ち切れなかった。

ヘリの装甲が叩かれる。

「被害軽微！」

直哉は叫ぶが、秋口は一切感情を揺るがすことなく撃ち続けた。

俺には秋口の感情がどのようになっていのか分からない。ダメー

ジを食らっていると聞いただけで暗い気持ちとなり、それで狙撃が思うようにいかなくなっているかもしれない。でも、本当にどう感じているのか分らない。なぜなら彼は感情を自分の中に閉じ込めてしまっからだ。

『こちらブラボー。目標地点に着きました』

向こうのへりのパイロットが言った。

今ごろブラボーの樋口達は建物の目的とする部屋に向かって全力疾走しているころだろう。俺達ももうすぐであった。

案の定、既に目的地の真上に来ていた。

「着地する！」

直哉は叫んだ。

## 飛び進むブラックホーク（後書き）

更新遅くなりました。

読んでくれている方、本当にごめんなさい。

フィービスはSとMどっち？

フィービス「・・・どちらかと言われるとMだと思う。基本受けだし」

受けですか。だそうです。

坂崎「これから攻める練習しよう！」

読んでくれたらありがとう



## C I A の判断

この建物に人は居らず、計画では居るのはC I Aの人間である。敵はC I Aを襲わない。メキシコは全力をあげてもそんな力はないのだ。

また、ママツドの人間も殺せない。ママツドの目的はモサドの失態を晒す事にある。そしてモサドはその事知っている。だとすればママツドをどうにかして黙らせるようにするはずだ。C I Aの人間を殺せばそのことを晒され、自分達にも不利が回る。

となれば情報提供者が殺される可能性は極めて低い。

しかし建物には本当にC I Aの人間しかいないとは限らない。もしかしたら密かにここは占拠されているのかもしれない。

だから俺達は銃を構えながら進んでいくのである。

ブラボー班先にこの建物を占拠する予定である。俺達はその後から速やかに情報提供者と接触し、へりに乗せる。

今回ここで聞けるほど余裕はないだろう。一旦S C A C Sの安全な場所に移り、そこで情報を聞く。

俺達は銃を構えて迅速に情報提供者の待つ部屋に向かう。

『こちらタイフーン。敵は一切居ないようだが、R P Gを撃って来ている。注意しろ』

「了解」

先ほどから爆音がするのはこれが原因か。

近くで窓ガラスの破片が飛んだ。これは本気で注意しなければならぬ。そう考えた頃には目的の部屋の前であった。

俺はトラップが無いか確認してからドアノブに触れる。そして仲間顔を見て頷いた。

次にはドアが開いた。

そこには・・・

誰も居なかった。

それどころか、死体すらなかった。

「・・・嵌められた？」

蒼京が呟いた。

直後、こちらに何かが近づくのが分った。

「伏せて！」

私は叫んだ。皆はどうやらこの状況が理解できず、しばらく不動であったために気がつかなかったが、私は分った。この部屋は無数のRPGに襲われている。

みんなは即座に伏せた。伏せていないのは私だけで、私は手を伸ばした。

「っや！」

比較的大きいシールドを張った。

シールドは見えなかったが、一気に水分が爆発によって蒸発したのが分った。それでも二重、三重にして防ごうとする。三発目から苦しくなってきた。でも、ここで諦めれば命はなかった。

背骨あたりがなぜか痛くなったが、最後の爆発は終わった。私は息が切れていた。

蒼京は叫んだ。

「こちらアルファ！失敗だ。情報提供者などいなかった！」

私はやっと状況が分った。つまり目的であった情報提供者はここに居なかったのだ。

情報提供者はきつと嘘をついていた。ここに来ると言っておきながらここには来なかった。そう考えるとCIAという組織はもしかしたら敵に回っているのかもしれない。さっきRPGを集中的に狙われたけど、それは私たちがここにいるとはじめからわかっていたからに違いない。

状況は確実によくなかった。

樋口が叫ぶ声が耳に響いた。

『嵌められたのか！？敵が集中しているぞ。撤退が困難になりかけ

てる!』

「今すぐ撤退しろ!ここにはもう・・・」

蒼京の携帯が鳴った。

蒼京は携帯電話をゆっくりと取り上げた。その間、樋口の声が聞こえた。内容は、敵の攻撃が急速的に止まったとのことであった。

『やはり生きてましたか。蒼京さん』

俺はこのクソみたいな声の持ち主を殴り飛ばしてやりたかった。

「誰だ?」

『分っているはずですよ。ママッドの人間ですよ』

「ママッドが何の用だ?」

今回ばかりは敬語を使わないどころか、敵意剥き出しの俺は、相手と話したもない感じである。

『CIAはどうやら貴方を騙したようですね。最後の伝であるはずのものに見放されるとは、もうダメなんじゃないですか?』

「何が言いたい?」

相手は何かを俺に突きつけるつもりだろう。それがなんなのかは分らないが、嫌な予感しかない。

『おとなしく今回の件から引き下がってください』

やはりそう来るか。そう思った。だが違った。

『と、言いたいですがそれよりも興味深いことがあります』

「何?」

俺はもはやその先の言葉に予想もつかなかった。

『魔女が居るかどうか教えてください』

即座に何の事が分った。フィービスのことだ。

俺はフィービスの顔を見た。彼女は俺が見たことで何の事がさっぱり分らないという顔をした。

俺は何も声を出せなかった。

『はいと言えばメキシコ軍を撤退させましょう』

やはりメキシコとママッドは繋がっていたということか。

俺ははいと言わざるおえない状況であった。でも、極力フィービ  
スについて漏らすの避けたかった。

漏れれば彼女を巡って争いになる。そうなれば俺はフィービスを  
失ってしまふ。でも、このままでは全滅し、何もかも失うことに  
なってしまう。

言うしかない。言うしかなかった。

俺の口は動く。一瞬空気を吸い、吐き出して声を発しようとした。  
でも、考えが変わった。

メキシコ軍はさきほどここにRPGを集中的に打ち込んだ。なぜ  
ならここに来ると分っていたからだ。でも、なぜわざわざRPGを  
使ったんだ？CIAの人間がこの部屋にC4をしかければいいこと  
ではないのか？

もしかしたら、CIAはママッドと繋がっておらず、さらにはま  
だ敵ではないのかもしれない。

「なぜCIAは敵に回ったんだ？」

『我々が買収したからです』  
即答であった。

今の俺には相手が動揺を隠しているようにしか思えなくなった。

CIAは見放していない。

坂崎が俺の目の前で小さく言った。

「米軍のブラックホークがいます」

希望の光はどうやら消えていなかったようだ。

俺は電話のマイクに言った。

「魔女か。お前はいい年こいてまだおとぎばなしを読んでいるのか  
？いい加減目を覚ますべきだぞ」

相手はもはや啞然としていて俺に返す言葉を忘れていたに違いな  
い。事実、電話は切られていないが無言になった。

坂崎は今度は叫んだ。

「SEALSが降下された！形成逆転だ！」

相手は電話を切ってしまった。

文字通り形勢逆転である。

『こちらブラボー！撤退するか？』

「せんでいい」

今回は意外にもあっさりと戦闘が済んでしまったが、重大なことが分った。

フィービスのことである。

前回の件でフィービスの驚異的な姿は全世界を回った。そして、誰もが同じ意見を述べた。英国を除いては。

SISはかなり困っていた。恐れていたことが現実となってしまうたからだ。

せめてもの救いは、フィービスが魔女だといわれた事だろう。幸い、シークレットワールドについては誰も疑わなかった。まあ、考えれば当然のことであるが。

蒼京はフィービスについてのことが分った。正確に言えばフィービスについての世界の反応であるが、それがわかった以上かなり悩まなければならなくなった。

蒼京の中では、いや部隊の隊員の心の中ではフィービスをかわいそうだと哀れんでいた。彼女は悲惨な運命をたどっていたと思っただ。今まではもつときちんとした生活を送っていただろうフィービスは、何も悪い事をしていないのに人殺しをさせられている。たしかに隊員は人を守る仕事と言っている。でも、本当は人殺しを任せられていると分っていた。それは自分のした行いが許されるようなことではなかったから。だからこんな仕事をさせられているのだ、そう言いつけていた。

でも、フィービスは違う。だからこそ哀れんだ。

そのため蒼京はなるべくフィービスにきつい思いをさせないようにしたのだが、彼女は次第に慣れてきていた。自分の仕事を完璧にこなそうとしてた。

これが原因で今のような状況を生んでしまったのだ。

それでも、隊員全員がファイブスを守ろうと決めていた。彼女はこの部隊の隊員であり、それ以外の何者でもない決めていた。だから今後彼らは悩まなければならなかった。

はて、今回の件についても話さねばならない。

CIAは買収されていた。確かにされていたにはされていた。しかし、実はモサドの方が力を見せ付けていたらしく、CIAの判断ではモサド側ついたということのようだ。

買収されそうになったとき、接触するはずであったレイノルズはメキシコ軍とママッドに作戦を聞き、逆に彼らを嵌めたのだ。

そのため結果的に蒼京達を救出し、モサドにこびを売ったと言う訳である。

CIAは把握していた。

話を急に変えるように悪いが、そうさせてもらう。

CIAは蒼京たちが求めるものをおおよそ持っていた。

メキシコの隣国であるアメリカは、やはりインフルエンザの感染には敏感に反応した。同時に蒼京達と同じようにイスラエルを疑った。疑ったが、アメリカはママッドによってねじ伏せられたのだ。

この時悪かったのがモサドである。モサドはインフルの感染に鈍感で、まさか自分達が疑われていることは思わなかった。そのため、ママッドにねじ伏せられた時の十分な対処ができず、アメリカは去ってしまった。

モサドはこの時不審に思った。アメリカは何しに来たのかと。そこでようやくママッドの目的が判明したのだ。

もしもこのときモサドが何も知らずにそのままにしていたら、第二の救いであった蒼京達を逃していたに違いない。

さて、この救いを逃さなかったモサドであるが、まだ本当に救いかどうか分らない。

先ほどアメリカはおおよそ持っていると言った。おおよそであった、完璧ではなかった。そこが問題であった。

私と蒼京、他にも隊員達全員がその場に居た。そして、二人のアメリカ人が居た。

アメリカ人は二人ともCIAの人で、右側に座った人がネイサンという名前。左側がレイノルズだった。

桜井は自分で作ったクッキーを持ってきて、テーブルに置いた。

「どうぞ。お口にあえばよろしいのですが・・・」

謙虚に言うところが桜井のこわいところだなあ。普段のこの人はこんなにおしとやかじゃないのにわざとこうしてるんだなきつと。

ネイサンとレイノルズの前に座るのが蒼京と樋口であった。

この二人と相手側の二人の年はかなり離れてる。でも、なぜか違和感を感じない。多分蒼京と樋口はこういう事にもう慣れてしまったのだろう。

「インフルについて、知っている限りのことをお願いします」

蒼京の声はとても冷酷であった。

対する相手側は、レイノルズが声を発した。

「ではメキシコが何故貴方達を襲ったか、というところから始めましょう」

早速レイノルズは桜井のクッキーをつまんだ。茶色いクッキーはきつとチョコ味だろうな。

「メキシコはテロを隠しているのです」

「テロ？」

樋口は聞き返した。

今度はネイサンがクッキーをつまむ。あれは・・・バニラかな？でも喋ったのはレイノルズであった。

「ええ。というのは、メキシコはテロの被害になってしまったのです」

蒼京もクッキーをつまんで食べた。なんかピンクっぽかったからストロベリー？案外可愛いところがあるんだなあ。

すると蒼京は噛みながら考えていたようで、喋り始めた。

「つまり、インフルを流すと脅されたと？」

「その通りです」

今度はネイサンが話す。

「どうやらテロリストは要求を出したようで、メキシコ側は無論飲まなかったのですが、阻止することも出来ずになってしまい、インフルが出回ってしまったわけです」

私はちよつと疑問に思った。

これだけインフルは世間を騒がしているのに、どうして要求をのまなかったのだろうか？騒がす事なんてメキシコとて分つたはずだから要求を飲んででもテロを阻止しないといけなかったんじゃないのかな？

私はこの点、良く分らなかつた。

でも蒼京や樋口はなぜか分つていたらしい。

「なるほど。では、そのテロは一体どこの組織が？」

その質問に、相手側は止まつた。

まさか……

「それが……分らないんです」



ＣＩＡの判断（後書き）

更新遅れました。すみません

読んでくれたらありがとうございます

## 魔法使い

テロの厄介な点は要求を容易に受け入れることが出来ない点である。

ダッカ日航機ハイジャック事件。これが大きな証拠である。

この時の有名な言葉が、首相の『人命は地球より重い』である。そしてこの言葉に基づき、要求は受け入れられた。

要求通り囚人は釈放され、人質は解放された。

しかし、この対応に対する世界の声はあまり良くはなかった。

世界の声はテロに調子に乗せるなどというものだった。

慎重に議論を進めた上でこの判断に至ったのだろうが、それでも結果として受け入れてしまったことは確かである。テロを完璧な成功へと日本は導いてしまったのだ。

一応参考として述べるが、どうやらこの当時はテロの要求を受け入れる国も少なくは無かったようである。ただ、それでも日本は非難を浴びてしまったのは、日本人がもしかしたら外人には調子に乗っていると見えたかもしれない。事実この頃、日本の自動車などの輸出が急増していたようだ。

余談が過ぎてしまった。

この後、日本はドイツのGSG-9を成功例としてSATを編成させた。対テロ特殊部隊の創設である。

そこから現代に至った。

このテロに調子に乗せる行為が完全に批判できるような社会。それがダッカ日航機ハイジャック事件をきっかけにはじまった現代の社会である。

蒼京、樋口、いやフィービスを除く隊員の全員が想像した。メキシコはテロリストから無理難題の要求を突きつけられたのだと。その要求はどんなナイフよりも鋭く、一突きで何もかも切ってしまう威力があったのかもしれない。

先ほど言ったとおり、テロリストの要求は現代では受け入れることは出来ない。さらに不可能な要求となればなお更である。ここから言えるのは、メキシコの取るべき行動は、テロの阻止であった。しかし出来なかった。

その証拠にインフルは広まってしまった。それも世界に。

この失態を世界に晒すわけにはいかず、あくまで突然変異として隠したのであった。

さてこの手口であるが、もしもこれがテロであったのなら、なんとか成功であるように見えるが、どうもよくない。というのは、インフルは隠すことが十分可能であり、下手をすると極少数の人間にしか訴える事は出来ない。つまり目的が果せていないのだ。だが、もしもこれがただ訴えるだけのテロではなく、パンデミックを起こすためのものであるなら話は百八十度変る。

メキシコはインフルを隠し通したい。となれば自らインフルの原因を隠し、テロ自身を隠し、犯人達も隠される。

もしも仮にテロリスト達は隠すように感染させるとなると、メキシコは徹底的に原因を探す。当然、テロの可能性も考える。つまり、これではテロリストは捕まる可能性があるのだ。これならば、実際にやってみせたテロの方が効率的であった。

C I Aが唯一分つていなかったのはテロリストがどのテロリストか分らない点であると述べた。しかし、実際のところC I Aは分つていて黙認していたのかもしれない。

それは何故か？

これはヒントに過ぎない。

私はせっかちで、ネタバレが好きな卑しい人間である。それでも私はこの答えを言うつもりはない。そうでなければ、この物語は詰まらないからである。

案外、ストロベリーのクッキーと言うのは美味しいものである。イチゴのジャムだろうか、それがイチゴの香りを出し、口の中で感じ

た。そう鼻で匂いを感じるようなものではなく、口の中で感じる食感であった。フレーバーというのだろうな。

俺はクッキーを少し興味深く眺め、すぐに口に頬張った。

樋口は、そんな能天気な俺に対して神経質であった。

「分らないとは、どの程度分らないんですか？」

「はい、こちらとしてはアルカイダではないかと見ています」

樋口はちよつと眉を動かし、不思議な表情をした。

「アルカイダ？メキシコとどう繋がりが？私としてはFARC（コロンビア革命軍）の方が可能性があると思うのですが」

ネイサンはココアのクッキーをつまみ、一度食べ終わると口を開く。

「その可能性も十分考えています」

．．．本当か？

クッキーを食べながら少々そんな考えが浮かぶ。

先ほどからどうも返答がおかしい。何故か曖昧だ。さっきまでは的確に返答していたはずだ。だが、ここに来てなぜか曖昧な答えになってきた。さっきの樋口の質問に対してもそうだ。なぜはなからFARCの可能性があることを言わなかったのだ？可能性があったのならアルカイダとFARCと言えばいいはずだ。なのになぜ？何かを隠している？

俺にはそう考えられた。同時に呟いた。

隠し放題だな。

相手の顔を見る。見るからに戦闘に慣れていそうな屈強な体をしている。それは何もアメリカ人だからでかいと言っわけではなさそうだ。

この屈強な相手に対して、俺はどう攻めようか。

俺には切り札がある。ママッドにそのことを教わった。

しかし切り札は一人の仲間を売ることに繋がる。出来る限り使いたくないものだ。しかし、彼女はもう人を守るために生きている。例え売ることだとしても、それは仕方の無い事だ。

作戦をクツキーをかじりながらたてる。

クツキーが上手い。作った桜井にはあとでたっぷり作ってもらおうか。

「ところで」

レイノルズが話を变えたことに少々反応した。

「ママッドが魔法使いがどののと言っていたのですが・・・何の事なんでしょう?」

二人は顔を見合わせ、困ったような顔をした。

やはりフィービスについて知っているのだろう。

「なぜママッドはあんな事を聞いたんでしょうね?それも、わざわざ我々を諦めさせるチャンスを投げ捨てて」

樋口が俺の方を見た。無論、隊員も。

許せ。

「私には分りません」

相手としてはきつとこのことを聞きたかったんだろう。しかしそうなればお終いだ。そうなった場合、俺と樋口は守りに入らなければならぬ。そして相手は攻めだ。

先手必勝。当たり前的事だ。

攻め側からすると自分は自由に動くことが可能であるが、守りは自由は許されない。攻めの自由な行動に付き合わなければならぬ、圧倒的に不利である。

相手は守りに入った。

レイノルズがやつとのことので口をあける。

「それは・・・どうも・・・」

「どうしました?」

「信じてもらえる自信が無いんです」

「信じます。それでも言ってくください。情報になります」

向こうはあくまで正直にでるのだろうか?それとも言わずにこつやって時間を稼ぐのだろうか?

俺は残り少ないクツキーをつまむ。黒いチョコレート味。これは

美味そうだ。

「先日、エリア51である実験が行われたんです」

何？

「その実験というのが、水を生み出すことなんです」

「はあ」

「実験は成功し、偵察衛星で地球上どこにでも水を発生させる事が可能になりました」

「それと我々に、どのような共通点が？」

「ママッドは俺に聞いてきた。俺達とかならず共通点がなければならぬ。共通点は水だけではないか？」

「あなた方とママッドの戦闘中、たまたまそこで再び実験が行われ、ママッドの潜む建物が水びだしになってしまったんです。彼らはそれを貴方達が何かしたのだと思ったのでしょう。それで魔法使いと言ったと思います」

俺は黙った。

相手が嘘をついていることは確かだが、フィービスの情報がいらぬのだろうか？

フィービスはかなり驚いた顔でたっていた。

「なるほど、そうでしたか」

知りたくなければそれでいい。俺はそういう考えで行くことにする。

「はい」

「しかし、おかしいですね。あれは我々の秘策だったのですが・・・」

「レイノルズは予想外の顔をした。」

「あれは私たちの秘策だったんですが・・・。まさかそういう事だったとは・・・」

レイノルズとしては多分俺達にしびれを切らせて吐き出させようとしたに違いない。だがそれを利用して逆に相手を誘う。

ネイサンは焦っていた。そして、ついに言った。

「あの．．．その秘策というのを教えてくれませんか？」  
「やっとなら食いついた。」

俺は即座に口を開き、それなりの処置をする。

「交換条件です。テロリストが何者かを言ってください」

樋口は俺の顔をまだ見ていた。それでも俺は樋口を見ようとはしなかった。

「テロリストは雇われた中東の人間です」

「雇ったのはあなた達では？」

「そう言ったのは隣にいた樋口であった。」

「最近噂を聞きましたね。米国が雇ったって」

「そう言うのはレイノルズはもう仕方ないという感じになっていたらしく、声を小さくした。」

「あまり漏らさないで欲しいことなのですが、いいでしょうか？」

樋口が調子に乗ったらしく、俺が結構ですと言う前に言った。

「我々はある会社と約束をしたんです」

「ある会社？」

「ええ。その約束によってテロを実行させました。しかし、インフルはその会社が開発しました」

「どこなんですか？」

俺が聞くが、流石にそこまで教えてくれそうに無かった。だが、ヒントはくれた。

「メキシコでインフルになったとき、確実に我々が感染します。そう考えると、約束は果さなければならなかった」

俺はその言葉を頭の中に焼き付ける。

「ありがとうございます。では、こちらの約束を果しましょう。フイービス。すまないが、お茶を頼む」

「そう言ってフイービスを見た。」

私はいきなりの命令に困った。しかし、樋口がコップを一つ用意してくれて、そこに入れると目で語った。

マジックをやるようだなあ。

そんな感じがしながら、私はテーブルの前に失礼なく出てきた。

「じゃ、じゃあ冷たいお茶にしますか？それとも・・・」

「冷たいので」

蒼京が即答した。

目の前のアメリカ人二人は興味深々だった。そんなにマジックが好きなのかなあ？あ、でももしかしてこの世界では私の能力は普通じゃないから・・・さっきの魔法使って私のことだったんだ。

「じゃあ」

私はようやく意味が分り始め、瞬きをしていつもの目に取り戻す。私とアメリカ人二人と目が合い、彼らは呟いた。

「なんてことだ・・・」

ちよつと目を瞑って微動もせずにコップに水を注ぐ。案外底が深く、だんだんゆっくりと注がれていった。

やがてコップはいっぱいになってしまい、それを蒼京が一気に飲んだ。

「二人も飲みますかな？」

私は蒼京がいつも何かを飲む屋上へ登った。ここなら居るだろうと思った。

この基地は大きな家程度でしかなく、基地としてはかなり小さい。でも、だから屋上も一人が夜空を眺めるにはちょうどいい広さなのだ。

蒼京はあのCIAとの会話の後、屋上に行ったきりである。そんな様子を皆はちよつと複雑な思いで見っていたようだった。

菊地が言っていた。

『蒼京さんはきつとやむおえなかったんだと思うんだ。でも・・・でも、坂崎の意見はちよつと違った。』

『仕方ないさ。俺達にはCIAに対する有力な情報はお前さんしかなかったんだから』



蒼京は私に何をしたのか実は分らない。あの時私は彼らに魔法を見せてあげただけだと思っっている。でも、蒼京はそう思っていないようだった。

私はドアを開く。天井はなくなり、昨日のこの時間にはヘリが着陸していた場所に立つ。

昨日とは打って変わって静かだ。銃撃どころかヘリの爆音も聞こえない。これで目の前に池と森があれば私の家の前なんだけども、ここは自然は無いけど、人の作った綺麗な光がある。私はそんな風景も良いと思った。

蒼京はあぐらをかいて何か飲んでた。お酒ではないようだ。サイダーかな？

そう思ったがよくよく見るとお酒であった。

彼はこちらを見てきた。でも、酔ってはいなかった。さらによくよく見るとお酒だけではなくサイダーもあった。

「フィービスか」

「ジユン・・・」

少しは酔っているのか、蒼京は私を手招きした。普段の彼ならそんなことはせずに口で来いとも言っただろう。

私は小走りに向かい、蒼京の隣に座った。すると、彼はコップが無い事に気がつき、自分の持っていたコップにお酒を入れて差し出した。私はそれを一口飲んだ。

蒼京は私を見て少しうつむきかけた。

「どうしたの？」

聞いたら、さらにうつむいた。

「すまん、フィービス。俺は、お前を売った最低の野郎だ」

「私を・・・売った？」

私は意味が分らなかった。

「ああ、奴ら・・・いやもう世界と言うべきだろう。とにかく、世界中がお前に興味を示しちゃった。だから、俺はそれに乗ってお前さんの情報と引き換えにあいつらに情報を買ってもらったんだ」

この話を聞いても今一ピンと来なかったが、蒼京の表情は悲しうであった。

ピンと来なかったけど、蒼京が私を売ろうとしていたなら相当なことだと思う。蒼京はいつも何も失わせないとやっているのに、自分から手放そうとしたなんて。

でも実際、私自身は売られていない。だから、別にいいんだと思う。蒼京はやむおえなかったんだし、私はこうして今も彼の隣で飲めるんだから、別にいい。それに、私が売られることで他の人が救われるのなら、それでも良いと思う。

私は少しずつ飲む蒼京に言う。

「別に．．．いいよ。私はこうしてジユンの隣にで飲めるんだから、いいよ」

それでも蒼京の表情に变りはなかった。

「ねえジユン。もう過去の事は聞かないけど、そんなに失うのを恐れたら何もできないよ」

そう言ったが、蒼京はさらにうつむくばかりであった。

「．．．違つ」

「え？」

「何かを失えば何もかもダメになる」

蒼京にそのときの蒼京は何かに怯えるような感じであった。それ故に私に怒りをぶつけるようであった。

こんなジユンは見たこと無い。

酔ったお陰で自分に正直になつてしまったのかもしれない。だとしたら、本当に失う事にヒステリックになつている。

「ジユン．．．」

私は心臓が動く音を感じながら、隣で肩に腕を回し、さらに近づいた。

蒼京自身、私が腕をまわしたことに気がつくとかかなりびっくりしたようだった。でも、私はしっかりと蒼京の肩を私の方に寄せた。

「大丈夫。私はジユンの側にいるから」

多分私は蒼京に恋をしている。命を救われたからだと思うし、外見の冷酷さと比べて優しいし、案外かわいいところもあるから恋したと思う。でも改めてその気持ちがあると、かなり驚いていた。

ジュンは・・・どう思っているんだろう？

私はそう思った。

## 魔法使い（後書き）

フィービスは身長的にロリですか？

フィービス「なんかこのスペース、質問コーナーになってない？まあロリじゃないと思うよ」

じゃあただの天然不思議ちゃんですね

フィービス「だって仕方ないじゃん！この常識とか分らないもん」

読んでくれたらありがとう

## 研究所の少女

彼ら第二小隊はやっとのことで真実を掴んだ。

インフルに関して、CIAの言葉で全てが把握された。全てを振り返ってみる。

まずメキシコでテロが発生。この件はCIAから発覚したもので、のちに菊地がインターネットを通じて確認された。菊地はGoogleで検索されたワードを調べ、そこからメキシコでのテロを調べた形跡があり、更に詳しく調べた結果確かにテロはあったらしく、またテロの阻止に失敗している事も分った。

メキシコ政府の対応もこの件については完璧に隠すつもりらしく、インフルは突然変異が原因と隠蔽している。無論、調査にテロに関する調査は一切無い。

世界の組織はこれについて無論突然変異とは考えていない。しかし重要なのはそこではなく、どこの組織がテロを起こしたかにあった。

そして、そこで疑ったのがイスラエルである。

これについては第二小隊も同じで、イスラエルを疑った。しかしそれはオットー・グロスマンによって無実を伝えられ、第二小隊、後々のSCASC全体だけが知ることとなる。

だが、真実は信じる人間が多くなければ嘘となる。逆に、嘘は信じる人間が多ければ真実となる。

オットーはまだ救われていなかった。

救われていないのいいことに、モサドに対するママッドが活動し、オットーらモサドを完璧な悪役にしている。

これが現在までの経緯である。

私はメキシコとイスラエルについて別々の問題と考えている。内、メキシコは解決した。

蒼京はメキシコに更に突きつけた。

『これ以上我々の妨害をするというのなら、我々は世界にインフルの实体を晒し、更には今後一切S C A S Cはあなた方の依頼を受けない』

この脅迫状とも言えるような文章は日本刀を突きつけられてに等しかったらしく、メキシコ政府はこちらに逆に情報を提供してきた。今まで妨害をするため、特殊部隊を送っていたメキシコ政府だが、ばれた以上はテロリストを悪者にするために蒼京達第二小隊にたたくしたので。

彼らはあと一息のところまで来ている。もう、彼らに託された希望の光が解放されるのも時間の問題である。

しかしながら同時に絶望の黒々しい光も解放されようとしていた。そのことをまだ蒼京達は知らない。

私は一週間経った今でも蒼京の温もりを覚えていた。

あの時の体温は暖かくて、ちょっとお酒臭かったけど優しさが感じられた。

それでも、蒼京がどう考えているか実はまだ分かってない。聞いたのだが、やっぱりかなり恥かしい。言おう言おうと口ごもると、急に顔が赤くなって全然いえなくなる。もう何を言っているのか全く分らなくなる。

でもそんなことは正直今は考えてはいけないことであった。

C I A が来た日からここはかなり慌しくなってしまった。

私も一応隊員だから今回の陰謀の真相は知っている。

C I A の人たちが言っていたことから、私たちは調べ上げた。その結果、坂崎が古新聞から見つけた。

インフルエンザの薬を製作している東和製薬会社は密かにK S 社と近づいていた。

新聞の本当に小さな記事、そこに書いてあったことは東和製薬会社がK S 社と共同で予防のためのマスクを作っていたことだ。

東和製薬会社とK S 社はインサイダーをしている。もはやそう見

て疑いは無かった。

秋口と桜井は更に調べた結果、驚異的なことを知った。

インフルの薬を製作し、更には研究まで任されている事から、インフルの発生時には各国が東和製薬に近づき寄ってたかつて薬品の確保を願ったようだ。

私が聞いた感じ、これはお菓子を持った子供に周りの子供達が寄って欲しいがると同じだと思う。お菓子を持った子供は調子に乗り始め、欲しいがる子供に命令をし始める。それと同じで、東和製薬もCIAを利用し始めた。

東和製薬は薬品の研究と共に生物兵器の開発も行っていた可能性がある。しかし、東和製薬という会社はもはや大きすぎて容易に口出しできずにいた。

私は世界がまるで子供のように見えていた。

大きな大きなそれこそ王族達のような組織や会社がこの世界では子供のように欲に眩んでいる。

私の世界は確かに王は欲に眩んでいた。でも、この世界とは違う事は、その王の下にいる人たちの数人はとても親切で、国民のためを思うときがある。そして王は欲を表に出し、親切な人たちは親切さを表に出す。でもこの世界は何もかもを人々に隠してもくもくと残酷な事をする。人が見なければどんな欲望も実行してしまう。そういう子供といっても狂気じみた子供の傾向があると思う。

この世界が好きか好きでないかで問われると、私はちよつと困る。なぜなら、この世界は純粹に悪いわけでないし、純粹に良いわけでもない。だから私はどちらかの意見を出せない。

でも、どうやらこここの世界の人たちの意見ははっきりしていたようである。蒼京たちがそうなんだと思う。

そんなことより今からである。

実はもう我々の役割は果している。そうだった蒼京は少し悩んでいた。

現状の報告をする時、少々重い空気が走っていた。

「俺達に依頼された任務はKS社のインサイダーを暴く事だ。よつて我々の任務はここで終わりとなる」

つまり、今まで送ってもらった新聞なども止められ、今回の件はこれにてお開きとなってしまう。でも、私たちはまだ突き止めてないことがあった。

蒼京は続けた。

「だが、少々気になることがまだ残っている。KS社が東和と共同で開発した手袋だ。何かあるはずなんだが、まだ掴んでいない」

樋口が隣でぼーとしていたが、ようやく口を開いた。

「中東の組織で確認したが、どうやら東和と生物兵器の交渉を裏で始めたようだ」

敏感に反応したのは意外にも菊地だった。

「CIAがその情報を掴んでいるのでは？ そうなればどうにかなると思うのですが」

「いやダメだ。というよりも、既に東和とCIAは手を組んでただら？」

樋口の言葉に菊地は少し残念そうであった。

蒼京の話は続く。

「そこで、俺はこう思っている。このウイルス戦争を止められるのは、俺達しかいないんじゃないかと」

彼は一息つくと、一気に言葉を発した。

「依頼してきたツバメ社をまず見捨てる」

え？

「インサイダーのことは黙っておき、これをKS社に突きつける」  
いつも常識が分らないから黙っている私も、流石に反応してしまつた。

「ちょ、ちょ、ちょ、そんなことしてもいいんですか！？ 頼まれた事はしっかりやらないと、イメージダウンになりますよ！」

あ、我ながらちよつと知的なこと言つたかも。

対する蒼京は



「分っている。だが止むおえん。ツバメには後々報告する。ただそれだけだ」

「でも、KS社に突きつけてどうなるんです！？開発している東和にはまった影響がないじゃないですか！」

その時蒼京は怪しげな笑顔をした。

何か考えがある。そういう訳であった。

『そんな無茶苦茶な・・・』

「無茶？私は出来ると思いますよ」

電話の相手はKS社の社長であった。俺の名前が出るとすぐに電話に応じてくれた。やはり、俺達が調査をしていた事くらい分っていたのだろう。

「手袋の売上の利益を全てあなた方の利益にするくらい、簡単なのでは？」

『ですが、あれは東和製薬さんとの共同開発で出来た物でして、東和製薬さんにも利益の何パーセントかを与えないと、面目立たないですよ。ですから・・・』

「知っています。しかし止めて下さい」

『そんな・・・』

向こうは困り果てていた。しかし、そんなことは知ったことではない。むしろ、困り果ててくれればいい。

「なら利益をそちらに回しても良いでしょう。しかし、こういうはどうです？今のインフルよりももっと強力なものを我々がここ日本で流し、更にはそのウィルスの情報をあなた方以外の会社に情報を提供すると言うのは」

『・・・』

つまりこれはKS社がした事とは全く逆のことだ。

KS社は東和製薬からインフルの情報を提供され、情報の独占をし、それを忠実に従うことができたが、今度はその逆を起こそうと言うのである。そうやってしまえば、今度はKS社は波に完璧にと

り遅れる。どこの企業もウイルス対策のための商品を作り、更には数も万全にしておくだろうが、KS社はそれができない。

こうなってしまうとKS社はお終いだ。

SCASCはやろうと思えば今すぐにでも生物兵器を流すことが可能である。そんなことくらい、KS社の社長は分っている。だからこそ、これが冗談の脅しではないと自覚しているのだ。

『 . . . 』

「どうでしょうか？」

『 . . . 全てを . . . 知っているわけですね 』

「ええもちろんですとも。私も年としてはケツが青いですが、仕事ではプロなので」

『 何が目的です? 』

「戦争、いえ大戦まで発展しているこのウイルス戦争を止めるんです」

『 . . . 』

「どうしますか？」

相手は答えなかった。

そしてそのまま電話は切られずにただ沈黙だけが残った。

俺から電話を切った。これ以上、話は意味が無いようだ。ならば、やるしかない。

ソフトパワーではどうにもならなくなってしまった以上、我々は武器を持たなければならない。

「実行」

「了解」

ガンナー席に座る兵士がブラックホークのミニガンに火を吹かせた。ミニガンの銃口からレーザーに似た光が放出される。そして、その光の向かう先には、東和製薬の医療開発所であった。

入り口の柵に生物兵器のマークが描かれたこの施設に、軽く穴が開く。ミニガンの弾丸に壁は無力であった。

ブラックホークは一度着陸する。

「Go! Go! Go!」

隊員はヘリから降り、即座に先ほど出来たばかりの入り口に入っていた。

実は今回、フィービスには極めてきつい質問をした。

なぜなら、今回の任務はいつも以上にしっかりとした精神力が必要であったからだ。

フィービスにこう聞いた。

『武器の無い人間を殺せるか?』

俺の目の前に白衣を着た研究員が現れる。何の痛みも感じず、即座に小銃の引き金を引き、その研究員の頭を撃ちぬく。

今回の作戦は、こういうことであった。

フィービスは言った。やります、と。

だからここに連れて来た。

ここに入ると、彼女も一人研究員を殺した。それも、自分の得意のレーザーで。

しかしそんなことを実感する暇もなくどんどん進まなければならぬ。

ここには地下があり、そこに生物兵器が隠されている。あくまでもこれは推測だが、とにかく地下に行つて爆薬を仕掛け、ここを爆破する必要がある。

そして出会った人間は即死させる。この人間を全て消し、生物兵器の存在の一切を隠すのだ。

「鍵が掛かつてる。坂崎、開ける」

「お安い御用」

坂崎は小銃に突いたショットガンをドアに向かって撃つ。ドアはバコンと開き、その中に手榴弾を投げる。そして急いでドアを閉めた。

「次!」

俺達は死神にでもなった気分である。

抵抗もしない人間を区別無く殺していくのだから。

でも、考えてみるとこいつらはある意味俺達よりも凶悪な人間だ。生物兵器を開発し、世界を感染という恐怖に怯えさせた。同情するのは筋違いなのかもな。

地下へは容易にいく事が出来、普通に階段を下がった。

警報は未だに鳴っていない。多分ブラックホークが攻撃していてそれどころではないのだろう。

警備員は銃を装備せず、なんとか連絡を取ろうとするがそれも無意味である。ここ一帯はもう無線は通じていない。ジャミングされてしまっている。

地下への道は案外長かった。あくまで階段としては長かったという感じだが、やはりこれでは巡航ミサイル一発ではどうにもならないものであった。

地下は暗く、とても嫌な予感がした。

「行くぞ」

樋口は走ろうとするが、俺は止めた。

「嫌な予感がする」

フィービスはくらい闇を自分の光で照らす。

俺は少し目を細めじつと先を見る。するとそこには人影があった。それに気がつく秋口は背中に手を回し、背負っている狙撃銃を構える。距離としては長く、150メートルといったところだろうか。秋口は息を止めて一発撃った。撃ったのだが、俺の目は少々疑いはじめる。

「!？」

撃った本人はスコープを疑い始めたようだ。

俺と秋口がなぜ疑ったか？一瞬、撃ったはずの人間が高速で避けたからだ。

秋口は更にもう一発撃つ。しかし結果は同じであった。

更に一発、更に一発と撃っていく。だが、俺の目が正しければ相手はこちらに向かってきているままだ。

秋口は俺のほうを見た。

「隊長、奴はどうも変です」

散弾銃を持っている。奴は俺達からここを守る気か？だとすればなんか嫌な予感が……

「チーム……散開」

「待って！」

フィービスは叫び、こちらに向かってくる人間に向けていた手を下ろした。

「カナリス！」

カナリス？

「カナリスなんでしょ！？返事して！」

なんでフィービスがあの人間を知っているのだ？ますます疑問が増えるばかりだが、一つの説が頭の中に浮かび上がった。

フィービスと同じ世界の人間なのではないか？

その可能性は今になってみるとかなり高い。

だが、そんな一説を立てているうちに敵はこちらに接近していくばかりだ。

いつの間にか俺たちから約10メートルまで近づいていた。それでも攻撃しないのは、フィービスの必死さと、啞然とするその力だからだろう。

「カナリス！」

相手は散弾銃を構え始めた。

「フィービス。私たちはもう敵同士よ！」

「チーム！散開しろ！」

俺の命令に反応した隊員はばらばらになろうとした。だが、相手は目にも止まらない速さで菊地の目の前に出て行き、散弾銃の撃とうとする。

「逃さない」

バン！

菊地は発砲音でも目を瞑らずにいた。そして自分の死を見と届けようとした。でも、菊池は死ぬどころか傷一つついていなかった。

代わりに水で出来たシールドが張られていた。

「先に行ってください！カナリスは私がどうかします！」

俺は命令を下す。

「樋口！頼んだ」

「おうよ！」

俺は少しばかり樋口達と行くフリをして振り返った。

どうしてカナリスが？

私は先ほどまで無抵抗の人間を殺す事に少々、ショックを受けていたが、今になってそれがどうでもよくなってきた。

カナリス・ナタード。その名の人間を知っている。

彼女は私と何度か遊んだ事がある。私が仕事をしなかったちょっとした時間に遊んだり、一緒に仕事をしたこともあった。仕事は彼女の能力が素早く高速で動くところから、小さい物の速達の仕事をしていた。

彼女の能力は高速移動。でもそれ以外なく、目の色は両方共水色。私のブルーの鮮やかな目とは違って、ちょっと白が混じったような水色だった。

両方同じ色ということ、能力が少ない分能力を使っても体力が大きく減らない。カナリスの体力はあまり減らないのだ。

しかし、カナリスの場合は体の移動と共に能力が発動するから実際には私以上に消耗が激しい。

カナリスはショットガンを持って私の方を向いた。

「最近、仕事にも行ってないと思っていたらこんなところにいたのね」

「カナリス、やめて。あなたはこの世界の人間じゃないの！」

きつとカナリスはこの世界に私のように突然来てしまった。そのはずだ。だから状況が読めずに皆を敵だと思っているんだ。

説得すればなんとかなるはず。

「カナリス！ここは貴方の知っているような世界じゃない！」

私は心のそこから大声をだして説得しようとした。でも、無駄のようであった。

「知っているわ！この世界はとても残酷なことも、私が利用されていることも！」

え？

「私はここに突然来て、こう告げられたのよ『お前の力が欲しい』って。私はこれで向こうの世界よりもいい暮らしが出来るようになったの。今日も朝はおいしいものを食べて、いいベットで寝たの。向こうの質素な生活とはおさらばだわ！だから私は利用されることに不快を感じない。むしろ快感を得る。その快感のためには、貴方達の命が必要なのよ！」

カナリスは狂っていた。完全に。

あそこでショットガンを持っている少女はもう私の知っているカナリスではない。あれはもう人間の心を捨ててしまったカナリスだ。カナリスが高速で私の目の前に来た。そしてさっきの菊池のように引き金を絞ろうとする。

「死ねえ！」

「は！」

私はギリギリのところまでシールドを張り、散弾を全て防ぐ。シールドを張ったままだが、光線を足元に放つ。

私には勇気が無かった。彼女の心臓を貫くなんていう勇気が。

相手は光線を見切っていたらしく、即座にその場からはなれていつの間にか背後を取られる。

背中がガチャという音が聞こえる。同時に私は手を後ろに向けてフラッシュをたく。

「きゃ」

相手は一時的に目が見えなくなったはずである。

後ろを向き、目を瞑って動けなくなるカナリスに膝蹴りをする。

大きいダメージを与えた末に今度は手を組んで背中を叩き、更に追撃でまた膝蹴りをする。

でも、相手はショットガンを投げ出して私の腕を掴んできた。そして、私の腕をぐいっと回し激痛を走らせてから投げた。

間抜けにも尻餅をついてしまい、さらには拳銃を抜かれる。

即刻電気で相手の拳銃を加熱させ、拳銃を爆発させた。

「あ！」

小さな悲鳴が聞こえた。

「もうやめてカナリス！」

「そう言っておいて貴方はなんなの？この人間を殺したのは貴方達でしょ？」

「でもそうしなきゃウイルスは広まり、大勢の人たちを苦しみに追いやってしまうのよ。私たちはあくまで人々を救うためにしただけ！」

「じゃあこの人たちはその人々に入らないの！？」

私は押し黙ってしまった。確かにカナリスに言う事はもつともであつたからだ。

もう私は愚かながらも力に身を任せるしかないようであつた。手をカナリスに狙いを定める。

もう仕方が無かつた。私の狙いはカナリスの心臓であつた。避ける事なんて分っている。でも、私の手は一つではない。

光線は私の正面を照らしたが、そこにカナリスはいなかつた。そんな事は予想済みで、あらかじめ身構えていた右側と左側に指を向けてレーザーを放つ。

しかしそれにもカナリスはかからず、再び私の目の前に現れてしまう。そこでお腹に直撃を受ける。

「がはっ！」

追撃を加えてきた。カナリスは直撃を受けたお腹に更に蹴りを加え、私が倒れたところで蹴りをまた加えて私は力尽きて倒れてしまふ。

カナリスは私の背中を踏んだ。

「あなたに私の気持ちなんて分らない。あの王子にも目をつけられ



ていたあなたを、私はどんな目で見ていたか……」

好きで目をつけられたわけではない。むしろ、無視して欲しかった。

私の中で怒りが爆発しそうであった。

「こおの！」

勢いよくカナリスを水で吹き飛ばし、私の背中からどける。

でもそれも束の間、すぐに私のところに戻ってきた。そして、即行で拾ったショットガンを私に向けた。

「終わりよ！」

これではシールドは間に合わない。私は死んでしまう。

でも、死ななかった。

「が！」

カナリスは背中を腕を撃たれた。撃つたのは……

「戻って着てよかった」

蒼京であった。

蒼京は銃の引き金を更に引く。しかし、そのときにはすでにカナリスはいなかった。

代わりに今度は蒼京の目の前に来ていた。自分のナイフを取り出し、蒼京の首にナイフを走らせようとする。

でも蒼京はすぐさまかがみこんで足を持ち、勢いよく引つ張って転ばせた。

同時に拳銃を抜いて撃つ。でもまたごろごろと転がって避けた。

それでも蒼京はカナリスのもう一方の腕と足を撃ち、血を散乱させた。

「あ！痛い！」

ダメージはカナリスの気力を奪っていた。

足を撃たれた以上、高速で走る事ができない。蒼京から逃げる事ができなくなった。

腕を撃たれながらもカナリスは必死にショットガンを持ち、蒼京に向けて撃とうとした。でも、蒼京は撃つ前にカナリスの至る部分

を売った。その度にカナリスの血が飛び散る。

あっさりと形勢逆転してしまった様子を見ていて、おかしいところを感じられた。

蒼京はカナリスの急所を撃っていないのだ。

「ジョン、やめて！」

それを聞いてやめたかと思えば、蒼京はショットガンを蹴り飛ばした。

「フィービス。こいつはなぜここにいるか分かるか？」

私は首を横に振った。

「おい、カナリス。お前はなぜここに来た？」

カナリスは力なく答えた。

「連れて、来られたのよ……」

え？

「いずれ分るわ……」

次の瞬間カナリスは私に飛びついて襲おうとした。私は突然すぎて判断が出来ず、ただ手からレーザーを発してしまった。

「さようなら」

友人が死んだ。

東和製薬は未だに存在する。というよりも、先日の研究所爆破の件は隠され、何事も無かったかのようになってしまった。

悲劇だったのはKS社であった。

手袋はもう意味が無くなり、さらにはインサイダーがツバメ社にばれた。このためKS社はツバメに余儀なく買収されてしまった。

テレビではインサイダーは報道されず、代わりに俺がアドバイスをした放送がされていた。それは、インサイダーに触れないKS社の買収についての放送であった。

これによってKS社の買収はインサイダーが原因だと疑われる事が避けられた。

その放送を見て樋口は言った。

「お前は世界を変えたくないようだな」

俺はその言葉にこう返した。

「ああ。俺はあくまでこの世界をそのままにしておくのが大切だと思っっている。知らないほうがいいって事も、あるからな」

樋口は、その考え方に反対であった。彼は、悪を公表して自分なりの正義を成し遂げたかったようだ。

フィービスについては案外どうってことでもなかった。

殺したシヨックより、カナリスのずたずたになってしまった心の方がよほどシヨックだったようだ。

俺は、それをただ眺めていた。

でも、どこか過去の自分を見ているようでもあった。

任務は無事成功した。でも、たまにこれでよかったのかと俺は思う。

実は東和製薬は本当はママッドにインフル製造を頼まれていた。

今回ママッドは疑いを全てモサドに擦りつけようとしたが、あの研究所から手に入れた資料からそのことが完璧に発覚。オットーに渡った資料はモサドは形勢逆転へと導き、さらに彼を英雄にした。

ママッドのインフルの目的はやはり人口爆発を食い止めることにあった。

俺はだからこれでよかったのかと思う。

皮肉な事に、人口爆発は人類が進めてしまった最悪の事態であり、解決は生物兵器による虐殺しかなかったのだ。

行き場の無い悔いが、俺の中には少しあった。

「自壊する世界、か」

屋上でただ一人、呟いたのだった。

## 研究所の少女（後書き）

Second Mission 終了です。

なんか最後らへん真面目に頭がこんがらがった。

すみません。なんかへんな展開になって。

さて今回は規模が下がって学園編になります。でも、フルメタルパニクとは違い、対象を探す任務になります。

はてさて、その対象はなにを以てかしてしまうのでしょうか？

ヒントは若いのにできるといふことです。

読んでくれたらありがとう

## Third Mission

蒼京達の任務は無事終了し、成功報酬を貰った。

この成功は同時にフィービスを守った。

もはやフィービスの存在はSCASCでも話題になっていたが、蒼京と樋口の報告書にフィービスを普通の人間と位置付けをしたためにとくに調べられることはなかった。

しかし、それでも無論フィービスを知りたがる人間はいた。蒼京はなんとかそれを振り切っていた。

さて、フィービスに伴って気になるのがSISについてである。

フィービスについての有力な情報を手に入れている組織は幾つかある。まずはメキシコ政府。次にモサド、ママッド。更にはCIA。そして一番有力な情報を手に入れているのが東和製薬だ。

カナリス・ナタードはフィービスと同じ世界の住民であった。しかしなぜ彼女が東和製薬にいたのか？

日本は現在インフル対策に焦りを見せている。これは致命的な焦りであり、他の国でも同じ事が起きれば致命的になる。

イギリスは東和製薬に脅された。東和製薬はこのフィービスについて調べ、更には第二小隊を調べていた。その結果、しつこく付きまとうSISの存在が浮き上がってしまったのだ。

SISに脅迫をした東和製薬は、なぜか一人の少女が送られた。その少女こそがカナリスであった。

東和製薬はこれによりSISがフィービスやカナリスについて何か知っていることが分ったものの、具体的に何を知っているのかまでは分らなかった。しかし、東和からすればカナリスを送られただけで十分といえる。

第二小隊は東和製薬にSISについて調べておくべきだったのかもしれない。だが、第二小隊はSISが何を知っているかどころか、SISが何をしているのかすら具体的に把握していなかった。ただ、

蒼京はすこしばかりS I Sについて気になっていた程度であった。とにかく、もはやフィードスは情報機関のアイドルである。そんな状況になった以上、S I Sは最終手段にでなければならなかった。そう、その最終手段とは第二小隊に近づくことであった。

今回のミッション。設定上Third Missionとなる今回の任務は規模は小さい。しかし、小さいながらも本当はあまりにも巨大なことであった。

しかしそんな中でもS I Sは踏み入れた。大きなリスクを抱えたとしても、S I Sにはそうするほか無かった。

フィードスとシークレットワールドについて、蒼京達が知るのもあと僅かな時間である。

「……」

俺はその場で固まってしまった。

新しく来た担当局長はなんとか笑顔でこの空気を取り繕うとした。そういうよりも、もしかしたらこの人はいつもニコニコと笑っている人なのかもしれないような陽気な人であった。

「で、依頼を申し込まれたんだけど、どうかなあ？」

樋口はまだ資料を読んでいる感じだが、俺はとっくに読み終えていた。

報酬は十億。内容の割には多い。しかし、俺にとってこの内容は困る。

「……まあ、悪くはないし、俺たちならではの依頼だと思いますがね……」

「じゃあ受けますか？」

樋口の言葉の後にニコニコ顔の担当局長、小村雅夫が言う。

俺の意見としては、

「……少々、きついです」

この通りであった。

その意見に樋口は不思議な顔をした。

「どうした？お前さんなら進んでやりますと言う気がしたんだが」  
「そういう樋口は何か言いたそうだったか？」

そういつてもこのニコニコしている担当局長は一切自分から出ている能天気なムードを変えなかつた。むしろ俺達がこの任務を批判するのを楽しみにしているかのようにも見えた。

樋口がとりあえず先に言う。

「少々気になるのがこの依頼した組織ですな。なんなんですか？」

まだ能天気な空気を出し続けるこの人は、笑顔で言う。

「なんなんだ、と言われればスカイプだよ」

「だからなんでスカイプなんです？この手の仕事はNSAに任せたほうがいいでしょう？」

この任務の目的はクラッカーを見つけ出し、スカイプにそいつを渡して欲しいと言うものである。

能天気ながらも担当局長はちゃんと説明する。

「だから、スカイプ側はどこにいるか分っているんだよ。でも下手に直接手を出したくないから私たちに頼んでいるんだよ」

「でも、NSAならもっとしっかり捕まえてくれる気がするんですが」

先ほどから樋口が言っているNSAとは、アメリカの組織で主に電子的なものを使って情報を手に入れることをしている。いわゆるシギントというものをしているのだ。

「うーん、僕の考えただけだね、スカイプとしては有力な人物が欲しいんだよ。このクラッカー、どうも強力な力を持っているみたいだし、絶対に手に入れたいと思うんだ。つまり確実に手に入れたい。だとしたら、やっぱり年齢的に考えて同じ年のほうが容易に接触できて更には容易に引き連れる事ができる君達のほうがいいんじゃないかな？それに君達の噂はもうすごいしね」

実は、このクラッカーというのが高校生なのだ。スカイプ側は住所や名前を特定しており、あとは手を出すだけであった。

樋口は陽気な説明を聞いて納得したが、俺はまた別の難点を持つ

ている。

「で、蒼京は何がきついんだ？」

俺はクラッカーの名前が書かれた資料を見る。

高見沢豊。この変った苗字で案外普通の名前の人間を、俺は覚えていた。

「……」

「どうした？」

俺はずっと黙っていたかったが、ようやく口を開いた。

「こいつ……俺の友人だったんです」

樋口は不審な顔をした。

多分やつ頭の頭の中では俺の過去を想像しているところなんだろうな。ついでに俺を笑ってるんだな。

しかし担当局長の顔は全く変らなかった。

「へえーこの子と君がねえ」

「え、ええ」

そのまま空気は白けてしまった。というか、この人だからなんだって感じたな。

「あの、そのために少々困難だと思うのですが」

「そんなことはないと思うよ。多分この任務のために高校に潜入することになると思うけど、君が潜入しなきゃいけない訳じゃないし、もしも潜入したとしても、旧友として安易に接触できるんじゃないかな？」

「ですが昔の自分の名は捨てました」

「同時に一つ殺人事件も消えたね」

その通りだ。俺のしかした事件は名前と共に消え去った。あの時の事件を記録する物はもはやここSCASCにしかない。

この担当局長は顔に合わずすっかりと隊員について調べてあるようであった。

「嘘の記録はちゃんが残さないといけないね。そうじゃないと今のように嘘をついたかつかなかつた忘れちゃうからね」



「どうやらこの任務を断るという選択肢はないようであった。」

「.....」

「.....」

俺と樋口は圧倒されて何も言えなかった。

この担当局長、顔に騙されてはいけないようだ。

「それじゃあ後でスカイプ本社に伝えておくね」

カナリスはこの世界に洗脳された。

この世界に利用された彼女は、理性などの大脳新皮質の能力が機能しなくなってしまった。そのお陰で彼女は自分のためなら人を殺してもいいという考えが出来てしまったのだ。

私はそのことで何日か悩んだ。

私も一歩間違えればあなってしまったのかもしれない。もしも蒼京に出会う事が出来ずに、他の人間であったのならあなってしまったのかも知れない。

そう考えると私は怖かった。

でも、恐怖を感じて落ち込んでいる暇はなかった。

だから私は考えない事にした。

戦争にあの時あしていれば、などということは通用しない。だからそれを引きずってしまっではいけない。だから考えない事にした。

桜井も、そのほうがいいって言うてくれた。

考えないで引きずらないことも大切なんだと私はその時学んだ。

だから私は今回も新たな任務と正面を向き合うつもりだ。

でもどうも向き合いたくないのは蒼京のようにも感じられた。頭に手を軽く当てながら説明する姿はそんな感じである。

「依頼は高校生である高見沢豊を捕獲し、スカイプの方に渡す。その際、こいつの高校に潜入するのだが.....」

なぜか隣で坂崎がときめいている。なんだろう、この何かを企んでいる感じは。しかも手を拳げ始めた。

「俺とフィービスが行く」

「俺も！」

ついに叫んだ坂崎。しかし蒼京の反応は、

「そのためその他は副隊長である樋口の指示に従うように」

何も無いように無視した。

と、そんなことを考える前に私が学校に潜入？

というより学校ってなんだろう？

「フィービスは今日中にその資料を全て見て学校が何かを学習しておくように」

そんなことばで会議は終わった。

一週間が過ぎて、樋口や坂崎、更に桜井からも学校での生活のしかたを学習し、後は行くだけになった私は制服に着替えていた。

蒼京は制服に着替えながら樋口に呟いた。

「頭が痛い」

「だろうな。元の名ではなく今の名の『蒼京』で行くんだもんね。

というよりも、お前さんそれで行ったらどっかの組織が近づいてこないか？」

「来るさ来るさ。わんさと来るだろうな。まあその点はちよつと考えがあつてこつしたんだがな」

「そつでなきゃ困るな」

樋口は大声で笑つたが、蒼京は苦笑いも出来ずにため息をついていた。

私の制服姿を見る。すると口元に指を添えた。

「うーん、なんかいかにも不思議な子ね」

「ふ、不思議な子って」

「いわゆる不思議ちゃん？そんな感じ。っていうか私からしても不思議ちゃんだしね」

「え、ええー」

「まあ学校では言われた通りにしてればいいから」

言われたとおり……。つまりそれは、余計な事を言わないということだ。

余計な事。例えばどうして学校なんかに行くの？とかこの世界では常識過ぎることを聞くなということであった。

「う、うん」

「俺はお前の事も心配だよ本当に」

いつの間にか着替え終えていた蒼京は、桜井の隣でため息をついていた。

「金はいくつか持ってる。ざっと三万程度だ。お前はいくらだ？」

私は新しく買ってもらったお財布を見る。ここでの私の財産は蒼京が管理していて、このお財布に入っているお金は蒼京が引き出した私の財産の一部であった。でも、実は私が一体いくら程度持っているのかわからない。

見た結果、三千元しか入っていなかった。

「あのお……。三千元しか入ってないんだけど」

「よし、学校に行くぞ」

「ま、待つて。何で私とジュンで金額が違うの？」

「お前さんに渡したら皆にたかられて取られそうだからなええー。」

まあそんなこんなに私はそのまま学校に行く事になった。

本来、この作品は蒼京とフィービス、私という第三者から成り立っている。しかし今回はやはりもう一つの視点を挙げなければならぬ。ないようだ。

その一つの視点とはあえて曖昧にさせてもらう。それがはっきりと一つとは言い切れないからだ。

今回の任務は単純な物ではない。前回の任務も決して単純とは言えないが、今回の任務は敵と味方という基本的な立場に中立という立場の物が混ざっている。

スイスには以前まで戦争産業というものがあつたようだ。これは

スイスの永世中立国がいいように使われていた証である。

永世中立国とは、永久に中立を保つ国のことを言う。しかしだからといって戦争をしないわけではなく、むしろ戦争をしても良い事になっていた。

先ほど言ったとおり永世中立国は永久に中立を保つことを言う。つまり中立を保つためならどんなことをしても良いということである。だとすればスイスは容易に戦争の理由を作ることができ、結果的に自分を敵とすることをしたのだ。

中立とは敵となり味方になる大変複雑な立場である。その立場を、一つの視点と第三者からの視点で語るのは難しい。

そのため、申し訳ないがもう一つの視点で書かせてもらう。

蒼京諄一は何を考えているのか不思議であった。

シークレットワールドの住民であるファイビス・トライデントの存在は既に世界に晒されている。そのため、現在情報機関はファイビスや魔法使いという単語に敏感である。

同時に、蒼京という単語にも敏感になり、彼の友人は重要人物とされるようになった。

無論ここS I Sでも同じ事であり、数人が重要視されるようになった。

それが現状であるというのに、蒼京諄一とファイビス・トライデントは名前を変えずに学校に入学した。

私はまさか彼らがこういう現状を知らないとは思わない。だとすれば、彼らはなぜそのままの名前で入学したのかが気になる。

しかし、それでもその名前で入学してくれたお陰でこちらは彼らの行動を安易に調べられる。

今もつとも重要なのは日本に送られた作員達である。

彼らの任務我々の最後の賭けである。彼らが成功しなければ、もう時間は無く、恐れていた事が起きてしまうであろう。

シークレットワールドは禁断の世界。それが世界に晒されてしま

えば、大変なことになる。かつて無い戦争がおこる可能性も秘めている。

彼らはそれを食い止める任務を行っているのだ。

「ステイブンさん、シークレットワールドって何なんですか？」

私は突然の問いに迷い無く答えた。

「その名の通り、機密世界さ」

機密世界。その名の通りの世界であった。

「なんかもう疲れた・・・」

私は学校について早々弱音を吐いた。

何しろ三回もタクシーを乗り換えてここに来たのだ。車の乗りすぎでもうくたくただった。

「だらしないこと言ってるな。とつとと行くぞ。クラスは同じにしておくよう金と紙を渡して頼んでおいたから着いてこい」

「はい」

力なく校門を通りながら私は言った。学校ってなんか面倒くさいな。

服装は案外気につてるからいいとして、なんかスリッパに変えるのとか本当に面倒くさいな。土足で入ってもいいじゃん。

私と蒼京は職員室に行った後、そのまま担任と一緒に教室に向かった。

私の世界にこんな大勢の子供が来るところはないなあ。色んな教室を通り過ぎるときそう思った。

蒼京が私の顔、正確に言えば目を見る。

「そのままでいろ。能力が必要な時は俺が命令を出すから」

小さな声で言ったから、私も小さく頷いた。

その時蒼京の顔に冷や汗があった。本当は私なんかよりも蒼京の方が緊張しているのかな。ちょっと心配だ。

教室から担任が入ってきなさいと命令してくる。私と蒼京は背筋を伸ばして入った。そして前の真ん中歩いて立ち止まり、正面を見

た。沢山の私と同年齢の人たちがいた。

内心、ちよっと凄く感じた。これだけ同じ年の人が集まるのはちよっと難しそうだな。

すると一人、大きな声で叫んだ少女がいた。

「よ、よ、よ、陽介！」

### Third Mission (後書き)

なんかいきなり少女が叫びましたね。蒼京くんの過去がわかるフラグですね。

ところで、最近グーグルが恐ろしくみえてきたのは私だけでしょうか？

読んでくれたらありがとう

## 蒼京と牧野

「よ、よ、よ、陽介！菅原陽介！」  
誰？

「おいおい、いきなりどうした？彼の名前は蒼京諄一だぞ？」

先生のツツコミに皆は爆笑し、叫んだ少女は恥かしそうに頬を染める。なかなか可愛いくて、恥かしそうにしている姿はまた良かったが、その顔にはどこか本気で陽介といっているようでもあった。

蒼京が自己紹介を始めた。

「蒼京諄一です。静岡から着ました」

私も続ける。なんだ入隊する時の自己紹介みたいだ。

「フイ、フイービス。フイービス・トライデントです。出身国は．．．  
．．．えーとイギリスです」

やばい。なんか異常に緊張する。目の前の人たちの目が一斉に私を襲う。

この時なんか男子は男子同士で話していた。それも私を見ながら。時には私を指しながら喋っていた。

「今日からこの二人は君達と共に勉強する仲間となる。仲良くするように。それじゃあ、君達は後ろのあの席で」

私たちは窓側の後ろの席に移る。その席は先ほど叫んだ少女の後ろの席であった。

蒼京は少女を避けて隣に座る。そして私が少女の後ろになつてしまふ。

すっごく何気ない行動で避けたけど、蒼京案外酷い事してるよ。しかも前の少女、『避けたな．．．』って小さな声で言ってるし。なんか私嵌められてる気分だよ。

なんか学校で嫌だな。登校するのに疲れるし、なんか緊張するし、嵌められるし。もうやだ。

そんなこんなで朝の連絡は終わり、休み時間に入る。入ると直後



に前の少女が後ろ向いて私と向き合った。そして睨んでくる。

「ど、どうも」

「ねえ、陽介と同じ学校だったの？」

まだ陽介って言ってる。

「よ、陽介じゃなくて諄一じゃない？」

「そ、そう。諄一。で、どうなの？」

蒼京は私を背にして窓と向き合い読書をしている。逃げた。

私はこの少女の答えてあげないと殺されそう。なんか一般人以上テロリスト以上でやばい気がする。これは止むおえず魔法使うべきなのか？それとも携帯電話で樋口に連絡して航空機部隊を支援してもらうらおうか？最近退役したF．．．．118？117だっけかな？とにかくSCASCがステルス攻撃機を買ったからそれで支援して貰えばきつと助かるはず。電話しようか。

「で、どうなの！」

む、無理みたい。電話できない。

これはやっぱり嘘でもいいから答えよう。

「そ、そうだよ」

さらに質問の追撃が来る。

「そのときの名前は？」

「そ、その前に貴方の名前は？」

何とかこの場を誤魔化そうと聞く。

「私は牧野芳香。ここだけの話、陽介と付き合ってたの」

．．．陽介って多分蒼京の事だよな？ってことは蒼京の元彼女！？

あの蒼京にそんな関係が築けるなんて．．．。この牧野はどんだけ凄いんだろう。というか有りえない気がしてきた。

「．．．ふ、ふうん」

そんなところで授業の時間が来て会話は終わった。

このころ、樋口達は指をくわえて待機している訳ではなかった。彼らは彼らで調査を始めていた。

樋口はまだ何かを感じていた。それはこの任務を受ける際に感じた疑問だった。

なぜスカイプが依頼したのか、である。

Skypeはインターネットで電話をするというプログラムで、世界的に有名なものである。その電話のセキュリティーはかなり硬いものらしく、盗聴は不可能とされている。

そんなプログラムで成り立つ会社がなぜSCASCに依頼をしたのか。

確かに担当局長の意見も正しいかもしれないが、そんな単純なものなもの訳が無いと樋口は高をくくっていた。

しかし樋口にはそれを確かめる術が少なかった。

蒼京と樋口の違いはそこにある。

蒼京の場合、友人にSISやCIA、さらにはモサドやDGSEなどの組織に在るといふ。つまり彼の場合、政府の情報機関の友人が多い。あとは企業の友人や報道関係の友人であるが、それらは樋口もいる。

樋口の場合、アルカイダやカレン民族同盟、コロンビア革命軍、ゴールドントライアングルで麻薬を管理する人間、さらにはリアルIRAなどにも友人がいる。これは樋口が英語をイギリスで学んでいた頃、同時に習っていた人間と仲良くなったところ、その友人達がそういう組織に行ってしまったということが影響される。しかも武器について樋口はよく武器商人に自ら頼んで武器を購入していたために、国の組織の人間よりも柄の悪い組織の人間と接触する機会が増えてしまい、結果こういうような友人ばかりになったのである。

樋口はそのため、テロが発生しそうな場所や、麻薬の回りなどに詳しいが、こういった国と企業の間で起きる問題などにはあまり詳しくない。だから今回の件についても自分ひとりではなんともできなかつた。

インターネット関係はやはり菊地が一番詳しくかつた。

彼の伝の中にはNSAなどの組織がある一方、よく言われるオタ

クなんかとも仲が良かった。

オタクといってもアニメをただ狂ったように追う人たちばかりではない。たしかにそういう柄の人もいるが菊地の持つ友人達はみんなプロ並のハッカーであった。その才能はグループにスカウトされても良いのではないかと疑ってしまっただけである。

このため樋口は菊地と共にインターネット業界に詳しい人間と接触することにした。

樋口と菊地はこのポルノ街を歩く。

秋葉原はポルノ街と外人から言われることもあるらしい。だが実際に歩いてみると常人ならポルノ街が電気街としか見えないだろう。樋口は少々そんなことを考えていながらもチラシを配るメイドに目をやってしまう。

「菊地。お前の友人は本当に信頼できるのか？」

「すつごく信頼できますよ。警視庁のサイトで見つけた人ですよ？」  
菊地は警視庁のサイトをハックしている人間を見つけて接触したらしい。大抵菊地の友人のハッカーはこのような手口で捕まえて接触する。だから菊地はよくそういったサイトをハックするのだ。

樋口は不審な顔をしながら平日の秋葉原を歩く。そしてメイドを見る。

「インターネットに関してはむしろこういった変った人なんかがいから余計に信頼できるんです。高卒でNSAに入る人もいます。いいじゃないですか。だからこればかりは外見を当ててはいけません」

「そんなものか」

樋口の目の前にコスプレをしている女性が歩いていた。彼はそれを見た瞬間携帯電話で写真を取ろうとしたが、警察がいたので諦めた。ちなみにそのときの内心は『死ぬ警察』である。

やっぱり気になるメイド達であったが、菊池はそれらに見向きもしなかった。まるで日常的なものを見るかのような興味の無さで、

樋口とは大違いであった。

しかし菊地の見ていた場所は一つのメイド喫茶であった。そのメイド喫茶は人が少なからず入っており、この不況の中でも少しはやっていけそうであった。

ここでのメイド喫茶は風俗店などとは違う。ここでは観光名所となる。一稼ぎが出来るようになる。

よくここはオタクの聖地と言われるが、もしかしたら経済の聖地かもしれない。ここで売られる製品は飛ぶように売れるからだ。

それはともかく、菊池はメイド喫茶に入ってしまった。樋口としてはすこし入るのに戸惑いを見せたが、とりあえず入ってみたいという好奇心もあつたので入った。

入るとすぐさまメイドが色気を出しながら来た。でもどうやら目的の人間がすでに席に着いていたので菊池は断ってからそちらに向かった。

「こんにちは」

菊池は愛想よく挨拶をすると、向こうも挨拶する。

「こんにちは」

外見から察するに大学生。慎重は俺達と同じくらい。弱冠痩せている感じがしており、顔立ちはまあ普通である。

「久しぶりですね。どうですか？最近アニメを見ていないので分りませんが、面白いものはありますか？」

樋口はこんな会話から始めるのかと思った。

「うーん、やっぱり生徒会とかだね。あとは見てないなあ。それに最近は東方にはまってるし」

「そうですか」

この会話を横で聞いている樋口には全く分らなかつた。というか菊池はオタクなのだと分つた気がした。

「菊地の友達？」

相手は樋口のことを聞いた。

樋口はただ少しだけ愛想をきかせて笑い顔をした。

「先輩です。いつも僕が頼っている先輩だから、今日は僕がおこるって言ったので・・・」

「ふーん」

「あ、先輩何か飲みますか？」

「ケーキでも頼ませて貰おうか。」

「内心樋口は思った。」

「そうだな・・・モンブランが食いたいな」

「ケーキですか・・・」

それでも菊地は頼みを聞いていくれて、手を挙げてメイドを呼ぶ。またそのメイドが注文を聞く際も色気を出していた。

「ご注文は何にしますか、ご主人様？」

菊地はその言葉に反応することなく普通に注文した。まるで慣れているようであった。

「で、用件ってなに？」

「ちよつとSkypeについて聞きたいんです」

相手の表情が変わる。

「なるほどね。そつち系の相談か」

樋口はこの時直感で分った。この男には二つの顔があるのだと。

一つはやはり先ほどまでのオタクの顔。そちら通常の顔だろう。

もう一つはこの何か秘密を知っている顔である。この顔は情報提供者そのものの顔で樋口はこのような顔をいくつも見てきた。

有能な情報提供者かどうかは分らない。しかし菊地にその顔を見せるということは菊地を信頼している証拠である。信頼性はあるようだ。

「スカイプとなると、ちよつと分らないな。俺の専門外かな？俺は基本的に警察とかに侵入する奴だからね」

「そうですか・・・」

「でも、最近アマゾンがNSAになんか媚売ってたな」

「アマゾンというと、あのネット通販の？」

「ああ」

この時菊地はかなり不思議な顔をしていた。なぜならこの状況が全く読めなかったからである。

頼んでおいたキーキとコーヒーが来た。

「お待たせしましたご主人様」

樋口は運び終えたあとそのメイドを見ていたが、菊池はやはり考えていた。

こうなるともはや菊地の方が優秀そうに見えるがそれは周りの環境が環境なので仕方が無いだろう。

「NSA・・・ですか」

ストローで少しコーヒーを飲んで考える。

やはり樋口の勘は正しいのかもしれない。そういう考えが浮かばないわけが無かった。

「なにか心当たりは？」

「いえ・・・全く・・・」

菊地としては他にも意見が聞きたかった。そのためにまずここを出て連絡をとってコンタクトをとらなければ。しかし樋口はまだケーキを食べながらメイドを見ているというある意味しょうもない事態。

菊地は上官をとめなければならぬ。でも、それにはかなりの勇気が必要である。その勇気はテロリストがいるかもしれない部屋に一人で入る以上の勇気が必要であった。

やるしかない。

この言葉が菊地の脳裏に流れた。

「樋口さん・・・。メイドさん好きなんですか？」

この言葉で樋口は我に帰り、次の行動に移ってくれるはずだ。

「あ？まあ好きだよ。あんなのとか。ついでにスカートの中にスベツナズナイフじゃない細い投げげる用のナイフを隠してくれたらもつといいね。メスみたいなナイフ」

ダメだった。完全に失敗だった。

樋口は見かけによらず女に弱かった。坂崎は弱いと言うよりはそ

もそもが女好きだから仕方がないのだが、樋口の場合はこう言うところに来ると案外こうやってばーっと見てしまうのだ。

菊地は渋々単刀直入に言った。

「すみません。次の行動に入りたいんで・・・一度出ましょう」

「じゃあケーキ食ったら」

そう言っつて結局菊地と樋口はここに長くいる事になってしまった。

奴がここにいる事は分つてた。

クラスの名簿を見たとき、奴の名を見て俺は体が締め付けられるような感じがした。

牧野芳香。

奴の名は忘れたはずだった。でも、いざこうやって名を見ると全てを思い出してしまふ。

消して何もかも捨てるなんて無理だった。そう改めて実感させられた。そしてできる事なら牧野に全てを話してやりたいと思った。でも俺は奴と縁を切った。もう奴は俺の彼女でもなければ元カノでもない。俺の頭の中から消えた存在なのだ。

だが問題なのは俺にとってそういう存在であるが、相手にとっては違つと言う事だ。

俺は何とか目をそらすために読書をしていた。その間ずっと牧野は俺を見ていた。

「じー」

「.....」

フィービスは隣にはいるが、男子に囲まれ質問攻めにされている。

フィービスのことが心配であるが、それ以上に俺の立場が危なかった。

「陽介」

反応するな。

必死に自分に言い聞かせた。

「菅原陽介」

反応するなよ。

「ヨースケー」

ここで踏ん張れば何とかなる。

と、思ったが次には普通の名で呼んできやがった。

「諄一」

「．．．なんだ？」

ここで返事を返さないと更なる追撃が重なる。現在の名前を言ってきたのだから一応返事した。

「諄一は確か．．．質素な感じの黒い服が好きなんだっけ？」

しまった。まだ覚えてやがったのか。

「．．．初対面で俺のことを知っているとかな

こう言っておけば何とかなるだろうと思ひ、俺の目線は即座に本に戻される。しかし甘かった。

「私はなーんでも知ってる。案外チヨコとか甘いものが好きな事とか、表情が硬いこととか、勉強ができる事とか」

「そいつは凄いな。あんたは占い師か？」

「違うわ。貴方の元カノよ」

言いやがった。

誰も聞いてないから良いが、こいつ何をしでかすか分ったもんじやないぞ。

「それに隠された事件も知っている」

「そいつどなんだ？」

俺が聞くと、相手は真面目な顔になった。

「殺人事件。貴方の近くで起きたね」

こいつ．．．やはり知ってやがる。

俺がしでかした過去のことを何もかも知っているようだ。  
まずい。

このことは俺だけの問題ではない。下手をすれば担当局長まで報告しなければならぬ。



あの殺人事件がばれればなんとかして警察をおっぱらないとならない。

「ほおそうか。だが俺は今まで豊かな生活をしてな。そういう事件に遭遇した覚えは一度もない」

「嫌なことを隠してる」

「は？」

「嫌なことを隠す時はいつもそうやって逃げる。言ったでしょ？何でも知ってるって」

本気でまズいぞ。

性格から何から何までこいつは知っている。こいつから逃れるにはどうすればいいんだ？

「・・・そうか。本当に占い師のようだ。ところで高見沢はどこにいる？」

こつなつた以上、こいつを利用して目的を果すしかない。

「高見沢？ああ、陽介、じゃなかった諄一の友達の。でも・・・もう帰ったみたい」

「そうか。じゃあ俺も帰る。行くぞフィービス」

フィービスは男子に囲まれながらも俺の声に気がつき、何とかその場から脱走して出てきた。

しかし余計な奴もついてきた。

「諄一。逃げようだったってそうは行かせないよ」

この任務、本気でやばい気がする。

## 蒼京と牧野（後書き）

スカイプを作った人ってハーバード出身なんですかね？わかりません。情報があれば欲しいです。

ところでちょっとこの前フィードを描いてもらったのですが、少々公開しようか迷ってます。どうでしょうか？まあ意見待ってます。

読んでくれたらありがとうございます

最近お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。期待に答えられるよう頑張ります。

## 寄り道

何度も思うが本気でまずい。

牧野はもしかしたら全てを知っている。それが警察にばれたらまずい事になる。

いや、よくよく考える。そうだとしたらもうとつくにばれているはずだ。だがばれていないということはやはり牧野は知らないのか？しかし万が一のことを考えた方がいい。いずれ牧野からこのことについて聞くようにしなければ。

いくら高見沢に容易に接触するためとはいえ、このような危険がいたるところにあったのでは身が持たないな。

それはともかく、今はそれとは少しばかり違ったまずい状況にある。

牧野がついて来るのだ。

俺とフィービスは並んで階段を降りる。その後ろで嫉妬をするように見てくる牧野。これはもしかしたらどこまでもついて来るぞ。

「フィービス」

フィービスは俺の方を向こうとするが、俺は手でこちらを向くなと指示する。俺の体で牧野にはその様子がわからないようにした。

「いいか、この際だ。奴と仲良くなって高見沢のことを聞き出せ」

「や、奴って？」

「牧野だ牧野！」

後ろには聞こえないように静かに怒鳴った。

「とりあえずこの後何処かデパートかなんかに行く。俺とお前はそこで奴と買物でもするんだ。それで奴は遅くなった頃に帰り始めるからそれまで買物に付き合っぞ」

フィービスはかなり驚いたような顔をしてから了解といった。無理もない。突然計画を変えられたのだ。本当ならタクシーに乗って即刻帰る予定であったのに。

俺達は靴に履き替える。同時に振り返るが、やはり牧野は立ち止まっていた。

「ねえ蒼京、どこに行くの？」

完全について来る気満々である。フィービスはその図々しさにもはや怯えていた。

「．．．本を買う」

「へえーじゃあ私が町を案内するわ。ここらへん、引っ越してきてあまりよく知らないはずだよな？」

こいつ、とことん俺を疑っていやがる。

俺は仕方なく頷き、今度は先ほどとは逆に牧野が先頭になって歩き始めた。

「じゃあ行こう！」

牧野は輝くような笑顔で俺とフィービスに言った。．．．その輝くような笑顔に、俺は惚れていたんだよな。

三人は歩き始め、移動した。牧野とフィービスははしゃいでいた。やはりフィービスはこう言うとき素直に嬉しいがるもんだな。

ふと、携帯電話に着信音が鳴る。電話ではなく、メールであった。多分このメールは樋口が送ってきたものだろう。何かしでかしたのだろうか？

携帯電話のパスワードを解除し、新着のメールを見た。

『NSAに知り合いはいないか？』

そう短く書いてある。

NSA。その組織がこの任務中に出てくるということは、樋口はこの任務に何か疑問を感じたんだな。

この任務、どうもおかしい。

高校生でCIAの職員などというのは見る事が出来ない例であり、そんなのは俺達くらいなものだと思うが、それが天才ハッカー、天才クラッカーとなれば話は別になってくる。

そもそもコンピュータ自身普及し始めたのは近年。正確に言えば1992年頃から始まったIT革命からだ。それ以前は大きな計算

機と言われており、触れていた人間も少ないだろう。だとすれば、天才ハッカーなどの類は年が多い人間よりもむしろ若い人間のほうがなりやすくなってくる。更に言えば、コンピュータなどのインフラオメガテクノロジーは急速に発展するものであり、若い方が最新の技術を身に付けやすいのだ。

これが理由で天才ハッカーは比較的皆若い。グーグルは学生が創り出したものであり、スカイプも学生が創り出した。

これらの例はよくある事として近年では捕らえられる。つまり、高校生で天才クラッカーなどというのはあまり珍しくないのだ。

樋口が疑問を感じたのはきっとそこではないはずだ。

俺達は技術者ではないし、コンピュータについて人より知っているが専門家のようにではない。つまり技術的なことや先ほどのハッカーについても詳しくなく、疑問があっても専門家からすればそれは常識レベルの疑問かもしれない。俺達の得意分野はインテリジェンスだ。

樋口は依頼を引き受けるにあたって疑問を感じていた。なぜスカイプが俺達に頼むのかと。

考えてみれば少々おかしくも感じられる。

彼が言うようにNSAに頼めば俺達とは違う確実なやり方でクラッカーを捕まえるだろうし、自からスカウトすることだってできるはずだ。だがなぜ俺達に頼んだのだろうか？

考えられる理由は現地点では検討がつかない。しかし検討をつけるために樋口が動いている。

NASは言ってしまうえばインターネットの作業員だ。そんな組織が今出てきたということは、やはり何かあったのだ。歩きながら俺は文字を打つ。

『いる』

たった二文字のメールを送信し、再びメールをした。

下手にメールを使いすぎると、情報が漏れかねない。そのことも配慮して余分なことを打つのはやめておいた。

「ジョン早く」  
フィービスめ、本気で楽しみにしてるな。

私はこの任務での敵を未だに明らかにしていない。

First Missionでは依頼を受けた地点で敵が何者なのかはつきりしていたし、Second Missionにおいても、最終的な敵は終盤で分つたにせよ、攻撃をする『敵』という存在が序盤にでて来ていた。しかし今回は違う。

今回はかなり特殊である。というのはこの地点では敵がいないのだ。

そもそもスカイプの依頼はクラッカーを捕獲することであった。つまりこの任務は人探しとなんら変わりなく、敵がいなければいいでもいいのだ。

が、そんなことならば先ほど蒼京が思ったとおりスカイプが本人に接触し、大金を渡してスカウトすればいいだけの事である。

それにも関わらずスカイプは半ば傭兵組織のSCASCに依頼し、更には現在注目を浴びている第二小隊を選んだ。これには何か理由がなければ不自然過ぎる。

またNSAに依頼すれば自国の利益を考えて行動するから信頼性に欠ける、という理由は通用しない。これはSCASCにも当てはまり、あくまでSCASCは政府が創設した機密民間警備会社である。当然日本の利益を考えて行動するのが当たり前である。

だとすれば理由は他にあるのだ。

樋口達は蒼京と別行動を取ってそれを追っていくつもりであった。ところで、蒼京は蒼京で別のことを気にしていた。SISについてである。

蒼京は前回の件からSISを気にするようになり、仲間ですら気づかれないように情報を集めていた。

その情報によれば、SISはJAMSTECと接触をしている。二年前に三度。

JAMSTECについて触れるには今は早すぎる。ただ簡単に説明するなら、JAMSTECとは海について研究している日本の組織である。

ここで注目する点はその組織が情報組織ではないことだ。蒼京もそのことを重要視した。

SISは情報組織であり、自国のために情報を司るのが仕事だ。それなのにこの海洋機構と接触するということは、専門的な情報を用供したと言う事だ。

ここまで言えばもう読者も分るだろう。

しかしあえて語らない。なぜならSISの動きについてはこれから述べる必要がある、その動きと共にこの件を明かしていくつもりだからだ。

ファイブス・トライデント、SIS、シークレットワールド、カナリス・ナタード、JAMSTEC。ここまで追い詰めても、まだ謎はあまり明かにならない。ただ読者はSISがシークレットワールドと繋がっていると勘付いているだろう。それについてはつきりといえそうである。

SISは確かに既にシークレットワールド繋がっており、シークレットワールドから人間を引き出す事が出来た。

だが不思議ではないだろうか？そんなことが出来るのなら、とつと魔法使いを集めた特殊部隊を編成し活用しないだろうか？

もしそうなってしまうえばSISは最強の情報機関として名を乗り出すだろう。でもSISはそんなことを一切していないし、それどころか実はカナリス・ナタードを派遣する時ですら、臨時でこちらの世界に引き出したのだ。つまりSISはシークレットワールドに対して遠慮する新人のようであり、無理にこちらに引き出さなかった。

それはただ単に遠慮しているなどと言う理由ではない。無理にしないのにはそれなりの理由があったのだ。

読者はこれを読んでいて何を考えているのか私には分らない。も

しかしたらこの理由というのを考え、その読者の考えが当たっているかもしれない。

だが私はそれでも答えを簡単には与えない。なぜなら、読者の頭を困らせて飽きさせないようにするためである。

この記録は人の印象に残る必要がある、そのためなら私は読者を混乱させることもためらわない。

正義とは何かを問うつもりはないが、私には私の、真実を伝えると言つ正義がある。それを理解してもらいたい。

私はどうやら演技ではなく本当に楽しんでた。

蒼京からは自由に使えと一万円を貰い、そのお金で牧野と色々見ていた。

普段こういふ買い物をする時一緒に行くのはいつも桜井で、他の人たちとは行かない。というよりもやっぱり男つていうことを意識しちゃっているみたい。訓練中の山の中では男女関係なくどこでも排便しているのに。

桜井と買い物しているときはなんだかお姉さん（年齢的にはお姉さんで間違っていない）と一緒にしているみたいでそれはそれで楽しいけれど、牧野の場合はまた違った感じで楽しかった。

化粧品やら、服やら、下着やら、食べ物やら、本やら、色々なものを見たり買ったりした。

私はたまにだけど生まれた世界と比較してしまう。

この世界はなんて凄いな、と。

相場からしてもこの世界の本は格段に安いし、それに容易に手に入る。故郷では考えられない。

そんなことを考えていると、この世界は美しく思ってしまう。夜の光は綺麗だし、高く聳え立つビルも綺麗だ。服だつて格段に違つし、食べ物だつて簡単に手に入れられる。

この人たちもきつとこの世界は凄い、美しいと思っっているに違いない。



でも私はこの世界の実体を知っている。それを考えれば、この世界は醜い。でも誰もそのことに気がついていない様であった。牧野を見ているとそう感じる。だからって気がついて欲しいわけではない。むしろ知らないで欲しい。

彼女の無邪気な姿は私の無邪気さと似ていて、その文字通り邪気を感じない。

もちろん今の私も無邪気で、悪意なんてものを考えていない。でもこの無邪気な顔の本当の姿が兵士だつて知って欲しくない。

「ねえねえUFOキャッチャーやらない？」

「うん、やるー」

蒼京は和んでいるような顔をしていた。

もしかしたら蒼京も私と同じように知られたくないのかな？

どうも蒼京と牧野は本当にできていたようだし、そんな人に人殺しだつて伝えるのはきつと辛いだろう。

あれ、これつてもしかして蒼京の過去を探るには絶好のチャンスなんじゃないの？

蒼京が私に細かいお金を渡す。

「落とすなよ」

「ちよ、ちよつとそんな無理だよ！」

「そついえば、桜井も落としたようだな」

以前秋葉原のゲーセンでの出来事である。確かにあの時は私も桜井も落としてしまった。

「まあいい。やれ」

そう言つて私の背中を押した。そのときの牧野の顔は驚いた顔であった。

牧野は私と蒼京の関係を知らない。多分それが原因だろう。

いきなり牧野が俺を睨む。

「ねえ、さつきから気になつてるんだけど、蒼京とフィービスってどんな関係なの？」

「・・・学校が同じだったただけだ」

それを聞いてもなお睨む牧野。その目には暴力すら感じられた。

「本当に？」

「ああ」

「・・・ふーん」

その時の牧野の顔を見て俺は思わず笑いながら言った。

「信じてないようだな」

「え？」

「疑う時の顔はいつもそれだ」

俺はその時自分の発言がどういうものなのか言った後にすぐ気がついた。

「・・・いつも？」

しまった。あの時の俺の癖が出ている。クソツタレ！

「・・・いや、なんでもない」

「うーそ、本当は昔のことを思い出してたんでしょ。何でもお見通しよ」

牧野の言葉は俺にとってかなりのインパクトがある。奴の言葉はまるで俺の頭に入り込んで見ているかのような鋭さであったから。昔から奴はその鋭さを利用して俺を困らせる。そんなところも彼女魅力であったが、今は彼女の武器だ。その武器は振舞わされたら最悪の事態になるほどの威力をもっている。まさに核保有国ならぬ核保有人物。ソフトパワー上ではそのレベルだ。

俺はなんとか振り切ろうと牧野から視線だけでなく顔すらも方向を変える。すると顔の前に牧野はしつこく現れてしまう。

「かくさなーい」

「・・・ファイブス、取れたか？」

「あ、逃げた」

ファイブスはかなり熱心に取り組もうとしていた。異常のようにも見えた。

「と、取れない・・・」

悪戦苦闘のフィービスの表情は凄く純粹であった。

タクシーは俺達の家から500メートル離れた場所に止まり、俺達はそこで降りる事となった。

牧野とはなんとかデパートで別れた。

フィービスは満足そうに俺の横を歩く。

「あー楽しかった楽しかった」

そんな純粹に陽気なフィービスには少しばかり憧れてしまう。

「まったく純粹でいいな」

「えーそうかなー？」

「俺みたいに純粹にものを考えられなくなるとそう思ってくるさ」  
それより何より樋口達が気になった。

メールでの俺の確認がどうも気になる。樋口は何か情報を手に入れたのであろうか。

とにかく情報が欲しかった。

フィービスはそんなことよりも気になる事があるようだ。

「ねえねえ、牧野さんとはどんな関係だったの？」

また余計なことを。

「・・・言わずも分かってんだろ」

「でもでも！確認してみたいじゃん」

「・・・聞いた通りだ」

「じゃあやつぱり付き合ってたの？」

俺は小さく頷いた。すると予想通り相手は調子に乗り始めた。

「ジュンが付き合ってたなんて本当に意外！だって女とか恋とかいつも無縁のような感じなんだもん」

「過去は無縁ではなかった。今は訳が違う」

「えーそう？また牧野さんと付き合い始めるって線はー？」

その言葉は俺の心の奥地に触れた。

俺はいきなり足の動きをストップさせ、フィービスの方を向いた。  
「付き合っていたのは菅原陽介だ。俺は蒼京諄一だ！」

怒鳴り声はフィービスの心までつき抜いてしまったらしく、フィービスは固まってしまった。慌てて俺は顔を伏せた。伏せたのはこの場を取り直すことが出来ず、逃げたかったから。

「すまん」

ただそれだけ言って俺は歩みはじめた。でもフィービスはその場で固まったまま歩こうとはしなかった。

フィービスは小さく言った。

「．．．どうしてそんなに過去を忘れようとするの？」

その小さな声は俺にとって大きな声であったが、何とか無視しようとして振り返ってフィービスを呼んだ。

するとあるう事がフィービスは走って俺の方に抱きついてきやがった。

俺の反射神経に鈍りを感じる事はなかった、人間らしさというものが反応して俺はそれを受け止めてしまった。

「なっ！」

「このままでいて．．．」

この時フィービスはただ俺に悲しくて抱きついたのではないと思っただ。抱きつかれてから数秒後、体に異変を感じたのだ。

通常なら異変を感じたところで振り払う俺だが、心のどこかがフィービスを信じたのだ。だから抵抗せずに異変を起こしてしまった。

俺の頭だんだん真っ白になってくる。光が．．．光が俺の頭を制御していく。これは．．．一体何なんだ？フィービスは俺に何を？

考え始めるあたりで俺の頭は光の拠点地となってしまう、何も感じる事も考える事も思ふ事も出来なくなってしまう。

## 寄り道（後書き）

すみません。本当にすみません。更新遅れてしまいました。

ところでファイブスは本当は蒼京に何をしようとしたんですか？いわゆる逆レイプですか？

ファイブス「・・・なんでそうなるの？」

だって事実上蒼京の意識をなくしたんでしょ？だったら蒼京はファイブスのもの同然じゃん。もろエロゲっぽくそのままベツトインじゃない。

ファイブス「いやいやいや、この作品エロゲじゃないから。そんな簡単にベツトインとかしないっていかそもそもエロいシーンとかないから」

でも第一級の情報を司る人間はモテるっていうしねえ。第二次大戦中の諜報員のゾルゲは数人妻が居て、駐日ドイツ大使館のオットー大使の妻とセックスしてたしねえ。やっぱりそういう人間ってモテるんだろっからねえ。

ファイブス「そ、そういう例はあっても私は違うから！レイプとかしないから！」

読んでくれたらありがとう

## 忘れない嫌な記憶

目の前の風景が何もかも変わってしまった。

「・・・ここは・・・どこだ？」

ログハウスのような木で出来た家で、テーブルもイスも何もかも木で出来ていた。というよりも、金属類が極力少ないうえに、ランブすらなかった。

端末もテレビも、機械と言ふ言葉すらないように見えた。

俺はゆっくりとあたりを見回す。ガラスの奥の景色を見ると、そこには池と沢山の木々が存在していた。どうやらここは森の中のようにであった。

後ろから聞きなれた声があった。フィービスだ。

「ここは私の家よ」

「何？」

フィービスはゆっくりと言った。まるで過去を嫌がるようでもあった。

「ここはエターナルフォーレスト。その真ん中にある私の家。トライデント家の家よ」

俺はじっくりと部屋を見ていた。俺達の築き上げてきた文化の一つのようにも感じられた。つまり、俺達の世界と変らないように感じられたのだ。

人間、誰もが同じような事を考えるのかもしれないな。そう心の奥で呟いた。

一人の小さな、質素な黒いワンピースを着た少女が出てきた。年として・・・十代前半ごろだろうか。もしかしたらそれ以下かもしれないなかった。

「あれが幼い時の私」

笑いながら少女は無邪気にはしゃいでいた。それを横で静かに母親らしい人間が微笑みながら見ている。なんとも和ましい風景であ

った。

フィービスはその姿を見て顔色一つ変えずに説明する。

「お母さんのサファイア・トライデント。目の色は綺麗なブルーとヴァイオレット。能力は水と幽霊」

「幽霊？」

俺は良く分からない能力だったので思わず聞き返してしまった。

「そう。幽霊達を呼ぶの。人の幽霊は呼べないけど、死んでしまった森の動物達を呼ぶことができたの。．．．いつも動物達と遊んでいたのを思い出すな。みんな楽しく天国に行ってくれて良かった。．．．」

母親のサファイアはフィービス頭を撫でた。フィービスは今も変らぬその綺麗なブルーとイエローの目に光を灯しているようであった。サファイアが何かを言った。俺には良く聞こえなかったが、フィービスの記憶はしっかりとしていた。

「いつも私たちは代々受け継がれていたナイフに祈りをしていたの」あのナイフは．．．確かソマリアでフィービスが俺達に刃を向けたナイフだ。あのナイフはフィービスの愛用のもので、任務のときでも普段の時でもどんな時でも持っている。通りであそこまで手放さない訳である。

そんな時、俺は直感で何かを感じ取った。窓の外を見ると、そこには銀色の鎧を着た三人の兵士達がいた。

俺はこのあたりで嫌な予感を胸に秘めてしまう。しかし、きっとフィービスはその嫌なことを俺に見せたいのだと思う。だから目をそらすようなことはしないと決めた。

ドアが突然蹴られ、勢い良く開けられる。

「おい！サファイア・トライデントはいるか！？」

サファイアはフィービスを急いでその場から離し、自分一人となった。しかし、フィービスはこっそり後ろから見ている。

「私です」

「サファイア．．．貴様、何様のつもりだ？貴様は家族三人分の税を

払っていないではないか』

『夫は死んでしまつて、二人分であるはずですよ。だから私は二人分をきつちり支払いました』

兵士は剣をやたらと見せびらかしていた。

『とかいつて死んでなんかねえんだろお？ちよつと中を拝見！』  
『や、止めて下さい』

三人は家の中にどたと入つてきて勝手に荒らし始めた。

『おー、こんなところに金貨発見！。徴収！』  
『それは！』

と、後ろから出てきたフィービスがあの手を向けていた。

『か、帰れ！』

兵士達はフィービスを向いた。

『わー可愛い子だねー』

男達の目は確実にいやらしい目となつていた。しかし、そんな目をされてもフィービスはナイフを下ろそうとはしない。それどころか振り回して威嚇を始めた。

『この野郎・・・俺達をなめていやがる』

『早く帰つて！ここから出てつて！』

もう涙ながらに叫ぶフィービスは、死との狭間にいることなんて一切考えていなかった。

『早く！早く！』

『この野郎！』

一人がついに剣を振り始めてしまう。それでもフィービスは目を瞑りながらだが、その剣を防ごうとした。更には、自分の能力をおうともう一つの腕を相手にだしていた。

だが、剣は予想外の場所に向かつてしまう。それは、サフィアの方であった。

『お母さん！』

『あーあ。そんな危ないもの振り回すから』

フィービスはナイフを捨てて斬られたサフィアの元に行く。



『お母さん！お母さん！』

声すら出なかった。何も出なかった。

フィービスの涙は、果てしないものに見えてしまいうくらいたくさん流れていた。

兵士達はさらにフィービスに近づく。そして、いやらしい眼差しを向けた。

だが、直後世界は白くなった。何がなんだかわからないが、これがフィービスの記憶であるなら、記憶が途絶えたのだ。

「この後のことは覚えていないの。でも、気が付いたら三人は死んでいて、骨すらも消えかけていた。なのにお母さんの死体は傷が消えていて、私は家の近くに埋葬したの」

俺は白い世界でただただぼーっと立っていた。

フィービスの記憶と無意識に俺の記憶が重なってしまふ。

フィービスは確かに人を殺していないし、俺みたいな死刑囚にはならない。それでも俺と似ていた。母親が切り殺されたところで、俺は父親の死体の前で泣きながら死ぬ双子の兄を思い出した。

そして同時に俺は、フィービスに疑問を持った。

どうしてこんなに辛い出来事を記憶し、人に話せるのだろうか？俺なら絶対にできないことであつた。俺はあの出来事から逃げて逃げて未だに逃げ回っている。訓練が行われた時から、菅原陽介は死んだと自分に言い聞かせていた。でも心の奥では逃げているだけだと分かっていた。

フィービスは．．．もしかしたら俺なんかよりも凄く強い娘なのかもしれない。

そこで世界は再び途絶えた。

気が付くと今度は先ほど抱かれた直後の風景に戻っており、暗い町にいた。

フィービスは俺の中にくたばっていた。目を閉じて気持ち良さそうに寝てしまっていた。奴は、俺にこれを伝えるために全力を尽くしたのかもしれない。ありがたい限りであつた。

しかし、俺はフィービスの耳元で呟いた。

「ごめんな」

俺はまだ逃げる。逃げなければ潰される。過去の記憶に。

私がこのことを書くうちに、この作品には不明な点が多いことに気が付いた。

私はどうやらこの作品を進めて行くうち、明かしていったのは任務についてとシークレットワールドについてだけであったようだ。つまり、登場人物について一切触れる事がなかったようである。

しかし登場事物について触れるには早すぎる。また、この場を使って触れることではない。

彼、彼女らについては彼、彼女ら自身が口をわけることを期待するのが一番である。私はそのときその説明を加えるつもりだ。

そのため今はここで触れないとする。が、先ほど口をわった場合説明を加えると書いた。そのため、このフィービスと蒼京について触れておく。

サフィア・トライデントの他界はフィービスが十歳の時。サフィアは父、ガザスリーン・トライデントの遺言に忠実であった。

父であるガザスリーンはサフィアよりも三年早く死んでおり、彼の死はトライデント家を大きく変えた。というよりも、彼はトライデント家の一本柱であった。

そもそもトライデント一族は名誉ある一族であった。ただし、貴族ではなく戦士である。ヨーロッパ史を見ると、戦士が地位を上げたという時代があったようである。これと同じようにフィービスの世界、仮定上、シークレットワールドにもその傾向が見られた。

トライデント一族は過去に英雄的功績を納め、そこから貴族並の資産と権力を手に入れた。だが、トライデント一族は権力と資産を捨てるという選択を選んだ。権力を捨て、エターナルフォーレストへひっそり住み、資金は平民に寄付をした。しかしながらそのことが更にトライデント一族の名誉を上げ、いつしか平民の憧れにもな

っていた。そのため、フィービスが一人になっても人々は彼女を支えた。

現役の兵士達にとっては逆である。彼らの間ではフィービス一族ほど陰謀めいた悪党はいないと評判であった。というのも、兵士側から見れば、トライデント一族は権力をどんどん上げていき、しかも寄付をして権力をさらに上げたという権力好きであった。だからトライデント一家は兵士達の嫌がらせを受けて当然でもあった。

ガズスリーンはその嫌がらせをがんとした強さで跳ね返していた。彼の目はブルーとイエローというフィービスと同じもので、能力の違いは電気ではなく精霊を呼ぶことだけであった。

精霊を呼ぶ。その能力は兵士達の恐怖であり、そのために彼らは黙っていた。

が、ガズスリーンがついに病死してしまうと、兵士達は早急に嫌がらせを始めるようになった。無論ガズスリーンもこの事態を予測していた。だから遺言には『この家に絶えず精霊の光を満たす』と書かれていたのだ。

この遺言にはサファイアの能力が必要であった。サファイアのヴァイオレットの目である。

このヴァイオレットの目には幽霊ともう一つの能力が秘められていた。それはガズスリーンの能力に劣らないものであり、それを容易に使えば大変なことになってしまうものであった。サファイアはその力を少しばかり使い、兵士達を脅したのである。兵士達はサファイアの能力がガズスリーンと同じだと思い込み、誰もが恐れた。

問題はフィービスであった。

ガズスリーンとサファイアはフィービスに一切その危険な能力を見せなかった。見せてしまえば、フィービスは恐怖に怯え、自分も同じ能力を持つことを知って自殺しかねないからである。二人はそのため能力をあまり使わなかった。

その結果、時間と共に兵士達は調子に乗り始め、フィービスの前なら怖くないと学び、嫌がらせを開始した。

嫌がらせの最終段階がファイビスの悲劇になったのはもう言うまでもない。だが不思議とこの後トライデント家に近づかなくなったのは何故であるのか？

ファイビスには秘められた力があつた。それはこのトライデント一族が引き継いだ最強の能力である。だが不運にもその能力の使い方を知ることがないままになってしまった。だから彼女は気がついていないのである。サフィアが死んだ直後、自分に何がおこったのか彼女は分かっていなく、記憶がないと言っているのだ。

さて、ファイビスについては今はここまでしか触れる事ができない。後々このことが重要になっていくからだ。

蒼京は寝てしまったファイビスを抱えて帰宅した。話はそこからにする。

樋口と菊地はコーヒーを飲む。

「で、どんな奴だ？」

樋口は容赦なく俺に聞いた。対する俺もコーヒーをすすりながら腕を背もたれに回しながら応答する。

「以前日本人のメールを見たいと言ってCIAから紹介して貰った人間だ。年齢的には三十くらいで、少々痩せているな。性格はお人よし。俺が声を掛ければなんとかなる」

俺はNSAの人間を紹介した。

樋口が俺の代わりで現在部隊を任されている。そのため、俺は樋口に助言や人材の提供くらいしかできない。

彼が何をしているかは全て聞いた。今日秋葉原で聞いた事などだ。そこから俺も樋口と同感であつた。

この任務、何かがある。

個人的には自分も情報収集をしておきたいところだが、目の前の任務を見失うわけにはいかない。

「にしても．．．なんでファイビスは寝ちまつたんだ？」

「さ、さあな」

少々しどろもどろになったところを坂崎に見られてしまった。

坂崎はフィービスが寝ている点で興味津々であった。それに対して俺の言い訳は凄く曖昧で、聞いた側からすれば、どんな妄想をしてもおかしくない。奴の事だから、きつとくだらないことを考えているに違いない。もっとも、彼女と抱き合った地点で奴の考えに近く、凶星のようであるが。

「もしかして．．．公園のトイレでやったのか？」

坂崎の言葉は予想通りであった。

「お前は入隊前そんなことしたのか？つーかそれが原因でこんなところに来ちまったのか？」

「馬鹿野郎。俺はレイプ魔と間違えんな。で、なんでフィービスは寝ちまったんだあ？この事実からは逃げられんぞお」

「あー、俺もその点気になるな」

樋口まで真相に興味をそられてしまったらしい。菊地はこう言うときどちらの味方につくか困り果てる。

「で、どうなんだよ」

坂崎と樋口の声に、俺は押し黙り、仕方なくそのまま時間を待つと、救いにも桜井が来てくれた。

「あーらそこで女の子に聞いちゃいけない下ネタは駄目だと思っ

ー

「聞いているのは男の子とその息子だがな」

桜井に向かつて早速下ネタを使う坂崎。桜井は坂崎の顎を二本の指で掴む。

「あーらそんな事ばかり言っていると、私とできなくなるわよ」

「．．．」

流石に今度は坂崎が押し黙ってしまふ。彼女の顔は不敵の笑みであった。

俺はその会話の隙を見てこの場を後にした。

なんだっただらう。

私は蒼京の中に入ったとき、とてつもない力が私と触れた気がした。そしてその力は私にこんな感じの事を言った。

『懐かしき光の戦士よ』

本当は途切れ途切れの声であったが、繋げると確かにこう言っていた。

光の戦士。なんでそんなことを言われたんだろう。

私の能力は光であるし、もしかしたら光の戦士とは私のことかもしれないけど、なんで蒼京の中でそんな声がしたんだろう？

でも元をたどるとこの能力もちよつと変だ。なぜなら私の目とは一切関係のない能力なのである。

私は人の中に入る事が出来る。たしかここの言葉を覚えるのもそうやった。距離的には抱きつかないと完璧に人の中には入れないけど、ちよつと離れているくらいならその程度はできる。でも、この能力がどのような属性なのか未だに知らない。

以前お父さんとお母さんにこのことを言った。すると二人は分からないと深刻そうな顔をして言ったのだ。人を疑うことを知った今だからこそ私は思うが、あの時二人は何なのか知っていたのかもわからない。でも、もうそれは後の祭り。今となつては二人は死んでしまったし、そもそもお墓参りすらできない。

今更この能力に疑問を持っても仕方がなかった。

でも、あの時の強大な力については知りたい。どうして蒼京の中にそんな力があつたのか分からないし、なんで私を光の戦士と呼んだのかも分からない。

私はあの強大な力によつて体力を消耗させられた。そのため恥かしいけど、蒼京の胸の中で眠ってしまった。

そのことを考えると今でも顔に火が付きそうだけど、やっぱりあの力は気になる。

「うーん」

ベットの中で唸る。

考えても仕方がない。頭の中でそう結論づけてしまった。

「それにしても・・・」  
明日起きた時、坂崎あたりから何か言われるだろうな。私はそっちの方が心配事であった。

深夜。私は友人にメールをした。

『蒼京諄一って子とフィービス・トライデントって子についてどう思う？』

ためらいなく送信ボタンを押すと、相手は早くに返した。

『うーん、フィービスさんはなんかイギリス人っぽくなかったね。』

蒼京は・・・なんか菅原に似てたな。』

やっぱり。私の感覚は狂っていないかった。

あれはどこからどう見たって菅原陽介。それ以外にはありえない。私は高見沢のメールを見て確信した。

返事を急いで打ち込む。

『やっぱりそうだね。陽介だね。なんで蒼京諄一なんて名前を使うんだらう？』

半ば興奮しながら私は送信する。また陽介といっしょにいられる、なんて考えると、少しいても立ってもいられなかった。

返事が返ってきた。

『あれだよ。やっぱりあの時の事件を隠したいんだよ。家族みんなが自殺しちゃったんでしょ？あの菅原でも絶えられないさ』

家族全員自殺。陽介の家に入ったとき、見慣れた彼のお父さんの死体やお兄さんの死体が転がっていた。あの時の衝撃は忘れられない。でも、あの時陽介の死体がなかったのはちよつとした希望であった。

陽介は生きている。この世界の何処かで。

私はずっとそう信じて生きてきた。だから私はいつか彼が帰ってくるのを望んだし、彼氏も作らなかつた。

彼は帰ってきた。蒼京諄一という別の名前だけど、彼はきつと菅原陽介に違いない。絶対にそうだ。

『じゃあどうやったたら自分が陽介だって白状させられるかな？』

メールを送信。そして返ってくる。

『ちよつといい考えがあるんだ』

興奮しながら打ち込み、即刻送る。

『どんな？』

相手は次に短い返事した。

『内緒』



忘れない嫌な記憶（後書き）

更新が遅くなって本当にごめんなさい。

実際フィービスとしては蒼京の胸で寝るのは嬉しかったの？

フィービス「・・・うん」

そのままベットで抱かれたかった？

フィービス「そこまで言っていない」

読んでくれたらありがとう

## クリスマス思い出

私はタクシーから降りて歩き始める。

蒼京とはちよつと話ずらかった。でも、昨日のことで何が言いたかったのか私は言っていなかった。それを言わなければならない。

「昨日の事だが・・・」

予想外、蒼京の方から話し掛けてきた。

「お前は、あんな辛い事を・・・覚えていて。それどころか、人に話すことが出来る。だから、俺もそうすべきだと言いたかつたんだよな？」

蒼京は占い師のように当ててしまった。私は頷く事しか出来ない。「だが、すまん。俺は・・・蒼京諄一だ。菅原陽介なんて知らない」

「ジyun・・・」  
「すまん」

私は蒼京の中に入っても過去だけは見ないと決めていた。その過去は、蒼京が心開いた事で明かされるべきことだし、私が見たのはそれ証拠にならない。蒼京に心を開いて貰いたい。好きな事は好きって言って、嫌な事は嫌って素直になってもらいたい。それが私の願いであった。

私たちが校門の近くに行くと、一日で顔が馴染めてしまった牧野に出会った。牧野の隣には、身長が少々高い男子がいた。顔はハンサムで、蒼京とは違った魅力の持ち主だと思う。ちなみに蒼京は・・・  
「かっこいいけど固い。」

二人はにこにここと笑いながら私たちを迎えた。なんか凄く怪しい感じである。

「おはよう、蒼京君、フィービスさん」

蒼京の顔を見ると、蒼京は目を細めて少しばかり陰しい顔になっていた。なんでなのかよく分からなかったけど、もしかしたら牧野

同様旧友なのかも知れない。まあ彼女との関係は友人以上のものがあつたみたいだけど。．．．なんか悔しいなあ。

それはともかく、蒼京は返事をした。

「ああ。二日目にして俺の名を覚えているとはな」

「牧野からメールで聞いたからさ」

隣の牧野は頷きながら笑っていた。私たちは校内に入り始め、階段を上がって行く。

「フィービスさんも」

私もちやんと挨拶を返す。

「お、おはよう」

返すと突然相手が話題をふってきた。

「フィービスさんってイギリスから来たんだよね？」

「う、うん」

「それにしては日本語が上手いんだってね」

「ま、まあ、日本での生活も長いから．．．」

実はこの手の話をされるとかなり困ってしまう。

桜井と坂崎に色々と私の過去の設定を決めて貰ったのだが、どうも不安であつた。私はそのイギリスという国に行った事がないし、そもそもこの世界に来てまだ一年も経っていないからだ。

ところでこの人誰だろう？

「あの、名前は？」

ちよつと気まずそうに言うと、相手ではなく牧野が答えてくれた。

「こいつは高見沢」

「こいつとは酷いなあ」

「高見沢君．．．」

あれ高見沢って．．．。

蒼京を見ると、顔に手を当てて呆れ返っていた。やっぱり、この人って対象？

だからさつき蒼京は険しい顔をしたのか。

でも対象がここに居たとして、どうすればいいんだろう？私は即

座にそのことを蒼京に尋ねようとしたが、蒼京の顔は聞くなという顔であった。

「どうしたの？フィービスさん」

爽やかな顔と爽やかな声で聞いてきた。なんだか輝かしい。

「な、なんでもないです」

牧野が私に寄ってひっそりと話す。

「もしかして、好きになった？」

私は慌てて否定する。

「なっていないってないってない！」

「へえー」

なんだか牧野は私を凄く疑っているみたいだ。なんだか嫌だなあ。私たちが教室に入ると、まず高見沢の席を確認する。それくらいしないと後で蒼京に殺されそうである。冗談抜きで。

高見沢の席は、教室でも真ん中で、弱冠私たちの席から離れている。座っていると私の席からはなんとか彼が見えるくらいで、何をしているかまでは良く分らない位置である。まあ実際問題、前にいる牧野も何をしているか分からないんだけどね。

牧野は荷物を置くと、後ろを向いて私と蒼京に話し掛ける。

「ねえ、明後日の放課後空いてる？」

私がつい、うんと返事をしてしまいそうになるけど、蒼京が先に喋り始めたので容易に返事をしなかった。

「なぜだ？」

「ちよつと行きたい所があるの。ほら、明後日はクリスマスでしょ？」

クリスマスってなあに？クリスマスってなあに？

そんな言葉に乗せた視線は蒼京に向けられるが、完璧に無視されてしまう。

「．．．他に誰か来るのか？」

「うん。高見沢が」

それを聞いてやや蒼京の反応が変わったのが分った。

「分った。まあいい。どうせ暇だ、行こう。なあフィービス？」  
「フィービスも行くよね？」

二人の視線にはなにかものすごい気迫があった。

片一方は何か冷静な判断で命令を下すような気迫。もう片方は何か計画があつてそのために誘導する気迫。どっちもなんだか拒否できないくらいに怖い。

私はことごとく頷く事しか出来なくて、結局行く事になった。  
ところでクリスマスって何？

俺と菊地は蒼京から紹介されたNSAの人間を招き、情報交換をした。

実はこの地点で俺は少し何か思う点があつた。というのは、NSAの人間がこうも簡単に招く事ができたのに疑問があるのだ。

蒼京の紹介した人間はわざわざアメリカから来たのだ。普通ならそんなことはしないはず。話を聞きたいなら来いと言って来るのが普通だろう。それなのにわざわざここに来たという事は、やはり何かあるのだ。俺達に何か聞きたい事があるのだ。

思い当たる事といえば、今回の依頼の件がフィービスの件だけである。

依頼の件ならいいのだが。

「蒼京さんの部隊の副隊長ですね。よろしくです」

相手はこの前と同じく若い男性であつた。ただし、若いといっても二十半ばというところである。

「ええ、よろしくです」

「あ、蒼京二尉の部下の菊池大刀です。よろしくお願いします」

俺達は握手をして座る。座ってから少し水を飲み、早速本題に入る事にした。

「実は今、我々はある任務を依頼されていまして、その件に関する情報が欲しいのです」

「それはきつとコンピュータ関係の情報ですよね？」

「え、ええ」

NSAの要員から情報を貰うということは、基本的にコンピュータ関係の情報であることなど考えればすぐに分る事だが、俺はそれでも少しばかり動揺してしまった。

話はここから相手の手で進められてしまう。

「最近こちらも色々忙しくなっていますね。仕事をしていくうちにあなた方の部隊名が出てきたんですよ」

「そうですか。つまり、我々はあなた方の視界に入っているということですね」

視界。つまり、NSAは俺達の行動に気を配っているという意味である。

相手は少しばかり挑戦的であった。自らの口から自分達NSAの行動内容の一部を告げたのだから。

が、俺はもう動揺はしなかった。あまり挑戦にのってしまうと痛い目をみるからだ。

「鋭いようで。まあその通りです。だからこそ今回わざわざここまで来ました。事態は案外深刻ですね」

「深刻？」

聞き返したのは菊地であった。

「ええ。貴方の耳にも入ったのでは？現在IT企業等は安全を確保に忙しいと」

ここでなんとなく今ある情報をこの証言の根拠として位置付けてみた。

あのオタクが言っていた、アマゾンがNSAに媚売ったというのが本当だとし、その理由が安全確保のためだとすれば、確かに話の辻褄があう。

とすればどこの企業も何かすら安全確保をしているはず。でもなぜ？

菊地はこの疑問点に俺よりも早く気がつき、迷わずに聞いた。

「何が起きているんです？」

「戦争さ」

「戦争？」

「そう、サイバーウォー」

菊地はどうやら戦争という言葉に過剰さを感じたらしい。だが俺は違う。俺はこれが戦争といわずなんと言っののだと思う。

頭で考えれるとかなり大変なことになっていると感じる。IT企業が案全確保のために行動を始めたとなれば、相当の数の企業が組織に媚を売るために何かをしている。それが金であったり、組織への協力であったりと様々だろうが、組織はかなり儲けを貰うようになる。つまり、この事態によりインターネット関係の組織は強い順に儲けを貰っているのだ。まるで公共事業のようである。これは日露戦争のバルチック艦隊の世界一周のような出来事だ。バルチック艦隊は世界を一周し、そのために様々な企業が儲けを貰った。中でもドイツの石炭を売る企業はかなり儲けた。今回は儲けたのは俺達のような警備会社や、組織であるが、ただバルチック艦隊の時と状況が逆なだけである。

これは過去の戦争と同じだ。だとすればバルチック艦隊は何なのだ？

「誰が戦争を意図している？」

俺の口調はけわしいものになっていた。対する相手は顔を前に出した。

「条件があります」

「何だ？」

「ファイブス・トライデントの身柄をこちらに渡して欲しい」

「．．．すみませんが、そんな者は知りません」

「NSAは全部知っています。今何がどうなっているのかも」

「．．．」

菊池が俺と相手の目を見ていた。俺の答えを待っているのだ。

俺はファイブスを売る気にはなれない。これは部隊の誰もが思っていることだからだ。蒼京は間接的とは言え彼女を売ったが、現在

あいつはファイビスの謎解きをしている。俺達にもばれないように人で謎解きをしているのだ。それであるのに彼女を売るのはやはりどうかと思う。

相手は問い詰めたという満足感で一杯の顔をしていた。俺は問い詰められたと言う顔だろうな。

「さあどうします？」

こいつの狙いは端からファイビスだったのか。だとしたら、蒼京は人選を間違えたな。

「ファイビス・トライデントか．．．。」

「そう、ファイビス・トライデント。CIAの情報では十代半ばの女の子。顔は東洋人のように可愛く、胸もほどほどにあり、お尻が小さい。スラツとした感じの美少女」

多分これはCIAの情報ではなく、独自で調べた情報だろう。このレベルに来るともはやストーリーカードだろう。訴えたら即刻有罪になりそうである。

状況が分らないことほど怖いものはない。言ってしまう俺達は暗闇の中の状態でこの任務をしようとしているのだ。そしてそんな中、暗視装置となるこの人間は、俺達の大切なものを奪おうとしている。暗視装置の代償が仲間の身柄。俺はこう答える事しかできなかった。

「ファイビス・トライデント二等兵か．．．。」

二等兵と階級をつけて言うと、相手はついに参ったかと思っただろう。満足そうに笑みを浮かべていたのが良く分ったが、俺の顔はかなり悲しい顔であった。

「彼女は戦死したよ」

笑った顔だったのがいきなり変化した。相手は目を大きく開き、疑った。

「戦死？そんなはずは．．．。」

「昨日のことでした。任務から帰宅中、ライフルで狙撃されました」  
「そんな急な話が．．．。」



「今や彼女はどこの組織にとっても脅威となる存在です。狙われるのは当たり前だったのです」

相手は急に慌て始めた。もしかしたら、いやきつとこの戦死というのが嘘だと分っているのだろう。でも、分つていても意味はない。なぜならこの嘘は情報交換の失敗を告げていたからだ。

俺はこの場から手を引くことにしたのだ。

「魅力的な話でしたが、どうにもすみません」

俺の冷たい声に相手は黙って立ち上がるしかなかった。でも、立ち上がりずに慌て始めた。

相手はわざわざここまで海を越えてきた。それなのに手ぶらで帰って来るのは致命的であったのだ。

「フィービス・トライデント二等兵の件は諦めて欲しいのですが、代わりにここ日本で活動しているハッカー達の情報を我々が仲介してあなた方に伝えるというのはどうですか？」

弱冠声が震えていたが、そんなことを言ったのは隣にいた菊池であった。

菊池は日本のハッカーに対して有力な人間である。前回の件見てもそう見えるが、俺は個人的に気になってこいつを調べてみると、どうやら深い絆でハッカー達と通じているようだ。

菊池なら仲介するのは簡単であった。

相手は考え始めた。慌てながらもじっくり考えていた。

コップに入っていた氷が溶けてなくなりかけている。

「・・・いい、でしょう」

相手は少々不満足そうに口を開いていた。フィービスについての情報を手に入れ、手柄を取ろうとしたことを考えれば、今度の交換条件は満足に値しないだろう。

欲張ってばかりでは、結局は何もかも失うかもしれないという事だ。

菊池について語っておく必要があるようだ。

菊地は日本のハッカー達と交流を深めていただけではなかった。前回の会話からすると、アニメの話で繋がっているようではあるが、実際は違う。前回のあのハッカーにしても本来は強力なハッカーであり、幾つか機密事項も知ってしまったている。

実は菊地はそういった危険要素のあるハッカー達と接触を頻繁にしていた。

そもそも入隊時、彼はシギントを専門とする要員として訓練された。無論戦闘についても行っていたが、どちらかといえばシギントが専門である。しかし、訓練が半年ほど過ぎると実戦訓練を与えた。SCASCの訓練はかなり急速に終わらせてしまう。人材が少なすぎるからだ。その対策として一通り訓練が過ぎると実戦に投入させて経験を積ませるという処置が行われている。実戦で死亡しなかった場合、訓練生はどの点について問題があったかなどを考えさせられ、自らその問題点を克服するために訓練を志願するのだ。

菊地も同じように実戦を与えられた。しかし、実戦の内容は直接生死に関わる事の無いシギントについてであった。彼は見事にそれをなすことが出来、実戦を与える側も彼の实力を知るようになった。すると今度はシギントとは離れ、ヒューマニズムな任務を与えたのだ。

その内容が『ハッカー達と連携を取れ』というものであった。

この実戦にはわざわざ本部からの声がかかり、分っているだけの日本のハッカーリストが菊地に渡された。

すると菊地は一人一人尋ねていき、交流を始めたのだ。本部からの声があったとして自由に資金が使えるようにもなった菊地は、いわゆるオフ会を開き、ハッカー達を丁寧に持て成した。するとハッカー達は易々彼を信頼しはじめた。そして彼はそこで呼んだハッカー達で一つのチームを立ち上げたのだ。

チームにはリーダーとなる中心人物はいないものの、このチームの違法行為を菊地が全てガードしたために彼の言う事は皆積極的に聞くようになっていた。無論、それは封建制度のような御恩として

最初のハッカー達はこのチームに入るように友人の有力なハッカーを連れてきた。これがチームを大きくする理由になり、SCAS Cが把握していなかった膨大なハッカー達をチームに集めてしまった。

このため菊池はハッカー達に名の聞いた存在であった。全てのハッカーがこのチームに居るわけではないが、このチームはかなり有力な存在である。だからこの面では彼は最強の存在ともいえた。

ただ、チームに覇気がないせいか、普段はあまり違法行為をしないうためにあまり知られていないのも事実である。そういうことを考えると、菊池の階級があまり上がらないのは仕方の名ことかもしれない。

さて、NSA要員の話伝える。

話によれば、現在インターネット上から様々な会社が消えているようである。

これは一部のハッカーの集団による活動が原因らしく、これを機に企業が組織に助けを求めているようである。

しかし、その集団というのがあまりの大人数だそうで、集団の中の一人を捕まえると多数が怒りをぶつけてくるために組織も容易に手を出せないようになっていらい。

集団は世界各地に広がっており、活動を止めるのはほぼ不可能と見ている。そのため、企業は止める事よりも安全を確保することを考え始めたのだ。

ハッカーたちが行っているのは具体的にはグーグル八部などである。つまりその企業のサイトを検索から排除し、アクセス方法を限りなく狭めていくことである。それを行うことによって大ダメージを受ける会社は多く、グーグルやマイクロソフト並に大きい会社でなければ組織に頼るしかなかった。

スカイプは実は蒼京達意外に安全確保のために行動をしていた。しかし、それでも依頼を中止してほしいということは言っていない。となれば、どうにも行動が怪しいのは言うまでもなかった。

樋口はそのところを頭に入れながら、じつくりと考えていた。

数日、正確には四日が過ぎた。

俺とフィービスは比較的クラスとも馴染めてきた頃であった。同時に、クラス内での対人関係というのも把握できた頃である。

今日はクリスマスで、約束通り放課後をあけて四人で電車に乗った。向かった先を二人は言わなかったが、大よそ予測がついた。

「後樂園か」

呟くにつこりと牧野が笑う。

「そ。東京ドームに行こうと思うの。混んでるから急がないといけないけどね」

「よくまあ混んでるところを行くな」

俺が呆れた苦笑をすると、牧野はちよつと目を落として一瞬暗くなった。

「陽介と．．．行った所なの」

俺はその言葉を聞いて忘れようとしていた記憶が脳裏を横切ってしまう。そうであった。昔、俺が犯罪を犯す前の年のクリスマスに牧野と二人で東京ドームのアトラクションに乗った。

いくら忘れようとしても、どうやら大切な思い出では絶対に心に残ってしまうものらしい。

あれが初めてで最後のデートになったのは、思い出したくない。

フィービスは俺の意識が少し遠い何処かに行ってしまったように見えたらしく、裾を引っ張って意識を呼び戻した。

「どうしたの？」

「．．．いや、なんでもない」

高見沢は俺とフィービスに突然大変なことを告げる。

「あー黙ってたけどね、今日は混んでると思うから二手に別れようと思うんだ。だから、蒼京さんと牧野。僕とフィービスさんで行動しよう」

俺とフィービスはぽかーん、と口をあけてしまった。

そんなこと聞いてないぞ。

即座に反抗しようとしたが、直後、牧野が俺の腕に組んできて全く抵抗をできなくさせた。

「いいよね？」

「．．．分った。ファイビス．．．分ってるな」

ファイビスは一度びくんと体を震わせて、俺の方を向いて頷いた。そして右肩に口を近づけて小さく喋った。

『う、うん』

制服の肩に入れておいた無線は健全のようだ。ちなみに俺にも同じようについている。

俺達は地下をでて、すっかり暗くなってしまった地上に出る。でも暗くなっても人口の光がまぶしかった。

「じゃあ別れよう。後で合流ね」

高見沢はファイビスと共に行ってしまい、立ち止まっている俺達二人を置いていってしまった。俺はこれからどうすればいいのか分らず、歩き出せずにいた。

でも牧野は違った。

「さ、折角だし遊ぼ。ま、最初は混んでないうちからご飯よね」

「はあ。まあ俺も折角だからおごってやるよ」

そんなこんなで俺達はやっと歩き始め、始めにレストランに向かい、その次にあまり混んでいないアトラクションに乗った。

早く着たとは言え所詮放課後であったのでほとんど乗れるアトラクションも無く、まあジェットコースターに乗れたのが奇跡のように思えた。

牧野は俺の隣で大きな悲鳴を上げ、俺は平然としていた。こんなもの、戦闘機に比べればなんともない。

でも牧野の悲鳴に吊られ、ついつい俺も叫んでしまう。

「クソツタレエ！」

まあこう叫んでしまったが誰も聞き取れる事はなかったに違いなし。ちよっとしたノリである。

ジェットコースターに降りると、あれだけ悲鳴をあげたのにも関わらず俺の声を聞き取っていた牧野は、爆笑しながら俺に言った。

「なのであの場面でクソツタレなのよ！」

「だってなんか．．．いいじゃねえか！」

「なーんにもクソツタレじゃないじゃない。あはは、あーおかし」

こいつ変なツボにはまったな。爆笑が止められない牧野は、俺にも笑いをもたらし、またもや吊られて笑ってしまった。

こいつ、今も昔も変わらないな。素直にそう思った。同時に少し安心した。

俺があの時消えても、こいつは変わることなく悲しみから耐える事ができたんだな。一番心配していたことが、どうやら解消されたらしい。

まだ少し笑っている牧野は、俺の腕を組んで歩み始める。

「ささ、行こ」

「今度はどこだ？まさか、俺の財布を当てにどこか行こうって訳じゃないだろうな」

ちょっと俺も調子に乗り始めたようで、そんな冗談を言う事ができた。相手は微笑んで内緒、という。

ジューズを一本買い、牧野に誘導されながら歩いていくと、いつの間にか東京ドームから離れ始めた。光で包まれた地域から離れていく。

「おいおい。本当にどこに行くんだ？」

ジューズを飲みながら聞いても、相手は微笑むだけである。

でも、この道はどことなく懐かしい感じがしていた。

懐かしい理由をたどってみると、どうにも引っかかる記憶が見つかる。多分この分だと、こいつが行く先は．．．。

「うーんやっぱりまだ侵入できるみたい」

向かった先にたどり着いたのは、以前俺と牧野で侵入して屋上に行ったビルであった。

「ビビッてないでしょ？行こう」

俺の腕は解放されておらず、そのまま一緒に侵入させられる。

俺としてはここにはあまり来たくない。全ての記憶を呼び覚ましてしまうからだ。

そんな心情をお構い無しに、俺達を乗せたエレベーターは屋上まで上がっていく。その間、二人は沈黙の中にいた。

沈黙はいつまでも続くように思えてしまった。なぜなら、屋上に来てもしくは牧野は喋らなかつたからだ。俺としてもあまり喋りたくはなかつた。

ここに改めてくると、やっぱり全てを思い出してしまった。ここで起きた、幸せの一つをも。

突然、牧野はいつまでも続くと思われた空気を破る。

「・・・陽介とここに来て、ずっと町を見ていたんだ。ばれて怒られるんじゃないかって、あの後思ったけど、そのときは何にも考えてなかつた」

「・・・」

牧野は月の光と町の光に照らされ、いつもよりも綺麗に見えた。

俺はそんな牧野を、あの時も眺めていた。ただ無言で。

今度も無言で眺めていたが、またも牧野は言う。

「ねえ、キスして」

「・・・知り合つてまだ四日にしては早い展開だな」

平然とした態度で言つてキスを回避しようとしたが、相手には効いていなかった。

「それでもいいの。私ね、ここで彼とキスしたの。その記憶がずーと残つてて、それを希望に今まで生きてたの。陽介は生きている。

だから、いつかまたここで同じことをするんだって。だから・・・」

「俺は陽介ではない」

「分つてる。でも、似てるの。何もかも。だから、クリスマスプレゼントだと思つてお願いを聞いて」

本当は俺は何もかもをこいつに言つてあげたかつた。俺が何をしでかしてしまい、どうしてここに立っていられるのか。でも、それ

は不可能なこと。だからせめてこいつの助けくらいにはなってるや  
りたかった。

俺の失った物の悲しみと衝撃は大きく、こいつの悲しみよりも  
っと凄いものであっただろう。でも、こいつだって悲しんだに違  
いない。その原因は俺である。償いきれないかもしれないが、せめて  
何かしてやりたかった。

牧野の綺麗な顔に俺の顔をそっと近づける。牧野は目を瞑り、俺  
も目を瞑った。そして、そのまま口付けをした。

直後何もかもが分らなくなってしまふ。ここはどこで、自分が誰  
かなど、全てがどうでもよくなってしまう。

牧野は俺の口の中に舌まで入れ、長い長いキスにしようとした。  
それに対する俺はとても弱く、まるで相手に身を任せてしまふかの  
ようであった。

長く深いキスが終わり、顔を離していくと、相手は嬉しそうだっ  
た。

「やっぱり顔が赤いね。ヨースケ」  
バタバタバタバタ。

へりの音など、気がつきもせずにはーっとしてしまっていた。



## クリスマスの思い出（後書き）

クリスマス終わってるのに何やってんだろ。むしろ正月じゃん。  
更新遅くなってごめんなさい。

読んでくれたらありがとう

## 疑惑

バタバタバタバタバタバタバタ。

俺は何も考える事が出来なかった。故に、いつの間にか俺は陽介に戻っていた。

「……」

少し照れていて、頬を染めているのが分った。

「ヨースケ、いつもそうなんだから」

「そ、そうか……？」

「うん。ヨースケって外見では分らないけど、実は照れ屋さんだもんね」

「そ、そんなことはねえさ」

「えーでもヨースケ、小学校の時テストできたけど発表はしなかったじゃない？それって恥かしかつたからなんでしょ？」

俺は確かにそんなこともあったなと鼻で笑ってしまう。思えば懐かしい。

「馬鹿野郎。んなことはねえよ。アレはただ面倒だったただけだ」

「またまたそんなこと言つて。本当は恥かしかつたからでしょ？」

「だから面倒だったただけだつて。いちいち数式と答えを言うのが面倒だったんだよ。お前さんだつてそうだろう？国語が出来たくせになんも手を挙げなかったじゃねえか。俺、いつも挙げるよつて思つてたんだぞ」

その言葉の裏には、俺が菅原陽介であることを証明していた。

そして牧野はその証明を見逃す事はなかった。

話が展開しそうなところで、牧野は黙ってしまったのだ。俺はそのときに気がつく。自分がとんでもないことをしてかしてしまったのだと。

「やっぱり、ヨースケなんだね」

ただ黙る事しか出来なくなつてしまった俺は、牧野の目をまとも

に見ることができなくなってしまう。

「ねえヨースケ。私、寂しかったんだよ。家族全員が死んでしまったって聞いた時、心臓が張り裂けそうだった。でも、ヨースケの死体が確認されていないって伝えられて、私、嬉しかったんだ」

「・・・」

「きっとヨースケは戻ってきてくれるって思ってた。だから寂しくても、辛くても、そのことが希望になって今日まで生きてこれたの」

「・・・違う」

小さく呟いた。相手はそれを聞き取れず、話を続けた。

「お願い。もう嘘をつかないで。貴方がだれなのか私に言って！」

「・・・違う」

「ヨースケ！」

「・・・違う！」

俺の『違う』という言葉が、どれほど無意味なものか分っていた。分っていたが、否定しなければ俺は今にも崩れてしまいそうで、否定せずには居られなかった。

「菅原陽介は死んだ！あの時、死んだんだ！」

「ヨースケ・・・」

「違う。俺は菅原陽介ではない！」

否定しても、否定しても、俺の心の中で誰かがささやいてくる。

お前は菅原陽介なのだと。お前は過去から逃れる事などできないのだと。

目の前の牧野がどんな反応をしているかなど、気にすることはできなかった。否定するのに精一杯だったから。

「死んだんだよ！奴は死んだ。首を切った兄貴と共に死んだんだ。」

俺は蒼京諄一だ。俺は蒼京諄一なんだ」

「・・・」

今度は牧野が黙ってしまふ。俺の過去に怯える姿を見て、彼女まで怯えてしまったのだろう。

「俺は蒼京・・・諄一。俺は・・・俺は・・・」

何度言っても脳裏に過去の自分の姿が出てきてしまう。そして、過去の自分の名前までも浮かび上がってしまう。

言葉ではとても耐え切れず、突然俺は牧野を腕の中に押しやっってしまう。あまりにも強引な抱き方であった。

「きゃ」

小さく悲鳴をあげた牧野は、知らぬ間に俺の胸の中に居た。軍隊格闘やらなにやらをやっていたために、牧野には抵抗する時間すら与えなかった。

でも、牧野は自分がどのような状況にいるか分つても、抵抗しようとは一切しなかった。それどころか、俺を受け入れ居ようと腕を回した。

「ヨー・・・諄一」

牧野は俺を諄一と呼んだ。

「すまない。すまない。すまない」

でかい俺の体を、牧野は小さい体でしっかりと受け入れてくれた。牧野の胸は、凄く温かった。

「諄一・・・もう、満足だよ。ごめんね」

そのまま二人はずっと抱き合っていた。

いつもなら爆笑をかます坂崎でも、今回ばかりは無言であった。無人へりは二人を映している。そして全ての会話を聞いてしまった。

俺も合わせる四人は、ディスプレイの前で固まってしまっていたが、少なくとも俺の頭はフルに動いていた。

蒼京のしたことはあまり喜ばしい事ではない。しかし、俺は即座に言う。

「データを消せ」

パソコンの前に座る坂崎が不審な顔で俺を見た。

「あいつは俺たちについて一切触れていない。大丈夫だ」

実を言うとそんなことよりも気になる事があった。というのは

「ただいまー」

フィービスについてであった。

俺の考えでは蒼京については少しばかり放置するつもりである。蒼京は牧野という対象と近い位置にいる人間を利用して情報活動をしてくれれば十分であった。しかしフィービスについては話が違う。フィービスは女であり、対象は男である。俺の考え方は単純かもしれないが、フィービスには対象との関係を築いてもらいたいのだ。彼女は疲れたようで、ニーソックスを脱いで洗濯機に投げ捨てる。そして一息ついて倒れ掛かるようにソファーに倒れこんでしまう。

「つかれたー」

「お疲れだな。だが、こつちとしては高見沢について知りたい」

フィービスはその言葉を聞いて即座に立ち上がる。一応上官である俺に対し、フィービスは機敏に反応したのだ。

「は、はい！えーと高見沢はいい人でした！」

「んなこと聞いてない！何か怪しい動きはあったか？」

彼女は天井を見るように目を上に向けて、ぼーと考える。しかし返ってくる答えは・・・

「無かったと思います」

俺はため息をついて坂崎の方を向いた。

「高見沢を監視していたヘリに何か映っているか？」

光学迷彩を装備した新型無人ヘリ二機は、牧野と高見沢をそれぞれ監視していた。そのため、ディスプレイには二つの映像が映されており、坂崎一人で監視する事ができた。

坂崎はヘリをこちらに呼び戻しており、画面には急速に動く景色が映されていた。そこに新たな映像が出てくる。その映像は先ほど撮った映像であり、赤外線カメラの映像や暗視装置を使用した状態の映像も同じく表示されている。

「あー、ちつと気になった点があるな」

「気になった点？」

坂崎はそう言いながら気になる部分の映像を流そうと設定し、さ

らにフィービスを呼びつけた。

「フィービス。奴のケータイはどんなもんだ？」

フィービスは思い出すように考えた。

「うーん。うーうーうーん」

ちゃんとしてくれよ。戦闘訓練ばかりじゃやっぱりだめだな。

内心密かに新たな訓練をフィービスに与えようと考えていたところで、なんとか思い出したようだ。

「そうだ！メールアドレスからすると携帯電話はドコモの物で、確か私のケータイのような形だった」

フィービスは自分の携帯電話を見せる。それを坂崎が受け取り、折りたたみ式だったので開いて見る。

「たしかこいつもドコモのケータイだったな。薄さからしてスマートフォンケータイか」

それがどうした、と少しばかり言いたかったが、こいつの性格は大体わかっていたので何も言わなかった。

坂崎は携帯電話を返し、再びパソコンに向かう。

「これを見て欲しい。高見沢のケータイだ」

俺とフィービスは近寄ってディスプレイを見ると、そこにはメールをしながら歩くさり気ない姿の高見沢がいた。携帯電話はフィービスと同じ感じの物であった。

坂崎が説明を入れた。

「こいつの持っている携帯電話は恐らくフィービスと同じようなドコモのものだ。そして」

マウスを動かし、新たに時間を変えて映像を再生する。するとそこにはフィービスという高見沢が映っていた。俺たちは造作も無くこいつの手を見る。するとそこにはあまり学生には見ない端末があった。

「PDAだ。こいつがケータイとしてこのPDAを使っているのなら、疑う必要性はあまりないが、高見沢が別に携帯電話を持っているとなると話は違うと思うね。そう思わないか？」

何も言わずに目を細めてそのPDAを見ていた。確かに、こいつの言うとおり、携帯電話を二つ持っているのはおかしい。だとするとやはりこのPDAは携帯電話として使っているわけではないはずである。

坂崎はさらに加えた。

「ここがもしもルクセンブルクだったとしたら怪しむ必要性は低いかもしれないが、ここは日本だ。一人で、しかも学生が二つも持っているなんて言う例はあまりない」

これは言うまでもなく更に疑う必要が出てきた。

が、突然別の情報が入ってきた。菊地の情報であった。

「三尉！私の友人の情報に、少しばかり興味深いものができました」  
急いで知らせに来た菊池は、どこか緊張していた。俺はそれをきいて即座にそちらの方に向かう。

菊地は自分の部屋に向かい、俺も同行する。

彼の部屋には端末が置いてあり、カメラやマイクなども揃っていた。オタクをイメージするような部屋ではあるが、壁などには様々な情報が書いてあったためにそうではないと思った。

「現在、ハッカー達が総力を上げて調べております。というよりも、どうやら状況としては僕の信頼するハッカーチームの敵が、例のハッカー達であったようです」

「どういうことだ？」

「今回、どうやらハッカーチームにも依頼があったようで、例のハッカー達を止めて欲しいときたようです。そのため、僕達が行動をする前にある程度の情報を得ていたらしいのです」

「なるほどな」

状況は酷かった。

例のハッカーチームはまるで中国のネチズムのように、企業や政府機関を監視し、気に食わない企業を潰していた。グーグル八部による攻撃は、企業にとって大きな打撃になってしまふ。そのことを知りながらグーグル八部をし、徹底的に叩き潰す。それがハッカー

チームのしていることであつた。

デストロイヤー。菊地の信頼するハッカーチームはそう呼んでいる。たしかに、その名にふさわしい奴らであつた。

奴らのチームの始まりはオンラインゲームである。五人程度で集まつた彼らは、そのオンラインゲームの課金について良く見ておらず、その会社自身を毛嫌いするようになっていた。そこから攻撃が始まつた。

オンラインゲームの宣伝を極力減らし、グーグル八部を行い、更には数回サーバーを落とした。その結果オンラインゲームは停止せざるおえなくなり、ゲームは停止した。彼らは会社を崖から落としたのだ。

この残酷極まりない行動から、暴走が起きはじめ、現在に至つてしまつた。この暴走は警察でも止める事が出来ず、むしろ公共機関は彼らに監視されて全く身動きがとれずに居た。

俺はこの話を聞いて彼ら、ハッカー達が神の様にも思えてしまう。奴らは世界の全てを知つてしまつている。そして、その世界では誰にも邪魔されず、好きな事をしている。神としかいいようがない。

菊地はテーブルに置いてあるサイダーを飲み、キーボードを叩く。ディスプレイにメールの文章が表示され、反射的にそれを読む。書いている内容は、驚いたものであつた。

『高見沢はフェイクって可能性もあるみたい。俺の友人が掴んだんだけど、どうやら高見沢の近くに居る牧野って奴がハッカーみたい』  
「.....」

俺は完全に押し黙る。牧野がハッカーだと。菊地は説明を加えた。

「この人に情報源を聞いたところ、友人のハッカーとしか言つてくれませんでした。匿名ということですね。でも、可能性としてはありえませんか？」

「.....」  
確かにそうである。



彼女の行動を振り返ってみると、怪しい点が幾つか見られる。その点を、菊池は的確に触れてくる。

「さつき、ちよつと内緒でヘリの映像を見てしまったんですが、牧野は見方を変えれば隊長に近づき、隊長の全てを探っているようにも思いませんか？さつきのものであっても、隊長だから自分についてあくまで言いませんでしたけど、もしも僕ならSACSCについて言うてしまいます。そう考えると、ありえませんか？」

「だが、牧野は任務について知らないはずだ。蒼京が隊員であることなどもだ」

「いえ、多分ハッカーはSACSCについても知っているはずですが、この会社は表に出ないだけで、それなりに大きいものになってしまいましたから」

菊地の意見はもつともであつた。

確かにこの警備会社は、様々な企業や組織と関わっており、機密情報を手に入れることのできるハッカーなら十分存在を確認できるものになってしまっている。だとすると、スカイプの依頼についても知られている可能性がある。

が、どうにも俺には理解しがたかつた。牧野はただ純粹に蒼京を追っているようにしか見えなかつたのだ。もしかしたらこの情報自体がフェイクなのかもしれない。そう思いながらも、俺の頭には嫌な行動を起こさねばならないといていた。

牧野の捕獲である。

「三尉、どうしますか？牧野を対象の内に入れますか」

菊地の言葉に、俺は頷かなかつた。

「今すぐ二尉を呼び戻せ。牧野捕獲作戦を行う」

この時期の世界の動きについて話しておく必要がある。

実はこの時期、NEWS WEEKという雑誌に『ネチズム』と言われる人たちについて取り上げていた。

ネチズムというのは、今ではもう死語であるが、どうやら解釈が

変っているようで、この雑誌では中国のインターネットを利用する人たちのことを指していた。が、ただ利用する人たちではない。いわゆるハッカーのことを指していた。

この記事では、囹捜査に反対する中国市民にネチズムが味方をしたと書かれていた。しかし、その記事を読んだ人たちは、そんな囹捜査などどうでもいいという感じであろう。なぜなら、そのネチズムたちの行動が激しすぎたからだ。

囹捜査に反対する市民「ネチズム」。この方程式が成り立ってしまいい、彼らは役所を完璧に監視しはじめてしまったのだ。この行動により政府は身動きが出来なくなってしまう。下手に動けば、反対する人間が一斉に立ち上がってしまう状況に追い込まれたのだ。

このことにより、中国政府はネチズムを罰するのではなく、むしろ彼らを受け入れた。これ以上、敵を作る行為は自滅であったからだ。

さて、NSAは弱冠このネチズムたちに疑惑をかけていた。しかしそれが、菊地の情報によって違うと証明され、さらには本当の敵がどこにいるのか分ると、彼らNSAはターゲットを変え始める。その先は無論日本であったが、少々日本を調べるうちに別の情報を手に入れてしまった。

SIISについてだ。

蒼京諄一とファイビス・トライデントの名が学校にあったことはNSAも分っていた。しかし、今回菊地が彼らのターゲットを変えさせてしまうと、この二人を徹底的に調べ始めたのだ。そしてそこからSIISの情報が入ってきた。

NSAは高をくくった。彼らもハッカーについて調べているのだろうか、このことを聞いたCIAは違った。

CIAはネチズムの件も合わせてハッカーの脅威を確かに知っていた。だからSIISがそのことを調べていたと解釈してもおかしくないはずのだが、解釈の仕方はNSAとは全く違ったのだ。

SIISがファイビスについて調べていると解釈してしまったのだ。

凶星であった。

S I Sの考えでは、ハツカーの捜査ということで潜入を行ったように見せかけるつもりであった。事実、C I Aを覗く様々な組織は確かにそう見ていた。だが、C I AはS I Sに不信感を持っていたのだ。というのも、C I AはフィードリスとS I Sの間に何かがあると共に予測しており、この状況を見た瞬間、普通なら先ほどのS I Sの意図どおり見るのだが、彼らはフィードリスのために潜入した読んだ。

その読みは正しかった。

C I Aは即座に行動を始めた。それは、S I Sを追い詰める行動だ。そして追い詰めた先でC I Aは、フィードリスを利用しようと考えていた。しかし分っている通り、S I Sはフィードリスとなんらかの関連性があっても、直接的な関連性がない。そのため、S I Sが追い詰められた場合、最悪の事態であるシークレットワールドの解放を行わなければならなかった。

二つの大きな陰謀が、迫っていることを、蒼京達はまだ知らなかった。そして、虚報が流れていたことも……。

もう、冬休みに突入して数日がたっている。が、俺たちは休むことなく働いていた。

と、言っても、俺は樋口に呼ばれて怒られる羽目になるだろう。

普段は奴が怒り出すのを面倒なので止めるのだが、今回ばかりはそうは行かないようである。

腕を組みながら座っていると、誰も居ない部屋に樋口が入ってくる。

「どうだった？キスをした感想は？」

やはり、俺は気がつかなかったが無人へりが放たれていたか。

「……あまり良いとは言えないな。状況が状況だからな」

樋口は、うつむいた感じで、まあそうか、と呟いた。この時、俺の脳裏は、こいつは俺に怒鳴る気が無いようだと言っていた。むしろ

る、何か辛い事でも言いたいような感じであった。

あまり、良いとはいえないことを俺に言うのだろうな。

微動せずには俺はずっと腕を組んでいた。そうしないと、寒くて凍えそうであったから。

突然、樋口は言った。

「牧野がハツカーであると情報が入った」

即座に俺は目を細めた。その言葉の意味が一瞬分らなくなっていたから。

「・・・何の冗談だ？」

「菊地が得た情報で、信頼性は微妙だ」

「・・・そうか」

少しばかり安心するが、相手の様子から不安が流れてくる。話はまだ終わっていないようである。

「だが、行動の点から不審な部分が多いということで、捕獲することに決定した」

「なんだと？」

一瞬、頭が締め付けられそうになってしまう。それだけでは済まず、全く体が動かなくなり、何も理解することが出来なかった。ようやう理解すると、俺は冷静に考え始めた。

「情報に信頼性がないのなら、彼女を監視する程度で十分のはずだ」

「ああそうだな。だが、彼女はお前を探った。そして、過去の名前まで当ててしまった。これが不審な点だ。考えとしては、彼女はお前に意図的に近づき、お前を利用しようとしている。その可能性も否定できないはずだ」

「だが、そんなことをしたら公安部が嗅ぎ付けてくるぞ。それに情報も虚報かもしれない」

「公安部に見つかる前に、失態を晒すわけにはいかない。彼女はお前の過去を知っているんだぞ。いつ彼女が俺たちにとって凶器になる分らない」

「それなら高見沢も同じはずだ」

「しかし、奴には決定的な不審点が見つからない。しいて言うなら、PDAを持っていてる程度だ。捕獲するにしても優先は牧野だ。もう帰ることはできない」

樋口はきっぱりと言った。俺は、もしも俺が樋口であったのなら同じ事をするかもしれないと思った。それは残酷なことかもしれないが、しなければならぬことである。今本当に辛いのは、樋口であるのかもしれない。

俺はもうこれ以上なにも言わずにいた。樋口は部屋をでようとす。でも、最後の最後に言った。

「俺も、捕獲作戦に参加する」

樋口は手を止めて、ドアを開くのをやめた。代わりに俺の方を振り返る。

「正気か？」

「ああ。フィービスはここで待機させる。俺も行く」

樋口は顔をしばらく黙って、やったのことで答えを出す。

「分った」

## 疑惑（後書き）

最近どうも調子がおかしいですね。なんでこんなに更新遅くなったんだろう？

まあすみません。

それにしても．．．News Weekの話、本当なんですよね。Googleもハッカーのために中国から撤退するらしいですし、やっぱりすごいですね。でもどうやら中国のハッカーの中には、ロシアで工作員をやっていた人もいます。まあ、ハッカーには気をつけましょう。

そういえば、ダイハード4.0が公開されたとき、交番に『サイバーテロに負けない世の中を』みたいなことをダイハードのポスターを使って言っていましたね．．．。

読んでくれたらありがとう

## 間違った行動

なあ、牧野。俺はやはり悪人なのか？

トラックが止まり、俺を含む三人の隊員が銃を持って飛び出す。桜井がサブマシンガンを構え、飛び出し。続けて秋口が拳銃を構えて飛び出す。そして最後に俺がアサルトライフルを構えて飛び出した。

俺の携帯端末には、くつきりと文字が映っている。

『じゃあ、家で待ってるからね』

一緒に大晦日を過ごせるとは思ってたなかった』  
絵文字を使ったその文章には、牧野の喜ぶ姿を想像させる力があるようであった。

俺は、どうしてお前と出会ってしまったのだろうか？

対象がいるとされる家に、俺たちは近づいた。

三人とも真っ黒な姿で、この闇に覆われてしまった町に溶け込んでいる。彼らだけでなく、彼らの物すらも溶け込んでいた。更には、音すらも溶け込もうとしていた。

町と溶けた三人は、誰の目にも入れられることは無く走った。

玄関のところで俺たちは壁に張り付く。

牧野の家には親が居ない。彼女の話では、親と対立状態になって  
いるらしい。

そういえば、俺はお前の親と会った事が無いな。

俺は携帯端末に文字を早急に打ち込む。

『自分の部屋で待っている。今からそこまで行く。』

鍵は開けてあるな』

このメールを送信すると、すぐさま返事が返ってきた。  
『さっきも言ったじゃん。空いてるよ。』

泥棒が入ったら困るけどね』

その文章が目に入ると、即座に秋口と桜井の目を見る。声無き合図。その合図の奥には、動けという意味が存在していた。そしてその通り、俺たちは動き始めた。

俺は玄関を開き、一斉に全員中に入る。その音は今までの静かな家の空気を破り、多分牧野もその音に驚いたはずであった。

お前はもしかしたら俺を避けてたのかもな。考えてみると、俺はお前は知っていてもお前の身内は知らない。そう思うと、避けていたと考えてしまう。

牧野の部屋を知っている三人は、迷うことなく階段を上る。携帯端末にメッセージが届くが、見ることができなかった。見れば俺は、これから行くことが出来なくなってしまいそうであったから。

部屋に向かうと、彼女が急いで部屋の鍵を閉める音が聞こえた。だがそれは無駄な行為であると言っかのようになり、俺の蹴りがドアに直撃し、中に入れるようになってしまった。

たちまち覆面をした三人組を見ると、牧野は完全にパニックに陥り、警察に電話しようとしていたことすら忘れてしまっていた。

俺はこの前再会して、少しばかり嫌な予感を感じた。もしかしたら、俺はお前に銃やナイフを向けねばならないのではないかと。

三人はその重々しい銃をそれぞれ牧野に向ける。無論、俺も例外なく、サイレンサーの付いたアサルトライフルを向けた。

牧野は悲鳴を上げようとするが、即刻桜井が脅す。



「動くな！悲鳴を上げれば即座に殺すわ」

中途半端に開かれた牧野の口から、甲高い悲鳴が聞こえる事はなく、そのまま固まってしまった。

秋口が即座に銃を下ろし、牧野の腕を掴む。そして手首を縛ろうとした。

「きゃ、やめて」

小さく訴える彼女は、振り払おうと激しく動くが、秋口は更に握力をかけて動きを封じてしまう。

「痛い！」

涙目で苦痛と激痛を伝える表情は、俺にとっても苦痛で仕方なかった。だから牧野から目をそらす為に彼女の棚やテーブルを見た。すると、そこには写真立てが一つあった。

そらす為に見ただけであったが、俺はその写真を集中して見てしまふ。そこに映されていた写真は、俺と牧野が仲良く座っていた写真だからだ。

どうして、出会ってしまったのだ？

酷い罪悪感に襲われる。

自分と出会ってしまったために、彼女はこのような目に遭ってしまった。俺が考えていたことは全く別で、彼女は俺を避けているどころか、俺をずっと忘れていなかったのだ。そのことを改めて気が付く。

出会ったこと自身が間違えであったのか。

アサルトライフルを手放して、肩でかけるだけにした。そして何もなくなってしまった手は、その写真立てゆっくりと手に取る。

その瞬間、秋口に腕を押さえられて縛られそうになっていた牧野が突然暴れ、それが原因で秋口は壁に叩き付けられ、腹に偶然蹴り

が直撃する。偶然の出来事であった。

俺はその偶然が起こる事など考えてもいなかった。油断をしていた。

「触らないで！」

目に雫を貯めながら、俺の髪の毛を引っ張ろうとした。当然、覆面をしているので髪の毛を引っ張れる訳はなかったが、それでも彼女の手は止まる事を知らなかった。

彼女は力いっぱい俺の覆面を掴んでしまい、それを引っ張った。

しまった。

何が起きたか分らなかった牧野は、手元にある覆面を見た。どうやら引っ張った瞬間、瞬きをしてしまい、自分がどんな状況にあるかわからなかったようだ。また、彼女の目の前にある見慣れた顔は、更に現状の理解を困難にさせた。

「え？」

写真立てを持つ俺は、牧野を険しい顔で睨んだ。

「こちらストーム。対象を確保。これより戻る」

「よ、ヨースケ！」

「Team, move back」

即座に秋口は再び牧野を掴み、手首を縛って身動きを取れなくさせる。

牧野は叫び続けた。

「ヨースケ。ヨースケ！」

だが、俺は叫ぶ事すら許さなかった。

「黙れ。殺すぞ」

銃を向けた俺に、完全に衝撃を受けてしまい。それから一切喋ろうとしなかった。

でも俺はその時、銃の引き金に指を触れさせていなかった。つまり、まだ撃つと決めていなかった状態である。まだ、俺は密かに油

断をしていたのだ。

油断をしていた失態と、大切な人の信頼を壊したことは、俺にとって重罪に値していた。

牧野の頬に涙が流れた。

腕をつかまれた彼女は、強引にトラックに乗せられる。そして涙を流しながら俺の顔を見たのであった。

「.....」

何もかもを失ったわけではなかった。でも、それはあまりに残酷なことだった。

済ませ顔であった俺の心は、とてつもなくブルーだった。

その様子を、樋口は無言で見ていた。彼はきつと、これが正しかったのだと思っている。いや、正確には思い込もうとしている。正直な話、こんな作戦、誰もが間違っていると感じているはずだ。だが、捕まえなければならぬと決めた以上、どんなに間違っていると感じてもそれを実行しなければならぬ。だから、間違っていると考えるのは無意味なこと、その上判断を鈍らせる。ここに居る全員はきつとこの作戦が間違っているなどと考えないようにしているに違いない。だが、俺は考えないようにするなど、不可能なことであった。

俺はトラックに乗り、牧野の目の前で言う。

「俺の顔を見たことは忘れる」

彼女が力なく握る覆面を奪い取り、それをすぐにつけた。

すると、彼女は小さな声で言った。

「嫌」

そんな小さな声に、俺は圧倒されそうになるが、それでも言い続けた。

「忘れる。そうでなければ殺す」

「嫌」

ついに拳銃を向ける。

「忘れる」

「嫌、ヨースケ」

胸倉を掴み、壁に押し付けた。

「忘れる。お前の知る男はここには居ない」

「. . .」

乱暴をされたということが衝撃になり、相手は黙ったかと思った。しかし、それは違うようだった。

「やっぱりヨースケだよ。いくら乱暴をしても、本気じゃないって分るから」

「. . .」

今度は俺が黙ってしまった。

こいつは分っていた。俺が牧野を殺す事などできないと。こんな状況であるのに、彼女はどこまでも俺を理解してくれていたのだ。

なのに、俺は. . .。

「. . . 桜井。相手をしてやれ」

桜井は武器を置いて立ち上がる。

「了解よ。隊長」

俺は牧野の側から離れ、後を桜井に任せてしまった。

背後から思いつきり壁に何かをたたきつける音が聞こえる。痛々しい声であり、とても無視できなかつたが、それでも俺は牧野を見ることは無かつた。

「ヨ、ヨースケ！ヨースケ！」

「黙りなさい」

今度は床に叩き付けれる音が聞こえた。

「た、助けて！」

同じ音が、数回トラックを響かせた。

ガン！ガン！ガン！

やはり俺は. . . 悪人なんだろうな。

まだ響くたたきつけられる音を、俺は黙って聞いていた。

樋口のしたことは正しいことであった。少なくとも、この地点では正常な判断である。

しかし、正しいのはこの地点であって、間違いを犯していたのは別のところであった。

彼の選択は既に間違っていたのだ。

既に分っていると思うが、虚報とは牧野がハッカーという情報の事である。実はそれは到底考えられない事である。

蒼京は知っていた。牧野が機械に弱いことを。

蒼京こと菅原は、昔の牧野を知っているためそのことを知っていた。牧野は機械に弱く、パソコンなどインターネットを使えるかどうかすら危うい人間であることを。無論樋口はそのことを聞いている。しかし、あくまで蒼京は牧野にとって数年の空白があり、その空白の間にコンピュータ技術を蓄えた可能性もあった。つまり、信頼性に欠けていたのだ。

牧野は自分が知らず知らずのうちに危険人物になっていることを分るはずがなかった。当然である。彼女は蒼京が機密警備会社の人間だなんて思っても見なかったのだから。

だが、蒼京が重要人物であるとなると、誰がどう見ても牧野は危険人物で、一刻も早く捕まえなければならぬと感じる。

樋口の見方はこの点でも正しい。ではどこで間違えたのか？

それは高見沢である。

今回、樋口は高見沢についての情報をおろそかにしてしまっていた。そちらの方面を全て蒼京に任せっぱなしで、自分はこの依頼の陰謀に熱心であった。

高見沢は依頼側の情報どおりハッカーである。そして、虚報を流した本人であった。

樋口は高見沢という人間を一切知らない。知っている情報といえ

ば、ハッカーという情報がある程度のものであった。また、蒼京も飯間の高見沢をあまり知らなかった。

高見沢は牧野と繋がっていた。そんなことは蒼京は知っていたが、高見沢が牧野にとつてどれほどの人間になっているかというのまでは分っていないかった。牧野は蒼京が消えた直後から高見沢とかなり親しくなっていた。無論、蒼京がいたときも親しかったが、現在ではそれ以上のものであった。彼はそれを利用し、牧野を操った。

牧野が蒼京と二人つきりになった時どうなるのかなど、予想済みであったのだ。

結果的にその予想通りにことは進み、偵察無人へりをハックしたPDAを見て、彼は虚報を流し、全てを思惑通りにした。

実はこの後、高見沢は蒼京に脅迫状を出すつもりであった。そして第二小隊を思うがままにしようとしていた。が、彼はやりすぎた。彼はこの組織を知りすぎた。暇さえあればSCASCをハックし、行動を監視していたが、その監視をしていた間、逆にSCASCに監視をされていた。そのことに今気がつき始め、自分の身の危険を知る羽目になってしまった。

さて、問題はここからである。

高見沢がハックされことにより、彼らの集団は新たな行動に出ることを決意した。その行動とは、盾を持つ事である。

ハッカーというのは、銃やナイフ等の凶器を持たずにテロリストになることが出来る。しいて言うならば、パソコンと技術さえあれば作業員にすらなれてしまう。容易にテロリストや作業員になれてしまうのだ。しかし、ハッカーは自分の存在を隠すという盾しか持っておらず、直接的な攻撃、例えば警察が家に乗り込んでくるなどの攻撃には極めて弱い。すなわち、守りは薄い物であり、法的な盾や相手の脅威となる情報の盾くらいしか強い防御法はない。しかも今回の場合、相手が悪すぎる。彼らは企業や組織を敵に回してしまつたために、NSAなどの情報機関までも敵に回してしまい、法的な盾が無効になっている。同時に脅威となる情報の盾は、逆効果と

なり、盾を滅ぼそうと動き出す組織が既に出ている。

彼らは新たな盾を持たなければならなかった。

世界は、一斉に動き始めている。まるで災害から逃れる人々のように。だが、その中には素直に逃げない人間が一部居る。一斉に逃げるのを見計らって、悪さを企む人間だ。この悪さを企む人間とは、今回敵を意味している。ここにきて未だに見えていない敵。それは陰謀を企む集団、組織である。無論、その中にも例外は存在する。例えばSISやCIAだ。彼らは蒼京達が目的とするものから外れた存在である。一応は中立である。ならば、蒼京達が目的とする陰謀を企む組織とは何なのか？

その答えが、彼らの盾であった。

牧野がここに連れて来られてから、三日が経つ。

坂崎がいくら質問しても彼女の答えは同じであった。

『お願い。蒼京に会わせて』

マジックミラーで監視する坂崎と桜井は正直つらいものがあつた。握り飯を食べながら、坂崎は牧野を見る。

「こいつは完全に無罪だぜ。俺たちのしたことは正直大日本帝国時代の警察を同じだぜ」

豪快に食う坂崎とは対照的に、桜井は上品に食べていた。

「そうね。まるで治安維持法があつた時代と変りは無いわね。『社会』という文字がついた本を買っただけで逮捕する警察ね」

「分ってるなら、どうするんだ？犯人じゃないのでごめんなさい、で済まないぞ」

「そうねえ。でも、あのコスプレ大好き樋口さんはこの子にコスプレをさせていないわ。一応、彼も犯人じゃないって分っているように見えるわ」

牧野の目の前にあるテーブルには、桜井と坂崎が食べているのと同じ握り飯が置いてある。つまり、監禁している以外は同等の扱いをするように配慮しているのだ。

でも、牧野はあまり食べなかった。フィービスや桜井がなんとか食べさせようとおいしそうなものを作ったが、それらは哀れにも彼女によって投げ捨てられた。

フィービスはそのことになんかショックを受けたが、桜井は平然としていた。というよりも、それを予想していたようだ。

二人はもぐもぐと食べながら牧野を見ていると、突然立ち上がり、握り飯の皿をマジックミラーに投げつけた。二人の目の前に潰れた握り飯と、アルミで出来た皿が登場した。

動揺もせずに二人はもぐもぐと食べ続けた。

「あら、ちよつと威力が弱くなってる。だんだんこんな事しても意味が無いって自覚するようになってきているようね」

「そうだな。弱冠食べてるしね」

二人ともあつさりとしていた。

「それにしても・・・」

桜井は呟くように言った。

「彼女、ちよつと怪しいところがあるのよねえ」

「そう言うと、彼女はマイクを持って喋り始めた。」

『同級生である高見沢について答える』

桜井の声とは到底思えない低い声が部屋に響く。そしてその低い声に反応して牧野は顔をゆっくりと顔を上げる。そして答えた。

「蒼京に会わせて・・・」

桜井はマイクを離し、坂崎に話し掛けた。

「どう考えてもその程度の情報は知っているはずよ。彼女は意地を張って私たちに何も言わないんだらうけど、このままだと暴力を使うことも視野に入れなければならぬわ」

「そうだなあ。正直に言っただけ」

その時、牧野が皿を投げたときと同じくらい突然監禁部屋のドアが開いた。そして覆面無しのフィービスが中に入った。

「ガーン！また捨てられてるー！」  
「は?!」



二人とも先ほどとは全く違い、動揺して立ち上がった。

「一生懸命作ったのにー！もー、牧野ちゃんのバカー！」

何してんの？

坂崎ははつとする。

「まさか、俺のチューハイをジュースと間違えたのでは！？」

「あんた何やってるの！？フィービスはまだ純粋な処女なんだからチューハイとジュースを見分けられる訳が無いじゃない！」

坂崎は『処女は関係あるか？』と内心思うが、とにかく事態は大変な事になっているのは確かであった。

桜井は即座に秋口と連絡をとり、フィービスを部屋から出すように言う。

しかし、急なのですぐには秋口は来ない。その間に牧野は完璧にフィービスを見てしまう。しかも、通常のフィービスの目も。

そう、フィービスは目を一般的な目にしていなかったのだ。

牧野はフィービスを凝視する。

「・・・フィービス？」

「もー牧野ちゃん！おにぎり私がつつたんだよ！折角がつつたんだから食べてよー」

「フィ、フィービス。どうしてここに・・・というか、その目どうしたの？」

やめるよ・・・。

やめてよ・・・。

二人はマジックミラーの奥の光景を見ながらそう願った。二人がやめろと思ったこと、それはフィービスの能力についてである。

「んー目ー？何を言ってるのー？私の目はいつもこれでしょー。あんまりふざけると水びだしにしちゃうよー」

目の前で酔っている少女に向かって、桜井は呟く。

「やめてよ、絶対に止めてよ」

そんなことを願っていると、期待を裏切るかのようにフィービスは手を出した。

あの体勢は本気で水びだしにする構えであった。

「フィ、フィービス？」

「みずよー、われのめいれいにしたがえー」

「まずい！」

二人がそう思っつてつい目を閉じると、幸いにも黒子姿の秋口が飛び出し、フィービスを部屋の外に追い出した。

が、問題はここからであった。

「待って！フィービスを放してあげて！」

牧野は閉じられたドアを叩き叫び始めた。

「彼女を放して！彼女は高見沢のことを知らないわ！フィービス！フィービス！フィービス！」

？

二人とも今の発言に、疑問が浮かんだ。

高見沢のことを知らない？まるで自分が高見沢について知っているかのようなのである。

桜井は一度座り、冷静さを取り戻す。そして考えた。

もしかしたら、彼女は高見沢をかばっているのでは？

思わぬ事態が、思わぬ考えを浮かび上がらせた。

坂崎は叱られることに頭を抱えていたが、桜井はこの場を立ち去ろうとする。

「ちよつとごめんなさい」

「ま、待てよ。一緒に怒られよう．．．せ？」

「遠慮」

そっけなく答えながら、ドアを開くのであった。

## 間違った行動（後書き）

凄く寒いですね。どこかで聞いたのですが、今ちよつとした氷河期が来てるらしいですね。ちよつと情報が曖昧なのですが。

それにしても．．．中国からグーグルが撤退ですか。まあ仕方がありませんね。

ところで、ハイチの地震について色々面白い話を聞きますね。まあ地震自体はあまり良い話ではないのですが、どこの陰謀論者もハイチの地震はアメリカによるものだって言ってますね。それに対するNEWS WEEKは『オバマの頭ではそこまで優秀な陰謀論を思いつけない』っていう意見でしたね。

まあとりあえず、現地で沢山の方が亡くなっているので、まずはそれを助ける努力をしたいですね。何も出来ないかもしれませんが、祈るくらいはします。

そういえば、フィービスはチューハイをどれくらい飲んだの？

フィービス「三本くらい．．．かな？一本飲んだらまた飲みたくないっちゃって．．．」

悪い子だね。純粋な処女じゃなくなったね。

フィービス「ところで処女って何？」

読んでくれたらありがとう

## 交換条件

「マーク」

呼ばれた人間、マークは振り返った。

「イエス」

静かに答え、自分を呼んだ女性の教師に焦点を合わせた。その教師は二年生を担当しており、つい最近この学校に来た新米教師である。名前は杉本京子。24ホームルームの副担任をしている。

マークは、用件を聞いた。

「最近のイギリスって、どうなんですか？」

用件は大したものではなかった。大したものではないが、良い答えと言うのが出なかった。

「すみません。最近日本ばかりを見てしまう有様なので」

マークはイギリス出身の人間で、日本にALTとして来ていた。でもまだ日本に来たばかりで、日本語を勉強する事に精一杯であるため、新聞なども読む余裕はなかった。せいぜいインターネットでたまにニュースを見る程度であった。

「そうですね」

杉本は少々がっかりしたような表情を作る。しかし、マークの前から消えようとはしなかった。

「最近、アメリカや中東のニュースは飛んでくるんですが、イギリスってなんだかあまり目立たないので聞いてみたんですが・・・そうですね」

「は、はい。すみません」

「いえ！聞いたのは私ですから」

苦笑をしながら、新米教師はその場に立ち尽くしていた。

「そうですね、マークって休日はどんなことをしているんですか？」

「そうですね。クロスワードをしているね。日本語を覚えるのに丁度いいからね」

漆黒の魔女。

それはフィードビスのことではなく、桜井のあだ名であった。今でこそフィードビスが居るために魔女と呼ばれなくなったが、以前までは魔女は桜井の代名詞でもあった。

彼女の服は、確かに漆黒と言われるような黒さではあったが、それはこの部隊の隊員の誰もがそうであり、漆黒と言われるにはあまり黒くない。彼女の黒さは、外見にはなかった。そう、彼女の黒さは内面に存在していた。

彼女の心は誰にも分らない。それを知るのは当事者である自身だけである。蒼京や樋口、他の隊員達も、彼女と普通に触れ合うが、触れ合っても何を考えているかは全く分ったものではなかった。一切、自分のことを明かさないのは当たり前であるが、自分が何のために動いているのかすら曖昧にしていた。目的が見えにくいのだ。だからこそ、彼女に男達は騙されるのだ。

黒は何かを隠している色であるらしい。まさに、彼女がその色であった。

その漆黒の魔女は、ある一室のドアを開こうとしていた。その一室は、あるうことが菊地の部屋であった。

「入るわ」

ノックもせずになんか入ると、菊池はパソコンの前で寝てしまっていた。

桜井は菊地の鼻を摘む。菊池は鼻で息が出来なくなり、苦しそうになると、泡がはじけたように口が開き、今度は口で呼吸をする。と、そこで突然起きる。

「……？桜井さん」

目の前に桜井がいる事に気が付き、体を起き上がらせて彼女の方に体を向けた。

「えっと、どうしました？」

「高見沢について、犯罪経歴は？」

待っててください、と軽く言い、キーボードに素早く打ち込んだ。そしてディスプレイに情報を表示させ、イスを少しばかり移動させて桜井にも見やすいようにした。

犯罪経歴は皆無であった。

「至って良い人のようですね．．．僕らと違って。親についても特に問題はないようですし、やはり疑うにはちよつと疑問があります。でも．．．ハッカーではないという可能性と共に、ハッカーであるという可能性も十分にありますからね」

そんな菊地の言葉を流し、桜井は表示された情報を凝視する。特に、目線は犯罪経歴無しの部分に向けられていた。

菊地がもう一言付け加えようとした時、桜井は顔を上げた。

「ありがとう」

「え？あ、はい」

不意をつかれて感謝されたので、菊池は即座に言葉を理解できず、慌てて理解して返事をした。桜井は部屋を出た。そして自分の中で考えをまとめ、また別の目的地向かう。

どうやら．．．考えた通りのようね。

心の中、漆黒の闇の中で、誰にも悟られる事無く呟いた。

一つのドアが、彼女の前に立ちはだかった。そのドアの向こうには、あの牧野がいた。

ドア一つ越えれば、そこには乱れ果てた少女がいる。飯もまともに食わず、口もまともにきかず、荒れに荒れて体力もまともでない少女だ。それでも、何かを必死に隠そうとしている。その姿は、まるで何かを守るように見えた。いや、守るという言葉が少女の中で生きていくからこそ、未だに隠そうとしているのだ。

少々迷う桜井は、このドアの前に立ったのにも関わらず、ここを後にする。

まだ早いわね。

代わりとして、彼女は別のドアを開く事とした。そのドアとは、蒼京の部屋のドアであった。

コンコン、とノックをする。すると、入れとという返事が返ってきた。その返事に従い、お構いなくドアを開けた。

「なんだ？」

蒼京は端末の前に座っていた。桜井はすぐにその端末のディスプレイを一瞬見た。そこには英語で書かれた文章があり、JAMSTECという単語が頻繁に見られた。

「それは？」

ディスプレイを指差して聞くと、蒼京はそっけなく答えた。

「ああ、少々気になった事があってな。ちよつと調べていたんだ」

「何について？」

「見ての通り、海のことだよ。JAMSTECのしんかい6500はどうやら世界でも優秀らしいからな。海について何かあると、情報機関がここに来るのではないかと思つて調べていたんだ」

「結果は？」

ちよつとばかり興味が出たのできいてみると、蒼京は笑いながら答えた。

「まあ、それなりに面白い情報が出てきたさ」

ふうーん、と私は声を漏らし、本題に映るタイミングを計る。

蒼京は見ていた文章を消し、何も表示されていない状態にした。

壁紙はグラビアアイドルの画像であった。

「意外ねえ」

素直にそう言うと、蒼京はまた笑つて答える。

「ふん。俺も男だからな。裸の女性に興味が無いわけではない。 . .

と、言うものの、実は樋口の野郎に言われてな。お前はつまんねえな、なんて言うから変えてやったのさ」

「以前の壁紙は？」

「標準のやつさ」

黒の水着を着たスタイル抜群の女性。なんとなく、そこから蒼京の趣味と言うのが分つてきたような気がした。まあ、悪くはないようである。少なくとも、コスプレ、メイド服大好きな樋口よりは。

そんなことよりも、本題に入らなければならなくては。

私は、話始めた。

「牧野の件で、お願いがあります」

桜井は口調を変えた。

「牧野に直接尋問を行ってください」

それを聞いても、相手は動揺せずにはいた。むしろ、動いていなかった。

きつと蒼京は、桜井がこのことで来たと分っていた。だから、動揺しないのだ。動かないのは返事をどうするか困っているから。はい分かりました、などと素直に言えないのは当然のことである。数日前に、自分の存在を忘れると言って乱暴をしまっているからだ。このまま沈黙の空気についても仕方ないので、桜井は話を続けた。

「高見沢は恐らくハッカーです。あくまでこれは推測ですが、恐らく高見沢は、自分がハッカーというデータや記録について機敏になっっています。多分、高見沢はそれらを全力で削除したのでしよう。最初、牧野はそのことを知らない、私は高をくくっていました。しかし、考えが甘かったようです」

「何があつた？」

「フイービスがお酒に酔って牧野と接触してしまいました。ですが、それがきっかけで牧野が高見沢について何か知っていると分かりました」

「. . .」

「恐らく、牧野は貴方に直接尋問を受けなければ、何も言う事は無いでしょう。彼女は敵ではありません。貴方が説得すれば、こちらとしては有力な人材として今回の任務に役立てることが出来ます。違いますか？」

「違うな。一般人を巻き込むな」

「一般人？彼女は一般人ではありません。重要参考人、そして危険人物です」

桜井はきつぱりと言った。そして、蒼京の「彼女を巻き込みたく



ない』という考えの基に作られた反対の言葉を完全に無意味にした。  
「二尉、彼女はもう巻き込まれています。例え、これ以上巻き込まないようにするとして、どうするのですか？彼女を一生あそこに入れておくのですか？それとも殺しますか？紛争地帯にでも放しますか？彼女に『巻き込まない』という選択はありません。ならば．．．最善の選択を選ぶべきです」

蒼京にとって、正念場であった。

これ以上巻き込みたくないという純粋な意見があるものの、現実とは違って最善の選択は彼女に協力をさせるところにある。

理想と現実。意地を張るか、できるだけのことをするか。

それでも桜井は蒼京の答えを知っていた。なぜなら、蒼京は理想にすぎりつくほど落ちた人間ではないから。

「．．．冬休みが終わりそうだ」

テーブルの空いているスペースに、なにやら教材を出した。

桜井は懐かしい目でそれを見る。

「課題を何もやっていないようだな。あいつ」

「？」

「学校に行くのに、課題をやっていないとなると．．．まずいだろう？」

桜井は笑った。

「人の課題をやるなんて、随分と人がいいわね」

蒼京も笑った。

正直な話、昨日の夜の記憶がない．．．。

確か、以前菊地が『ジューズならいくらでもあるから飲んでいいよ。冷蔵庫にあるよ』って言っていたから、飲んでみたらなんだかもう一本飲んでみたくなって．．．それから記憶が途絶えている．．．でもなんだか普段の不満を本人に言った気がする。

なんでだろう？

まあいいや。

そんなことよりも、これから蒼京が説得に行くのだけど、なんで私もついて行くのだろう？別に私がいなくても蒼京なら十分できると思うのに。

そう考えると、どうしていつも蒼京は私を連れて行くのだろう。この前のインフルエンザの件であっても、彼はいつも私を連れていたし、今回も私を連れて学校に行っている。何か私にして欲しいのだろうか？でも私は帰って蒼京の足を引っ張っているだけのようない気がする。対象の名前は忘れるし、我を失ってまともに戦えなくなるし、何をやってもなんだか上手くいかない感じがするのにな、どうして蒼京はいつもいつも私と共にするのだろう？

考えても仕方ないか。

とりあえず私は、なぜか黒い迷彩姿で来いと言われたので着替える。個人的にはいつものワンピースが良かったのになあ。外に出たら寒くて死んじやいそうだけど、ここはどうせ暖房がきいているし、あれの方が着慣れてるから良いのに。

私は着替えを終えて自分の部屋を出て、牧野が監禁されている部屋のドアに向かう。そこには、いかにも上官らしい格好をした蒼京がいた。

「いいか、あくまで律儀な感じでな」

「はあ」

そんなことを言われて、私は曖昧な返事しかなかったが、十分に分っていた事であった。

私はドアを開く。少しばかりドアノブが重く感じたのは何故か分からない。もしかしたら、牧野がこのドアを叩いたせいでちょっと壊れてしまったのかもしれない。そうでないかもしれない。とにかく、空けるのに少し戸惑った。

それでも開くと、牧野はイスに座っていた。

部屋にはぼつんとイスとテーブルだけが置いてあり、部屋の広さと吊り合っていないく、ただただ広いだけのスペースのように感じられた。牧野はそんなスペースの中で、一人寂しく座っていた。

気の毒に。

心の中で呟くと、いつもの緊張というものが今はないことに気がついた。

牧野がこちらを向いた。

「ファイビス．．．」

「ファイビス・トライデント一等兵です」

私はわざわざ『一等兵』まで付けて自己紹介をする。その時はまだ、牧野は不思議そうな顔をしているだけであった。でも、蒼京が部屋に入り、私と共に彼女の目の前まで接近すると、表情は完璧なほど変っていた。

「ヨ、ヨースケ．．．」

私は手を出して謙虚に蒼京を指す。

「こちら、蒼京諄一二等尉です」

「二等尉？」

「今回特別に直接尋問を行うことになりました。では」

私はこれでお終いと思い、出て行こうとするが、蒼京に裾を掴まれ、出て行くのを阻まれる。

「イスを持ってきてくれ。二人分な」

なんで二人？私も？

とにかく、そう命令されたので急いですぐに持ってくる。牧野と向かい合わせになるよう、二人分のイスを置く。

蒼京は遠慮なく座り、私もやはり座るように命じられる。なんで？私もすわり始めたところで、蒼京は単刀直入に話始める。

「君の望みどおり、私は君の目の前に現れた。さあ、質問に答えてもらおう」

「待って！その前に聞きたいことが．．．」

「こちらの質問が先だ」

「そんな！いきなり暴力を振られて、ここに強引に連れてこられ、いやらしいボディチェックをされて、監禁されて、自由を奪われて．．．答えるのはそっちが先でしょ！」

流石にそこまで言われて蒼京は動揺したのだろうか？少しばかり押し黙った。でも、どうやら蒼京は動揺なんてしていなかった。

まるで次の言葉を既に準備していたかのように蒼京は言い渡す。

「君の置かれている状況を教えよう」

「状．．．況？」

「君は現在、組織内では危険人物と判断されている。また、それが原因でここに監禁されている」

「ま、待って！組織？」

「更に、君が我々が目的としているハッカーであるとの情報も入っている」

その時、牧野は口を閉じて黙った。私はどうしていきなり黙るのが分らなかった。

さっきの調子なら、ここで牧野は『ハッカー？』と疑問を浮かべながら言うはずなのに、急に何も言わなくなってしまったのだ。これってもしかして．．．彼女がハッカーだから？いや、違う。だとしたら．．．あ、高見沢がハッカーだと知っているから？

そうだ。きっとそうだ。彼女は高見沢をかばっているんだ。学校で見た限り、高見沢と牧野の関係はかなり深いようだし、そのような関係上かばうのは道理であるはず。

蒼京はそのことを知っているんだ。

「そこで、私は提案する。交換条件だ。」

「交換条件？」

「我々に協力して貰いたい」

牧野は何が何だか分らなくなっていた。

「きよ、協力して？」

「協力した場合、今すぐにでも君の質問を聞こう。ある程度の範囲内だが。そして、全てが成功した場合、君を解放する」

全く何も分らない顔をする彼女は、まるで私に似ていた。

そういえば、私が入隊するときもこんな感じだった。何も分らない私は、今の牧野のような顔をして、ただただ座っていた。分った

のは、この組織が人を守るためにあるということ。私はそれを聞いて頷いた。彼女も、頷くだろうか？

「……」  
緊張をしているのは牧野だけであった。当たり前だ。訳も分らずに協力してくれなど、怪しいに決まっている。

それでも、首を横に振らなかった。

ガラ！

蒼京が立ち上がった。

「これ以上時間は時間の無駄だ。今回の話は無かった事にしてもら  
う」

「やる！」

二文字の言葉が、部屋を轟かせた。

同時に、蒼京は牧野を睨みながら座った。

蒼京は牧野に圧力をかけてた。でも牧野はそれに応じなかった。

「交渉成立だ。約束通り、君の質問を聞く」

その言葉と同時に、牧野は勢いよく言葉を発した。

「全てを教えて！どうしてここにヨースケがいるかまで」

蒼京は深いため息をついた。

「いいだろう……。限度があるがな」

そう言うと、蒼京は拳銃を取り出した。

「これが何か……。分るだろう？拳銃だ。本物のな」

「どうしてそんなものを？」

「ここは機密警備会社SCASC、第二本部。俺は、SCASC第

二小隊の隊員。要するに、特殊部隊の隊員だからだ」

目を丸くする牧野。信じてないみたい。

「フィービスも？」

私の方を向いたので、慌てて答えた。

「は、はい」

牧野は私をちょっと嫉妬するような目をした。

「でも、どうしてそんなところにいるの？」

まだ私を見るので、ちょっと押されながらも説明する。

「ここにいる人たちは、みんな過去に何らかの問題を抱えた人たちなんです。二尉は・・・」

「殺人罪。四人以上殺している」

あつさりと言うが、流石に誰を殺したのかまでは言わなかった。

でも、牧野の顔はかなり思っていることを表していた。

「よ、四人って・・・まさか家族の自殺は・・・」

「違う。その件については範囲外だ。というか計算上、俺を含めて四人家族なんだからおかしいだろ」

自殺？

私はちよつとばかり今の言葉が気になる。家族は全員自殺した。でもどうして蒼京だけが自殺をしなかったのだろう。

「さて、交渉は成立したことだ、ついて来い」

蒼京は立ち上がり、部屋のドアに向かって歩く。私もつられて立ち上がり、急いで部屋を出ようとした。蒼京の顔は、どこか不安げであった。

特殊部隊について、私は国家の最終兵器だと考えている。

ある元陸軍大將は特殊部隊について、精密機械と述べている。

現代戦争を見れば、戦車や戦闘機などの強力な兵器が無力である事が大いに分る。以前説明した、F-22の生産終了の件を思い出してくれば、分りやすいであろう。

元陸軍大將は、それらの強力な兵器について、粗雑だと述べている。粗雑とは、精密でないことを指し、それは特殊部隊を精密機械と例えた時、その対照的なものにあたる。

戦車、戦闘機、護衛艦、核兵器、これらの兵器はとても強力で対抗できるものは数少ない。しかし、これらの兵器は強力であればあるほど使用の制限がかかり、且つ人を殺す、破壊する程度のことしかできない。

特殊部隊は違う。特殊部隊はそれらの『粗雑』なものとは違い、

破壊や殺人以外にも複雑な事が出来る。

よく、『任務ではない』と言って人を見殺しにする兵士達を映画などで見るが、特殊部隊は違う。特殊部隊は、与えられた任務以外のことが求められ、政治的背景を常に考えながら行動しなければならぬ。

不正規戦。特殊部隊にはその複雑な戦いを強いられる。その戦いは、例えばゲリラ部隊の訓練、指導や、時には現地の人間に手を差し伸べ、彼らに自分達が正義であることを印象づける、というのが主なものとなる。

つまり自分達の行動により、どれだけ本来の目的に役立てるかというのが特殊部隊にあたえられた任務なのだ。

特殊部隊は強力な兵器にはできない事を多くできる。戦争を勝利に導くこともできるだけでなく、テロにも対処できる。最終兵器、というよりは、他の兵器があまり役に立たないだけなのかもしれない。しかし、それはつまり最終兵器である。

蒼京はそう考えると正しい行動をした。

確かに自分達がどのような組織であるか、それを相手に明かしてしまったのは良くは無い。だが、現地の人間と手を組み、より成功に近づけるという行為は当然の事のようにも考えられるし、先ほどのことも含めると、正しい行動と思える。

牧野という人物は、高見沢を知る上でかなりの重要人物であった。また逆に、蒼京を知る上でも重要人物であった。そんな人物が、完全に蒼京側につくという事は、蒼京側が有利になり始めたと言う事である。実際、彼女は高見沢が犯したことを話した。

そんな中、高見沢は判断に迷っていた。

高見沢は蒼京達をハックしようとしたが、もう手遅れであった。菊地はハッカーに対して敏感になっていたからだ。そのため、高見沢は肝心の牧野がどうなっているか分らなかった。考えが甘かったのだ。

あまりにも無鉄砲な策であったかと、後々となって気が付く。だ

が、これを教訓と思わないほど落ちてはいない。

人は失敗から学ぶ。高見沢も例外でない。そして、自分がしようと試みた事が失敗した時、人は何かを憎む。

特殊部隊は人に好かれる仕事もするが、敵にとってそれはとてつもない憎しみであった。

私は胸のポケットにタクティカルペン入れる。

蒼京も、同じようなタクティカルペンを入れた。

「ね、ねえ？何か・・・武器とかって・・・ないの？」

ちよつと期待していたのかな？牧野が着替える私たちの前で武器を求めた。でも蒼京は表情一つ変えずに言う。

「俺たちにはこのペンがある。それだけで十分だ」

「でも、一応私って、その・・・スパイだよな？何かあったほうがいいかなあーって思うんだけど・・・」

蒼京の返事は、『必要ない』とかだと思った。けど案外違って、またしても表情を変えずに言った。

「分った。いい物がある」  
？

いい物が何なのか分らなかった私は、ちよつとだけ気になる。すると、菊地が何かを持ってきた。

私は蒼京の背中によく見えない菊地の手を、私は背伸びをしたりして必死に見ようとす。なんだか茶色い感じで大きいなあ。

あまりにも見えないので、牧野の表情を見ると不審な顔をしていた。

「これって・・・」

菊地から牧野の手に渡ると、私はやつと見ることが出来る。そうして見てみると・・・

「・・・かつおぶし？」

その通りである。あの茶色くて意外と重く、更に意外に硬すぎるあのかつおぶしである。



銃刀法違反とか、怪しまれないためとか、色々な理由でなぜか車にも入っているかつおぶし（車の中の物は真空状態の袋で保存されている）。

確かにあのかつおぶしの硬さは異常だし、頭をアレで殴れば殺せるかもしれないけど、いくらなんでもそれはないでしょ。というか、どうやって持っていくの？

「その．．．これ．．．かつおぶしだよね？」

なんとも思っていない蒼京は平然としている。

「そうだ。それで、自分の腕を叩いてみる。骨を直で叩いているよな感じがするから」

牧野は本当にその通りになるか試そうと、思いっきり自分の腕を叩こうとする。

「あー！待って！待って！骨、折れちゃうー！」

危ないところで牧野を止め、私がかつおぶしを奪って軽く腕を叩いてあげる。

「痛！何これ？」

「かつおぶしです」

「見れば分るよ。それにしても．．．硬い．．．。というか硬すぎない？」

「包丁で切ろうとしたら包丁が割れたらしい」

牧野はまるで凶器を見るような目でかつおぶしを見るようになった。というか凶器だけど。

「ちなみにそれは静岡の焼津産のものだ。樋口に言わせると高かったらしい。香りもいいはずだ」

「．．．これバツクに入れたらかつおぶしの匂いが凄いと思うんだけど」

「気にするな」

牧野は私の胸にあるタクティカルペンを見る。

「フィービースー」

「こ、こればかりは仕方がないですよー」

私はこの場を押し切ると、蒼京が荷物をまとめて歩き始めた。

「さて、行くぞ」

その言葉をいいことに、牧野を完全に無視し、車の方に向かった。学校に、再び行くのだった。

## 交換条件（後書き）

いやらしいボディエック？おかしいなあ、やったのは空姉ちゃんなのに。

牧野「胸とかお尻とか・・・とにかくいやらしいところばかり触られた」

空姉ちゃん、本当にしたの？

空「百合は嫌い？発売したのを見るとすぐにストライクウィッチーズを買っちゃう人なのに」

・・・ノーコメントです。・・・ビューリングいいよ、ビューリング。

空「ノーコメントではない件」

そういえば、最近思い出したのですが、桜井空なんですよ。忘れてました。

読んでくれたらありがとう

えーと色々ありまして、まあフィービスの画像を投稿しました。

[http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=medium&amp;pillust\\_id=9122981](http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=medium&amp;pillust_id=9122981)

## 背を向ける者

車は朝の混雑の中でも裏道を使って走っていた。

「いいか、牧野？絶対に正体を言うなよ。言ったら今度は本当に死ぬからな」

樋口は先ほどからしきりにそのことを言う。

「もういいから樋口。くどいぞ」

俺は助手席に座る樋口にそう言ってやった。

「だがよ」

「くどい。何度言った？お前はお前でメイドのことでも妄想してりゃいいんだよ」

これ以上は面倒なので、これで話が終わるように言うておく。

フィービスがシートベルトに寄りかかって気持ち良さそうに寝ていた。その証拠に静かな寝息が車に聞こえた。

牧野が寝ていたフィービスの頬をつんつんと突いて遊んでいた。

「牧野、そいつを殴ってやれ」

「え、いいの？」

頷くと牧野は容赦なくフィービスの頭を叩いた。殴れよ。

フィービスはいきなりびくんと体を震わせて目を開けた。どうやら反射的に敵の襲来かと思ったらしく、目を青々とそして輝かせながら手を牧野の方に出した。要するに魔法の能力を使おうとしていた。

「エネミー．．．．あれ？牧野ちゃん？」

「寝るなフィービス」

俺がそう言ったにも関わらず、再び眠い目をした。

牧野がまた叩いた。

「いたいー」

「寝るなって言うてるだろうが」

「うー、でも訓練の時は車が寝床だったのにー」

「訓練じゃないだろうが」

ちなみに彼女は少し前の米軍式の訓練を受けており、ついこの前までパラシュートを開けなかったと思えば、いつの間にかもうサバイバルの技術まで身に付けていた。

彼女の能力は、一見その不思議な目に秘められた物しかないと思われがちであったが、その考えは実際全く違っていた。元々、彼女は電子機械など無い世界の住民である上、森での生活が日常であったために体力やサバイバル知識が長けている。俺ははじめ、森でのあらゆる食料、蛇やウサギなど野生の物を見て気持ち悪がり、食べるどころではないのではないかと思っただが、彼女は予想を裏切り、野生の動物や植物をごちそうにしまった。

身体能力についても、実は普通の人間以上の体力や反射神経を持ち、正直体の限界というものが見えなかった。

ただ、睡眠時間についてはやはり苦労が必要であった。長期間恐ろしく短い睡眠時間でパトロールを何回も行わせるという訓練を実施したが、流石に限界というものが早く見られた。三週間で睡眠時間は十時間。最後までやり切れたのは、やはり凄いと素直に思う。

これがきっかけで、フィービスには『寝れる時には寝る』という規則が出来たようで、訓練の移動中の車の中やヘリの中でよく寝ていた。

が、最近では寝過ぎのように感じる。

「学校で寝ちやうかもー」

「寝たら耳元で撃つてやる」

「.....すみません」

前に居る樋口がため息をつく。

「こんなんで大丈夫かよ」

「お前もな。今日はどこに行くんだ？」

秘書であるかのように、その問いには菊地が答えた。

「今日はちょっとN.T.T.に行くつもりです」

「ほう。何かコネでもあるのか？」

「ええ。知り合いにいつも協力し合っているCIAの人がいましてね」

「そうか」

話はそれきりで終わり、途中で俺たちは車から降りた。

今日は樋口達が朝早くから車で移動するといっているので、それを利用しただけである。明日からまたタクシーだ。

菊地は俺たちを学校の近くまで来て降ろした。

「いい情報が手に入るといいな」

ドアを閉めず顔だけ外に出さずに言うと、坂崎は俺の方に顔を向けてお前もな、と言った。それだけ言って、ドアを閉めた。

車はすぐにその場を離れていき、車の群れの中に姿を消した。

「さて、行こうか」

スーツ姿の俺たちは、まるでいわゆる『キャリア』に属する部類の人間であった。実際はそれ以上の存在なのかもしれないが、とにかく若さが以上に目立つ。

そんな俺たちがここ、NTTに何をしに来たと言うのか？

盗聴。

それ以外何かあるだろうか？恐らく無いだろう。

しかし、ここに来ておかしな問題が発生した。

「その．．．．それはどういうことですか？」

菊池が俺の隣で慌てていた。その片手に持つ携帯電話の相手と何かあったのだ。

「ちょ、ちょっと待ってください。つまり今回は、手助けが出来ない、と？」

．．．．まさか。

NSAは俺たちに強力しているはずだ。なのにここに来てなぜ今更？

恐らく今菊地が話している相手はCIAの友人だ。そして会話を聞いていると、どうにも彼らの我々に対する雲行きが怪しい。何か

が起きたのか？ハッカー達に脅迫でもされたのか？

いや、例え脅迫されたとしてもCIAはそこまで落ちていない。ハッカー達を殺すなどの処置が出来るはずだ。

ハッカーではないのなら、何処から圧力が加わったのか？それとも、CIAに何か事情があるのか？

菊地は冷静になれず、乱暴に電話を切った。

「どうにもおかしいです。CIAが我々から手を引きました」

「何故だ？」

「それが一切話してくれないんです」

予想した答えであるが、そうなることややはりCIAに何かあるのだらう。

少しばかり、考え方を変える必要がある。

アメリカはどうやら、俺たちへの協力を反対しているところと賛成しているところがあるらしい。前者は当然CIA。後者はNSAだ。

見方は二つ。NSAが異様なのか。CIAが異様なのか。

とりえず、疑うべきはCIAのような気がしてならない。実は先週までCIAは乗り気だった。その背後に『Feviss Trident』という単語があつたのかもしれない。それでも俺たちに協力するということは、協力を拒む大きな理由がないということだ。このタイミングで手を引くなんて言うのは、明らかにおかしい。何か俺たちと協力したくない理由が近々出来たに違いない。

高見沢の電話を盗聴したかったが、それが出来なくなった。高見沢は一体何なのだ？

俺は少しばかり考えてから、車に戻ろうと歩き始めた。

「ど、どうしますか？」

突然歩き始めたので、菊池は俺に何をするのか尋ねる。自分で何をしたらいいのか分らなくなったのだらう。

「いいから行くぞ。CIAはもう俺たちとは離れた。ここに居ても時間の無駄だ」

「でも、どうするんです？手がかりが全くないですし……」  
その言葉と共に、俺は菊地の方を向く。

「あるさ。ちよつと興味深いものがな」

駐車場にある自分達の車を見つけ、そこまで最短距離で歩く。さりげなく自分で最短ルートを頭に浮かべて、そこに疑いも無く添った。菊地は俺の通る最短ルートを同じく添っていた。

車のロックを解除して、俺は補助席へ。菊地は運転席についた。何気ない事だった。このまま自然と、菊地はエンジンをかけて車を走らせる予定である。

俺はさり気なく外を見た。本当にさり気なくだ。が、それが菊地の予定を妨げる、という心のささやきに繋がった。

即座に隣に手を出してストップという合図を出した。菊地は既に鍵を鎖していて、後は回すだけになっていった。

「ど、どうしたんです？」

「……今、車が一台出た」

一般で出回っているワゴン車。先ほど、その作業でもしに行くような車を見たことで、車のエンジンをかけるなど命令した。妙な胸騒ぎがしてならない。

「車を出るぞ。早く！」

半ば蹴り飛ばすようにドアを開け、即座に走り出す。  
なるべく遠くに！

俺と同じ事を考えた菊地は、俺とは反対側を全速力で走った。

その時、突然先ほどまで乗っていた車が轟音と共に火を吹いた。車は火の勢いと同じではないかと思われるくらい同時に一度跳ね上がり、その重さからキノコ雲と空中で別れて地面についた。

俺はいきなりの爆発で背中を勢いよく押されて倒れ、一瞬何かなんなのか分らなくなっていた。起き上がろうとすると、倒れた衝撃による頭痛を少し起こし、耳には激しく鐘が鳴るのが分った。

急速に状況を把握しなければならぬ。

「菊地ー」



頭痛を抑えようとしながら、菊地を呼ぶ。

「だ、大丈夫です！」

菊地はよろけながらも俺の方に向かってくる。俺は俺で、携帯電話を取り出した。しかし、それを菊地が慌てて止めた。

「駄目です。今連絡すれば、相手に僕達が生きていることを晒すことになります」

「………仕掛けたのはCIAか？」

CIAはNTT経由の電話を盗聴できる。現に俺たちはそのCIAの力を借りてここに来たつもりであった。どうやら、菊地はCIAが車に爆弾を仕掛けたのだと思ったのだ。

「だってそれ以外考えられません！こんなタイミングで殺そうとするなんて………」

「だろうな。俺もCIAだと思う。だが、その前に連絡を取りたい。迎えが必要だ」

「何とかします」

そう言って菊地は自分のPDAを取り出した。

五階男子トイレ。

最上階のトイレと言うのは、どうにも利用しやすい。頻繁に生徒が入り出す理由が良く分る。

俺はしないが、ここには鏡があり髪を整えるには最適な場所だ。

しかも教師は滅多に來ない。

一種の無法地帯って訳である。

それを利用してもらい、携帯電話を使うことだ出来た。

「そうか」

『一応ALITの身元を調べたけど、何処かの組織の要員である可能性が無いわけではないわ。注意して』

「分った」

樋口達の身に異変が起きたらしい。桜井は盗聴を恐れたのか、あるいは本当に分らないのかもしれないが、彼らに何が起きたのかは

具体的に言わなかった。心配であるが、気にしてはられない。

この学校のA L Tについて調べた事があるが、確かにどこかの要員でないとは言いつれない。イギリス出身ということであるが、その情報を偽っている可能性もある。また、怪しいのはA L T、マーク・グレイソンは去年の十一月に学校に来ていたのだ。俺たちがこの学校に来た時期に近い。これは単純に考えれば、俺たちがここに来る事を意図しているのではないかと推測できる。

無論これは低い可能性でもある。だが、俺はイギリス出身がどうにも気になる。

S I Sだ。

最近、どうにもイギリスと聞くと第一にS I Sのことが頭に浮かんでしまう。理由はもちろんフィービスの件である。

それにしても、今考えると全体的に情報が少なすぎる。現在の任務に関して、情勢がよく分っていない。どこの組織がどんな情報を持ち、どんな取り組みをしているかなど、一切の情報が無い。このお陰で、マークがS I Sの要員であるかどうかも検討できないのだ。樋口達にはもう少し頑張って貰わないとな。生きていたら。

心の中で呟いてから、トイレを出ようとす。すると、何故かトイレの入り口で女性教師が立っていた。よくよく見るとそれは担任だった。

「こーら、遊んでるんじゃないよ」

妙に生徒に熱い教師こと、鈴氏麗佳。正直、熱すぎる。

「遊んでませんよ。小便しただけですよ。そんなことよりなんで男子トイレにいるんですか？」

「ん？近くで授業してて、貴方が見えたからよ。さ、ほら、早く授業に戻りなさい！今度テストあるでしょ。その時貴方の学力、調べさせて貰うからね」

呆れたとばかりに笑いながら息を吐き、鈴氏の隣を過ぎる。

「大丈夫ですよ。テストくらい。まあやってみせますよ」

鈴氏は苦笑して俺を軽く見送り、すぐに自分の受け持つ授業に戻

った。

階段を静かに下る。

「大きなお世話ってのは、ああいうことだな  
ため息をつきながら下った。

空はいつの間にか綺麗なオレンジ色になっていた。

そんな空を眺めて、私は自分がどこに居るのか再確認した。

そういえば、ここは異なる世界なんだっけ。

ちよつと前まではすごい事だったけど、こうしてみるとどうって  
ことはない。慣れるのが早いだけである。

世界が違っても、友達と言えるような存在はあまり大差ないよう  
だ。

「フイービスさん、食べる？」

眼鏡が凄く似合っているその子を、牧野は黒崎さん、と呼んでい  
た。

「うん、食べるー」

チョコレートを一ツ貰い、嬉しそうに開けて食べた。

「牧野さん、彼とはどうなったの？」

彼とは、蒼京のことだろうか？すぐ近くに蒼京が居るのに、なん  
だか大胆だなあ。

牧野は一度食べているお菓子を飲み込んで、即座に嫌そうな顔を  
して言う。

「うーん、あんまり良い感じじゃないなあ」

「えー、そうなの？いかにも草食系男子で優しそうじゃない？」

「っうー！」

草食って聞いて喉が詰まる。蒼京が草食？絶対にそんな風には見  
えないっていうか、肉食でもない気がする。むしろ別次元のような  
気がする。

喉を詰まらせてしまい、三回ほど咳をする。

「だ、大丈夫？」

みんなに笑いながら心配されてしまう。牧野に背中を摩ってもらった。

「あれ？もしかしてフィービスちゃん狙ってる？」

呑気な声の天野が近くの机に座りながら喋る。

「そ、そんなことはないよ」

「とか言ってる」

まったくの緊張感が感じられない天野の声は、なんだか能天気さとは裏腹に妙に頭に残ってしまう。何故か印象強い。

話は元に戻って、牧野はその彼について話した。

「ちよつとねー、問題があってね」

「問題？そういえば今日の彼、貴方にちよつと冷たかったわね」

「あー、そういえばー」

蒼京を見る。窓を開けて寒いのに風に当たりながら外を見ていた。それも空を。

どうしたのだろうか？

私にはどうにもただ単に空を見ているようには見えない。何か空にあるのだろうか。ヘリでも居たのかな。

と、突然蒼京は窓を閉めて荷物を持った。

それは帰る合図だったので、私も荷物を持って帰ることにした。

「あ、フィービスちゃんもう帰るの？」

「うん。じゃあね」

帰る仕度を素早く済ませると、牧野も荷物を持った。

「じゃ、私も」

「じゃあね」

私と牧野が立ち上がり、蒼京を追いかけるために急いで教室を出た。

残された二人は呟いた。

「……狙ってるね」

そんなことも知らずに私と牧野は蒼京に追いつき、階段を一緒に下りた。

「状況は良くないようだ」

小さな声で蒼京は私たちに言った。それから、学校に出るまで何も喋らずに居た。

何かあったのは知っているのだけど、何かあったのだろうか？さつきからその事がどうにも気になっていた。

学校を出て、一度タクシーを呼ぶのかと思っていたら、見慣れた高級車が止まった。同時に、すぐにドアが開き、早く乗れと言うようであった。

牧野は訳がわからないで居たが、私はようやく分ってきた。

恐らく、先ほど蒼京が見ていたのは偵察ヘリだ。光学迷彩を装備していて見えなかったけど、きつとそうに違いない。ヘリは光か何かの合図を使ってモールスで蒼京に状況等を知らせたのだ。だから蒼京はあんな風になんかを見るように空を見ていたのか。

運転席からは何も声が聞こえず、それでも私たちは造作も無く乗った。ただし、牧野は少し戸惑っていたが。

全員乗ると、即刻走り出す。まるで精密機械のようだ。そして、またまた精密機械のような冷たい声が聞こえた。

「樋口さんの乗っていた車が爆破された」

秋口は無駄な動きをせずに運転していた。

「爆破!？」

大声で叫び驚いたのは牧野だった。

「そ、その車って、今朝乗ってた車でしょ？それがそんな……」

私もこの仕事に慣れてきたなあ。牧野はきつと樋口達が死んじやったと思ってショックを受けたんだろうな。少し前の私なら私も今の牧野のように叫んでたけど、どうにも樋口達は死んでないと思っただよな。それに、この仕事をやっているとなんか日常茶飯事になってくるしね。

「大丈夫だ。樋口さんらは無事に帰ってきてる。ただ、問題はそこではない」

「何が問題だ？」

車はそんなに急いでいなく、信号が黄色でもちゃんと止まっていた。

そんな止まるタイミングを見計らっていたのか、ブレーキをかけたと同時に口が開く。

「我々にCIAは背中を向けたのです」

「CIAが？フィービス。お前、CIA要員に向かって『死ね！』とか『くたばれゴミ野郎！』とか言ったのか？」

なんで私？

「い、言つてませんよー」

「なら、お前がらみで背を向けたわけでもなさそうだな」

「あ。そうですね」

信号は青に変わり、再び進み始める。また、先ほどのタイミング同様に秋口は口を開く。

「理由は分りませんが、車に爆弾を仕掛けたのはCIAである可能性が高いです。我々に協力したくない理由が何かあるでしょう」

「だがそれにしてもおかしい」

蒼京は足を組み、腕も組んだ。

「こつちにはフィービスが居る。こいつを敵に回せば厄介になるなんて事、向こうは百も承知のはずだ。だとすれば相当な理由があるはずだな」

「ええ。ただ、新たな味方も来ました」

牧野はもう頭が完全ノックダウンだとして、その言葉には私も蒼京もなんだろうという感じであった。

「第六中隊が、今回上からの命令で我々の指揮の下で動いてくれるそうです」

第六中隊って……あるんだね。全く知らなかったよ。

それにしてもこつちとしては味方が増えるわけだから、嬉しい報告だと思った。でも蒼京の顔はあまり良いものではなく、複雑な顔をしていた。

「六だと？奴ら、たしかまだケツの青い隊員ばかりの部隊じゃないか」

「しかし、菊池の友人も多く、菊池曰く有能なサイバー部隊らしいです」

「それにしたって奴らは新人である事に変わりない。不安が伴う。くそ、上の連中ももつとまともな奴らを送って欲しかったのだがな」

秋口は反論もせず、そうかと思えば苦笑もせずに話を続けた。

「実は、既にこちらに第六中隊隊長の橋本三佐が来ています」

「なお更くそだな。疲れてるって言うのに……………」

話はそこから無言状態に持ち込まれ、車内ではしらけたムードが漂っていた。

そういえば、先ほどの牧野の話が気になる。頭がパーンな状態の今の牧野は、もうどうでもいいというような態度で、ちよつと拗ねている感じであった。ちよつと話しづらいけど、私は話し掛ける。

「先ほどの『彼』の話……………草食系男子じゃないと思うんだけど……………」

やっと話が通じる、とばかりに顔を上げる。

「そう？いかにも草食だと思っけど」

「えーでもー」

じーっと蒼京を見る。

「違うよー」

「でも、見た目からしても高見沢は肉食ではないと思っけど」

あれ？高見沢の事言ってたの？

「あー。それは確かに草食だねー」

急に牧野の視線が痛くなる。なんか恥かしい。

「まさか、蒼京だと思ってたの？」

小さく小さく頷いた。

牧野は頷いたのを見てすぐさま隣の蒼京を見る。

「草食じゃなくて悪かったな」

牧野は笑いを一気に吹き出した。

「ないないないない！」

私は頬を真っ赤に染め、もう穴があつたら埋まりたかつた。やつちやつた。

蒼京の視線が怖い。．．．．．帰ったら耳元で撃たれるかも。恐怖に怯えながらも、車は減速せずに帰るべき場所に向かうのであつた。

『返事が来たぜ』

着信ボックスに、短い文で終わらせる友達のメールとは全く違つたメールが一件存在した。

僕はそのメールを開いて、続く文章を読んだ。

『中華人民共和国国家安全部っていう情報機関が乗り出してきた。報酬も十分もらえるようだし、尚且つ俺たちの身の安全を守つてくれるらしい。なんとも美味しい話だよ。』

明日その組織の人間が来るんだが、お前は来るか？来るんだつた場所を教えたい』

返事は、短く終えることが出来る。

『ごめん。ちよつと明日は無理』

それだけ打ち込んでメールを送信した。僅か十秒程度。

もう、遊びではすまない。そんな事は、とつくに分つている事だ。陽介が僕の目の前に現れた時、それを実感した。僕はもう戻れない道を歩んでいるのだと。手遅れだと。

でも、これが終われば何もかも手に入る。

大きいものや、沢山のものを手に入れるのは容易ではない。それができる者たちは、並みのことはしない。時には、殺人などのルールを破つてまで手に入れようとする。それでもしなければ、何も手に入る事は無いから。

僕も、そうだ。

手に入れたいものは大きすぎる。手に入れるには、ルールを破る必要がある。



5。 牧ちゃん。もうちょっと待っててね。きっと、成功して見せるか

## 背を向ける者（後書き）

ファイブス「もうすぐ二ヶ月の放置だったね」

死ぬところだった。本当にごめんなさい。こんなでも読んでくださった人がいるのでしたら、本当にごめんなさい。流石に更新ペーシング上げます。

そういえば、K-1で自演乙氏が優勝しましたね。東方厨ではありませんが、東方は好きなのですが、どうにもあの登場の仕方は……。でもあのコスプレをしていた人たち、あの入場のためにどれくらい踊りの練習したのでしょうか。意外とがんばってたんじゃないですかね。まあどうでもいいですが。

試合自体は凄かったですね。K-1はあまり見ませんが。

ファイブス「護身術とああいう格闘技ってどっちが強いんだろう？」  
「……………護身術って信じてたい。そういえばディアスポリスって漫画では主人公がシステム使ってたね。あれを見ると護身術が凄いやつにも見えるけど、確か格闘技を使う人もいたよね。ちよつと記憶が曖昧だけど。」

ファイブス「zzzz……………」

分りませんね！ファイブス寝ちゃったね！

イラスト投稿したので前話のあとがきを利用してアドレスを張ったのですが、分らなかつた人もいるかもしれないので、ここにも張っておきます。

http://www.pixiv.net/member/illustration.php?mode=medium&amp;illustration\_id=9122981

## 激化する状況

うーん。

私は暇な授業の間、眠い目をしながら気が遠くなっていた。

授業が終わっても、眠そうな目を覚ますことは無く、そのまま昼休みに突入してしまった。

突入するとすぐに私は気持ち良さそうな顔で寝始めた。警戒心ゼロの状態。多分今攻撃されたら死んじゃうと思う。

そんな様子を見ていたのは、集まってお弁当を食べていた牧野達だった。

「フィービースー」

「うーん」

牧野は私の頬をつんつん、とつついた。でも私は起きることなく、今ごろは夢の中で空中浮遊をした。

夢の中で、友達のアリスと一緒に飛んでいた。

音速ではないけれど、私たちは凄く早く飛んでいると感じた。

「アリスちゃん。速い過ぎない？」

風邪に声が消えそうだったので、私は大きな声を出して訊いた。でもアリスは平然と言った。

「大丈夫だよ！むしろフィーちゃんが乗ってるから遅いくらいなんだから」

アリスの背中にいた私は、風圧で振り落とされそうになっていた。でも、楽しい事には変わりはない。

森の木々の真上を風のように飛び進み、木の葉っぱたちは大きく揺らいた。本当に私たちは風のようにだった。

やっぱり飛ぶって気持ちいい。何も束縛されていない気分になれる。

「うーん」

「呑気だなあ」

牧野が弁当を食べながらつんつんつきまくる。

本気で呑気な野郎だ。

俺がちよつとした菓子として持ってきたカンパンを摘みながら思っていた。あいつ、一体どんな夢を見てるんだか。そういえば最近夢を見ていないような気がするな。早速今日も夢を見ていない気がする。気持ちよく眠れていないのだろうか。

まあいい。

それよりも、外人さんが俺を呼んでいるようだ。わざわざ教室まで来て俺の顔を見ながら手で招いている。

俺はゆっくりと腰を上げてマークのところに行く。彼は一応注意人物の一人なので、警戒しながら話さなければならぬ。更には警戒していることをばれないようにもしなければならぬ。まったく、疲れるつてもんだ。

「何か？」

そっけなく言った俺に対してマークは、片言の日本語で話す。

「リヨウ、だね？」

英語の教師と言うのはどうやら表情が大切らしい。確かにそうだろう。言葉が分らないのなら、分るもので表せて学ばせる必要があるからな。このALTはその傾向にあるのか、やけににっこりしていた。

「ちよつと訊いてもいいかな？」

「なんです？」

俺の対応はあくまで気だるそうであった。カンパンを食ったの妨害されて確かに気だるいのだが、相手に警戒していないように見せるためでもある。

マークは一度左右を見て、それから顔を近づけて声を小さくして言った。

「あの、英語は出来ますよね？」

一瞬にして気だるさが消える言葉だった。

英語で話す。すなわちそれはここが日本である以上、他者には聞かれないようにする手段を使うということに値する。

機密事項を話す際によく使われる手だ。それを行うというのは、挑発か何かするつもりか？

表情を変えずに英語で喋りだすマークを見る。

「リヨウ、貴方はパソコンに詳しいようですね」

「.....ええ」

「実はですね、どうやら生徒会のパソコンがハッキングされているらしいんですよ」

「ハッキング？」

話は案外機密って程のことではなかった。だが興味があったので話を聞いてみることにした。

「はい。それで、何か知ってるかと思いましたが」

心当たりは大いにある。もちろん言わないが。

「いえ、ありませんが.....どういったことをされるんです？」

「なんだか冊子にして生徒達に配るはずのデータをよく削除されるようですよ。だからいつまでたっても配れないんですって。とは言っても、そろそろ自宅でなんとかして配るつもりらしいですけど」

少しばかり面白い話だな。

「分りませんか」

「あ、ああ、そうかい」

「ただ、少し興味はありますね」

「心当たりが？」

「いえ、単純に興味があるんですよ」

丁度その時、フィービスが起き出し、ここが自分が置かれている分らなかつたらしく『ここどこ？』とびっくりしていた。いくらなんでも能天気すぎるぞフィービス。

マークはそのまま何処かに行ってしまった、俺はフィービスのもと

に向かう。

「フィービスは相変わらずの様子で、きょとんとしていたが俺は構わずいつもの調子で言った。」

「帰りに生徒会室に寄るぞ」

「.....なんで？」

「興味のある情報を得たんだ、寄るぞ」

まったく状況が分っていないフィービスとは違い、牧野は俺に興味があったようだ。

牧野はフィービスと話し終わる頃合を狙って俺に寄ってきた。

「どうかした？マーク先生と話したりして」

「どうやらフィービスと話す以前から見られていたようだ。」

「ちよつとな」

「教えて」

あまり口にしたくないというのが俺の考えだ。なのでそつと耳で小さくささやく。

「帰ったらな。お前はお前でやることがあるんだからな」

牧野の顔を見ると不満そうな顔であった。仕方の無いことだ。

俺はさつさと席で再び先ほどのカンパンをつまみ始めた。

現在、S I SことM I 6はギリギリの状況に居た。

ついにハッカー集団の攻撃はイギリスまで及び始めた。これによって動き始めたのがM I 5だ。同時に、水面下で動いていたM I 6の存在が彼らに知られてしまった。

M I 5はM I 6を快く思っていないかった。その流れでM I 6を日本から引き上げさせようとしていた。

国内に被害が回った以上、M I 5が出る幕であるあるのにM I 6がいる。縄張りを既に取りられているようなものだ。追い出したい有様である。

イギリス本国ではそういう事情で二つの情報機関の間で問題が発生していた。いつフィービスをマークする要員が本国に引き返せと

言われてもおかしくない状況である。

だが、要員はそれでも任務を実行し、今でも活動を続けている。彼らの目的は表向きはサイバーテロについて。裏の本質的な目的は違う。つまり、この状況になってもまだ任務を遂行する可能性はあるということだ。本国では時間稼ぎさえしていればいい。だが、それにも限界がある。要員たちは焦りを感じ始めていた。さて、ハッカー集団について話そう。

ハッカー達は中国の情報機関と結びついた。中華人民共和国国家安全部という情報機関である。この組織が彼ら集団の盾であった。同時にクライアントであった。

ハッカー集団は資金を求めてもいた。これは単純に欲だ。もっと資金さえあれば活動を激化する事ができると考えたのだ。花火と一緒だ。大きく過激で派手な花火が欲しいのだ。

中国はこのハッカー達を支援したいところだった。彼らからすれば、グーグル問題等も含めて攻撃してしまい、アメリカやEU諸国にダメージを与えた方が有利にまわる。また、支援する自分達は攻撃を受ける事は無い。美味しい話だ。

ただ、少しばかり考えは甘い。ハッカー達をよく見ていない人間もいる。中国のように支援するを検討せず、むしろ敵意を剥き出しにする法人団体も数多く存在する。その中にSkypeが存在していた。

Skypeは何かを企んでいた。そう何かを。事実、高見沢は中国の情報機関との対面を断ってSkypeの社員と対面した。

何故Skypeは敵である人間と接触したのか？単純なことではないことは確かであった。

この日、牧野は一人でアパートの一室を訪れた。

行きなれた場所だ。昔は三人でよくここに来て遊んだものだ。

でも、行き慣れたはずなのに今日だけは緊張していた。蒼京の言葉が未だに頭に響くのだ。

『責任のある仕事だ』

失敗は許されない。絶対に成功させなければならぬ。でも、もう一つ高見沢を裏切る事になるのではないかと思ってしまう。

蒼京が与えた仕事は別に命に関係はなかった。銃も使わないし、ナイフも使わない。暴力だって振るわない。傷なんて別次元の仕事。だけれども、精神的には大きな負担となるもの。

『お前の仕事は高見沢から現在行っている活動内容を聞き出すことだ。何をしてもいい、とにかく聞き出すんだ』

裏切り。私のすることはいずれ彼への裏切りに値する。でもやらなければそれはそれで蒼京達、いやあの組織を裏切ることになってしまう。あの組織を裏切る事は怖い。それ以前に蒼京を裏切りたくなかった。

道は二つに一つしかない。その中に、どちらも裏切らないという選択は無かった。

いつまでも変わらずにいたのは私だけだったんだ。

私は時の流れというものが怖くなってきた。楽しかったあの時はいつの間にか消え失せてしまったのだ。時間によって消されてしまった。私はいつか彼が私たちの前に帰ってきてくれると信じていた。そうしてまた楽しい時間が流れると思っていた。それがこの通りだ。二人は対立し、片方に至っては名前を偽り別人に成りすましている。私も……変わらなければならないのかな。

目の前に高見沢の部屋の玄関を見つめながら私はそう思った。

この玄関はいつも見慣れている。でも、やっぱりいつもとどこか違う感じがしてならなかった。

チャイムを鳴らしたが一向に出る気配はなく、仕方ないと自分に言い訳して逃げようとした。でも、背中を向けた直後にドアが開いた。

出てきたのはもちろん高見沢本人だった。

「あ、牧野。どうしたの？」

高見沢はいつもと変わらない接し方をしてくれた。無理にしてい



るわけではなさそうだったけれども、どこかいつもと違う感じがした。ぎこちない気がする。

このどこかいつもと違う彼に私は少し呆然としてしまい、何も言えなくなっていた。対する相手も、普段ならこういうとき何か話すのだが今日は相手も同じだった。やっぱりおかしい。

ずっと動かないままだったけど、流石に高見沢は中へ入るように言ってくれた。私はそれにしたがって靴を脱がせて上がらせて貰う事にする。

高見沢が休む事は多い。不登校ではないけど、どうしても休みが多いのだ。今思うとそれもサイバーテロを起こすためのように考えってしまうけど、昔から体が弱い高見沢は本当に体調が悪いからなのかも。ちよつと心配になってきた。

中に入ると、狭い部屋で始めに見たのは立派な電子機器だった。あちらこちらにコードが張り巡らせ、いろいろとパソコンに機械が接続されている。パソコン自体も、ちよつと大きい気がする。まさにパソコンというにふさわしいパソコンだった。この大きな機械が人々を殺すのかと思うとぞつとする。けれど、今思えばそれを使いこなす高見沢はもつと怖かった。その怖さは、今までの理想的な友達の影響すらを消してしまっただかのように思えてならない。蒼京は過去を隠し続ける理由が分る気がする。知らない方がいい真実だつてあるのだから。

きつと今がその知らない方がいい真実と向き合う時なんだろうな。向かい合つた高見沢を見てそう思った。

高見沢は少し疲れた様子だった。

「どうかしたの？」

「ううん。なんでもないよ」

体調は良いみたい。高見沢はこのところあまり学校に来ないから本当に体調が悪いのかと思っていたのだが、違ったようだ。元気で何より。でもそうだとしたら、やはり蒼京が言う通りハッカーの活動をしているのだろうか？

私は勇気を出していつてみる。これが、真実と向き合う瞬間だと直感した。

「どうして休んでたの？」

高見沢は深刻な顔をした。そんな顔をされてしまうと、心臓が激しく鼓動してしまふ。私は実際逃げたい気持ちだった。

そうして放った言葉は

「ちよつとお腹下してね」

苦笑いをこぼす高見沢を見て真つ先に安心する。

なーんだ、やっぱり蒼京が間違っていたじゃない。

心の底から私は安心していた。先ほどまでの緊張感はどこかに行つてしまい、今はまったく違う場所にいるかのようだ。

「そう」

少しはずませた私の声で、立ち上がる。そしてここを去って蒼京に報告しようと思った。

荷物を持って帰ろうとする。

「待って」

突然高見沢が叫んで私を止める。

「？」

振り返ると、すぐに相手は言い放った。

「蒼京くん、やっぱりヨースケだよ」

「え？」

「調べてたんだ。彼のこと」

そう言つて私に二枚ほどのプリントを渡した。

「ヨースケの経歴を書いたものだよ．．．．信じられないけれど」

私は突然展開に頭がついてこれず、呆然としていた。

「あ、ありがとう」

何を言つて良いのか分らず、私はそれだけ言つてこの部屋を後にした。

文章の書かれた紙に『一家を殺害。四人死亡』と書かれていたの

を読んでしまった。

生徒会室にほぼ強引に乗り込んだ蒼京と私は、よくウイルスに感染するというパソコンを覗いた。

「ちよつと！いきなり入ってなにするのよ。そのパソコンは生徒会以外使用禁止よ！」

蒼京はまったく聞いていない様子だった（聴こえてると思うけど）。

依然として蒼京はパソコンをいじる。それにしても、生徒会の人にはよく止めないね。

私は一応パソコンは扱えるけど、何しろここに来てまだ一年も経ってないから使いこなせてない。だから蒼京がやっているのだが、私はなんできたのだろう？

蒼京は今までディスプレイを見ていた顔をこちらに向けて生徒会の人たちに尋ねた。

「ウイルスに何度も感染しているんだろ。なぜセキュリティを強化しない？」

生徒会長は案外この手の話はよく分らなかつたらしい。だから仕方なく下っ端が応えた。

「実はこれにこりて自宅のパソコンとかを使ってるんですよ。だからそれはインターネットが目的のただの遊び道具ですね」

「ほお、生徒のリーダー的人物がこれを黙認か」

蒼京は皮肉を楽しんでる様子。

それはいいとして、蒼京はぼそつと言った。

「このパソコンは実験に使われているようだな」

「え？」

「こいつはウイルスの実験体だ。奴らの行う手口にそっくりなんだ。実はSCASCは彼らハッカーチームの資金を把握していた。しかし、それはかなりののはした金。実際はパソコン一台買うのもやっつとということが判明した。とすると、このパソコンが実験に使われ

ていたとも考えにくくないことだった。

でも蒼京は少し不思議に感じていたらしい。

「最近ウイルスはこないようだな」

するとつまらそうに下つ端が言った。

「そうなんですよー。ウイルスが来ないとそれはそれでつまらなくて」

私は悟った。

このパソコンはもう実験に必要ないのでは？

でもどうしてだろう。

蒼京も何かを考えていたらしく、しばらくは動かなかった。と思うと突然動き出してこの部屋を出た。そして私の手を強引に引っ張って後者から急いででた。

何がなんだか分らない。

校舎を出るとすぐに携帯電話を手を取った。電話をかける間に私に推測を語ってくれた。

「奴ら、資金を手に入れたんだ！」

「え？」

「資金だ！パソコンを何台も変えるような膨大な資金。その金の裏には何かあるはずなんだ」

あ！

そこまで言っつてやっとな気がついた。ハッカーチームはどこかの組織と手を組み始めてしまったんだ。だから資金は手に入るし、活動を活発化させることもできる。事態がまずくなる一方だ！

蒼京は電話が繋がったらしく、急いで奴らに近づいた調べさせた。そんな姿とは裏腹に私はさっきから空が騒々しい事に気がつき始めた。ヘリの爆音だと思うのだけど、どうしても見つけられない。だから始めは私たちの無人ヘリかと思ったのだけど、どうもそれよりも大きい音のような気がする。

あたりをくまなく探したが音源は見つからない。それでもこちらに近づいてきているので心配になってくる。

どこに居るの？

蒼京が携帯電話を仕舞うと、私の様子に気がついて空を見た。同じく不審に思ったらしく、あたりを見た。でも私と違ったのは地上も見始めた点だ。

地上を見るとすぐに私の腕を掴んだ。そうして一目散に走り始めた。

「え、ええ？」

走ってもまだ何も言わない蒼京に疑問を浮かべるばかりだが、全速力で走った。突然過ぎて息が切れそうになってしまう。

「シールドを展開しろ！」

私だけに聞こえるようにそれでも力を込めて言った。私は勢いに押されてシールドを展開した。

目の前に球状の水の膜が張り、高圧電流が流れる。それでも蒼京はさらに叫ぶ。

「もっと厚いシールドにしろ！」

「はあああああ！」

私はいつも以上に厚いシールドを張ろうと勢いを出す。体力消耗は半端じゃない。全速力で走っているような感覚にすら襲われてしまう。蒼京も、高圧電流による影響を受けていないようではなかった。頭が痛くなったのか、押さえ始めた。

「く、来るぞお！」

何が来るのかなんて考えていられる余裕はなかった。でも、直後こちらに何か急速に向かってくるのが分った。ミサイルやロケット弾だった。それらは私のシールドと直撃する。

一瞬の出来事だった。いきなり目の前に長細いものが襲いかかり、次には爆発してしまったのだ。

シールドの水が蒸発するのが分った。それを補う分、私はそこでも恐ろしいほどの体力を消費した。

私と蒼京は口を開けて耳を塞いでいた。爆発が目の前で起きているため目も瞑った。爆発の光はまぶたを通り越して目を焼いてしま

うのかと思ったくらいだ。

けれども爆発も一瞬の出来事で済む。

目をあげると、黒煙の中に二人が居た。だけれども、私と蒼京は見た。暗視装置のようなものを掴んで逃げる男を。

俺はようやくSkypeの企みを知った。

そうか、これならCIAは俺たちに背中を向けるわけだ。

しかし、どうやら事は手遅れかもしれない。

「やはり中国に動きがあったようだ」

坂崎が報告に来たとき、俺はさほど驚きはしなかった。予想できた状態だったから。

そしてもう一つ、手にしていたコピー用紙に比べれば、驚くに値しなかったからだった。

「クソツタレ」

激化する状況（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

本当にごめんなさい。三ヶ月いくとが真面目にごめんなさい。

よんでくれたらありがとう

## 黙る樋口

暗視装置を持った男は走って逃げて行った。

私たちはそれを追おうとした。だが、光学迷彩を搭載したヘリコプターが私たちの行く手を阻んだ。走る私たちの目の前に、銃弾が送られてきたのだ。

「隠れるぞ、ファイブス！」

蒼京は走るのを止めて近くの家に飛び込んだ。私もその家に飛び込む。

さっきの爆発によって人々は悲鳴を上げ、家の奥へと伏せたり、逃げたりしていた。また、帰宅中の高校生も少なからずいた。

飛び込んだ家の人は、私たちを見ながら電話をかけていた。警察か消防、はたまた学校かもしれない。でも、様子がおかしく電話がかけられないかのようにだった。もしかしたら、この周辺の電話回線を切られているの？

私は携帯電話を見た。すると、こちらはこちらで電波が届いていなかった。支援要請を不可能にしてしまったのだ。

酷い状況だ。こちらにはまともな武器がない。あるのはタクティカルペンくらいだ。

私たちは家の物陰に隠れてまずどうにかヘリがどこにいるのかを把握しようとした。

「ファイブス、ヘリを探せ！相手は俺たちの無人ヘリと同じ原理だ。見えにくいだけでなんとかすれば見える。見つけたら水をぶちまけろ！」

「了解！」

生徒たちが私たちを見ていた。また、爆発の現場も見ていた。中には携帯電話のカメラで私たちをとる生徒もいた。でも今はそんなことを気にしている場合ではなかった。この耳障りなヘリの前の私たちは、生きるか死ぬかの境界線にいるのだから。



蒼京は前を見回すのに対して、私は後ろを見回した。

どこにいるの!?

必死に探した。半透明であって完全に透明な訳ではなしろ、背後が空とあってかなり見難くなっている。相手のカムフラージュ性は最高点に達していたのだ。

それでも探さなければ再びやられる。相手のヘリの機種が何か分らない以上、爆弾の搭載量は分ったものではないが、あんなもんじやない気がする。

当たって欲しくない予想は、的中していた。

私が一瞬横を向いた瞬間、ほんの数秒火を吹くのが見えた。

「やつ!」

手を前に出してすぐさまシールドを作った。でも遅すぎた。

ビーム光線のようなものがこちらに向かってきた時、シールドはまともに出来ていなかった。薄い水の膜で張った所謂大きなシャボン玉同然だった。

「ダメッ!」

私が無意識に泣き言を放った。だけど、それを聞く前に蒼京は私の頭を掴み、伏せさせた。真上に銃弾が飛ぶ気配を感じる。地獄のような空間だった。

今さっきまで私は学校の、この世界での普通の高空生だったのに。私たち、こつも軽々と特殊な人間になってしまうんだ。蒼京たちはやっぱりみんなと同じじゃないんだね。

周りにいた高校生は私たちを携帯電話のカメラを使ってビデオを撮っていた。これで私たちは明日から高校を去らないとまらないのかな。

武装ヘリのことなんて忘れてしまっていた。それが隙となって敵は私に銃口を向け、すぐさま火を吹いた。

「クソッ!」

少し離れていた蒼京は、さっきとは違って今度は私に飛び込んで体当たりをしようとした。威力の高い銃弾とすれすれでなんとか私

に体当たりして回避することができたが、蒼京の怒りの表情が目に見えかけた。彼の行動は表情は予想を反して変わらなかった。

「お前の弱点は集中力だ、フィービス！まだ未熟だからこそ意志が弱い。集中しろ」

私はその言葉の裏に呆れを感じたが、実際は違うのだと思った。

その言葉の裏には、私の成長の支えというものがあるんじゃないかと感じた。期待されているようにも思えた。

指摘されて、私は素直にへりの音源に注意する。

へりの音源の距離は先ほどから変わらない。必ずこの周囲に居るはず。けれども例え見つけたとしても、銃を撃って確かめるなどとは方法は無い。私たちは逃げ切れるのだろうか？

状況を確認する。

まず、私たちがどうなれば勝ちなのか。恐らくそれは私たちが生き残る事にあるんだろう。とすると、敵の無力化もしくは逃げ切る事になる。敵は光学迷彩を搭載した武装へり。幸い、既にロケット弾やミサイルの半分はもう無いとみられる。対するこちらの状況は極めて貧弱。対空兵器は愚か、銃いやナイフすら無い。唯一の武器がタクティカルペンくらいなもの。通信手段は敵によるジャミングなどにより一切を絶たれ、更にはどこか電話線を遮断したようで家庭に繋がっている電話も使用不可。私たちの勝利は、絶望的だと思つた。ただ、希望が無いわけでもない。敵のへりの燃料の消耗はあてに出来ないけれど、光学迷彩はあてに出来る。私たちは普段から使っているから分るけど、光学迷彩の電力消費量は著しい。半日連続で使用した場合は確実に電気は底をついてしまう。そうすれば、幾分か状況がよくなる。どうやら私たちはこれから、持久戦を強いられるようだった。

ここに何時までも居られない。私は当たり前のようにそう思った。「二尉、移動しましょう！ここは持ちません。この近くには幸運にも山があります。そこに身を隠しましょう」

「その前にへりの居場所を見つけるんだ。今の俺たちに逃げ場はあ

「つても逃げ道がないんだ」

「確かにそうだ。ヘリの居場所がよく分っていない以上、どの方向に逃げるべきかが分らない。下手をすると最悪の事態を招く。」

「私はくまなくヘリを探す。でも見つからない。このままでは夜になる。夜になつたら最後、太陽と言う最大の味方を失ってしまう。」

「敵を見つける上で太陽は最も重大な味方なのに！」

「『太陽は最も重大な味方？』」

「どうした？」

「そうだ。そうだ。そうだ！」

「どうして太陽は見つけるための味方なんですか」

「蒼京は空に顔を向けながら、奇妙に思いながらも私に言ってくれ  
る。」

「物体が光を放っている、もしくは光を反射している場合、それが目に入りその物体を『見る』事ができる。しかし大抵の場合前者よりも後者の物体が多く、光源が必要となる。その光源が太陽だからだ」

「光学迷彩は特殊な人口物質であるメタマテリアルを使い、物質による反射をおかしくさせる。つまり、私たちの目に光が向かわないようにさせる。そうですね？」

「その通りだ。．．．．何をするつもりだ？」

「私は思いつきのために身構えた。」

「光学迷彩を作ります！」

「私の考え方はこの世界とは違い、ちよつと頓珍漢なことを思いつき、隊員達はその発想を良い物と捕らえるのだけれど、今度ばかりは蒼京もそういうわけにはいかなかった。」

「待て！お前の水はメタマテリアルじゃないんだぞ！ただ光を屈折させるだけだ。見る方向によっては何の意味も成さないぞ」

「目を瞑って！」

「蒼京は私の突然の叫びで反射的に目を瞑ってくれた。同時に、私を源とする眩しすぎる光がこの地域一帯に発生し、カメラで撮って

いる生徒や、家の中から外の様子を伺う人たちの視界を一気に真っ白にしてしまう。へりのパイロットも例外ではなかった。

急いで次に大きな水の膜を張る。その膜は球状でとても分厚い。より屈折した光を直進させるためだ。

蒼京の肩を二回ほど叩き、目を開けると合図する。合図するとすぐに近くの家の玄関を蹴り飛ばし、侵入する。蒼京の方はそれを見て仕方なしについてきてくれる。そのまま家の奥へと走っていき、窓ガラスをぶち破る。その際気がついたが、さっき水を張ったせいで部屋が水びだしになっちゃってるね。失敗しちゃった。

破ったガラスから家を出て後は山に一直線で走るだけだった。道路が山への案内をしている。私たちはもうその案内の通りにするだけ。それだけだった！

蒼京と私は全速力で走る。普段着ている防弾パネルも持っている銃弾や銃もない制服である分、私たちはいつも以上に活発に動けるようになっていた。走る速度はいつも以上で、私は異常じゃないかと思ってしまうくらいだ。それでもへりの爆音は一向に大きさを覚えていかなかった。ただ、こちらに寄って来ている訳でもなかった。私たちを見失っているのだ。

速く！速く！もつと速く！

早くへりから逃げたい。ただその一心で走っていた。

あと二百メートル。それで隠れられる！

が、へりの爆音が今まで何かを探すようにゆっくりとした移動を感じさせたものからいきなり活発化させた爆音に変わった。いや、こちらに向かってくるような音だ。

「へりに気づかれた！」

へりの機首がこちらに向けているのが想像つく。もういつ爆撃を開始してもおかしくない。

「先に行ってください！」

水の膜を解除させ、後ろに振り向いた。

道路は先ほどの家から一直線上に山へと繋がっていた。へりの爆

撃にはもってこいの道。だから光学迷彩の独特な光の反射を見る事ができた。

私はその場に立って左腕を伸ばした。その手首をしっかりと右手で掴んで支えようとする。

「はあああああああああああ！」

ヘリからロケット弾が発射するのを見た。気にすること無い。私の手からパイプのようになり太い円柱状の水が勢い良く伸びていき、ヘリへと向かった。

水に電流を流せるほどの体力は無かった。ただ、水だけで十分だった。

水の勢いでロケット弾は爆発した。しかし推進力はそれだけでは足りないかのようにヘリに向かい、コックピットの部分を直撃する。ヘリはコックピットを当てられた事により、元から下げていた機首が更に下がり、バランスを崩しそうになる。だけどパイロットは思う異常に優秀なようで、バランスを元に戻した。まだ攻撃を続けるつもりだ。

「そっちがあ！その気ならあ！」

水の円柱の直径を短くしていき、光線のようにする。ただし、勢いはさつきよりも増す。

ヘリは完全に元の状態に戻し、こちらに進んできた。

「さあ、突き抜けて！」

バリッ！

ついにキャノピーが水、ウォーターカッターに耐え切れず割れてしまい、そのままコックピット内に直進する。すると光学迷彩が解除されてその姿をあらわにし、またコックピット内の後部座席に居た人間が頭を水で釘付けにされていた。

それを確認してから、私は森に入る。

正直、体力を使いすぎた。逃げるとき体力まで考えるべきだった。

私はよろよろと山の中を彷徨うのではないかと思ってしまう。で

もへりの爆音が止んでいないことに気がつく、顔をあげた。そこにはへりがいた。

殺したのはガンナーの方だったか。

パイロットを殺して無力化したかったのだけど、どうやらそれはできなかったらしい。なんだか無念だ。

よろよろになった私は、それでもへりから逃げようと深い茂みに入っていく。すると、地面に銃弾がたたきつけられた。パイロットだ。

「よくも！」

パイロットを見ると、手にはプロジェクト90が握られていた。

抵抗として、私はパイロットに向かって水をぶちまけようと腕を空に向けた。だけど、パイロットはさっきの私を教訓にしたようで、腕を上げると隠れるようになった。

夜が近づく。

背を低くして、山の奥の奥に入っていくが、へりは一向にまかない。でも、この地域一帯はジャミングが仕掛けられていて連絡なんてできるはずがない。だからこのままへりは仲間を呼べず自滅する運命になってくるはずなのだ。

私は逃げては腕を上げ、逃げては腕を上げの繰り返しだった。だけど、とうとう限界に達するところまで来てしまった。けど、それはあのへりだって同じ。もう弾薬が切れてる頃。

考えは甘かった。

「爆音が……もうひとつ聞こえる」

へりだ。けれどもそのへりは、私への救助へりなんかじゃなかった。なんと、機関砲が火を噴いたのだ！

「あ」

撃たれる。そう思った時には、何もかもが遅かった。もう体を動かしてもよけることはできない。あの口径なら、一発で死んでしまう。伏せることすら、回避方法ではなくなっていた。

バツ！

銃弾から顔をそらしたほんのわずかな間に、誰かが私に突進してきた。蒼京だった。

「無茶しやがって」

それだけ言うとは彼はすぐさま私を背負い腰を低くして走り始めた。そして思わぬ朗報を耳にすることができた。

「二十分で味方のヘリが到着する。それまで耐えるんだ」

「み、味方？」

思わず聞き返してしまう言葉だった。ここ一帯はジャミングの影響を受けているようだし、支援要請はできないはず。それに今日は向かえの車はこないようにしてあるから仲間が異変に気がつくのも可能性としては低い。

「何を、したんです？」

息を切らしながら訊くと、答えは意外なものだった。

「ジャミングじゃなかった。奴ら、大型の基地局まで破壊しやがったんだ」

「ええ！？」

つまり、有線の電話を遮断してさらに携帯電話の電波が行き場に困るようになるために携帯電話の基地局を破壊してしまったのだ。これでは確かに携帯電話はつながらない。

「おかしいと感じたんだ。なぜか周りにいた生徒の奴ら、携帯をずっといじりまわしてやがって。そうしたら案の定、NTTの基地局がやられてドコモの俺たちは使えなくなってたんだよ」

「では、どうやって支援要請を？」

「たまたま山を登ってた登山部の奴らから奪ったのさ」

蒼京が見慣れない携帯をポケットから取り出して見せてくれる。

「そういえば登山部なんてあったなあ。」

「登山部に入りたい！」

「フォート・ブラッグに送り込むぞ」

そんな会話を入学当初にしたのを思い出してしまふ。考えてみたら、あの時フォート・ブラッグって言ったのって自然の中で登山部

つぼくしてろってこと？

思い出して私は少し吹き出した。

そんなことを言っていていられるのもつかの間。再び機関砲も火を吹き始め、木々を削っていく音がした。敵のヘリはどうやら暗視装置を使っているから、木々の隙間から私たちの光が見えるとそれを頼りに撃ってくるようだ。

背中にしがみつきながら、私は後ろのヘリを見た。

「右に回避！」

「おう！」

とつさに右に激しく動くと、私は振り落とされそうになる。

早く来て！

心の中で救助支援が光の速さで来てくれることを願うばかりだ。

橋本三佐は携帯電話とアサルトライフルを持ちながらヘリの爆音に負けないような声を出すために大声で怒鳴っていた。そのくせ顔は地上を見降ろすために外を見ていたので怒っているようにも見えず、しいていうなら光が灯っている街に悪態をついているようだった。

「樋口三尉、ここは僕たちに任せてもらいたいところですよ」

本部に入った蒼京諄一からの救助要請をいち早く聞いた第六中隊顧問の白神は、早速救助のために部隊をヘリで送り込んだ。しかし、本来ならば第二小隊に向かうはずの要請だったので、第二と第六の間でもめていた。

『だがな、本来ならば俺たちが救助に行くのが正しいはずだ。お前たちは任されていないのだ』

「ですがねえ、こっちはすでにヘリを飛ばしているんですよ」

『だからなんだというんだ。俺たちもヘリで』

「あなた方の第二拠点地のヘリポートにヘリが来るのはあとどれくらいですか？」

『.....』



ハッカーを中心としたこの部隊は、現在第二小隊拠点地にヘリがないことを知っていた。その弱みを握ったうえでヘリを飛ばしていた。

なぜここまでして第六が要請を受けたがるのか。理由は白神と橋本の目論見にあった。

本部からの命令では第六中隊は第二小隊の指揮下で動くこととしており、すなわち下端として働いてくれと命令されたのであった。このことはもちろん橋本の顔色を悪くさせたのであった。彼の考えでは、きつと第二はまともに現状況を説明してくれないだろう、と推測した。事実、樋口も蒼京も（一応今回は樋口の指揮なので蒼京の判断よりも樋口の判断が重視されてくるが、蒼京もほぼ同等の指揮権がある）第六にあまり情報を漏らさないようにしようという意向であった。

またこれと同時に白神の方は元自衛官で以前普通科部隊の隊長を務めていたがその際優秀な部下を特殊作戦群に送ったが全員落ちたことから極端に特殊部隊という物を嫌うようになり、第一、第二を例外とすることなく嫌っていたことから、今回の命令を受けて第二をだしにしようと考えていた。

このような考え方からまずは第二から現段階で分っているだけの情報を聞きだす機会を待っており、今その機会が回ってきたということだった。

「僕たちは彼らを救うためにこうやって飛んでいます。今分っている限りの情報を渡してください」

この状況に追い込まれると、第二小隊は情報を渡さないわけにはいかなくなる。渡さなければ渡さないで後々本部から調査員が送られてきて厄介なことになってしまう。

『……いいだろう。この任務における情報を今送る』  
「ありがとうございます」

橋本は激しい銃声を鳴らす音源を見ながら携帯電話をポケットにしまう。

フィービスの体力は回復しつつあり、彼女は俺の背中では機関砲やミサイルを自分の魔法で破壊してヘリから死守していた。

二機のヘリが俺たちを追い、当の俺たちは救助部隊を待つしかできない有様だった。

悪態や暴言を吐いても仕方なく、ただひたすら俺は後ろの仲間を背負いながら走っていた。体力に自信はあるが、さすがに重く、しかも不安定であった。フィービスはこの真冬のなか、少しでも荷を減らそうとワイシャツ姿だった。ついでにそのワイシャツも次第にぼろぼろになつてきて肌が見えるあられもない状態だった。

フィービスが腕を振るのが背中感覚で分った。けれども音的には全部の球を防ぐことはできなかつたらしく、地上に何かが着弾した。ロケット弾だった。

「ぐおっ！」

今までなんとか走っていた大勢が一気に崩れて俺たちは一度宙に飛んでから地面にたたきつけられた。

「死ねえ！」

パイロットが叫ぶのが分った。ボロボロの一機からあの特徴的なプロジェクト90をこちらに向けて撃とうとしたのも見えた。

クソツタレ！

そう叫ぼうとした。が、叫ぼうとした直後にヘリは南から来たミサイルによって破裂するかのよう爆発した。

ボロボロのヘリが爆発に気づき、横を見たのが命取り。爆発したヘリの破片が自分のところに一気に刺さり、鉄くずが体を八つ裂きにしてしまう。それを信じられないという思いで見たパイロットは次に発射されたミサイルに気がつくこともなく爆発と共にしてしまつた。

俺たちは助かった模様だった。

送った情報の内、この紙に書かれた情報は送ることができなかつ

た。

高見沢が牧野に渡したこの紙は、まさに機密文書である。しかし敵の機密文書ではない。こちらの、すなわちSCASCの機密文書であった。

樋口は信じがたいことを受け入れなければいけなくなった。

ハッカー達に機密警備会社がばれた。それは大変な失態とも言えた。

ハッカー達は一体どうやって情報を手に入れたんだ？SCASCは確かに時にオープンな警備会社と協力して警備を行うことも少くない。だからと言って秘密主義を守っているはずだ。民間人のテロリストが知る由もないのだ。中国共産党か？彼らが我々を？いや、そんなことをしたら彼らは自滅しか先が無い。なにしろこの警備会社も国の下で作られた企業であるために外交干渉も可能なのだからでは一体なんなのだ？

樋口の頭はそれでいっぱいだった。

帰還したばかりの蒼京は先ほどの第六とのいざこざとこのことを話したが、やはり分らないと言ってきた。蒼京が分らないとなると、フィービスがらみのもので知られたのではないようだ。

一体何がどうなっている？

「．．．．．コーヒーを飲もう」

頭がうまく回らない時はコーヒーを飲むことにしている樋口は、考えても仕方ないということでもキッチンに向かう。

「桜井の姉さんがいたらいいなあ」

ちよつと息抜きにエロい妄想をしまいながら、キッチンに入るとそこには今の自分と同じような幹事の少女がいた。

「あ、樋口さん．．．．．」

コーヒーが出しっぱなしであったので、飲んでいいか一応訪ねてから樋口は紙コップに冷たいコーヒーを入れた。

コップを持って寄りかかると、牧野が全く飲んでいないことに気づく。

「なんか考え事か？」

樋口の声に鈍く反応する。一度は目の前の樋口を見たが、再びうつむいた。

「うん」

「それで、頭が回らないから一杯か？」

「.....うん」

何か空気が重かったので、ちょっと笑い話でもと気をきかせる。

「カフェインは脳細胞を死滅させるらしいぞ」

樋口の言葉に対して牧野は顔を上げて首をかしげてしまう。

「あれ？それって実際はそうでもないようですよ」

「お？そうだったか？」

「とかいって本当は知ってるんでしょ？だって樋口さんも考え事がありそうな顔してコーヒー飲んでるじゃないですか」

「ノンカフェインだぜ。こいつは」

「あ、そうだったんですか」

会話はそこで途絶えてしまい、しばらくちまちまとコーヒーを飲む時間が過ぎる。

お互い相手を気遣っている様子で、どちらも考え事よりこの空気の方が気になって仕方なかった。

「樋口さん、何を考えてたんです？」

以外にも早くに訊いたのは牧野だった。

「何、ちよつとな。お前さんがとってきてくれたあの紙についてだ」

「私も、それなんです」

牧野は深刻そうに言った。

「あの文章に、蒼京のことが書いてあるって言われて少し読んじやったんです。そうしたら、一家殺害って書いてあって.....怖くてその先を読めなかつたんです。あの、彼は何をしたんですか？」

こればかりは黙ることしかできなかつた。今日の樋口は黙りっぱなしであつた。

実のところ、訓練の時に蒼京から何をしでかしたのか聞いたことがある。不運が不運を呼んだ最悪の事件だったらしい。それで、その不運の果てに発狂した。それが蒼京の過去だった。

しかし十七の少女にはまだその事実は衝撃が大きすぎる。樋口はそう当たり前のように思った。だから黙ってしまった。

しばらくして、樋口はそれでも言った。

「あまり……詮索するな。奴の口が割れた時に聞くのが一番だ」

樋口言葉は何の解決にもなっていなかったが、それが最善の言葉だと思った。

「……そう、だよね」

牧野は寄りかかったまま一気にコーヒーを飲む。

「悩んでも仕方ないね」

牧野は紙コップを捨てて、キッチンから出ようとした。そして出る際に樋口の方を向く。

「ありがとう」

牧野はひと言いつて風のように去ってしまった。

一人残った樋口は、コーヒーを一口飲んでつぶやいた。

「……可愛いな」

## 黙る樋口（後書き）

いやーすみません。

そしてお気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

いやーなんかあれですってね。中国がグーグルにいくつか譲歩したらいいですね。やはりグーグル撤退は痛いところだったんでしょね。

ところでファイブスちゃん。最近ストライクウィッチーズ二期を見始めて思ったんだけど、もしかしてファイブスちゃんの世界には航空歩兵ってあった？

ファイブス「あー、あったあった。名前は鷹人間隊ってのだった」  
何その鳥人間。コンテストに出る部隊なの？

ファイブス「そんなんじゃないって。剣を吊るしてゴーグルをする人たちでね、すつごくカッコいいんだよ」

へえー。ちなみにさ、それらの武器って持参？それとも国がくれるの？

ファイブス「たぶん国だよ。それでね、その鷹人間って風のように低空を飛んで剣で次々人をきつていくんだよ。プライドが高くて軍人が嫌いの私もついみとれちゃうんだ。まあその人たちは国民にやさしいんだけどね」

なんか現代の空軍みたいだね。あの人たちもプライド高いし。

読んでくれたらありがとう

## 本来の目的？

俺は重い頭を支えていた。あまりの重さに腕が折れそうだ。

高見沢は、正確には高見沢たちは俺の経歴をほぼ知り尽くしていた。そしてその証拠である文章を牧野に託した。これは脅迫以外の何物でもなかった。

俺に手を引けって言うてるのか。ふざけた真似を……。

この経歴が漏れたことはSCASCにとって重大な失態であるが、それよりもやはりその経歴の当事者であるために知られたことの方が重く感じられた。考えただけで頭痛がする。

しかし相談相手もいなかった。樋口は樋口で頭を悩ませていたからだ。

第六中隊に情報を渡した件についてだ。

フィービスがちょっと泣きそうな顔で俺に耳打ちする。

「やっぱり機嫌が悪いようです。……坂崎さんに聞いたんですけど、第六の人の言い方が気に障ったみたいです。もう私怖くて樋口さんに近付けませんでした」

奴の様子を見てくるように言ったが、予想通りの言葉が返ってきた。悩ませると同時にかなり不機嫌なんだな。腸が煮えくり返るような言い方だったに違いない。何しろ相手はあの素人集団&ハゲ（白神）だからな。ハゲは特殊部隊大嫌いであるから、無知の素人どもに間違ったことでも教えちまったんだ。恐らくハゲは今回の件を利用して俺たちを潰そうとしてるんだろうな。情報をすべて与えた今、一つでも、些細なことでも向こうに渡ってなければ俺たちの信頼と評価を下げようとするだろうな。その上どうせやつらのことだからロクな情報が手に入らない。入っても俺たちに渡ることではなく、自分たちの手柄にしようとする。

「バカの考え休むに似たり。まったく困っちゃうよ」  
つぶやくとフィービスが跳ね上がる。

「す、すみません！」

「いや、お前じゃないから。ん？」

飛び跳ねて頭を下げるフィービスを見て気がついたが、妙に胸元がはだけている。普段ならきっちり閉めてるワイシャツのボタンが外れていてだらしなく肌を見せているのだ。しかし俺の記憶では、ほんの十五分前はいつも通りだった。

「お前、何してた？」

言われて気づいたようで、即座にワイシャツのボタンをはめる。

「な、なんでもないです！」

「何してた？」

フィービスの言葉を完全に無視してもう一度訊いてみる。するとなぜか目に涙をため始めて、抑えきれなくなつたのかその場にしゃがみこんでしまった。

「桜井さんが！」

「桜井が？」

「桜井さんが……桜井さんが……」

フィービスは『桜井さん』を連呼して、その先を言おうとする息が詰まってしまった。そして言葉にならない叫びを発して恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めて自室に一目散に逃げて行った。

女同志の喧嘩か？だとしたら桜井の圧勝だな。少くらい手加減してやれよ。と、そんなことを思っていたらその本人がふらふらと歩いてきた。

「ふい〜びす〜、どこ〜？可愛い可愛いふい〜びすちゃん、でておいで〜」

よくよく顔を見ると、いやよくよくどこるかぱつと見ただけで真っ赤になっていることが分つた。これは間違いなく酒を飲んだな。

「桜井姉、大丈夫か？」

あまりの赤さに弱冠引いてる俺だが、相手はお構いなしだ。

「大丈夫な訳あるかー！私のフィービスがどっか行つたのよー！」  
「そ、そうか」



いきなり桜井が顔を急接近させてきたので、一瞬動けなくなり素  
つ気ない返事をかえしてしまった。すると今度は不満そうな顔にな  
って俺を見つめる。

「さ、桜井？」

相手は何も反応なし。かと思いきやいきなり目と目の間に指を指  
した。ついその指を見てしまい、気づけば寄り目になって変な顔を  
していた。

「あははは！変な顔！」

そう笑いながら桜井は去っていく。

俺はただ一人この場に残されてしまい、指を指されて妙な違和感  
だけが後に残ってしまった。

敵にとつて、蒼京諄一はほぼ無力化したとして認識されていた。  
それだけにとどまらず、この頃から第六中隊との不仲を利用し始め  
ていた。

中華人民共和国国家安全部はハッカー達にSCASCへの糸口提  
供していた。中国側は直接手を出すことを恐れていたのだ。しかし、  
間接的とは言え、中国の支援はあまりにも大きいものであった。彼  
らは巧みに築き上げてきた人脈を利用し、SCASCへのアクセス  
方法を見つけ出し、それを提供した。今やSCASCは丸裸にされ  
たも同然である。これに気づく幹部たちは第二小隊を即刻引かせろ  
と叫んだ。だが、どういう訳か行動に至るうとはしなかった。幹部  
たちを抑えるだけの力のある者が居たのだ。

小村雅夫局長。彼こそ密かにバックで第二小隊をサポートした  
人物だ。しかし樋口はそのことに今の今まで気がついておらず、こ  
こにきてようやくそのことを悟ったのだ。

この状況まで追い込まれてしまった樋口は悩んだ挙句、そのこと  
によりやく気づくことが出来たのだ。

『幹部はこのことを知ってるのに、なぜ俺たちに何もしてこないん  
だ？』このふとした疑問が思わぬ展開を見せたのだ。

そして、彼は期待してみることにした。小村局長に。

俺とフィービスと牧野はこんな状況ではあるものの、登校した。ちなみこの前の強襲があったにも関わらず武装は変わっていない。ただし、あらかじめあの逃げ隠れた山に幾つか武器を埋めておいた。登校すると、まず気になるのはやはり俺とフィービスに向けられる視線であった。俺はまったく気にすることなくむしろどや顔で廊下を歩いたが、フィービスの方は歩いて3メートルで白旗だった。「か、帰っていいですか？」

「却下」

こうして俺たちはやっとのことで席に座ることができた。ちなみにフィービス涙目。そしてそんな事も気にせずやってくる野次馬達。正直ここまでくると勘弁してくれと言いたい。

案外俺はこのクラスともなじみ深くなっており、男子達は気軽にやはり昨日の噂を俺に訊く。それだけでなく、フィービスもダウンということと普段牧野とよくいる二人組以外の女子も興味津々で集中砲火をしかけてくる。

そんな言葉の砲弾が飛び交う中、高見沢の席を確認すると荷物が置いてあった。間違いない、今日はいる。まあ恐らく俺の思う通り脅す気だろう。無論俺はそれに対して表向き肯定させてもらうつもりだ。奴にとって今日の登校は、俺の活動停止を宣言するためだけの目的でした事と言っても過言ではない。ここでその宣言を拒否すれば俺たちは奴らに潰される。情報を漏らされ、場合によってはSASC本社が俺たちに対して消極的になりかねない。ただでさえ第六のように俺たちのような少数の特殊部隊を嫌う人間が居るのにそんなことになったら孤立しかねない。

「それで、ヘリからの攻撃の後どうした？どうした？」

「だから俺じゃないって」

半分投げやりに応えようと、丁度いいタイミングでホームルームの時間となる。周りの野次馬たちは動きが遅いものの席に戻り始め、

その中にいつの間にもやら高見沢がまぎれていた。

高見沢を凝視するわけでもなく、俺は別にどこに視線を向けるわけでもなく黒板を見ていた。教卓に鈴氏が立つ。そして学級委員の起立の声でようやくホームルームが始まった。

「えーと、連絡は．．．．．」

特に何もないだろうと（あつてもだが）みんなろくに耳を傾けようとはしなかったが、それでも少しは聞いているのが実際である。．．．．．自然なツンデレ？よくわからねえや。それはともかく、鈴氏は今日の予定をざっと読み上げた。軽く読み上げているが、内容は委員会の集まりだとか部長の集まりだとかで結構重要だと思っただが本当に大丈夫なのだろうか。最後に鈴氏はこのときばかりは少しトーンを下げた。

「昨日学校周辺で原因不明の事故がありました。爆発と銃撃があつたらしく、更には一部の携帯電話が使用不能となつたようです。警察によると、これはヤクザの仕業ではないかと言われているらしいですが、実際に見ていた、あるいは住んでいた住民の話ではどうもそんなヤクザの姿は見当たらず、代わりに本校の生徒が襲われていたようです。その、注意してつて言つても仕方がいないことかもしれないけど気をつけてください。連絡は以上です」

どう気をつけるんだよ。対処方法なさ過ぎてもう笑うしかないじやねえか。ついでにこれ聞いてんな俺とフィービスに視線を向ける。こっちみんな。

俺は高見沢の視線も気になり、目線を黒板に向けたまま見た。奴は俺のほうを見ていなかった。その時俺は奴の心境を想像した。目線を変えず奴の様子を見ると足が震えているのがわかる。また、行動がやけに落ち着きがない。本を開いて読むかと思いきや、すぐに閉じてしまい、かと思えば再び開く。この繰り返しだ。明らかに緊張している。相手はハッカー。それゆえに得意とするのは電腦のみ。どうやら電腦戦では勝てないが、リアルな三次元空間では勝てるよ。うだ。

鈴氏の話が終わって俺は早速高見沢の所に話しかけてとつと物件を済ませようとした。したのだが、行く手を野次馬によって阻まれる。

「おい蒼京、ヤクザと戦ったのかよ？」

「邪魔だ、お前ら」

「ドンパチやらかしたかー？」

「邪魔だつて」

「フィービスと一緒にやったか？」

「殺すぞ、糞ガキ」

数人の野次馬。本気で殺してやろうか。特に体のでかい山田。お前はしつこい&でかい。

この際だからフィービスに俺のすることをやらせてもいいのだが、生憎とそこご本人も牧野の友人という野次馬に囲まれていた。

「鬼瓦、邪魔だ、どけ」

「お？お？逃げる？」

野次馬は一向に動こうとはしなかった。

教師を去ったと思っていた鈴氏が、突然山田と鬼瓦の間を切り分けて入ってきた。

「ちよつといい？」

おいおい、教師まで野次馬の仲間入りか？

初めはその程度と思って嫌そうな顔を彼女に向けたが、相手の顔はそうでもなかった。テストは古文以外良かったはずだ。鈴氏の教科の英語にいたっては満点に近かったはずだ。

俺は鈴氏に呼ばれ、少しばかり警戒しながらも面倒そうに人気の少ないところに場所を移す。流石にそこまで奴ら野次馬はついて来なかったが、笑いながらどんな話をするのか予想をしていた。フィービスは俺が連れて行かれるのを見て流石に反応した。同じく高見沢も。

連れて行かれた場所は前回授業中に俺が抜け出して捕まったトイレの近くだった。確かにここなら人気はあまりない。

古典が赤点なんじゃないかと心配したとき、俺は随分と自分が能天気なことを考えているなと改めて感じた。先ほどの高見沢と違って俺ははるかにリラックスをしていたのだ。多分それは今日が異常に気分が晴れる日だからだと思う。なぜだろうか。状況としては切羽詰った状態であり、数日前まで頭を抱えていたのに、今日はまったく違った。そこで俺はガキのころよく高見沢と何かを競っていたことを思い出す。そうか、それがいまだに体に染み付いていたのか奴と再び戦う。それが密かに俺の中で楽しみになっていたのだ。

今すぐにも奴を挑発してやりたいという感情をぐっとこらえる。そして今は鈴氏の赤点補修の話を黙って聞くことにした。しかし、それは俺のともない思い違いだった。

「M I 6よ」

「!？」

予想できなかった。この展開は。自分からスパイと名乗り出るスパイがいるものかと思っていたから。いや、それ以前にこいつがイギリス国籍とは思っても見なかったからだ。しかし信じざる負えなかった。

「流石に私が諜報員だとは見破れなかったようね。でも、この学校に私たちの組織の要員が紛れ込んでいるとは予想済みでしょ？」

その問いに無言で返すしかなかった。

そもそも、俺たちがこの学校に入学するに当たって名前を偽名にしておかなかった理由はそこにあるからだ。俺の意図はS I Sをここにおびき寄せることにあったのだ。

「．．．．．それで、何か？」

「フイービス・トライデントの件よ」

「どうするんです？殺します？」

「いいえ、一度この件は置いてもらうという話よ」

意外だった。あれほどフイービスについて調べ上げていた彼女らが一旦フイービスから引くというのだ。無論、『一旦』と言った意味の裏には後ほど厄介になると言うことであるが、それでも意外だ。

「では、用件は？」  
「高見沢の拘束よ」

小村はやっぱりにつこりと笑っていた。

「どうしたのかね、樋口君」

俺が入るなりお茶を入れ始めた小村は何も荒事が起きていないかのような顔だった。けれども俺は知っている。彼は俺たちへの批判を抑えていることを。

「小村局長」

「どうしたんだね、改まって。いつものように局長って……」

「何か考えがありますね？」

相手の動きは止まらなかった。平然と俺の分のお茶を入れ、それを目の前に置いてくれた。更には和菓子まで。けれど、俺の問いかけから数秒が経過しているのは確かであった。多少なりとも動揺しているのかもしれない。

よっこらせ、と座るとやはりあの明るい雲ひとつないにつこりとした笑顔がこちらに向けられる。しかし答えない。

いい加減じれつたく感じてしまいが、慌てることなくひとまず和菓子に手をつける。するとこのときを待っていたかのように小村は答えた。

「やっぱり危ない状態なんだね」

俺はこのときなぜ相手が和菓子に手をつけるのを待っていたのか悟る。自分の表情を見られたくなかったからだ。いつも笑った顔に少しでも曇らせた顔を作ってしまったえば、それはやはり俺の不安にもつながる。何より自分の心情を知られてしまうからだ。

和菓子は桔梗信玄餅という餅で、おいしいが黄な粉がとても散らばりやすく汚れやすいで有名なものだった。だから手をつけてしまった俺は、未だに相手の表情を見ることができない。その間を相手はフルに利用する。

「手は打つてあるよ。樋口君」

不覚にもこの黄な粉のせいで喋る事すら俺には許されていなかった。

「樋口君。この件、本質を見失つてはいないかね」

「．．．．．っ！ゲホッ！ゲホッ！」

急いで飲み込んで喋ろうとするが、誤つてむせてしまう。

「君たちは少し、全体を見すぎた。この際、中国もグーグルも関係ないと考えるべきだよ」

そこで小村は喋るのをやめ、俺がお茶を飲むのを待った。答えるということだ。

「それは、つまり．．．．．」

「目的はクラツカーの引渡しだよ？探るべきは、クラツカーの目的。まったく持つてその通りだった。そしてそれを聞いたとき、本当はクラツカー集団なんてものはどうでもいいことに気がつく。スカイプは俺たちに正義の任務を与えたわけではなかったのだ。

そうだ、スカイプはただ引き渡してほしいと言った。もしかしたら、スカイプはそのクラツカーに弱みを握られていたそれが暴かれそうになっているのではないか？そうだとすればそれが何なのか把握する必要がある。俺たちはあくまで国益のために作られた組織なのだから。

小村は黄な粉を散らばらせることなく食べると、俺に新しい任務を与えた。

「君たちにはひとつ、奴らに一泡吹かせてもらいたい」

「．．．．．と、言いますと？」

にっこりとした顔で放たれる言葉によってこの小村という人間がとてつもなく冷酷であることを証明させた。

「クラツカー集団の襲撃。ただし、高見沢を除く」  
？

「なぜ．．．．．高見沢だけ例外なんです？」

「彼がスカイプの欲しがっているハッカーだからだよ」

クラッカーという言葉からハッカーという言葉に代わったとき、高見沢という人間が本当は悪人ではないのではないと俺は読み取る。さらに小村は続ける。

「さーて、高見沢君は気まぐれらしいからね。恐らく蒼京くん、フイービスちゃんの襲撃事件をきっかけに今日当たり学校にいることは確かだから今すぐやってくれないかね？」

俺は相手と同じ顔を作る。

「了解ですとも」

私は鈴氏に呼ばれて急遽授業をやめて英語準備室にて作戦会議をすることになった。個人的には今の授業（家庭科、内容は育児教育）やりたい。

それはともかく鈴氏が引き出しから何かを取り出し私に渡した。

なんかものすごい嫌な予感がしたけれど、やっぱりこれなんだよね。

「SIG社のP226よ。扱いはご存知のとおり」

「トカレフじゃないとは上等だな。どこでこれを？それも三丁も」

ジュン………なんでこうなったのか説明して………。

そんな思いを無視して鈴氏はそのまま普通に答える。

「上司のステイブーンに在日米軍のコネがあつて、そこで買ったの」

「それは分かるが………いや、なんでもない」

「………なんで三丁も買ったんです？」

話に入っただけいけないのはあまりにも惨めだったので仕方なく質問をしてみる。正直、どうでもいいんだけどね！

「その前にフイービスにはこの状況を知ってもらう必要があるしそうですね」

「ん？」

なんか予想外にも聞きたいことがすんなりと聞けるようだ。

「まず、私はMIE6の要員。今回、本来なら貴方たちと任務を共にすることはないと思っていたけど、ちょっとした事情により共同作戦を展開することになった」



「……別の任務で来たってこと？」

蒼京に向かつて首を傾げてみると、目をつぶってうなずいてくれる。話を続ける。

「その件については今はいいけど、こうしてここに集まってもらったのは高見沢を拘束するためのなの」

「こ、拘束!？」

それができたらとつくにやってるって! 私たちはあのハッカー達に脅されて手がだせないのに、なんで拘束なんてしちゃうの! そんなことしたら一瞬で部隊がパー。システム崩壊してパー。予算もパー。信頼も武器も無人機もゴルフもパー!

「どうやら小村の局長、にっこりした顔で密かに戦略を練っていたらしい。俺たちとは別に、そちら方の上司さんとウチがハッカー集団を全員片付ける。高見沢とハッカーの集団はよく別々に行動するらしいからここで奴を見失うと少し面倒になる。更に集団は今日、高見沢のとってもいい報告を今か今かといつも集まるセーフハウスで現在も集まっている」

蒼京の状況説明を元に頭の中で一体どうなっているのかを把握する。その間約十秒。

「つまり、集団を抑える際に万が一高見沢に襲撃の事実が知られるとまずいので今拘束するんですね」

鈴氏が腕を組んで私を興味深いといった目をして向く。

「へえ、案外頭の回転が速いの」

「どうにも飲み込むのは早いんだ。そうじゃなきゃ戦場に出してない」

私はちよつとムカツとしていたが、鈴氏は目を細めて私を見た。そこで私はいつものブルーとイエローの目に変えて驚かせようとした。けれども、相手の反応は予想を完全に裏切ってますます興味を示してきた。

「随分とすごい子ね……。いきなりここに来て特殊部隊並の能力を發揮させるなんて。しかもまだ二十歳にも満たないのに」

「まあ、射撃能力以外は特殊部隊よりも勝るかもしれない。生まれ  
た環境が環境であるし、どうやらこいつは……」

そこまで言って蒼京は口を噤んでしまった。鈴氏は衝動的に不満  
そうに蒼京を向いたが、すぐに表情を変えた。

「そうね。まだ話す時じゃないわ」

「？」

突然の出動命令ではあったが部隊はそれに混乱することなくスム  
ーズに動いてくれた。また同時に突然の命令に応じてくれたヘリ部  
隊についても優秀さを評価しなければならなかった。

「よし、俺と坂崎はこちらに乗る。後は次のヘリに乗れ！追って連  
絡する」

俺たちはヘリに乗り込み、すぐにポイントに向かわせる。同時に  
狙撃ライフルを持った秋口、サブマシンガンを装備する桜井、少し  
大きめのPDAを持つ菊池がヘリに乗り込んだ。

「スノー、奴らの様子は！？」

光学迷彩を搭載した小型無人機XRQ-2が先立って襲撃ポイン  
トを監視している。その映像を元にどう襲撃するか戦術を練る必要  
があった。また、相手はハッカーということもあって菊池は彼らが  
何か異変を起こさないかどうか確認させている。

「とくにありません！」

俺は無人機の映像を見る。人気は少なく、襲撃ポイントはガレー  
ジのようなところで外からはまったく中の様子は分からない。ただ、  
ときどき人影が見えるあたり中に誰かがいることは確かなようだ。

「各隊員へ、襲撃開始時間を1125に設定する。ヘリが降下ポイ  
ントに到着次第各自即座に持ち場につけ」

『了解』

俺は更に電話をかける。

マナーモードを解除した俺の携帯電話が鳴った。その音にここに

いる誰も反応したのは言うまでもない。

『こちらタイフーン。1125より作戦を開始する』

「了解」

11時25分。あと三分といったところだった。

俺たちは行動を起こす。俺と鈴氏は先ほど上った階段を使って下り、フィービスは少し離れた階段を使って下る。そうして鈴氏とは反対側の出入り口に配置。これにより教室の入り口二つに配置させ逃げさせないようにする。

フィービスは走ったが、俺たちはなるべく普通に下った。しかし無言で静かにだった。

俺たちは廊下に出てフィービスがこちらに向かってくるのを確認した。相変わらず体力のあるフィービスは走るのが速かった。

俺は後ろにいる鈴氏に肩をたたいて手で合図する。鈴氏はすぐさま教室の扉の脇の壁にべつたりとくつつく。フィービスも同じくそうする。幸い扉は閉まっただけで、腰を低くすれば何の支障もなかった。

残り十秒。

残り五秒。

もう腕時計すら見ずにカウントダウンをしていた。

「5、4、3、2、1、GO！」

南と北からそれぞれ二人ずつ突入を開始する。俺たちは裏庭へと回り、桜井と菊池は正面のドアから進入する。いきなり菊池がドアをショットガンでぶち開ける音を聞いた。トラップなんてものはなかった。

俺たちは裏庭のガラスを銃で叩き割り、中にいたハッカーどもに銃を向けた。

「動くな！」

同時に正面から進入した二人も現れる。

「動くな！」

中に居たハツカーは全員で四人。あまりにも簡単に全員降伏した。桜井がそのあっけなく降伏したハツカーたちを床に押し付け手首に手錠をかける。

妙だ。いくら奴らただのハツカーで銃には太刀打ちできないと分かかっていても少しぐらいの抵抗があってもおかしくない。なのにこんなにあっさり。

何かがおかしい。

授業中、俺は平然と教室を歩いた。それをみんなが変なものでも見るような目で見ていた。当然その中には教師も入っていたにはいたが、自分の席に戻るのだろうと思っただのか何も俺には言わなかった。その代わり、教室は静まり返って不穏な空気を漂わせた。

だが俺は自分の席に戻ることはなく、途中で立ち止まった。

「高見沢、先生が呼んでる」

その言葉はこの教室が沈黙の空気に満たされていたからか響いていた。と、流石にこればかりは教師も確認しなければならぬので誰が呼んだのかを聞いた。問題なく鈴氏と答える。それを聞くなり教師はとくに何も気にしていないといった態度を取り、何事もなかったかのように黒板のほうを向いた。

俺は高見沢の腕をつかみ立ち上がらせた。相手は何の抵抗もなしにすっと立ち上がった。白状しているのか、と最初は思ったがそんなはずはない。なにせこいつの頭には今は俺たちに勝っているという実際とは違う幻想の状況があるのだ。白状なんてもってのほかであるはずだ。

この考えは的中した。俺が先ほどのように推測していた矢先に顔面めがけて殴りかかる高見沢の姿が目には映っていた。一瞬、殴りかかるほどのだからなにか武道でもやっていたのかと思っただが、それはまったく違い素人同然であった。

反射的に俺は腕を掴んでいる反対の左手で相手の殴りかかる腕の手首を掴んで顔面に直撃するのを防いだ。この地点で俺の手は塞が

つてしまい目潰しもできないので、相手との距離も近く顔面が無防備なため思いつきり頭突きをしてやった。俺の頭は相手の顔面へともろに直撃し、相手はくらっとよろめいた。

「動くな！撃つぞ！」

フィービスの声だ。

見ると前と後ろの扉のところに銃を持った鈴氏とフィービスが高見沢に向けていた。

生徒は全員唾然とした。教師は困っていた。

「あ、あの………鈴氏先生？」

状況が読めないといった顔をしたが、鈴氏は華麗に無視する。

俺はまだ顔面を痛がる高見沢を床に押し付け、手首に手錠をかける。これで目標の確保は完了した。

あとは屋上にでてへりに乗るのみだ。俺たちは屋上へ向かおうとする。

「蒼京！」

そこで予想外の行動に出てきた少女が出現してしまった。

奴はまずい！奴が来るのは非常にまずい！

フィービスが戸惑う一方、俺はすぐに命令を出した。

「行くぞ！」

そこで牧野を無視した。そうすれば奴もついては来ないと思っていた。だが、甘かった。俺たちが高見沢を連れて階段を上るとき、同時に下のほうから急いで上ってくる音も聞こえた。

へりはもう屋上で待機している。このままでは彼女も連れて行く破目になる。

フィービスが屋上に出る扉を蹴り飛ばした。へりが見える！

「来るな！」

下に向かって叫んだが、彼女は迷うことなく走ってくる。

「置いていかないで！私一人、置いていかないで！」

俺たちはへりまで走った。それでも彼女はついてくる。そしてとうとう彼女をへりまで連れてきてしまった。

彼女を両肩を掴み、ヘリの爆音に負けないように叫ぶ。

「戻れ！お前はもう来るな！」

「置いていかないで！また離れ離れは嫌！」

時間がない。急いでここを離脱しなければ警察が来る。

そんな最中にフィービスが嫌な情報を持ち出した。

「樋口さん達が襲撃に遭いました！」

「な．．．．．」

俺はその事実に一瞬言葉を失った。そしてその隙に牧野はヘリに乗ってしまふ。

「急いでください！もう時間がありません！」

フィービスは叫んだ。

もう已むをえなかった。

本来の目的？（後書き）

．．．．．すみません。四ヶ月に及びそうなのは分かっています。更新速度を速めたいのですが、どうにも時間に余裕がないもので。

さて、今回特別にちょっとしたデータを持ち込んだよ。

ファイビス「なにになにー？」

これです。はい。

ファイビス・トライデント一等兵 処女

菊池大刀三曹 童貞

秋口大悟二曹 非童貞

桜井空一曹 非処女

坂崎渥美一曹 童貞

樋口公柔二尉 非童貞

蒼京淳一尉 非童貞

ファイビス「これ．．．．．」

階級が初期と違うのは以前言ったろ。あ、いや、すまない。君達に

とっては（ry

ファイビス「その．．．．．やりすぎない？」

普通です。

ファイビス「桜井さん．．．．．ビッチなんじゃ．．．．．」

桜井「貴女も同じにしてあげましょうか」

ファイビス「え？え？な、なに？いつのまにか手足が．．．．．」

桜井「いきなさい」

ファイビス「へ？あ？あ、あ、あ、あ！」

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5346h/>

---

シークレットワールド

2011年9月12日11時38分発行